今宿バイパス関係
埋蔵文化財調査報告

糸島郡前原町所在「波多江遺跡」の調査

第 6 集

上 巻

1 9 8 2

福 岡 県 教 育 委 員 会

今宿バイパス関係
埋蔵文化財調査報告

糸島郡前原町所在「波多江遺跡」の調査

第 6 集

上 巻

1 9 8 2

福 岡 県 教 育 委 員 会

波多江遺跡出土陶磁器類

序

「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第６集が刊行の運びとなりました。今回、報告申し上げるものは1978年度に調査を行った糸島郡前原町波多江遺跡の調査成果であります。

波多江遺跡出土の木材資料については九州大学農学部の松本昜・林弘也先生に樹種同定を、鉄滓分析を八幡製鉄所技術部の大澤正己先生にお願いし、玉稿を頂き本書に収録させて頂けたことは望外の喜びであります。

又、波多江地区の文献史料の調査には九州大学文学部の丸山雍成先生にお願いし多大の成果を得て、本書の分冊として刊行いたすこととなりました。

冬の寒いさなか調査に御協力いただいた地元波多江地区の皆さま、前原町教育委員会、私達の調査に全面的に協力いただいた建設省九州地方建設局福岡国道工事々務所の方々に心からお礼申し上げます。

本書が文化財の保護と活用という点で利用いただくことを期待して序といたします。

1982年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　友野　隆

例　言

1．　この報告は1978年度に福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した一般国道 202号線今宿バイパス建設予定地に係る糸島郡前原町所在波多江遺跡の発掘調査記録である。

2．　波多江遺跡出土の木材資料については九州大学農学部松本勗・林弘也先生に樹種同定を、鉄滓については新日鉄八幡製鉄所技術部技術研究室の大澤正己氏に分析をお願いし、玉稿を頂いた。

3．　波多江地区の文献史料の調査には九州大学文学部丸山雍成先生にお願いし、玉稿を得た。波多江地区史料調査報告として分冊し、下巻とした。

4．　本報告の執筆分担は下記のとおりである。

上巻

Ⅰ	橋口達也
Ⅱ－1	橋口達也
2	橋口達也
3－1）	橋口達也
2）	高橋　章
3）－a	橋口達也
b	馬田弘稔
c	馬田弘稔・小池史哲
d	馬田弘稔
e	馬田弘稔
f	馬田弘稔
g	馬田弘稔
h	小池史哲
Ⅲ－1	林　弘也・松本　勗
2	大澤正己
Ⅳ	橋口達也

5．　遺物の復原作業は岩瀬正信の指導の下に九州歴史資料館で行った。

6．　出土鉄器の保存処理は九州歴史資料館の横田義章が行った。

7．　遺物の実測は橋口・馬田が、製図は橋口と豊福弥生が、遺物の撮影は橋口と平島美代子が行った。なお巻頭カラー図版は九州歴史資料館の石丸洋による。

8．　本書の編集は橋口が行った。

本 文 目 次

Ⅰ．序　　章……1
　1．はじめに……1
　2．調査の経過……4
　3．位置と環境……7
Ⅱ．発掘調査の記録……9
　1．はじめに……9
　2．遺　　構……9
　　1）平安期の遺構……9
　　a．竪穴住居跡……9
　　b．掘立柱建物……12
　　c．溝……18
　　d．土壙その他……18
　　e．小結……19
　　2）戦国期の遺構……20
　　a．掘立柱建物……20
　　b．溝……22
　　c．井戸……25
　　d．土壙その他……25
　　e．小結……26
　3．遺　　物……28
　　1）平安期の遺物……28
　　2）瓦……42
　　3）戦国期の遺物……44
　　a．土器……44
　　b．石製品……71
　　c．石器……77
　　d．木器……78
　　e．柱根……83
　　f．鉄・青銅製品……90
　　g．土製品……91
　　h．自然遺物……93

Ⅲ．自然科学的調査……95
1．波多江遺跡から出土した木製遺物の樹種同定……95
Ⅰ．資料の概要……95
Ⅱ．樹種同定の方法……95
Ⅲ．同定結果……96
Ⅳ．柱材に用いられた木材…… 101
Ⅴ．本遺跡出土の五葉マツ、チョウセンゴヨウについて…… 104
2．前原町波多江遺跡出土鉄滓の分析調査…… 107
1．はじめに…… 107
2．供試試料…… 107
3．調査方法…… 107
4．調査結果…… 108
5．考　察…… 110
6．ま と め…… 112
Ⅳ．結　語…… 119

図　版　目　次

図　版　1	（上）	遺跡付近航空写真
	（下）	遺跡全景（東側より）
図　版　2	（上）	遺跡全景（西側より）
	（下）	遺跡西半部
図　版　3		1号掘立柱建物　SB001
図　版　4	（上）	2号掘立柱建物　SB002
	（下）	3号掘立柱建物　SB003
図版版　5	（上）	1号竪穴住居跡
	（下）	溝1　SD001（南辺）
図　版　6		溝1　SD001（東辺）
図　版　7	（上）	P.902・P.903
	（下）	P.902土器出土状態
図　版　8	（上）	遺跡西半部（北側より）
	（下）	遺跡西半部（東側より）
図　版　9	（上）	遺跡西半部（西側より）
	（下）	溝2　SD002（南側より）
図　版　10	（上）	溝2　SD002の石橋
	（下）	同上
図　版　11	（上）	1号井戸　SE003
	（下）	1号土壙　SK001
図　版　12	（上）	第2次調査区
	（下）	3号井戸　SE003
図　版　13		平安期土器1
図　版　14		平安期土器2
図　版　15		瓦質土器、白磁、土師器
図　版　16		唐津系陶器1
図　版　17		唐津系陶器2
図　版　18		唐津系陶器3
図　版　19		唐津系陶器4
図　版　20		染付1
図　版　21		染付2

図　版　22　　染付3
図　版　23　　染付4
図　版　24　　染付5
図　版　25　　石戈・石匕・滑石製硯
図　版　26　　白1・白5
図　版　27　　白2・白8
図　版　28　　白6・白7・白3
図　版　29　　板状木製品3、下駄1
図　版　30　　下駄4・2
図　版　31　(上)　下駄3
　　(下)　下駄
図　版　32　(上)　木製椀高台2
　　(下)　木製椀高台
図　版　33　　有孔板状木器、杓文字状木製品
図　版　34　　環状銅製品・銅銭・包丁・鞴羽口
図　版　35　　柱86
図　版　36　　柱200
図　版　37　　柱300
図　版　38　　柱300・柱450
図　版　39　　柱450
図　版　40　　柱650
図　版　41　　柱107・61
図　版　42　　柱150・800
図　版　43　　柱250・700
図　版　44　　柱350
図　版　45　　柱210・600
図　版　46　　柱500、表皮550
図　版　47　　柱根および下駄出土状態
図　版　48　　溝2　SD002出土タニシ

挿　図　目　次

第 1 図　遺跡位置図（縮尺１／50,000）……6
第 2 図　遺跡付近地形図（縮尺１／10,000）……8
第 3 図　遺跡付近地割図（縮尺１／2,000）……10
第 4 図　遺構全体図（縮尺１／200）……さしこみ
第 5 図　１号竪穴住居跡（縮尺１／80）……11
第 6 図　１号掘立柱建物 ＳＢ001（縮尺１／80）……13
第 7 図　２号掘立柱建物 ＳＢ002（縮尺１／80）……14
第 8 図　３号掘立柱建物 ＳＢ003（縮尺１／80）……15
第 9 図　６・７号掘立柱建物 ＳＢ006・ＳＢ007（縮尺１／80）……16
第 10 図　９号掘立柱建物 ＳＢ009（縮尺１／80）……17
第 11 図　溝１ ＳＤ001断面図（縮尺１／40）……18
第 12 図　平安期遺構配置図（縮尺１／600）……19
第 13 図　４号掘立柱建物 ＳＢ004（縮尺１／80）……折込
第 14 図　８号掘立柱建物 ＳＢ008（縮尺１／80）……21
第 15 図　10号掘立柱建物 ＳＢ010（縮尺１／80）……22
第 16 図　溝２ ＳＤ002断面図（縮尺１／40）……23
第 17 図　溝２ ＳＤ002石橋実測図（縮尺１／40）……23
第 18 図　１号井戸 ＳＥ001、３号井戸 ＳＥ003（縮尺１／40）……24
第 19 図　１号土壙 ＳＫ001、２号土壙 ＳＫ002、２号井戸 ＳＥ002（縮尺１／40）……26
第 20 図　戦国期遺構配置図（縮尺１／600）……27
第 21 図　１号竪穴住居跡出土土器１（縮尺１／３）……32
第 22 図　１号竪穴住居跡出土土器２（縮尺１／３）……36
第 23 図　１号竪穴住居跡出土土器３（縮尺１／４）……36
第 24 図　平安期土器１（縮尺１／３）……38
第 25 図　平安期土器２（縮尺１／３）……42
第 26 図　瓦（縮尺１／５）……43
第 27 図　戦国期土師器他（縮尺１／３・１／６）……47
第 28 図　瓦質土器他１（縮尺１／４）……49
第 29 図　瓦質土器他２（縮尺１／４）……51
第 30 図　白磁・青磁（縮尺１／３）……52
第 31 図　唐津系陶器１（縮尺１／３）……56

第 32 図　唐津系陶器 2（縮尺 1／3）……58
第 33 図　唐津系陶器 3（縮尺 1／3）……60
第 34 図　唐津系陶器 4（縮尺 1／4）……62
第 35 図　染付 1（縮尺 1／3）……66
第 36 図　染付 2（縮尺 1／3）……68
第 37 図　染付 3（縮尺 1／3）……70
第 38 図　滑石製硯実測図（縮尺 1／1）……72
第 39 図　石臼実測図 1（縮尺 1／4）……73
第 40 図　石臼実測図 2（縮尺 1／4）……74
第 41 図　石臼実測図 3（縮尺 1／4）……76
第 42 図　石臼実測図 4（縮尺 1／4）……77
第 43 図　下駄実測図 1（縮尺 1／2）……79
第 44 図　下駄実測図 2（縮尺 1／2）……80
第 45 図　下駄実測図 3（縮尺 1／2）……81
第 46 図　木器実測図（縮尺 1／2）……82
第 47 図　有孔板状木製品実測図（縮尺 1／2）……84
第 48 図　柱根出土状態実測図（縮尺 1／30）……86
第 49 図　柱根実測図 1（縮尺 1／6）……87
第 50 図　柱根実測図 2（縮尺 1／6）……88
第 51 図　柱根実測図 3（縮尺 1／6）……89
第 52 図　包丁実測図（縮尺 1／2）……91
第 53 図　輪・銅製品・石器実測図、銅銭拓影（縮尺 1／1、1／2）……92
Fig　1　家屋および柱根出土配置図（縮尺 1／300）…… 103

表　目　次

第 1 表　今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告一覧……1
第 2 表　今宿バイパス発掘調査の実績及び予定一覧……2
第 3 表　土師器坏・埦法量……30
第 4 表　平安期土器観察表……33
第 5 表　戦国期土師器等観察表……46
第 6 表　瓦質土器等観察表……48
第 7 表　白磁・青磁観察表……51
第 8 表　唐津系陶磁器観察表……54
第 9 表　染付観察表……64

Ⅲ－1

Table Ⅰ　樹種名表……97
Table Ⅱ　柱の形状と使用樹種……102
Table Ⅲ　柱の使用樹種……103

Ⅲ－2

Table 1　供試鉄滓の履歴及び調査項目……107
Table 2　鉄滓の化学組成　―糸島郡内出土鉄滓を中心に―……113
Table 3　砂鉄の分析結果……113
Table 4　各地域別の製錬滓と鍛冶滓の化学組成・鉱物組成の比較……113
Table 5　椀形滓出土地名表（福岡県のみ）……114

I 序　章

1．はじめに

1968年に行った分布調査をもとに、一般国道 202号線今宿バイパスの「路線決定の資料を得る」目的の発掘調査は、建設省九州地方建設局から委嘱された福岡県教育委員会が主体となって1969年～1973年の4ヶ年にわたって行われた。以上の調査成果は「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」として第1集～第5集が刊行されている。（第1表）

第1表　今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書一覧

No.	副　題	収録した遺跡	報　告　者	備　考
第1集	福岡市大字拾六町所在の遺跡群	湯納遺跡 宮の前遺跡E地点 高崎古墳群 大又遺跡	浜田信也 酒井仁夫 浜田 副島邦弘	1969年調査 1970年報告
第2集	福岡市大字徳永・飯氏所在の遺跡	若八幡古墳 飯氏馬場遺跡 飯氏鏡原遺跡	柳田康雄・浜田・副島 永井昌文 柳田・副島・浜田	1970・71年調査 1971年報告
第3集	福岡市西区大字拾六町所在の遺跡	高崎古墳群 大又遺跡	栗原和彦・上野精志 上野	1971年調査 1973年報告
第4集	福岡市西区大字拾六町所在湯納遺跡の調査	湯納遺跡	青峰重範　山本輝雄 松本　勗　栗原・上野 林　弘也　馬田弘稔	1971・72年調査 1976年報告
第5集	福岡市西区・糸島郡前原町所在遺跡の調査	湯納遺跡 今宿大塚南遺跡 今宿高田遺跡 今宿小塚遺跡 糸島平野条里及び古墳遺跡 上鎗下遺跡	沢村　仁・松本・林 細川隆英 紛川昭平 弓場紀知 栗原・柳田 上野・馬田	1971・72・73年調査 1977年報告
第6集	糸島郡前原町大字波多江所在「波多江遺跡」の調査	波多江遺跡	松本・林　橋口達也 大澤正己　高橋　章 丸山雍成　馬田	1978年調査 1982年報告
第7集	糸島郡二丈町深江・大入地区所在遺跡の調査	塚田遺跡 鎮懐石八幡宮裏古墳 赤岸遺跡	大澤・橋口・中間研志 橋口 中間	1979年調査 1982年報告

第2表　今宿バイパス発掘調査

地点番号	遺跡名	所在地	調査所要区間			既調査面積	
			長さ	幅	面積	44年度	45年度
			m	m	㎡	㎡	㎡
1	遺物散布地	福岡市西区大字拾六町	34	28	520	45	
2	〃	〃	52	50	2,600	63	
3	湯納遺跡	〃	280	40	11,200	168	
3	〃	〃	30	20	600		
4	宮の前遺跡	〃	110	40	4,400	400	
5	高崎1・2号墳	〃	36	15	540	160	
6	大又遺跡	〃	57	20	1,140	300	
6	高崎3・4・5号墳	〃	40	15	600	200	
7	須恵器散布地	〃	55	20	1,100	27	
8	弥生散布地	〃	33	39	1,287		
9	若八幡古墳	福岡市西区徳永	50	40	2,000		1,100
10	馬場遺跡	福岡市西区飯氏	70	70	4,900		290
11	鏡原遺跡	〃	70	50	3,500		550
12	条里遺跡	福岡市西区大字飯氏～糸島郡前原町篠原	3,000	40	120,000		
13	古野遺跡	糸島郡前原町大字有田・篠原	150	40	6,000		
14	上鑵子遺跡	糸島郡前原町有田	70	30	2,100		
15	遺物散布地	〃	300	30	9,000		
16	古墳2基	糸島郡前原町	30	30	900		
17	遺物散布地	〃	100	30	3,000		
18	〃	〃	40	30	1,200		
19	今宿高田遺跡	福岡市西区大字今宿字高田					
19	今宿大塚南遺跡	福岡市西区大字今宿	100	40	4,000		
20	今宿小塚遺跡	福岡市西区大字今宿女原	30	40	1,200		
21	遺物散布地	糸島郡前原町	250	20	5,000		
22	〃	〃	55	40	2,000		
23	〃	〃	100	20	2,000		
24	〃	〃	230	20	4,600		
25	〃	〃	150	20	3,000		
26	〃	〃	200	20	4,000		
27	〃	〃	300	30	9,000		
28	石崎曲り田遺跡	糸島郡二丈町大字石崎字曲り田	200	30	6,000		
29	遺物散布地	糸島郡二丈町大字上深江	100	40	4,000		
30	〃	糸島郡二丈町大字深江	100	40	4,000		
31	〃	〃	100	30	3,000		
(32)	鎮懐石八幡宮裏古墳	〃					
(33)		糸島郡二丈町大入					
(34)	赤岸遺跡	〃					

の実績及び予定一覧

既調査面積							残調査予定面積	備考
46年度	46年度	48年度	53年度	54年度	55年度	計		
㎡	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡	
						45	0	調査不要
						63	0	〃
1,200	4,612					5,980	0	発掘調査終了、報告書既刊
		450				450	0	〃
						400	0	消　滅
						160	0	発掘調査終了、報告書既刊
900						1,200	0	〃
249						449	0	〃
						27	0	調査不要
						0	0	消　滅
						1,100	0	保存確定、報告書既刊
						290	2,000	一部調査終了、報告書既刊
						550	2,000	〃
136			3,360			3,496	0	調査終了、一部報告済、今年度報告
482						482	0	調査終了、報告書既刊
304	630					934	0	〃
							4,500	
							0	路線変更のため調査不要
							0	〃
							1,000	旧道1
							2,000	旧道2　一部発掘、一部報告済 57年度調査報告予定
		650				650	0	旧道2　調査終了、報告書既刊
		500				500	0	旧道3　調査終了、報告書既刊
							1,000	
							400	
							400	
							900	
							600	
							800	
							1,800	57年度調査予定
					2,000		0	調査終了、58年度以降報告予定
					100		0	遺構なし
				3,000			0	調査終了、今年度報告
							0	調査不要
				100			0	調査終了、今年度報告(二丈・浜玉道路)
				30			0	調査終了、遺構なし(二丈・浜玉道路)
				224		350	0	今年度報告(二丈・浜玉道路)

発掘調査は一時休止されていたが、1978年度から再開された。発掘調査の進行状況は第２表に示すとおりである。

第６集で報告を行うのは、1978年度に行った、第12地点「条里遺跡」とされた糸島郡前原町波多江地区の調査である。

２．調査の経過

１）1978年度に建設省九州地方建設局から福岡県教育委員会が委嘱を受けた発掘地点は、第12地点「条里遺跡」であった。第12地点は福岡市西区飯氏～糸島郡前原町篠原に至るかなり広範囲の地域であるが、実際上は土地買収・稲作との関係もあって、糸島郡前原町波多江・有田・篠原地区の雷山川の西側部分の調査に限定された。

調査は、３×20ｍのトレンチを６ヶ所、条里の畦畔にあわせて設定し、発掘した。（第２図）調査の結果は、現在まで遺存した条里の畦畔・溝が条里施行時とほぼ同じであろうとの推定ができたのみで、他の遺構の検出はできなかった。遺物の包含もきわめて少量であった。

調査期間　　1978年９月６日～９月27日

調査関係者

総　　括	教育長	浦山太郎
	文化課長	藤井　功
庶務会計	文化課主任主事	入江智徳
調査担当者	文化課主任技師	橋口達也
	文化課技師	馬田弘稔

２）貝原益軒の筑前国続風土記に「今に波多江村の内に、丹波屋敷と云所有。是波多江丹波が居たりし宅の址也。四方大堀をかまへ、高築地あり。」と記載された東西半町、南北１町と推定される中世館跡が現在でも保存良好な状態で残っている。この南側隣接地付近は周辺と比して微高地をなしており、同様の遺構の存在が考えられたので、建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所に調査の必要の旨を伝えていた。この地点は本来は1979年度に調査を行う予定となっていたが、周囲の圃場整備との関連もあって、国土庁の国土総合開発事業調整費による工事が着工されることとなり、急拠調査を行ってほしいとの依頼が建設省側から行われた。調査の結果は平安時代前期の周溝をもつ掘立柱建物群と竪穴住居跡、戦国期の周溝をもつ掘立柱建物群等の遺構が検出され貴重な成果を得たが、水稲の収穫後に調査にはいらざるを得なかったこともあって、調査期間が、工事期間とほぼ重複することとなり、主に工事用道路のため、調査に不充分な面が生じたことは残念であった。

調査期間　　1978年11月16日～1979年2月11日

調査関係者

総　　括	教育長	浦山太郎
	文化課長	藤井　功
庶務会計	文化課主任主事	入江智徳
調査担当者	文化課調査第2係長	栗原和彦
	文化課主任技師	橋口達也
	文化課技師	馬田弘稔

なお、1978年11月16日～12月9日までは橋口が、1978年12月11日～1979年1月26日までは馬田が、それ以後は栗原が主として担当した。又、遺構実測の段階で石山勲、上野精志、佐々木隆彦の文化課技師諸兄の来援を得た。

又地元の皆さま方の御協力により調査が順調に進行した。感謝の念にたえない。

3）中世豪族原田氏の一族、波多江氏に関連する遺構を検出したことと、地元に未だ未調査の古文書類があるとのことであったので、整理期間中に文献調査を行うこととなった。

まず地元および前原町社会教育課とも連絡をとりながら、1980年12月5日に、続風土記に丹波屋敷と伝えられる地元で「築地」と呼ばれる波多江佐二氏宅にて、現地説明をも兼ねて、地元の皆さまに文献調査の御協力をお願いした。

その後文献調査の実際は文化課文化係三池賢一、磯村幸男氏が窓口となって、九州大学文学部助教授丸山雍成氏にお願いした。

調査期間　　1980年12月5日～1981年4月22日

調査関係者

総　　括	教育長	友野　隆
	文化課長	藤井　功
庶務会計	文化課主任主事	三瓶寧夫
調査担当者	九州大学文学部助教授	丸山雍成
	九州大学文学部助手	紫多一雄
	九州大学文学部大学院生	池畑裕樹
	九州大学文学部大学院生	佐伯弘次
	文化課文化係長	三池賢一
	文化課主任技師	磯村幸男

文献調査は波多江正美氏、波多江大治氏、波多江稔氏、波多江佐二氏、波多江種重氏をはじめとして、地元の皆さま、前原町社会教育課社会教育係長西孝明氏の御協力で、順調に進行したことを記して感謝いたします。

第1図　遺跡位置図（縮尺1/50,000）

1．波多江遺跡　2．若八幡古墳　3．三雲南小路　4．桑原飛櫛貝塚　5．元岡瓜生貝塚
6．泊大塚　7．御道具山古墳　8．子捨塚　9．井田用会支石墓　10．井田御子守支石墓
11．石ヶ崎支石墓　12．端山古墳　13．築山古墳　14．曽根古墳群　15．有田1号墳

3．位置と環境

糸島郡前原町波多江地区は、地図を一見した場合には国道 202号線、国鉄筑肥線の南側に位置し、地理的には旧怡土郡に属するような錯覚をおこすが、1896年の糸島郡合併前は志摩郡に属していた。又古くは怡土郡から志摩郡と変り、その一部をさいて怡土郡へ割譲するなどの変遷もみられた。

このように旧怡土郡との境界にあり、南に怡土郡井田、三雲、井原等と続く。これらの地には三雲南小路、井原ヤリミゾ、石ヶ崎支石墓、井田用会支石墓、平原遺跡、築山古墳、端山古墳等の著名な遺跡群が知られている。東側には高祖山がそびえ、その山麓には丸隈山をはじめとする数多の著名な前方後円墳が存在し、又怡土城跡が望まれる。北側は本来の志摩郡であり、支登支石墓群が近くにあり、元岡貝塚、今津貝塚、泊大塚等、縄文～古墳時代の遺跡が知られている。

瑞梅寺川の河口は現在ではかなり後退しているが、弥生～古墳時代の段階では、泊、志登支石墓、周船寺近辺までかなり深くはいりこんでいたものと想定される。波多江地区は現在までの調査が、周辺に比して少なく、調査区域も限られているので確実なことはいえないが、弥生時代、古墳時代の遺構、遺物が少なく、瑞梅寺川、雷山川等の形成する自然的条件とも相俟って、水田開発がかなりおくれたものではないかと考えられる。波多江に属したとされる高田、池田等は古墳時代までの段階では河口に面した地域であったといえる。平安時代前期の遺構は、周溝、掘立柱建物群ともに、完全に条里の方向に規制されている。この地域で条里制がいつ施行されたか確定するきめ手はないが、条里施行時にはすでにこの地域も水田化されていたものと考えられる。

以後歴史時代に関しては、遺構、文献の調査記録を次章以下に詳述することによって、その歴史的位置、環境等を説くことに変えたい。

第２図　遺跡付近地形図（縮尺1/10,000）

II　発掘調査の記録

1．はじめに

発掘地点は糸島郡前原町大字波多江字木下602、604、606番地で、曽根丘陵から舌状にのびる微高地のほぼ先端に位置している。

発掘地点の西側から雷山川に至るまでは、雷山川とそれに注ぐ小川の氾濫によって荒されてはいるが、付近の条里の遺存は比較的良好であった。条里の方向はほぼN－20°－Wで、南の三雲、井田地区で測った数値と合致している。

調査の結果は平安期の周溝に囲まれた掘立柱建物群、竪穴住居跡と、戦国期の溝で仕切られた掘立柱建物等からなる宅地跡が検出された。とくに西側半分は無数の柱穴があり、柱根の残存状態も良好なものが多く、私どもが抽出した以上に建物、柵跡等があるかとも思われるが、これ以上は力が及ばなかった。（第4図）

以下順を追って説明を加えたい。

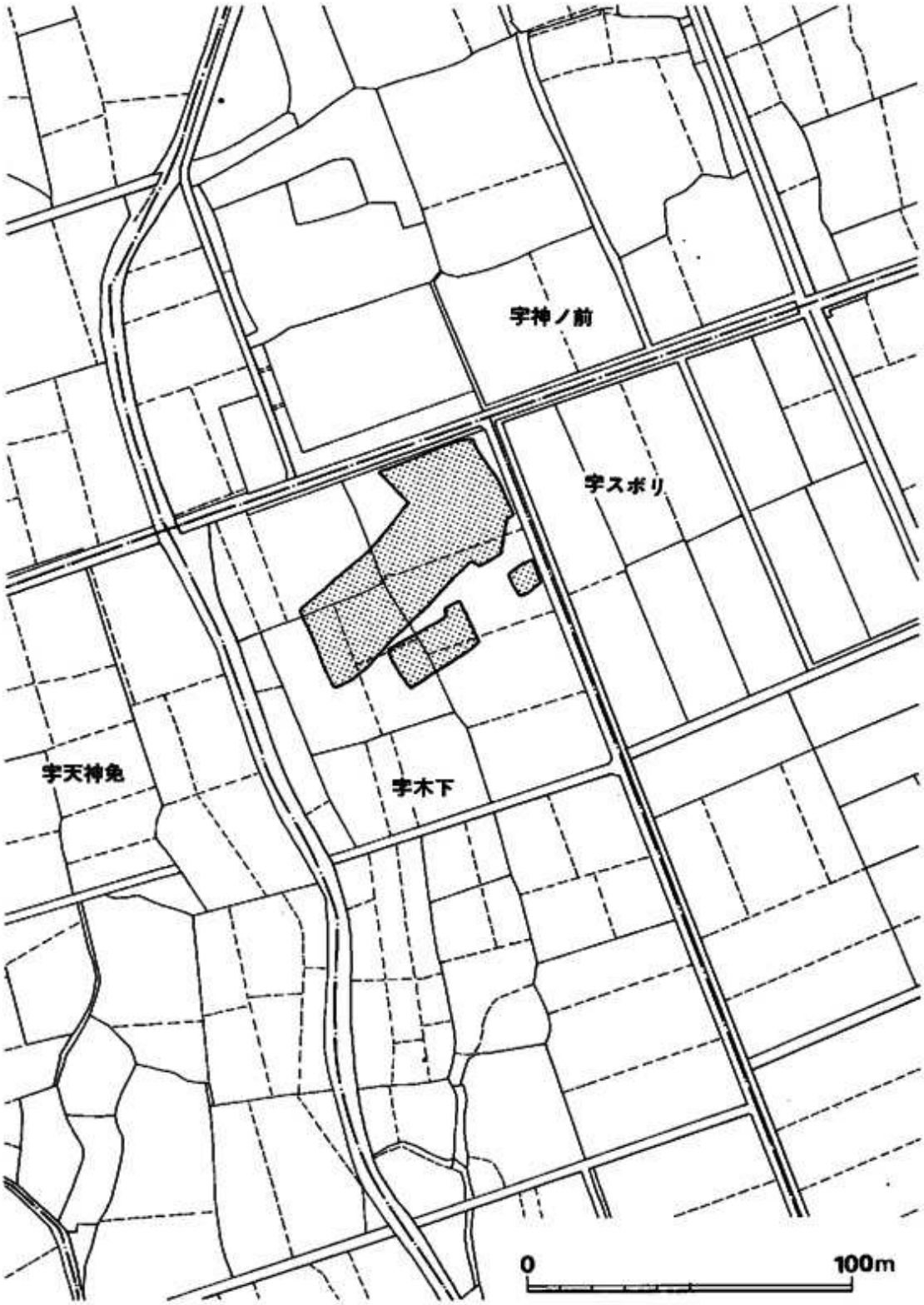
2．遺　　構

1）平安期の遺構

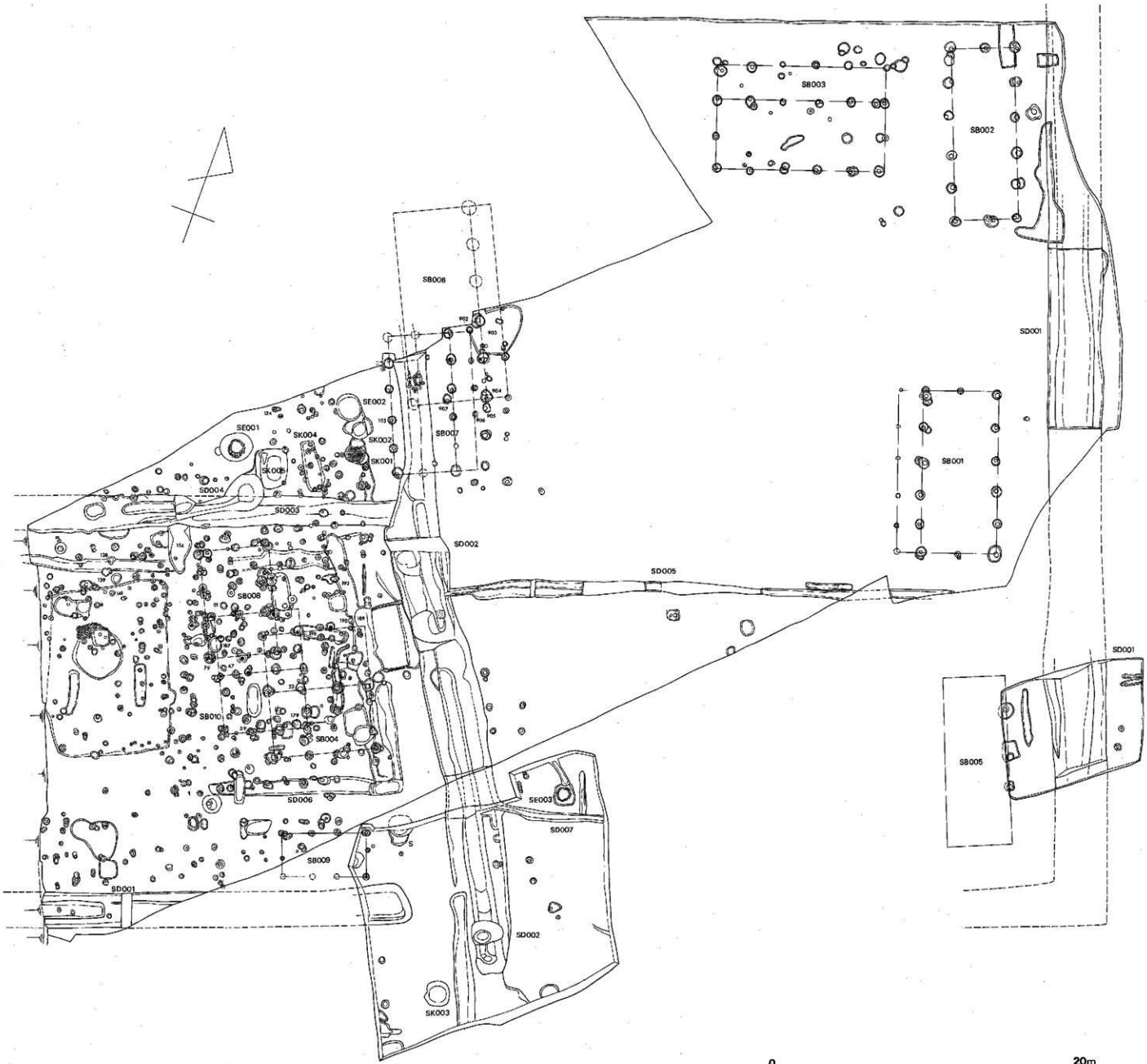
a．竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（第5図）

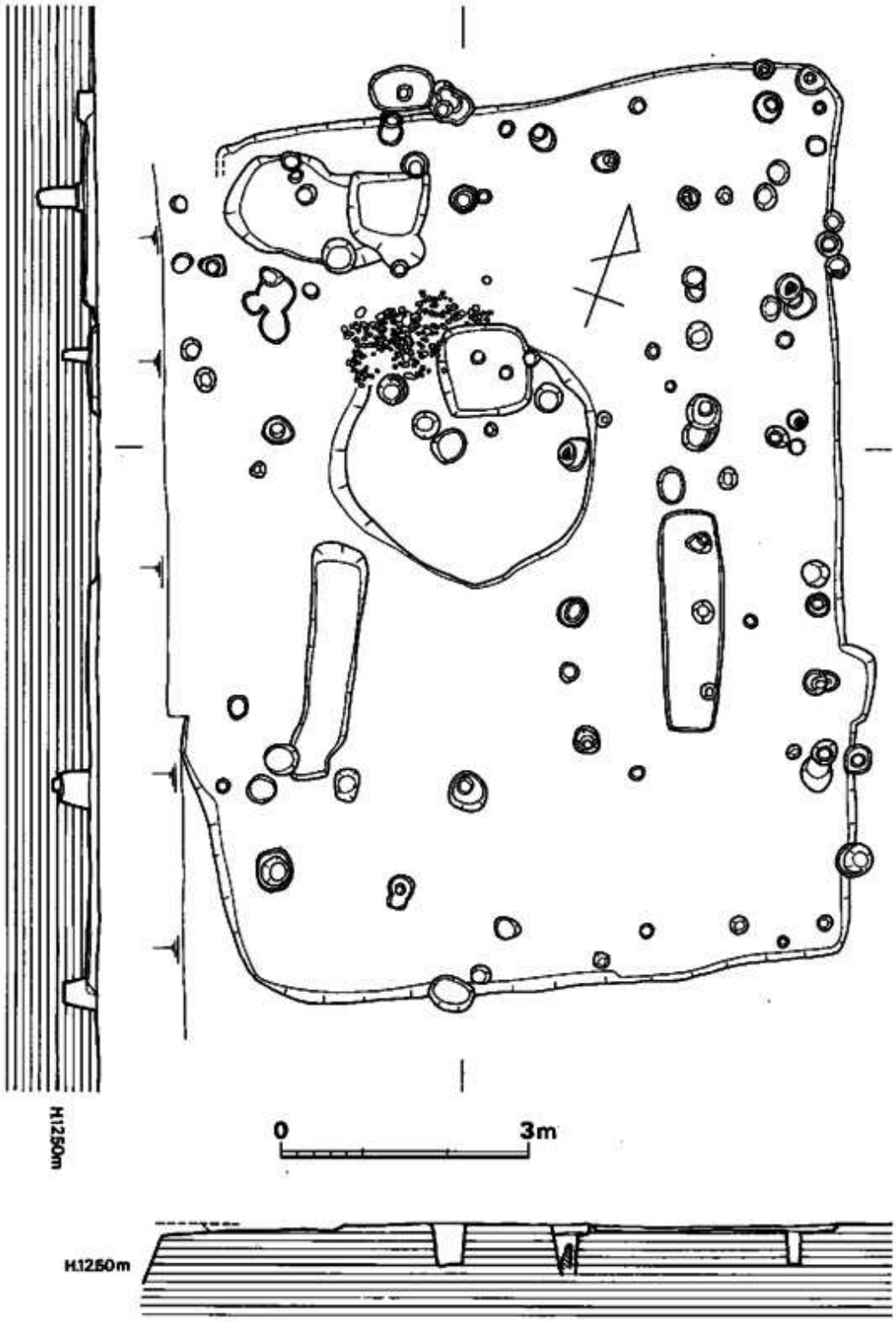
方向は条里のそれとほぼ同じである。南北10.60～11.00m、東西8m弱の大形の竪穴住居跡である。どれをもって主柱とするかは見当がつかない。特筆すべきは中央部のやや西北よりに径3.2m程の円形の台座が設けられていることである。大部分は地山を削ってつくりだしているが、西北側は小礫を積んでつくっている。用途はわからないが、家長の座するところではなかろうか。戦国期の柱穴の重複も多く、一部はその時期のものもはいりこんではいるが、出土遺物には、怡土城の瓦、土師器坏、埦、内黒土師器、緑釉陶器、越州窯系青磁等を含み、セット関係としては良好な資料を得た。



第３図　遺跡付近地割図（縮尺1/2,000）



第4図　遺構全体図（縮尺1／200）



第5図　1号竪穴住居跡（縮尺1/80）

b．掘立柱建物

1号掘立柱建物　SB001（第6図）

南北に長い2間×5間の建物で西側に庇をもつ。方位はN－20°－Wを測る。柱穴の大きさは60cm程のものが多くほぼ一定している。断面の観察からすると柱の大きさは20cmを越えるもののようである。又穴の底まで柱根が達するもの、達してないものの二者がある。柱間寸法は図示するとおりであるが、柱筋は多少の出入があるので各柱穴の中心で測った距離を示した。以下同様である。

図示したように柱間寸法は必ずしも一定しないが、梁行は8尺・8尺、桁行は7尺を基準としたものであろうと想定できる。

2号掘立柱建物　SB002（第7図）

南北に長い2間×5間の建物である。方位はN－20°－Wを測る。柱穴及び柱の大きさは1号建物とほぼ同様である。柱間寸法は梁行・桁行ともに一定しないが、両者ともに7尺を基準としたものと思われる。

3号掘立柱建物　SB003（第8図）

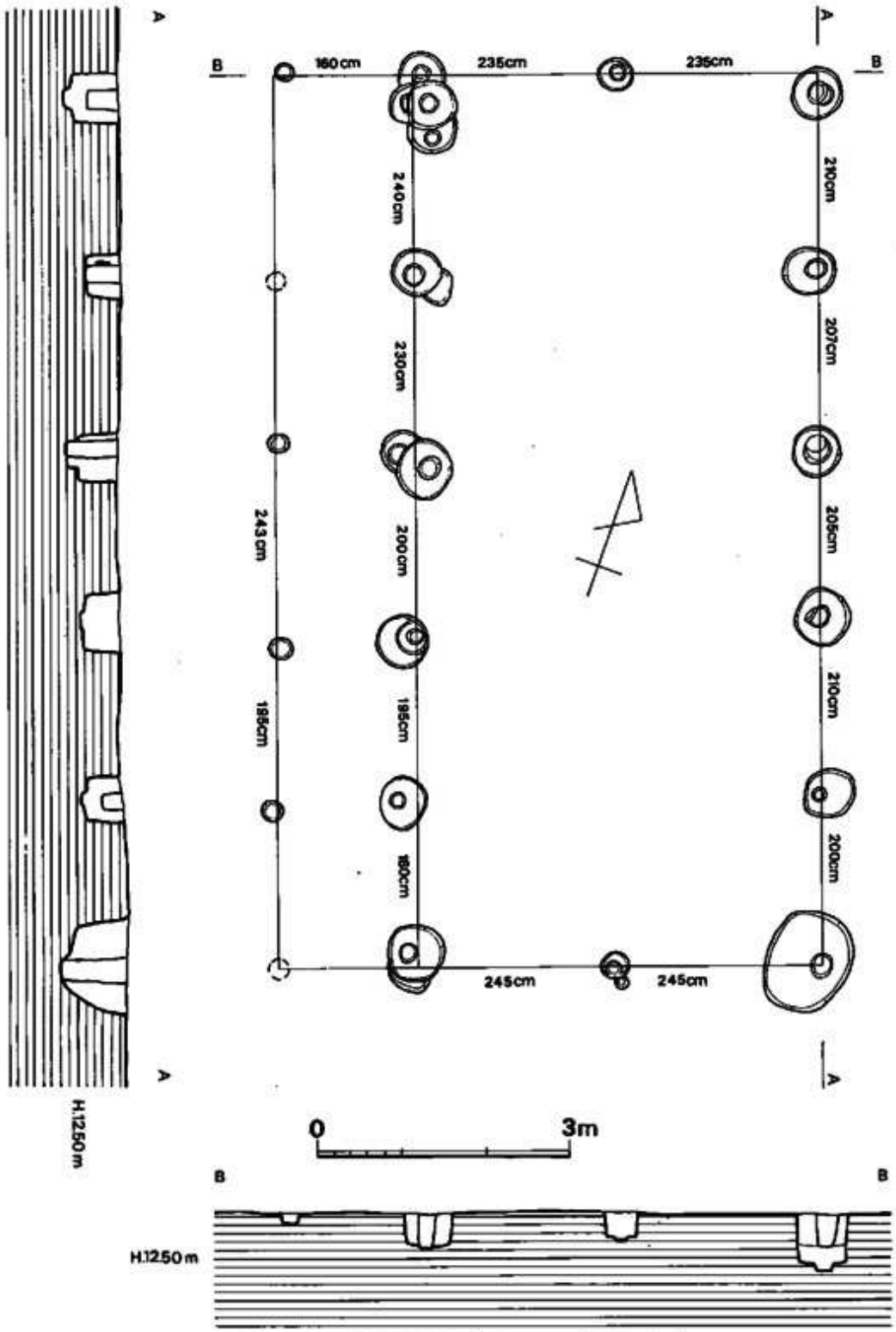
東西に長い2間×5間の建物で、北側に庇をもつ。方位はN－20°－Wを測る。1・2号建物と同様、柱穴は径60cm程のものが多いが、やや小形のものもある。柱間寸法は図示するように、梁行・桁行ともに必ずも一定しないが、7尺を基準としたものであろうと想定できる。西南隅の柱穴には柱根が残っていたが、遺存の状態はあまり良くない。

5号掘立柱建物　SB005

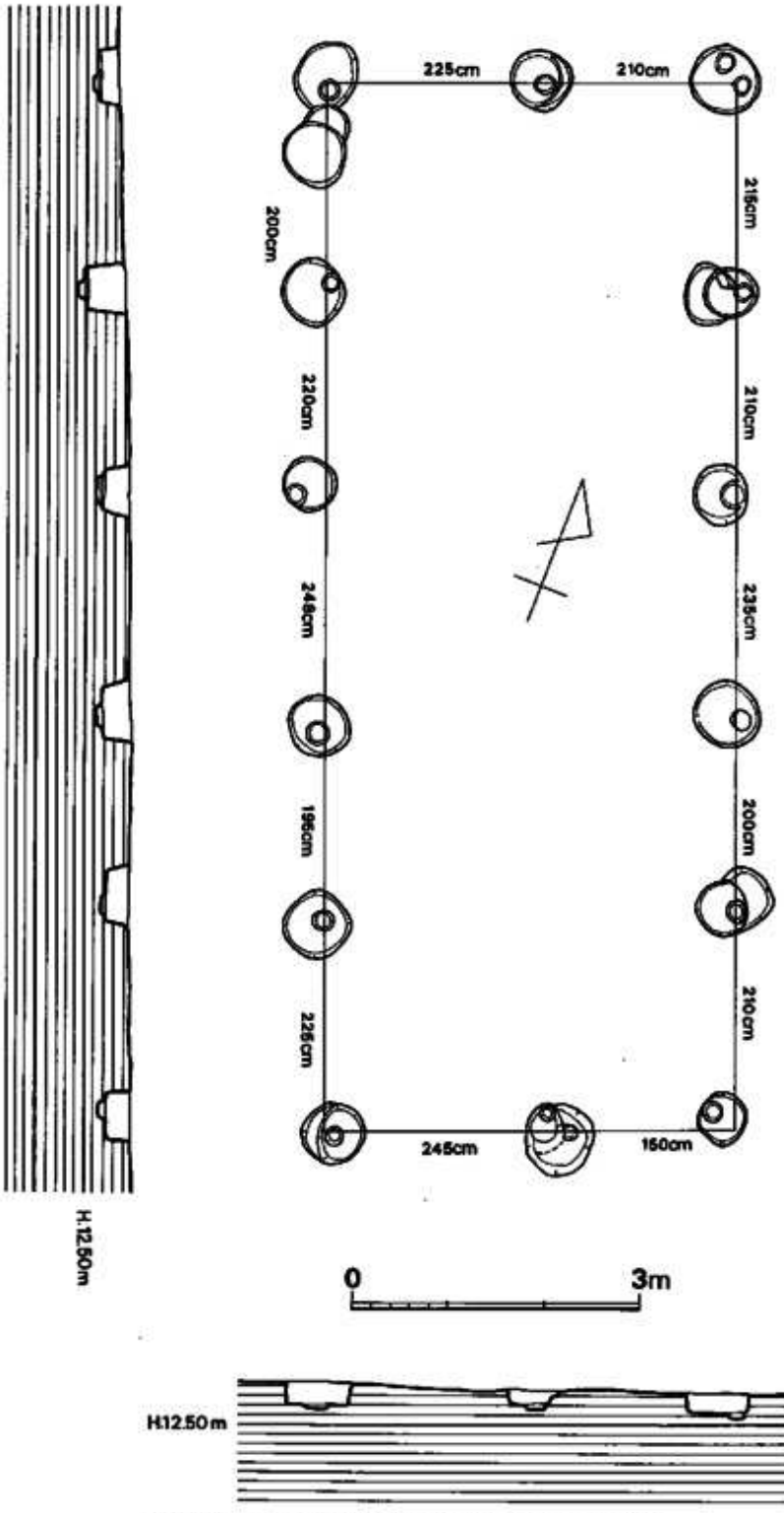
東南隅のトレンチに東側の桁筋と思われる柱穴3個が検出された。他の建物から考えて南北に長い2間×5間の建物であろうと推定できる。

6号掘立柱建物　SB006（第9図）

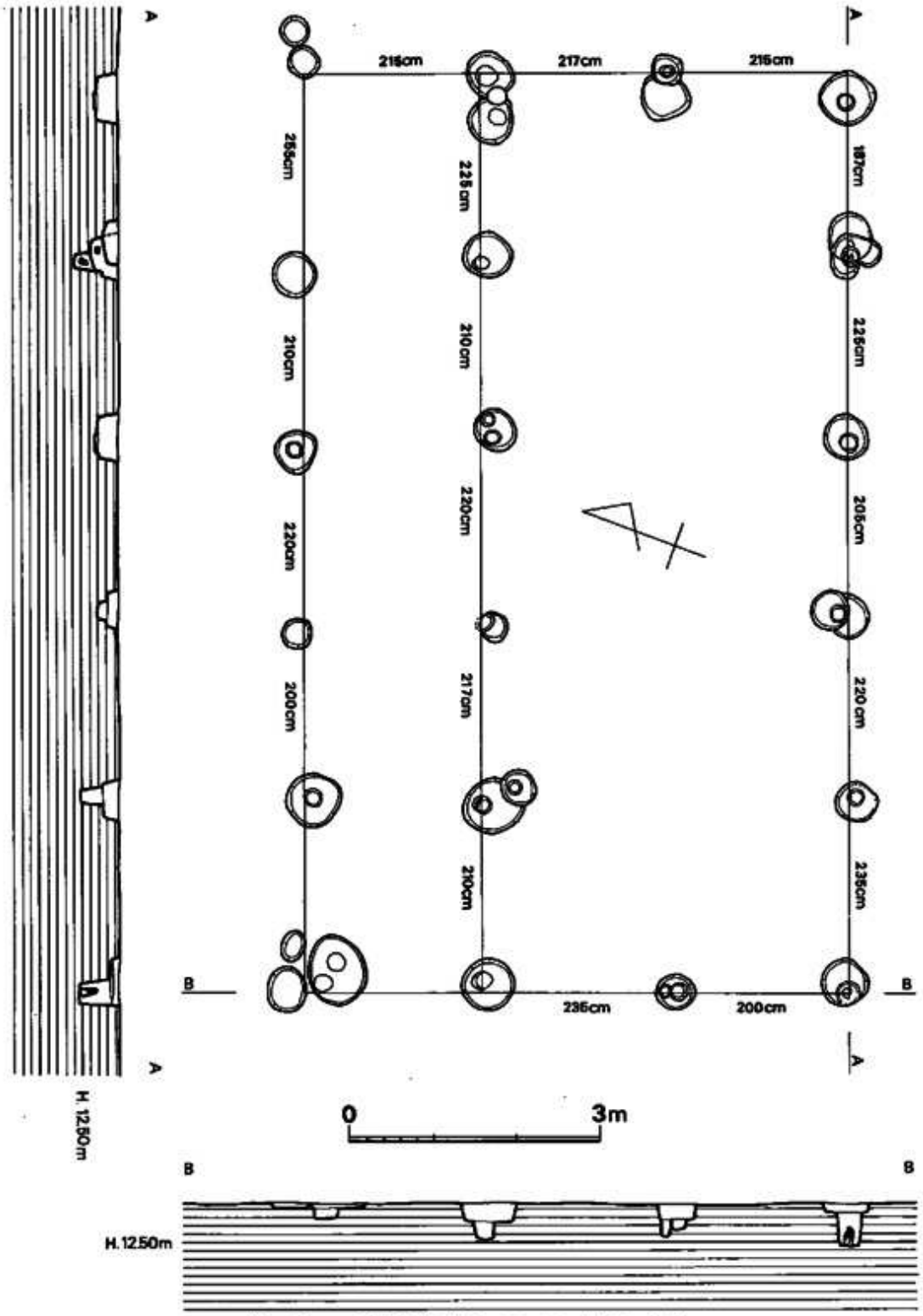
西側桁筋を溝2によって切られており、又大部分が発掘区外にあるので全容はわからない。南



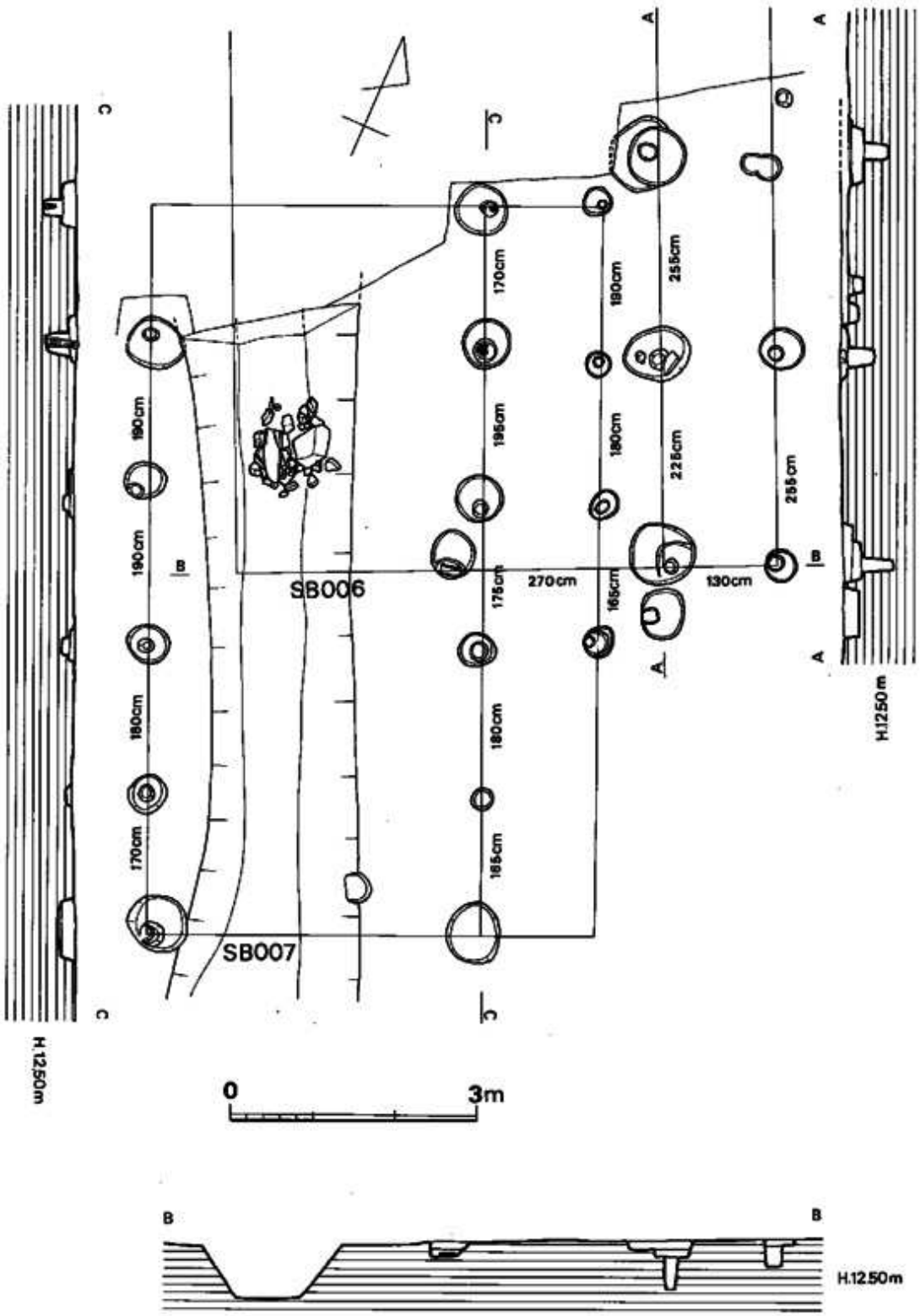
第6図　1号掘立柱建物　SB001（縮尺1/80）



第７図　２号掘立柱建物　ＳＢ002（縮尺1/80）



第８図　３号掘立柱建物 ＳＢ003（縮尺1/80）



第9図　6・7号掘立柱建物　SB006・SB007（縮尺1/80）

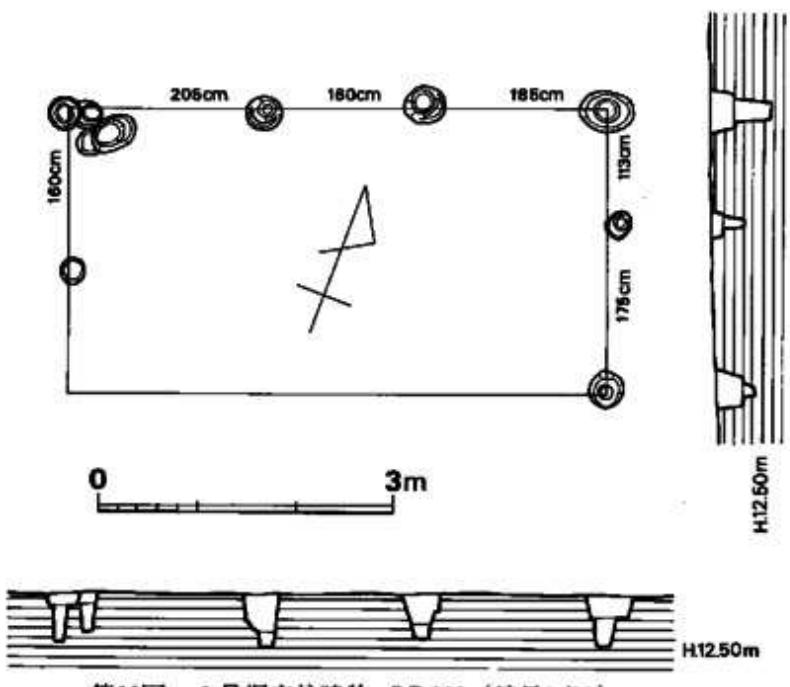
北に長い2間×5間の建物と想定される。東側に庇をもつ。方位はN－24°30′－Wを測る。柱間寸法は図示したが、かなり一定しており、梁行は9尺・9尺、桁行は8.5尺を基準とするものと考えられる。柱穴番号907からは染付等がかなりの量出土していることになっているが、P907は根じめに怡土城の瓦を使用しており、本来6号建物に伴う古いものであることは確実である。遺物取上時又は整理の時点で、柱穴番号905との間に混乱があったものと思われる。この建物の柱穴からは多くの遺物が出土している。とくにP902から出土した土師器坏、埦のセットは古い要素をもっており、この遺物がこの屋形の創建時を示すものと思われる。したがって7号建物よりは古いものと考えられる。

7号掘立柱建物　SB007（第9図）

南北に長い2間×5間の建物で、東側に庇をもつ。溝2に一部を切られ、西北隅が発掘区外にあるが、ほぼ全容は知られる。方位はN－23°30′－Wを測る。柱間寸法は図示するごとくであるが、桁行は6尺を、梁行は6.5尺を基準としたものと考えられる。東側桁筋の北2個の柱穴には柱根が残っていたが、遺存の状態はあまり良くない。

9号掘立柱建物　SB009（第10図）

東西に長い2間×3間の小形の建物である。方位はN－20°－Wを測る。図示するごとく柱間寸法は必ずしも一定しないが、南側入口の周溝のすぐ内側に配置されていることからして門番小屋ではないかと考える。



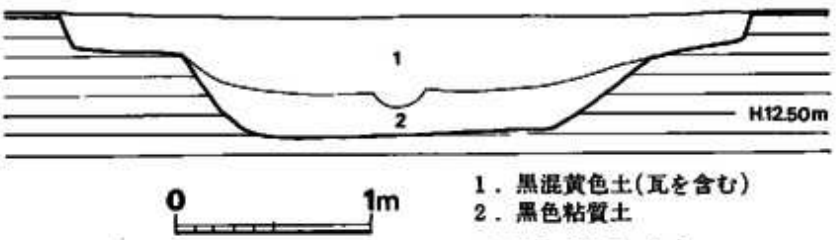
第10図　9号掘立柱建物 SB009（縮尺1/80）

c．溝

溝1　SD001（第11図）

先に述べた竪穴住居跡、掘立柱建物群をとり囲むものと思われるが、北辺が道路下にあり、西辺がすでに削平されていて、東辺、南辺の一部しか発掘できなかった。東辺では幅350～400cm、2段に掘られており、深さは60cmを測る。南辺では幅 240cmとやや狭くなっており、中央部で溝が切れる。東側溝の端にあたる部分を発掘できなかったが、この部分がこの屋形の入口になるものと思われる。方位は完全に条里に規制されている。

出土遺物は比較的少いが、東辺溝の上層からは怡土城の瓦がかなり出土し、下層からは高台付塊の完形品等数点が出土し、これから1号竪穴住居跡、前述の掘立柱建物群と同時期の溝であることを確定できた。



第11図　溝1　SD001断面図（縮尺1/40）

d．土壙その他

柱穴等の時期を確定するために、遺物の出土した柱穴等はすべて番号を付して取りあげたが、前述の遺構の他に確実に平安期の遺構として取りあげられるものは3・4・5号土壙である。

3号土壙　SK003

径160cm、深さ30cm強の穴で、高台付塊の完形品を出土している。

4号土壙　SK004

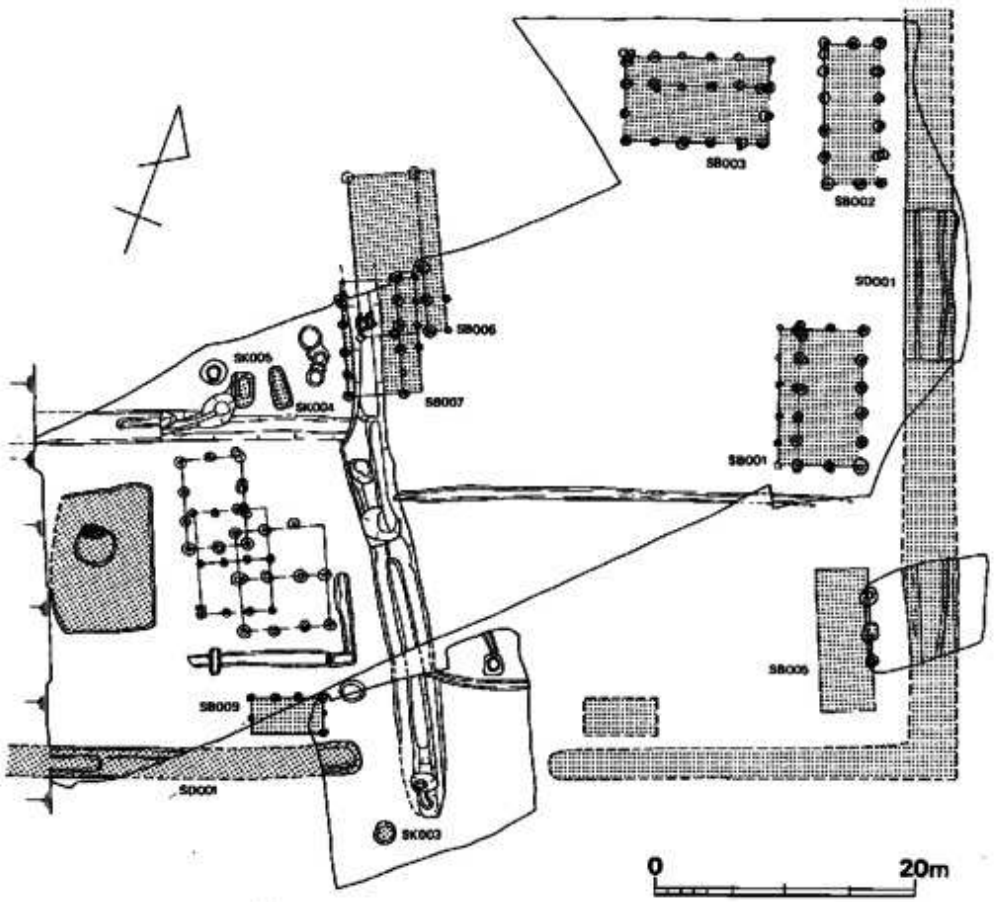
1号・2号土壙の西側にある長さ 330cm、幅100～140cm、深さ10cm程の土壙で、土師器坏等を出土している。一部戦国期の遺物もみられるが、混入したものと考えられる。

5号土壙　ＳＫ005

長さ270cm、幅180cm程の隅丸長方形を呈する浅い穴であるが、土師器坏、高台付椀、甕、内黒土師器等をかなり出土している。土壙の性格、用途等は不明。

ｅ．小　結

平安期遺構の配置を図示すると第12図のごとくなる。第３図にみるように、２・３号建物のすぐ北の道路は条里の区割にあたる。溝・建物ともに条里と方位をほぼ同一とし、条里の区割に強く規制されたと考えられるので、さらに北側に拡がる可能性は少ない。南辺の溝は中央部で切れており、この部分が入口になることは又確実であろう。これらから復原すると南北に62～63ｍ程東西に80ｍ程の周溝に囲まれた屋形跡といえる。おそらく入口の両側に門番小屋をかまえ、屋形内の東側半分には中央部分を広場にして掘立柱建物群を配置し、西側半分には竪穴



第12図　平安期遺構配置図（縮尺1/600）

住居跡が残ることから家人ともいえる人々の居住する奥向きの用を果す空間ではなかったかと想定できよう。南側に入口をもち、整然とした配置を示す掘立柱建物群からすると、役所的な一面をも有するものであろうが、西側半分はかなり私的側面をもつことを示唆しているといえよう。かなりの勢力を有する階層の者の屋形であろう。後に詳述するが、土器の示す年代は9C前半頃から9C末頃に属する。したがって中世豪族原田氏の一族である波多江氏と関係のないことはいうまでもない。波多江庄とは文献的には必ずしも明確ではないとのことであるが、波多部から波多江へとなったとされる天長3年(826年)、怡土郡から志摩郡へと変ったとされる寛平8年(896年)と、土器の示す時期がほぼ重複することは興味深い。いいかえれば、波多江と称された頃に屋形が創建され、郡変えされた段階で廃棄された可能性が強いということである。この屋形の性格を考える上での大きな鍵となるものかもしれない。

2) 戦国期の遺構

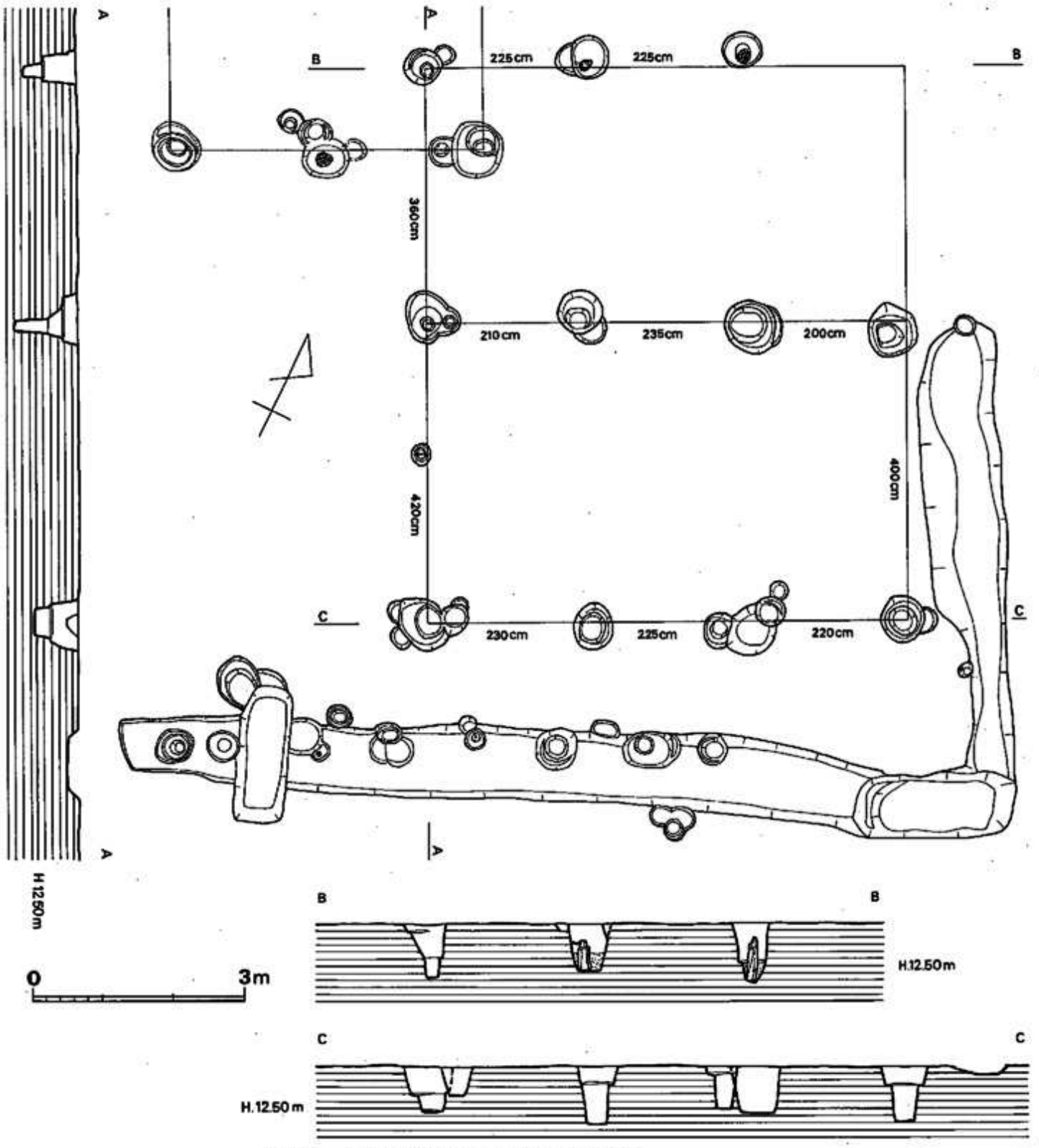
a. 掘立柱建物

4号掘立柱建物　SB004（第13図）

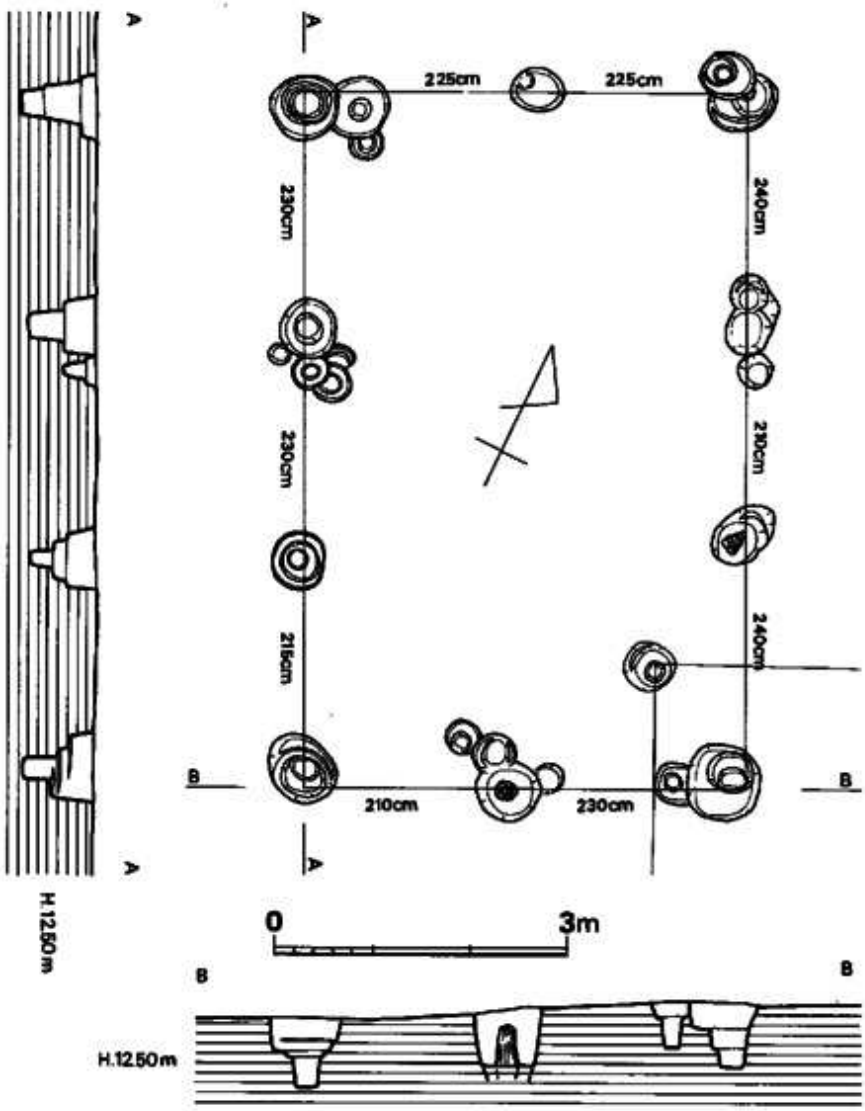
東西3間×南北2間で、南北に長い建物である。東北隅の柱穴は検出できなかった。方位はN－25°30′－Wを測る。柱間寸法は図示するとおりであるが、梁行は7.5尺、桁行は14尺・12尺を基準としたものと考えられる。南側・東側に雨落溝（溝6　SD006）が設けられている。一部8号建物と切り合うが、柱穴内遺物の検討からすると、同じ戦国期ではあるが8号建物が一時期古いと考えられる。柱根の残るものもあり、その遺存状態もかなり良好である。柱穴の大きさは60～70cm程度、柱根の径は20cmたらずである。雨落溝からは染付等がかなり出土しており、この建物が溝2等と同時期のものであることを示している。

8号掘立柱建物　SB008（第14図）

2間×3間の南北に長い建物である。方位はN－25°30′－Wを測る。柱穴の大きさは60～80cm程で一部に柱根、松の皮等が残り、遺存状態は良好である。柱根の大きさは20cmを越える。柱間寸法は図示するとおりであり、梁行は7.5尺、桁行は8尺・7尺・8尺を基準としたと想定できる。さきにのべたように4号建物よりも古いものと考えられる。



第13図　4号掘立柱建物　SB004（縮尺1/80）



第14図　8号掘立柱建物 SB008（縮尺1/80）

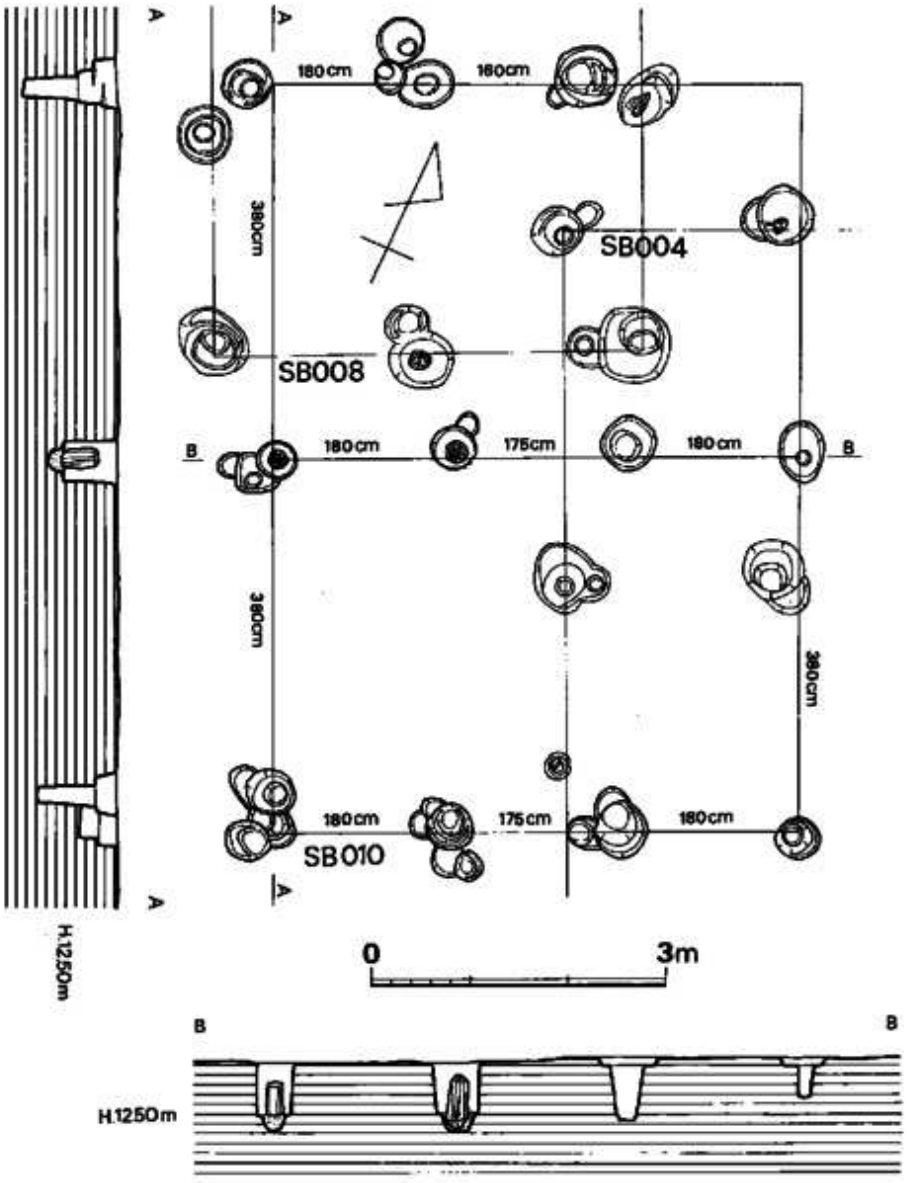
10号掘立柱建物　SB010（第15図）

東西3間×南北2間で、南北に長い建物である。東北隅の柱穴は検出できなかった。方位はN－24°30′－Wを測る。柱間寸法は図示するとおりであるが、梁行は6尺・5.5尺・6尺を、桁行は12.5尺を基準としたものと考えられる。柱根の残るものもあり遺存状態も良好である。柱根の大きさは20cmを越える。時期を確定するきめてはないが、4・8・10号の重複状態からすると、8号→10号→4号建物の順に建てかえられた可能性が強い。

b．溝

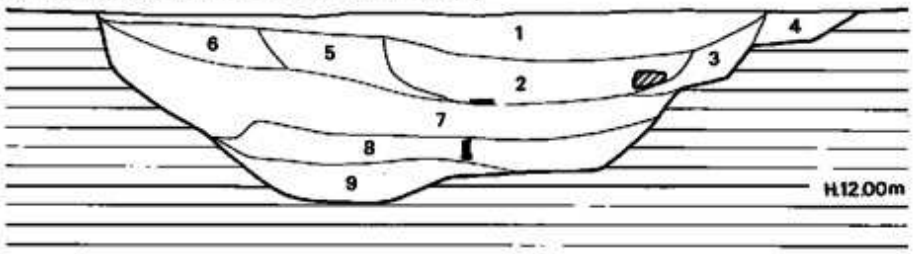
溝2　SD002（第15・16図）

平安期屋形のほぼ中央部を南北に走る大溝で、南側は端が検出された。北側はさらにのびる。幅 350cm、深さ70cm程となる。発掘区の北端に近く、大石２枚と小礫を用いた石組があるが、これは橋として用いたものであろう。遺物は石臼、土鍋類、唐津系陶器、染付等の戦国期のも



第15図　10号掘立柱建物 SB010（縮尺1/80）

のに加え、平安期の遺構を切っていることもあって、それらに伴う遺物もかなり出土した。さらに下駄、漆器椀類の他にタニシの殻も出土した。

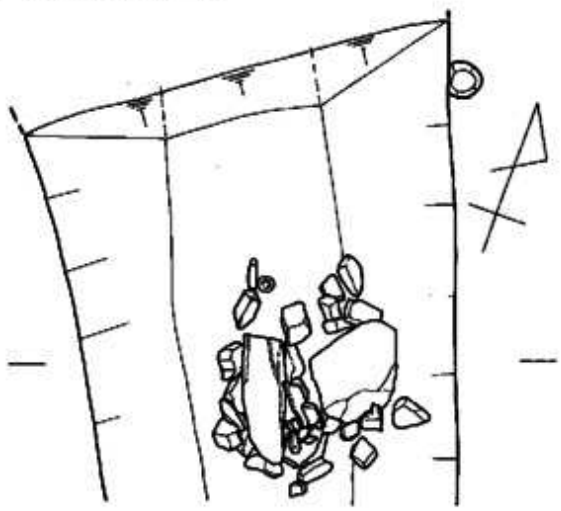


第16図　溝2　SD002断面図（縮尺1/40）

1．灰褐色砂質土　2．褐色粘質土　3．灰色砂質土　4．茶褐色粘質土　5．褐色粘質土ブロック
6．褐色粘質土　7．暗灰色粘土　8．灰色粘土　9．灰色粘土混・砂

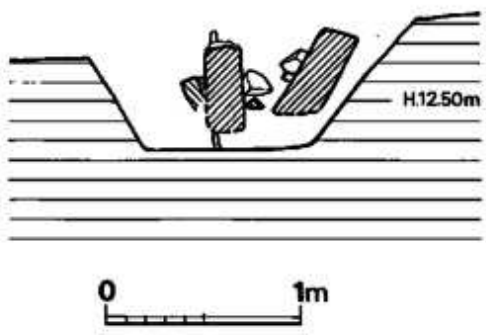
溝3　SD003

ほぼ条里の東西方向と同方向に、溝2の西側に走る溝で幅180～240cmで、深いところでは60cm程である。出土遺物からみると、土鍋類、火舎類の他、瓦質すり鉢等が多く、唐津系陶器、染付類をほとんど含まないといってよい。この上層にある溝4はこれに反してほぼ溝2と同様の遺物を含んでいる。したがって戦国期に属するが、溝2・4等よりはやや古期に属し、8号建物と関連する可能性が強い。



溝4　SD004

溝3の上層にある溝で、あたかも1号井戸の流し場でもあるかのようである。遺物は石臼、土鍋類の他、唐津系陶器、染付等を多く含み、又溝2出土のものと破片が接合するものもあって、4号建物、溝2等と同時期のものであるといえる。



第17図　溝2　SD002 石橋（縮尺1/40）

溝5　SD005

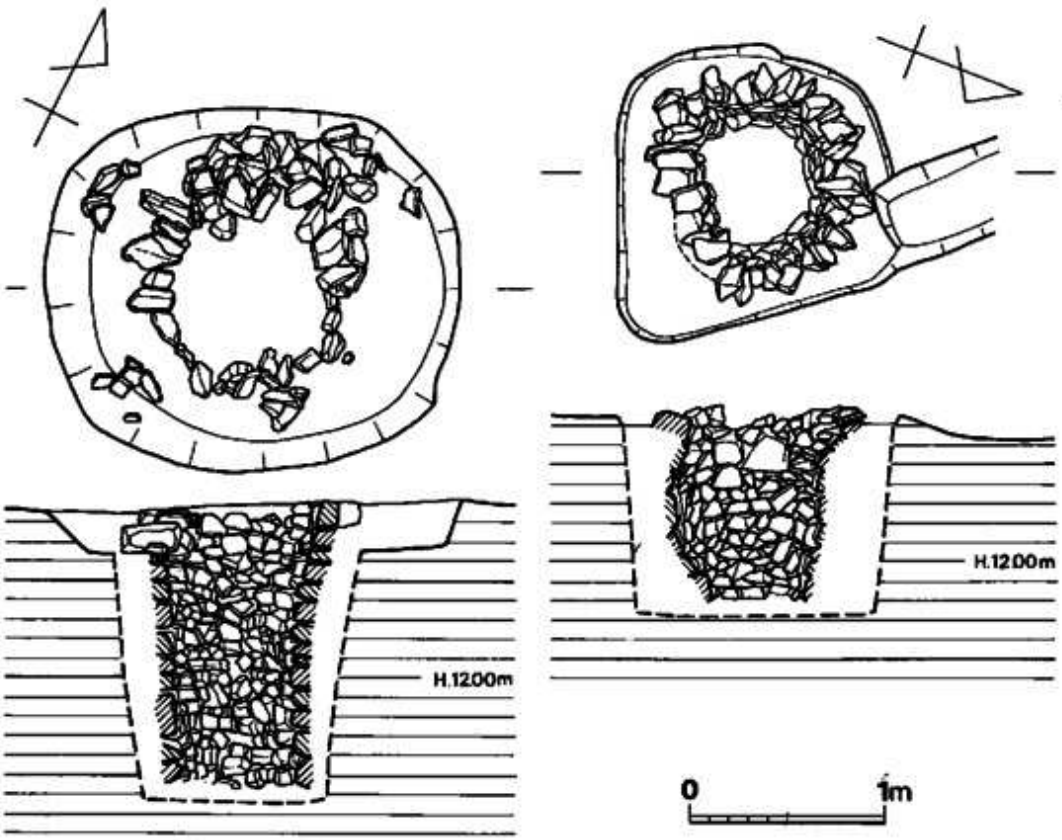
溝2の東側を、条里の東西方向とほぼ同方向に走る幅 100cm前後の浅い溝で、遺物の出土量はきわめて少ない。

溝6　SD006（第13図）

便宜的に溝6としたが、実際は4号建物の雨落ち溝である。染付等を出土し、4号建物の時期を確定できた。他に包丁等も出土している。

溝7　SD007

3号井戸の南側を東西に走り、溝2に注ぐ小溝で、染付等を出土しており、溝2と同時期のものであることがわかる。



第18図　1号井戸 SE001(左)，3号井戸 SE003(右)（縮尺1/40）

c．井　戸

1号井戸　SE001（第18図）

小礫を小口積した石組井戸で、径は70cm、深さは140cmを測る。発掘中も常に満水の状態であった。唐津系陶器・染付等を出土し、溝2・4、4号建物等と同時期のものであることがわかる。

2号井戸　SE002

径170cm、深さ140cmの素掘りの穴で、井戸であるか否かはさだかでないが、他の同類の穴より深く、井戸としても機能し得る。

3号井戸　SE003（第18図）

1号井戸と同様小礫を小口積した石組井戸で径は70cm程度、深さは100cm程である。北側に流れる小溝と連なり、南側には溝2に注ぐ小溝があり、この井戸も1号井戸と同時期のものと考えられる。

4号井戸　SE004

溝2の南端近く、その西側に位置するが、大部分が発掘区外にあったので、底まで至っていない。素掘りの2号井戸と同様なものであろう。

d．土壙その他

1号土壙　SK001（第19図）

径110cm、深さ60cm程の素掘りの穴である。底部の外周はやや深く掘り下げており、底部には幾重にも重ねて藺を敷いていた。貯蔵穴等の用をなすものかと考えられる。唐津系陶器、染付等を出土しており、4号建物、溝2・4等と同時期に属することがわかる。

2号土壙　SK002（第19図）

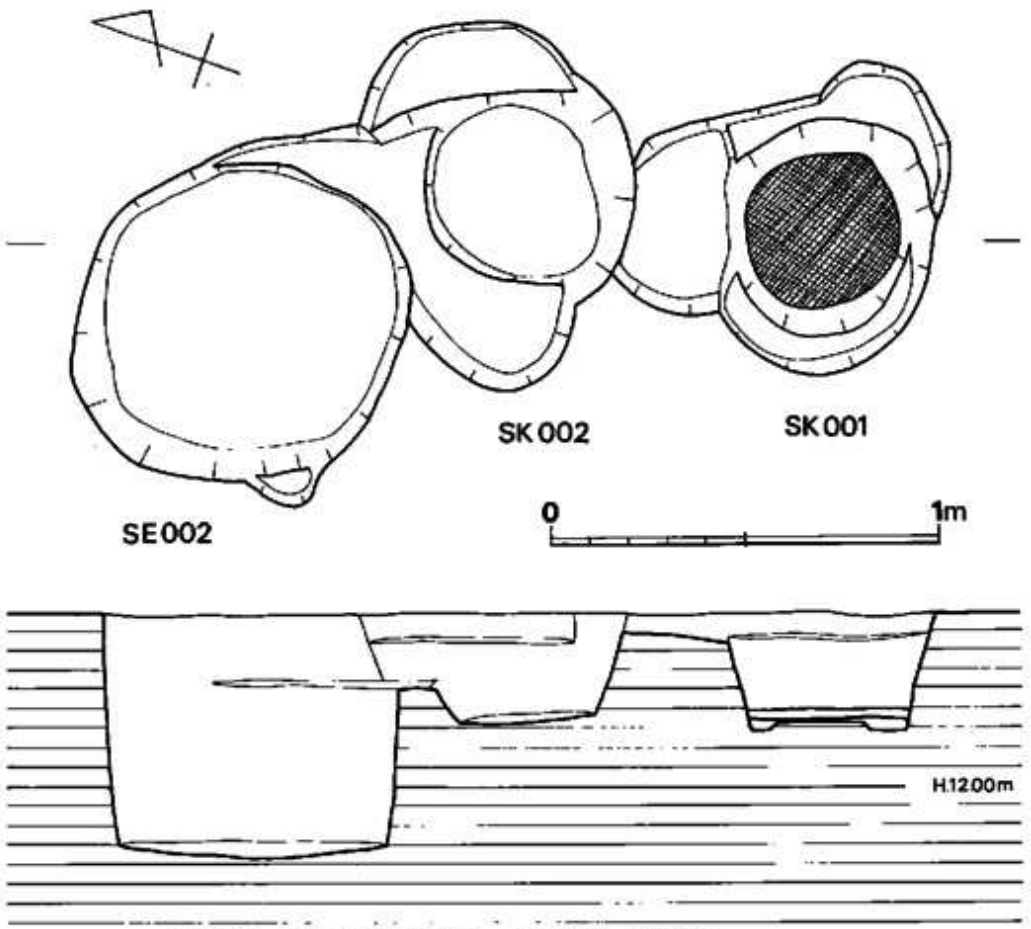
1号土壙と径・深さともに同大の穴である。出土遺物も唐津系陶器、染付等を出土している。

e．小　結

戦国期の遺構は、８号掘立柱建物、溝３と、４号掘立柱建物、溝２・溝４、井戸１等の時期に大別できるようである。出土遺物については後で詳述するが、前者は土鍋、瓦質すり鉢、瓦質火舎を主体としており、後者は土鍋の他に唐津系陶器、染付が多量に出現している。これらの陶磁器の示す時期はまさに原田氏が豊臣秀吉によって滅ぼされた時期と一致するものとみてよい。

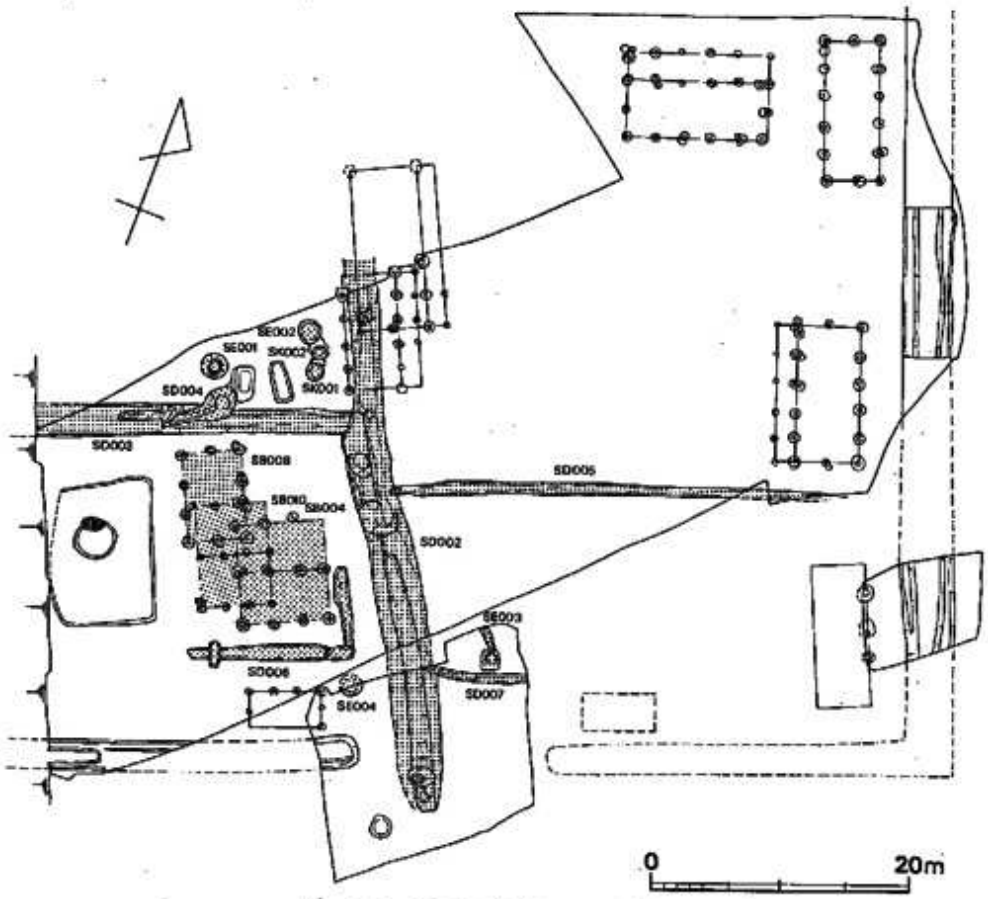
４号・８号・10号建物と３棟が相重複しており、10号建物の時期決定を行う決めてはないが８号→10号→４号と建替えていったものと考えられる。

戦国期の遺構は溝２を東端としており、南・北・西側に如何に展開しているものかは見当がつかない。溝２が発掘区の南端で切れていることからすれば、東側に入口をもち南北に拡がるもの



第19図　１号土壙 ＳＫ001，２号土壙 ＳＫ002
２号井戸 ＳＥ002 （縮尺1/40）

かも知れないが、この時期まで掘立柱建物であることなどからすると、北隣の「丹波屋敷」等に比して小規模の観をまぬがれない。



第20図　戦国期遺構配置図（縮尺1/600）

3．遺　物

1）平安期の遺物

平安時代の遺構は竪穴住居跡1、掘立柱建物7、溝1、土壙3を発掘した。1号竪穴住居跡からは土師器坏、高台付埦、甕、脚付皿・内黒土器の高台付埦・高台付皿、緑釉の高台付埦、須恵器、越州窯系青磁碗等が大量に出土し、一括資料としての好資料を得た。掘立柱建物はその構造上、遺物の検出はほとんどないといえるが、6号建物ＳＢ006の柱穴、とくにＰ 902からは柱のまわりに祭ったような状態で遺物が出土した。他に土壙、および戦国期の遺構に混入した状態で出土している。

土器の特徴・法量等は別表にまとめたので、ここでは2・3の問題をとりあげてみたい。奈良・平安・鎌倉時代土器についての研究は、大宰府史跡の発掘成果をもとにした、横田賢次郎・森田勉両氏、大宰府条坊の発掘成果をもとにした前川威洋氏の研究等によって急速に進展した。これらの研究は大宰府を中心としたものであって、周辺地域との(注)対比は未だ細部にわたって行われているとはいえないが、これらを参考にした場合、波多江遺跡の平安期土器は、前川氏の土師器Ⅰ－1Ａ・Ⅰ－1Ｂ類、横田・森田氏によるＳＥ400、ＳＫ045出土土器に近く、概して9Ｃ代の土器であることは確実といえるが、前川、横田・森田氏の分類と必ずしも一致しない面があるので、さらに詳しくたちいってみることにしたい。

前川氏は9Ｃ初頭～9Ｃ中葉に位置づけるⅠ－1Ａ類として御笠川南条坊6次ＭＥ13区下層の土器をあげ、坏は口径120～129㎜、底径68～83㎜、器高24～36.5㎜で器面はヨコナデされ、底面にはヘラ切り痕と板目がついていること。高台付埦の体部は直線的で、底部端に高台がつき、器面調整はヨコナデが施されるとし、坏・高台付埦ともにヘラミガキがみられず、精製土器がない。皿形のものがほとんどみられない。坏はやや小形化し、高台付埦もやや小形化して、大形のものがない。明確に須恵器の坏や高台付埦を伴っている。内黒土器、黒色土器の量が多いことを特徴としてあげている。9Ｃ中葉～9Ｃ後半に位置づけるⅠ－1Ｂ類の特徴として、坏は115～122㎜、およそ120㎜前後で、Ⅰ－1Ａ類と比べて小形化している。高台付埦はまだ直線的で、底部近くにゆるい屈折部をもつものもある。脚付皿があり、托はまだ存在しないとしている。9Ｃ終末～10Ｃ初頭に位置づけるⅠ－2Ａ類の特徴として、坏は口径106～121㎜、底径66～78㎜、器高23～30㎜でⅠ－1Ｂ類と比べて口径・器高ともに小さくなる。高台付埦では120㎜前後の小埦が圧倒的に多く、体部は丸味を帯びてきているが、口縁の外反はほとんどみられない。托が出現してくる。いわゆる丸底の埦が出現していない。小皿がまだ分離出現していないとしている。

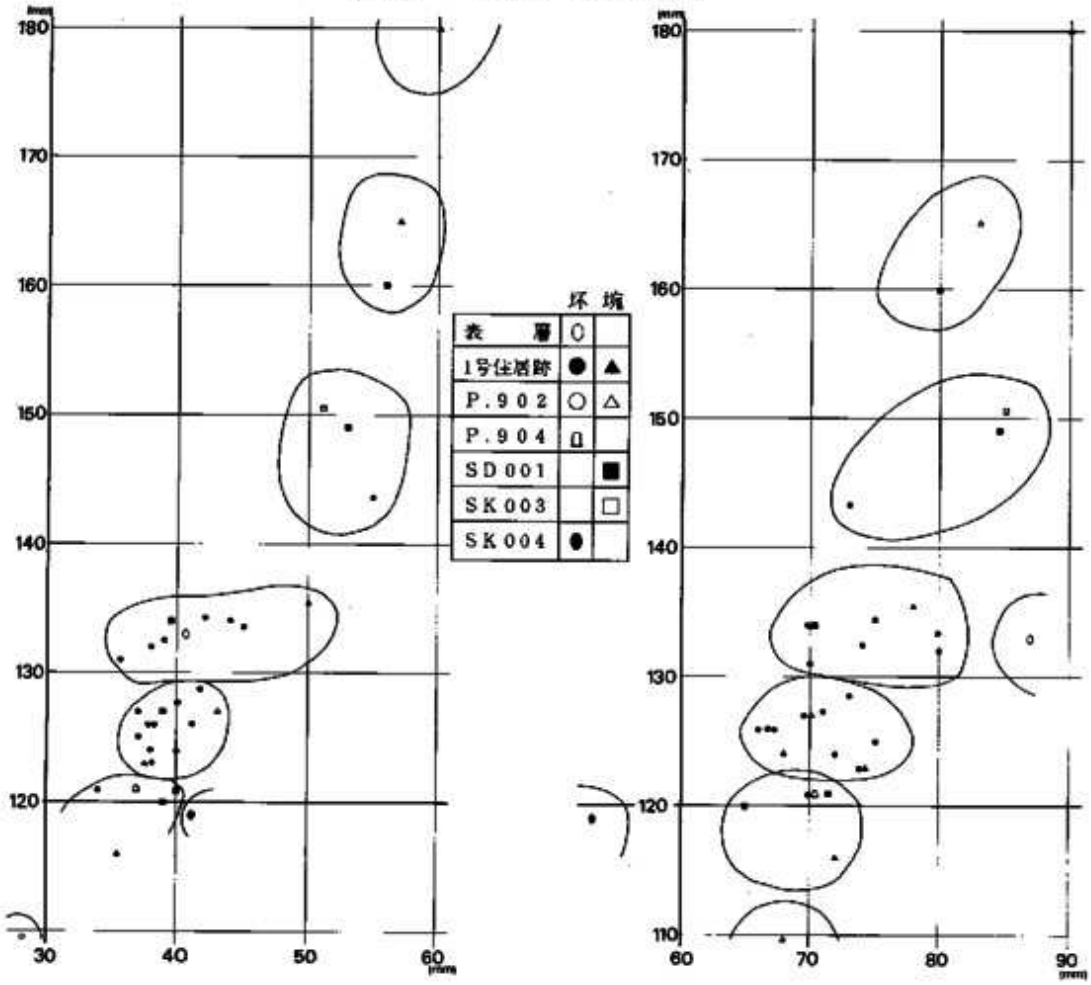
横田・森田両氏は９Ｃ前半（825年±25年）のものとして、大宰府史跡ＳＥ400出土土器をあげ、坏は122～135㎜、器高31～37㎜、底径69～80㎜で、直線的な体部でわずかに口縁を外反させる。体部はヨコナデ、内底はナデ、底部はヘラ切り離しで板状圧痕がみられるとし、又口径164㎜、器高44㎜、底径90㎜で、ヨコナデの後ヘラミガキ、外底はヘラ削りを行なう精製土器が存在すること。又152㎜、器高25㎜、底径82㎜のものもある。高台付椀は上・下層の二者に分け、前者の体部はやや内彎気味で、端部を細くし、後者は底部端に厚く直立した高台を貼付し、体部下半はヘラ削りを行っているとする。これらに須恵器、土師器甕、高杯等を共伴している。９Ｃ中頃（850年±25年）とされた筑前国分寺ＳＫ045出土土器の坏は口径114～134㎜、器高2.5～3.7㎜、調整はヨコナデを基調とするとしている。900年前後とした大宰府史跡ＳＫ678は前川氏もⅠ－２Ａ類として使用しているが、坏の口径123㎜前後、器高28㎜前後としている。

では１号竪穴住居跡出土の土器を中心にしてみてみよう。坏の底部はヘラ切り離しで、板状圧痕が残るものがある。体部はほぼ直線的である。内底部の調整はナデ、外底は板状圧痕の上からナデ、体部はヨコナデで、ヘラミガキを加えたものはない。前川、横田・森田氏にならって、口径と器高、口径と底径との関係を示すと第１表の如くなる。最も量的に多いものは口径123～129㎜、器高37～42㎜、底径66～75㎜を測るもの。次に多いのは口径131～135㎜、器高35～45㎜、底径70～80㎜のものである。ほぼ器形を同じくしながら、さらにこれよりも小さいもの、口径121㎜以下、器高34～37㎜、底径70㎜前後のもの。口径143～144㎜、器高54～56㎜、底径72～74㎜を測る大形品がある。これらとやや器形を異にするものに４号土壙ＳＫ004出土のものと、表層出土のものがある。前者は復原口径119㎜、復原底径53㎜、器高41㎜で底径が小さいことが特徴である。内底はナデ、体部は内外ともにヨコナデ。後者は復原口径133㎜、底径87㎜、器高38～43㎜を測り、底径がかなり大きい。底部には板状圧痕があり、その上からナデ、体部はヨコナデであるが、底部と体部の境をヘラ切りしていることが特徴的である。いまこの45・62の両者を別にして、口径121㎜以下のものを特小坏、口径123～129㎜のものを小坏、131～135㎜のものを中杯、口径140㎜代のものを大坏として便宜的に分類する。45・62はこれらよりも古い要素をもつものといえる。

高台付椀の体部はかなりいびつな25、やや丸味を帯びた57をのぞき、ほぼ直線的である。高台は外にひらくものが多いが、開きぐあいが小さく、高台もあまり高くないもの。大きく開く高い高台。ほぼ直で低い高台などがある。内底はナデ、体部から高台部分はヨコナデ、外底はナデを施す。又外底には板状圧痕が残るものがある。いまこれらの椀の高台貼付前の状態での口径と器高、口径と底径との関係を第３表に合せて呈示した。これによると坏の特小、小、中、大にみあうものと口径160㎜代、180㎜のものも存在する。これらを一応特大椀として分類しておく。57は内黒土器の高台付椀と器形的に共通するものかもしれない。

以上、坏・高台付椀について述べたが、前述の前川、横田・森田氏の分類と数値の上では必

第3表　土師器　坏・埦法量



ずしも一致しない。しかし、坏・高台付埦の形態・調整、脚付皿、甕、内黒土器、須恵器、緑釉、越州窯系青磁の組合せ等からいって、前川氏の土師器Ⅰ－1Ｂ類とその共伴土器、横田・森田氏の筑前国分寺ＳＫ045出土土器に最も近いものといえるようである。

ところで私はこの時期のものを取扱うのははじめてのこととて、事務所が隣接していたことから横田・森田氏の御教示を得るとともに、彼らと多くの討論を行うことができた。彼らが主張するに、1・21・22・23・25・57は新しい要素をもち大宰府史跡ＳＫ678の段階まで下るのではないかとのことである。57は体部がやや丸味を帯びているが、58・59と共伴するものであり、先にのべたごとく内黒土器高台付埦と共通する器形とも思われるので、それを除外すると、その根拠の最大のものは小形化していることと、高台の形態のようである。高台の形態によって、たしかに視覚的に埦全体がかなり形態を異にするように感じられる。しかしながら高台貼付前の状態でみると、坏の形態としてはさほど差がないように思われる。したがって高台貼付前の

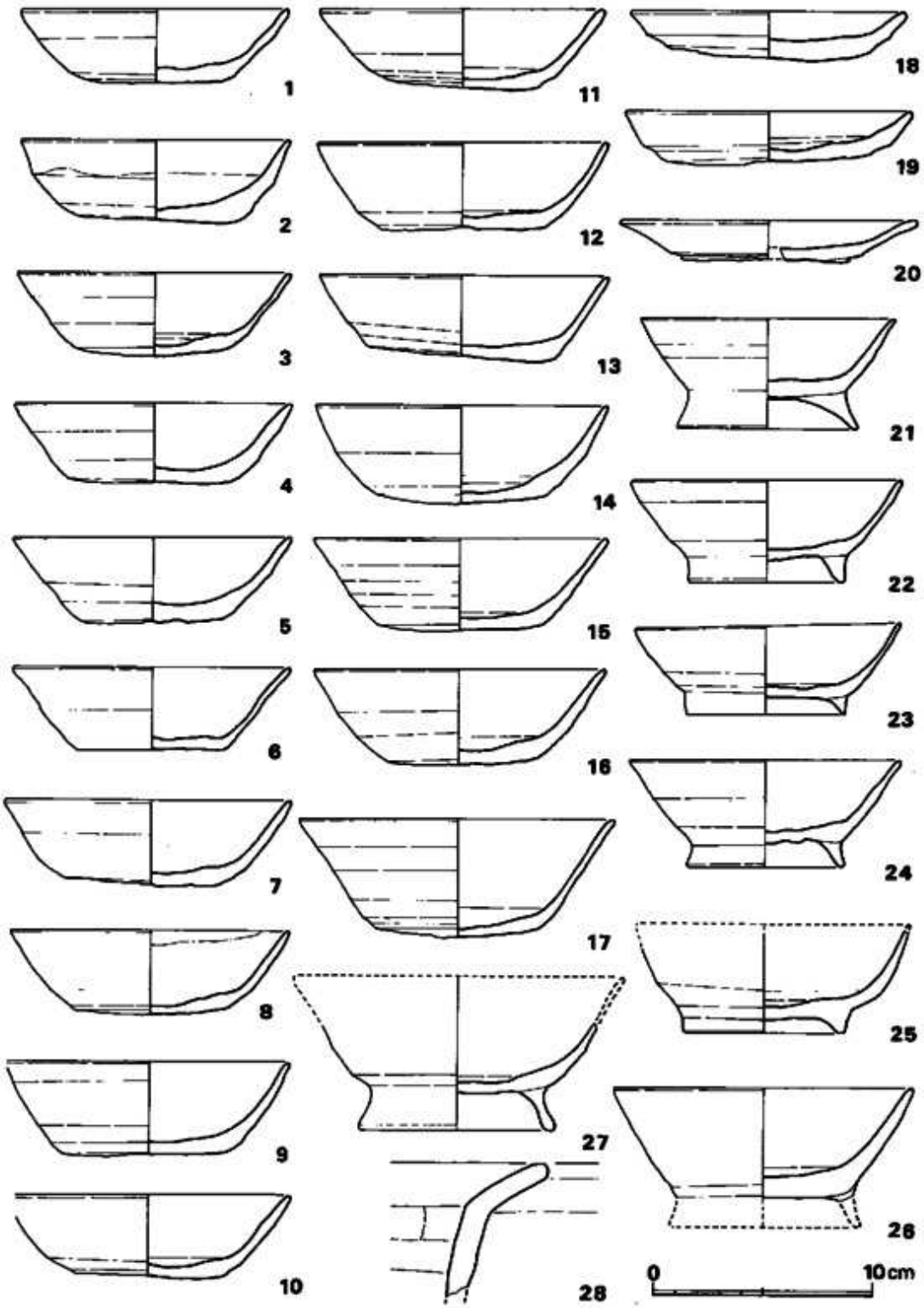
口径、器高、底径を示すことにした。ただ高台が高くなり、外に大きくひらく、たとえば27・43・44・71等の高台は前川氏のⅠ－２Ａ類、横田・森田氏の大宰府史跡ＳＫ678以後の埦の高台と共通する要素をもち、たしかに新しい要素をもつものかもしれない。体部は未だ直線的ながら高台が高く、大きく外に開くこの種の埦等をもって一型式を設定し得るのかもしれない。こういうことから考えると、１号住居跡、溝１ＳＤ001、３号土壙ＳＫ003、５号土壙ＳＫ005、などは前川氏のⅠ－１Ｂ類と、Ⅰ－１Ｂ類とⅠ－２Ａ類との間に位置付けられる一群、横田・森田氏の分類による筑前国分寺ＳＫ045と、筑前国分寺ＳＫ045と大宰府史跡ＳＫ678との間に置ける一群を含むものといえよう。又58・59・45・62等は前川氏のⅠ－１Ｂ類、横田・森田氏の筑前国分寺ＳＫ045というよりは、前者のⅠ－１Ａ類、後者の大宰府史跡ＳＥ400により近いといえる。したがって波多江遺跡の土器の示す時期は前川氏分類のⅠ－１Ｂ類、横田・森田氏の筑前国分寺ＳＫ045を前後として、それらよりやや古い要素とやや新しい要素の両者を含んでいる。つまり９Ｃ中頃を中心として前半の一部と、後半に比定できるものと考える。ただ坏に関していえば、いずれをもって新しい要素をもつものとすればいいのか、抽出しにくい。第３表に示すように、特小、小、中、大と分類したが、ほぼ一直線上にならび、形態的にはすべて相似形である。ただ前川、横田、森田氏ともに、小形化することを新しい傾向と指摘している。一般的にいえば正しいと思われるが、今後の資料の増加によって、この地域での検証も行われることを期待する。

【註】

前川威洋　「土師器の分類および編年とその共伴土器について」　福岡県教育委員会『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第８集(下)　1978所収

横田賢次郎・森田勉　「大宰府出土の輸入陶磁器について」　九州歴史資料館研究論集４　1978

横田賢次郎　「大宰府出土の土師器に関する覚え書(３)」　九州歴史資料館研究論集５　1979



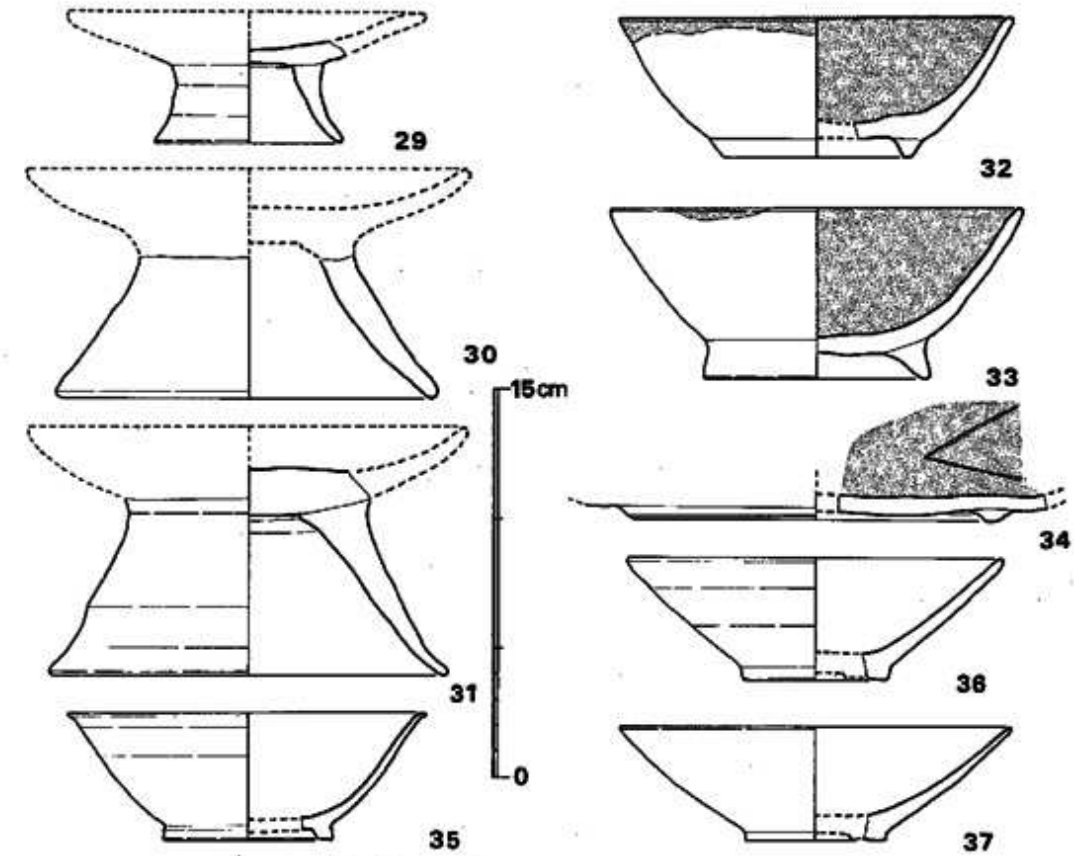
第21図　1号竪穴住居跡出土土器1（縮尺1/3）

第4表　平安期土器観察表

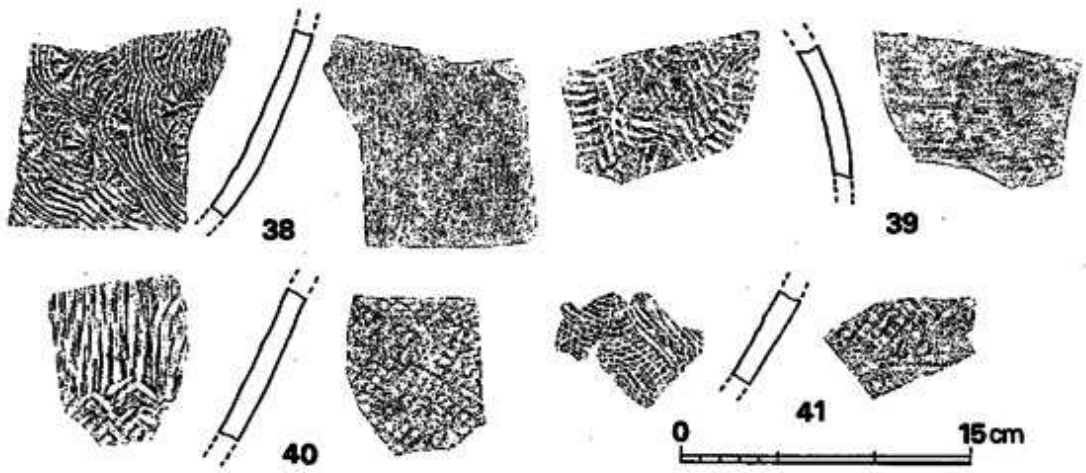
番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
1	1号竪穴住居跡	土師器	坏	口径 121mm 底径 70mm 器高 34mm	底部はヘラ切り離し。ロクロ方向は右回り。黄白色を呈し、胎土には微量の砂粒を含む。焼成はやや硬くて良好。器面のあれがいちぢるしいが、黄白色の化粧土の痕跡がある。	
2	1号竪穴住居跡	土師器	坏	口径121～124mm 底径 73～75mm 器高 38mm	底部はヘラ切り離し。ロクロ方向は左回り。内面は黄褐色、外面は黄白色で、口縁の一部が赤褐色を呈する。胎土には砂粒を少量含む。焼成はやや硬くて良好。器面調整はヨコナデ。	
3	1号竪穴住居跡	土師器	坏	復原口径 124mm 復原底径 72mm 器高 38mm	底部はヘラ切り離し。ロクロ痕が明瞭である。淡茶褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含む。焼成は軟質であまりよくない。内底部はナデ、他の部分はヨコナデ。	
4	1号竪穴住居跡	土師器	坏	口径125～126mm 底径 75mm 器高 37mm	底部はヘラ切り離し。ロクロ方向は左回り。茶褐色を呈し、胎土には少量の砂粒を含む。焼成は軟質であまりよくない。器面のあれがいちぢるしくて観察困難であるが、調整はヨコナデのようである。	
5	1号竪穴住居跡	土師器	坏	口径 126mm 底径 66mm 器高 41mm	底部はヘラ切り離し。ロクロ方向は左回り。淡赤褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含む。焼成は軟質であまり良くない。器面の調整はヨコナデであるが、器面のあれがいちぢるしく、観察困難である。	
6	1号竪穴住居跡	土師器	坏	口径 126mm 底径 67mm 器高 36～40mm	底部には板状圧痕あり。ロクロ方向は左回り。黄白色の化粧土をかけているが地色は赤褐色。精選粘土を用い、焼成は硬くて良好。内面に黒褐色のものが付着している。調整はヨコナデ。底部は板状圧痕の後ナデ。	
7	1号竪穴住居跡	土師器	坏	口径126～129mm 底径 70～72mm 器高 40mm	底部には板状圧痕あり。ロクロ方向は左回り。淡赤褐色を呈す。胎土には少量の砂粒を含む。焼成は軟質であまりよくない。調整は化粧土を施した後ヨコナデ。底部は板目の上からナデを施している。	
8	1号竪穴住居跡	土師器	坏	口径125～127mm 底径 66～68mm 器高 38mm	底部はヘラ切り離し。ロクロ方向は左回り。黄褐色を呈し、胎土には少量の砂粒を含む。焼成は軟質であまりよくない。器面のあれがいちぢるしくて調整の観察不能。口縁内面の一部は赤褐色を呈する。	
9	1号竪穴住居跡	土師器	坏	口径128～129mm 底径 72～74mm 器高 41～42mm	底部はヘラ切り離し。ロクロ方向は左回り。茶黄色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は軟質であまりよくない。器面のあれがいちぢるしく、調整の観察は困難。	
10	1号竪穴住居跡	土師器	坏	口径 127mm 底径 69～70mm 器高 37mm	底部には板状圧痕あり。ロクロ方向は左回り。淡赤褐色を呈し、胎土には少量の砂粒を含む。焼成は軟質であまりよくない。器面調整は底部は内外ともにナデ。他はヨコナデ。口縁の一部に黒斑あり。	

番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
11	1号竪穴住居跡	土師器	坏	口径 131mm 底径 69～71mm 器高 32～37mm	底部はヘラ切り離し。ロクロ方向は左回り。灰黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は軟質であまりよくない。器面調整は底部をナデ、他の部分はヨコナデを施す。	
12	1号竪穴住居跡	土師器	坏	口径131～134mm 底径 74mm 器高 37～41mm	底部には板状圧痕が残る。ロクロ方向は左回り。赤味を帯びた化粧土を施しているが、地色は淡黄褐色。胎土には砂粒を含み、焼成は軟質であまりよくない。器面調整は底部をナデ、他の分はヨコナデを施す。	
13	1号竪穴住居跡	土師器	坏	口径 132mm 底径 80mm 器高 3838mm	底部には板状圧痕が認められる。赤褐色を呈し、胎土には少量の砂粒を含む。焼成は軟質であまりよくない。器面調整はヨコナデであるが、器面のあれがいちぢるしく観察は困難であった。	
14	1号竪穴住居跡	土師器	坏	復原口径 133～134mm 底径 80mm 器高 45mm	底部はヘラ切り離し。ロクロ方向は右回り。淡黄褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含む。焼成は軟質であまりよくない。器面のあれがいちぢるしいため、調整の観察不能。	
15	1号竪穴住居跡	土師器	坏	復原口径 134～135mm 底径 75mm 器高 42mm	底部はヘラ切り離し。ロクロ方向は左回り。内面は赤褐色、外面は黄白色を呈する。胎土には微量の砂粒を含む。焼成は良好でやや硬い。底部はヘラ切りの後ナデ、他の部分は化粧土を施した後ヨコナデ。	
16	1号竪穴住居跡	土師器	坏	口径 134mm 底径 70mm 器高 44mm	底部には板状圧痕あり。ロクロ方向は左回り。黄白色の化粧土を施すが、地色は赤褐色を呈する。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は軟質であまりよくない。底部は内外ともにナデ、他の部分はヨコナデ。	
17	1号竪穴住居跡	土師器	坏	口径143～144mm 底径 72～74mm 器高 54～56mm	底部には板状圧痕が認められる。ロクロ方向は左回り。内面は淡黄褐色、外面は灰黄色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は軟質であまりよくない。化粧土を施しているが剝落がいちぢるしい。	
18	1号竪穴住居跡	土師器	皿	口径125～126mm 底径 89～91mm 器高 22mm	底部はヘラ切り離し。凹凸いちぢるしい。ロクロ方向は左回り。赤褐色を呈する。器壁は部厚く、胎土には少量の砂粒を含む。焼成は硬くて良好。調整は底部をのぞき、他の部分はヨコナデ。	
19	1号竪穴住居跡	土師器	皿	口径131～133mm 底径 95～96mm 器高 25mm	底部には板状圧痕あり。ロクロ方向は左回り。器壁はやや部厚く、胎土にはやや多量に砂粒を含む。焼成は良好で硬い。淡赤褐色を呈する。底部の調整は内外ともにナデ、他の部分はヨコナデ。底部に黒斑あり。	
20	1号竪穴住居跡	土師器	皿	復原口径 136mm 底径 74mm 器高 18mm	底部には板状圧痕あり。黄褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含む。焼成は軟質であまりよくない。底部の調整は内外ともにナデ、他の部分はヨコナデ。体部、底部の両者に黒斑あり。	

番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
21	1号竪穴住居跡	土師器	高台付椀	口径 116㎜ 底径 81㎜ 器高 50㎜ 高台貼付前の底径 72㎜ 〃器高 35.5㎜	外にひらく高い（17㎜）高台を貼付している。淡赤褐色を呈し、胎土には砂粒を少量含む。焼成は軟質であまりよくない。内底はナデ体部から高台部分はヨコナデ。外底には板目あり。口縁の一部に黒斑あり。	
22	1号竪穴住居跡	土師器	高台付椀	復原口径 123㎜ 底径 70～71㎜ 器高 46～49㎜ 高台貼付前の底径 74㎜ 〃器高 36～39㎜	ほぼ直の低い（12㎜）高台を貼付する。黄白色の化粧土を施すが、地色は茶褐色。胎土には砂粒をやや多く含み、焼成は軟質であまりよくない。内底はナデ、体部から高台部分はヨコナデ。外底には板目あり。	
23	1号竪穴住居跡	土師器	高台付椀	口径114～120㎜ 底径 72㎜ 器高 39～46㎜ 高台貼付前の底径 73㎜ 〃器高 31～38㎜	ほぼ直の低い（11㎜）高台を貼付している。乳白色の化粧土を施しているが、地色は黄白色を呈する。胎土には精選粘土を用いるが、焼成はよくない。器面のあれがいちぢるしく調整の観察は不能。	
24	1号竪穴住居跡	土師器	高台付椀	復原口径 124㎜ 底径 70～71㎜ 器高 48～50㎜ 高台貼付前の底径 68㎜ 〃器高 40㎜	外にやや開く低い（10㎜）高台を貼付する。淡茶褐色を呈し、胎土には少量の砂粒を含む。焼成は軟質であまりよくない。内底はナデ、体部から高台部はヨコナデ。外底には板目あり、又黒斑もある。	
25	1号竪穴住居跡	土師器	高台付椀	底径 72～74㎜	ほぼ直に近い低い（11㎜）高台を貼付している。全体としてかなりイビツである。灰黄色を呈し、胎土には少量の砂粒を含む。焼成は軟質であまりよくない。調整はヨコナデ。外底には板目あり。	
26	1号竪穴住居跡	土師器	高台付椀	口径134～137㎜ 高台貼付前の底径 78㎜ 器高 50㎜	ややひらく15㎜程度の高台のようである。黄白色の化粧土を施すが、地色は赤褐色。胎土には微量の砂粒を含み、焼成は軟質。内底はナデ、体部から高台部分はヨコナデ。外底には板目あり。内面に黒斑あり。	
27	1号竪穴住居跡	土師器	高台付椀	底径 88～89㎜ 高台貼付前の底径 81㎜	外にひらく高い（20㎜）高台を貼付している。ロクロ方向は右回り。黄褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含む。焼成は軟質であまりよくない。内底はナデ、体部から高台部分はヨコナデ、外底は板目の後ナデ。	
28	1号竪穴住居跡	土師器	甕	口径 208㎜	小形甕の口縁部である。内面は黒褐色、外面は黄褐色。胎土には砂粒を多量に含む。焼成は軟質であまりよくない。内面はヘラ削りで稜は明瞭。口縁内外はヨコナデ。外面は不明。全体に二次的火熱を受けている。	
29	1号竪穴住居跡	土師器	脚付皿	底径 72㎜	皿部分を欠く。淡赤褐色を呈する。胎土には砂粒を含まない。焼成は軟質であまりよくない。内底はナデ、体部から脚部はヨコナデ、外底はナデ。ロクロ方向は右回り。	
30	1号竪穴住居跡	土師器	脚付皿	底径143～145㎜	大形品であるが、皿部分を欠く。淡赤褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含む。焼成は軟質であまりよくない。脚部は内外ともにヨコナデ。	

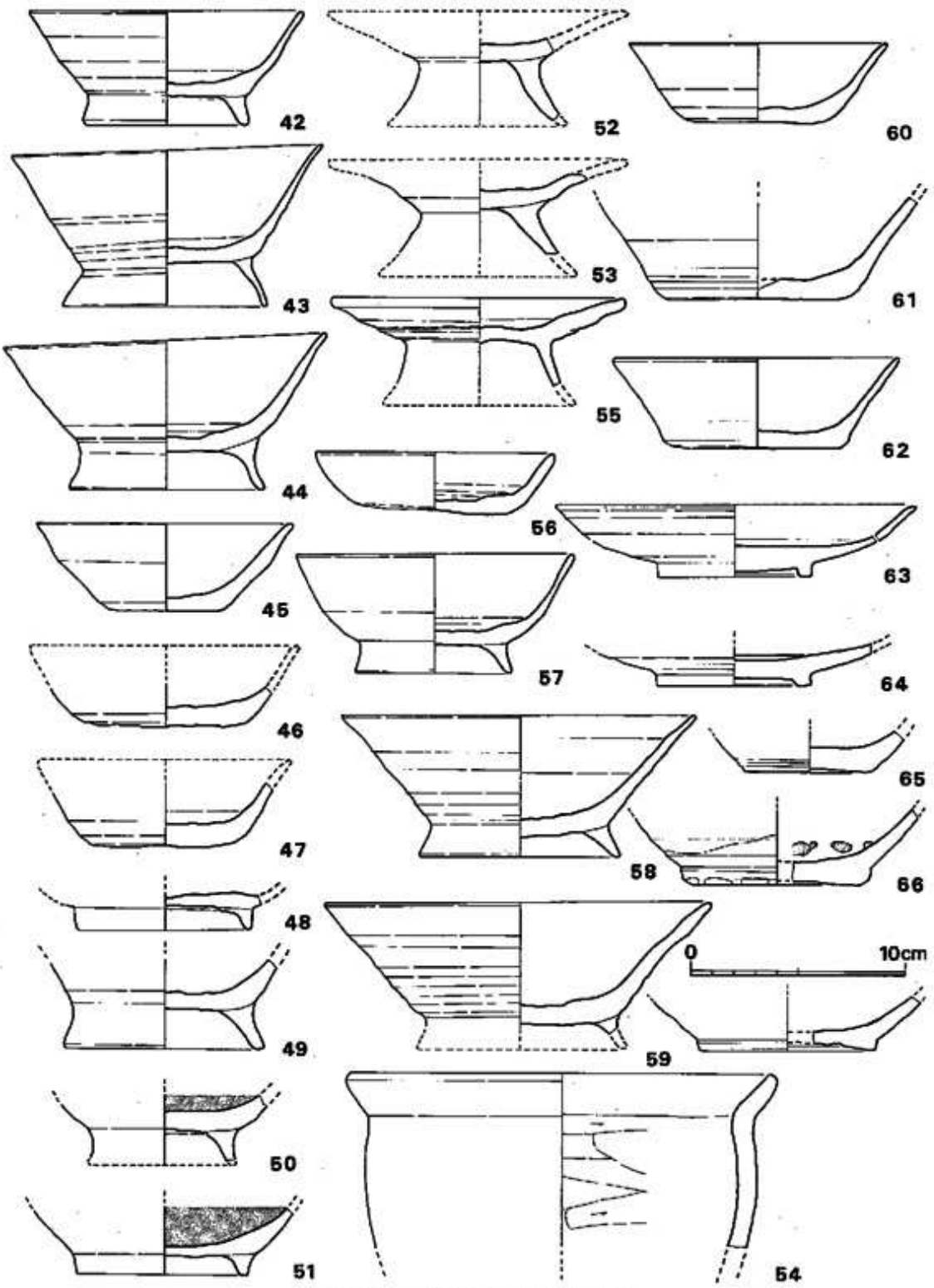


第22図　1号竪穴住居跡出土土器2（縮尺1/3）



第23図　1号竪穴住居跡出土土器3（縮尺1/4）

番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
31	1号竪穴住居跡	土師器	脚付皿	底径 154mm	大形品である。皿部の大部分を欠く。黄白色の化粧土を施すが、地色は赤褐色。胎土には微量の砂粒を含む。焼成は軟質であまりよくない。底部は内外ともにナデ。脚部分はヨコナデ。	
32	1号竪穴住居跡	内黒土器	高台付椀	口径 153mm 底径 72mm 器高 55mm	体部はわずかに丸味を帯び、高台は低く内側に向く。黄褐色を呈し、胎土には少量の砂粒を含む。焼成は軟質であまりよくない。内面は横方向のヘラミガキ、黒色にいぶされる。外面・高台部分はヨコナデ。	
33	1号竪穴住居跡	内黒土器	高台付椀	復原口径 160mm 底径 86mm 器高 66mm	体部はわずかに丸味を帯び、高台はやや外に開く。外面には黄白色の化粧土あり、地色は淡黄褐色。少量の砂粒を含み、焼成は軟質。内面は横方向のヘラミガキ、黒色にいぶされる。外底はナデ、他はヨコナデ。	
34	1号竪穴住居跡	内黒土器	高台付皿	底径 140mm	体部を欠く。高台は低い。内面はヘラミガキ、黒色にいぶされる。又ヘラ記号あり。外面は茶褐色を呈する。体部、高台部分はヨコナデ、外底部はナデ。胎土には砂粒をほとんど含まず、焼成は硬質で良好。	
35	1号竪穴住居跡	緑釉	高台付椀	復原口径 138mm 復原底径 65mm 器高 49mm	体部はやや丸味を帯び、口縁部で外にひらく。高台は低く、やや外にひらきぎみ。胎土は淡茶色で、精選粘土を用いるが、やわらかく、土師質である。高台部分の施釉は明確でないが、他は全面に認められる。	
36	1号竪穴住居跡	青磁	高台付椀	復原口径 146mm 底径 57mm 器高 48mm	体部は直線的、高台は蛇の目高台である。内面及び外面の口縁付近はヨコナデ、それ以下高台部分までは削りの後、施釉。釉はくすんだ灰緑色で、内外ともに貫入あり。胎土は灰白色。越州窯系青磁である。	
37	1号竪穴住居跡	青磁	高台付椀	復原口径 152mm 復原底径 54mm 器高 44mm	体部はほぼ直線的、高台は蛇の目高台。内面から外面上半はヨコナデ、下半は削りの後施釉。釉はくすんだ灰緑色。胎土は灰白色を呈する。越州窯系青磁である。	
38	1号竪穴住居跡	須恵器	甕		大甕の下半部と思われる。灰黒色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は硬質で良好。外面は平行線タタキの後をハケ目様のもので掻き消している。内面は青海波であるが、車輪文を呈している。	
39	1号竪穴住居跡	須恵器	甕		大甕の上半部である。灰黒色を呈し、胎土にはわずかに砂粒を含む。焼成は硬質で良好。外面は横方向のハケ目、内面は青海波。	
40	1号竪穴住居跡	須恵器	甕		大甕の下半部である。外面は灰茶色、内面は灰色を呈する。胎土には砂粒をほとんど含まない。焼成は硬質で良好。外面は格子目タタキの後ナデ、内面は平行線タタキと、方形のあて板を併用している。	



第24図　平安期土器１（縮尺1/3）

番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
41	1号竪穴住居跡	須恵器	甕		大甕の下半部である。青灰色を呈し、胎土にはわずかに砂粒を含む。焼成は硬質で良好。外面は格子目タタキの後ナデ、内面は青海波。外面に線刻あり、長4.4㎜、幅2.1㎜、長幅比2.10で、日本型に属する。	
42	S D 001	土師器	高台付埦	口径 127㎜ 底径 73～74㎜ 器高 54㎜ 高台貼付前の底径 74㎜ 〃器高 39㎜	外に開く高さ13㎜の高台を貼付している。ロクロ方向は左回り。赤褐色を呈し、少量の砂粒を含む。焼成はやや硬く良好。外底には板目あり。底部は内外ともにナデ、体部から高台部分はヨコナデ。	
43	S D 001	土師器	高台付埦	口径 149㎜ 底径 93～96㎜ 器高 69～75㎜ 高台貼付前の底径 84～85㎜ 〃器高 53㎜	体部は直線的で、口縁付近でわずかにひらく。高台は高く、かつ内彎して外に開く。黄褐色を呈し、砂粒を多く含み、焼成は軟質。外底には板目あり。調整はナデ。ロクロ方向は右回り。	
44	S K 003	土師器	高台付埦	口径 151㎜ 底径 89～90㎜ 器高 66～73㎜ 高台貼付前の底径 85㎜ 〃器高 48～54㎜	体部は直線的で、口縁付近でわずかに開き気味。高台は高く、外彎して外に開く。淡赤褐色を呈し、砂粒を多く含み、焼成は軟質。外底には板目あり。調整はナデ。ロクロ方向は左回り。	
45	S K 004	土師器	坏	復原口径 119㎜ 復原底径 53㎜ 器高 41㎜	底部はヘラ切り離し。体部は直線的に開く。底部が小さい。茶褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含む。焼成は軟質であまりよくない。内底はナデ、体部は内外ともにヨコナデ。	
46	S K 005	土師器	坏	底径 74㎜	底部はヘラ切り離し。ロクロ方向は右回り。淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒をほとんど含まない。焼成は軟質であまりよくない。内底はナデ、体部は内外ともにヨコナデ。	
47	S K 005	土師器	坏	底径 67㎜	底部はヘラ切り離し。ロクロ方向は右回り。黄橙色を呈し、胎土には微量の砂粒を含む。焼成は軟質であまりよくない。底部は内外ともにナデ、体部は内外ともにヨコナデ。	
48	S K 005	土師器	高台付埦	底径 79㎜	10㎜程の低い高台を直に貼付している。外底には板状圧痕あり。黄褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含む。焼成は軟質であまりよくない。底部は内外ともにナデ、体部から高台部分まではヨコナデ。	
49	S K 005	土師器	高台付埦	底径 90㎜	高台は高く、大きく外にひらく。ロクロ方向は左回り。外底には板状圧痕あり。黄橙色を呈し、胎土には微量の砂粒を含む。焼成は軟質であまりよくない。内底はナデ体部から高台部分はヨコナデ。	
50	S K 005	内黒土器	高台付埦		高台は外に開き気味。ロクロ方向は左回り。淡赤褐色を呈し、胎土には砂粒をほとんど含まない。焼成はやや良好。内面は丁寧なヘラミガキ、黒くいぶされている。外底はナデ、体部から高台部分はヨコナデ。	

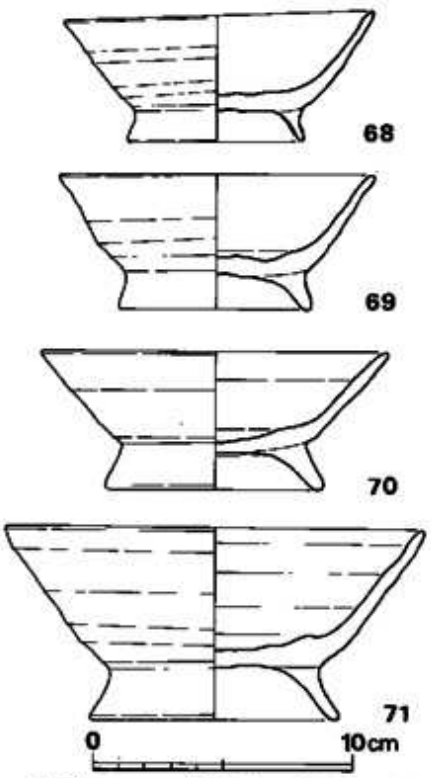
番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
51	SK 005	内黒土器	高台付椀	底径 79㎜	高台は低く、ほぼ直に貼付される。黄褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含む。焼成は軟質であまりよくない。内面は黒色研磨。外底はナデ、体部から高台部分はヨコナデ。ロクロ方向は右回り。	
52	SK 005	土師器	脚付皿		皿部の大部分、脚部の末端を欠く。淡茶褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含む。焼成はやや硬質で良好。底部は内外ともにナデ、体部外面から脚部はヨコナデ。	
53	SK 005	土師器	脚付皿		皿部、脚部ともに末端を欠く。淡赤褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含む。焼成は軟質であまり良くない。外底はナデ、体部外面から脚部はヨコナデ。皿部内面は器面のあれがいちぢるしく観察不能。	
54	SK 005	土師器	甕	口径 194㎜	小形甕である。黒褐色を呈し、胎土には砂粒を多量に含む。焼成は軟質であまりよくない。内面は左→右への横方向のヘラ削り。口縁内外はヨコナデ、外面はハケ目の後ナデ。外面には煤が付着している。	
55	P 103	土師器	脚付皿	口径 136㎜	脚部端を欠くが、皿部があるので他の托の全容をうかがう好資料である。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は軟質で不良。外底はヘラ削りの後ヨコナデ、体部外面に一部カキ目あり、他はヨコナデ。	SB 007 柱穴
56	P 902	土師器	坏	口径107～110㎜ 底径 67～70㎜ 器高 28㎜	底部には板状圧痕あり、ロクロ方向は左回り。黄褐色を呈し、胎土には少量の砂粒を含む。焼成はやや硬質で良好。底部は内外ともにナデ、体部は内外ともにヨコナデ。	SB 006 柱穴
57	P 902	土師器	高台付椀	口径126～128㎜ 底径 70～71㎜ 器高 56㎜ 高台貼付前の底径 83㎜ 〃器高 43㎜	高台はややひらき気味、体部はやや丸味を帯びる。黄褐色の化粧土をかけるが、地色は赤褐色を呈する。胎土にはやや多く砂粒を含み、焼成は軟質。外底には板目あり。内底はナデ、体部から高台部分はヨコナデ。	SB 006 柱穴
58	P 902	土師器	高台付椀	復原口径 165㎜ 底径 92㎜ 器高 66㎜ 高台貼付前の底径 83㎜ 〃器高 57㎜	体部は直線的で大きく外にひらく。高台も大きく外に開く。ロクロ方向は左回り。外底には板目あり。黄褐色を呈し、少量の砂粒を含み、焼成はやや硬質。底部は内外ともにナデ、体部から高台部分はヨコナデ。	SB 006 柱穴
59	P 902	土師器	高台付椀	口径(長径) 180㎜ 高台貼付前の底径 90㎜ 〃器高 60㎜	高台端を欠く。体部は外湾ぎみに大きく外に開く。いびつで長円形を呈す。内面黄褐色、外面茶褐色、微量の砂粒を含み、焼成はやや硬質。外底には板目あり。底部は内外ともナデ、体部・高台部はヨコナデ。	SB 006 柱穴
60	P 904	土師器	坏	復原口径 121㎜ 復原底径 70㎜ 器高 37㎜	底部はヘラ切り離し。黄褐色を呈し、胎土にはわずかに砂粒を含む。焼成はやや硬く良好。外底はナデ、他の部分はヨコナデ。	SB 006 柱穴

番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
61	P 905	土師器	坏	底径 86mm	底部はヘラ切り離し。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は軟質にてあまりよくない。底部はナデ、他の部分はヨコナデ。内面には煤様のものが付着している。	SB 006の柱穴？
62	表層	土師器	坏	復原口径 133mm 底径 87mm 器高 38～43mm	底部には板状圧痕あり。体部は直線的に外に開く。淡赤褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含む。焼成はやや硬質で良好。底部はナデ、他はヨコナデ。底部と体部の境はヘラ切りが施されている。	
63	SD 002 P 111 （口縁）	緑釉陶器	高台付皿	復原口径 168mm 底径 72mm 復原器高 34mm	胎土には精選粘土を用い、灰白色を呈する須恵質のもので、焼成は堅緻。ロクロ方向は右回り。外面はヘラ削り、口縁部はヨコナデ、見込は釉下に細かいヘラミガキを施している。釉は薄く全面に施されている。	
64	P 193	緑釉陶器	高台付皿	底径 72mm	須恵質のもので、地色は淡灰色を呈する。外底およびタタミ付をのぞき施釉するも、釉のかかりは悪い。高台は削り出し。見込には釉下にこまかいヘラミガキを施す。内外ともに回転ヘラ削り。回転は右回り。	
65	表層	青磁		底径 60mm	越州窯系青磁。底部はやや上底で露胎。内外ともに淡灰緑色の釉をかける。内外ともに貫入あり。胎土は灰黄色を呈し、雲母の微細粒を含む。重ね焼しており、内面及び底部に4ヶ所と推定される目跡がある。	
66	SD 002	青磁		復原底径 80mm	越州窯系青磁。底部は上底で、削り出して高台状につくる。底部近くは露胎。内面は灰緑色の釉をかける。貫入あり。胎土は灰色にて良好。内面に推定4ヶ所の目跡あり。	
67	SD 002	青磁		復原底径 78mm	底部はやや上底。削り出して高台状につくる。底部近くは露胎。釉は灰色がかった黄緑色。胎土は淡灰色にて良好。露胎部は赤褐色。内外ともに推定10ヶ所程の目跡があり、重ね焼されたことがわかる。	
68	SD 001	土師器	高台付椀	口径 120mm 底径 67mm 器高 51mm 高台貼付前の底径 65mm 〃器高 39mm	高台は外にひらく、体部はほぼ直。赤褐色を呈し、微細粒の砂をわずかに含む。焼成は軟質。本来はうるし塗りで、高台等に若干痕跡が残る。外底には板目あり。底部は内外ともにナデ、体部はヨコナデ。	
69	SD 001	土師器	高台付椀	口径 121mm 底径 74mm 器高 52mm 高台貼付前の底径 71.5mm 〃器高 40mm	高台は外に開き、体部はほぼ直線的。黄褐色を呈し、胎土には砂粒をわずかに含む。焼成は良好にて硬質。内底はナデ。体部内面、外面のすべてはヨコナデ。	
70	SD 001	土師器	高台付椀	復原口径 134mm 底径 83mm 器高 53mm 高台貼付前の底径 70mm 〃器高 39.5mm	高台は大きく外に開く。体部はほぼ直線的。茶褐色を呈し、胎土には砂粒若干と金雲母片を含む。焼成は軟質で不良。底部は内外ともにナデ。体部および高台部分はヨコナデ。	

番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
71	SD 001	土師器	高台付椀	口径 160㎜ 底径 94㎜ 器高 76㎜ 高台貼付前の底径 80㎜ 〃器高 56㎜	高台は約20㎜と高く、大きく外にひらく。体部はほぼ直線的。赤褐色を呈し、胎土にはわずかに砂粒を含む。焼成はやや硬質で良好。底部は内外ともにナデ。体部および高台部分はヨコナデ。	

2）瓦

今回の調査で出土した瓦類は丸・平瓦のみで、その出土量は整理箱にして約10箱である。これらの瓦は調査地区の全域にわたって分布していた。本来は平安期の遺構に伴なうものであろうが、戦国期の遺構からの出土もかなりあった。特に集中して出土した遺構に、溝1 SD001、1号竪穴住居跡、溝2 SD002がある。今回出土した丸・平瓦は完形品はなくすべて破片である。



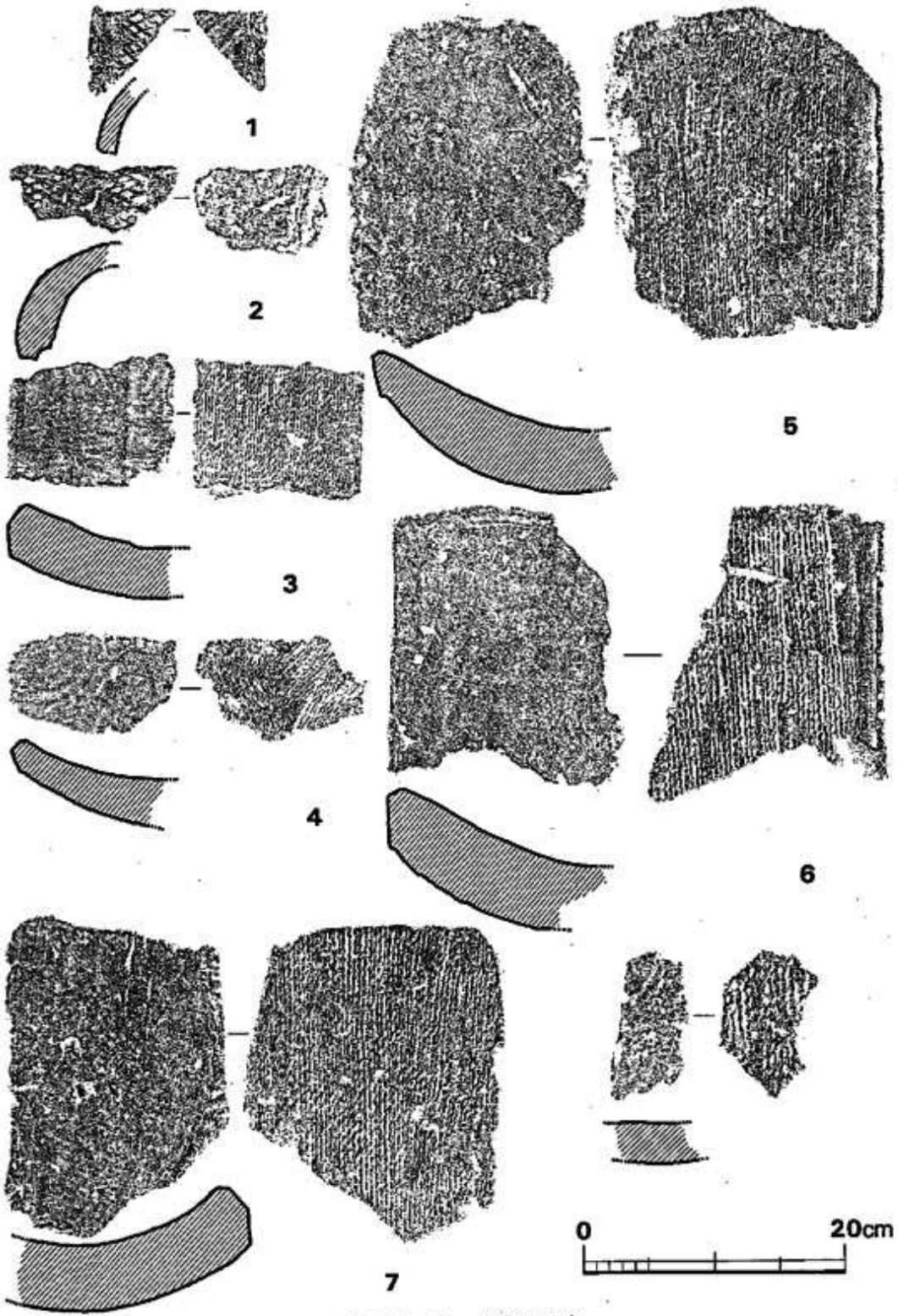
第25図　平安期土器2（縮尺1/3）

(1)　丸瓦（第26図1、2）

丸瓦の出土点数は2点である。いずれも玉縁を有するもので、桶巻き作りによっている。凸面は8×10㎜の斜格子の叩きで、規格性に欠けており、凹面は比較的粗い布目痕が認められる。側縁は分割時のままである。胎土内に砂粒が多く含まれ、焼成は硬質である。これらは平安時代前半頃のものであろう。SD002出土。

(2)　平瓦（第26図3～8）

出土した平瓦はすべて凸面に縄目の叩きを有している。縄目は大部分が右撚りのものであるが、なかには左撚りのものが数点ある。縄の太さは区々で直径2～4㎜位まで認められる。凸面の叩きは縦位のものが多いが、なかには4のように斜方向に叩いているのもある。凹面は比較的粗い布目を残しているが、5～7のように



第26図　瓦　（縮尺1/5）

ヘラケズリによって丁寧に調整されているのもある。これらの側縁は丁寧にヘラケズリ調整を行っている。胎土は砂粒が多く、焼成は軟質のものが多い。今回出土の平瓦は、一般の古代瓦にみられる瓦と若干異り、瓦の厚さが通常の2倍あり、これらを瓦の厚さから3～4cmと5～5.5cmのものに分類できる。前者に相当すると思われる3・4・8は凹面の布目をそのまま残し、擦り消してないものが大部分で、3は模骨板痕が残り、桶巻き作りによる手法をとっている。後者と考えられる5・6・7は前者と異り、布目痕を完全にヘラで擦り消している。後者の資料のなかには粘土板を二枚重ね合せた線が断面部に認められる。これらの平瓦は丁寧に調整されているため、その製作技法を見極める積極的な根拠はないが、一枚造りの可能性があることを指摘し、今後の資料に待ちたい。

今回出土した平瓦は、本遺跡より東方に位置する怡土城跡の瓦である。怡土城の築城については、続日本紀天平勝宝8年（756）条の着工記事を初見として、同神護景雲2年（768）条にはその完成が記されている。本遺跡出土の平瓦は、縄目叩き、製作技法などから奈良時代のものと考えられ、怡土城築城年間などを考え合せると8世紀中頃の年代が可能である。また出土した瓦類を総合的にみると、主として縄目叩き平瓦が大部分を占めていることは興味深い。

3）戦国期の遺物

a．土　　器

戦国期の遺構は4号建物ＳＢ004とその雨落溝ＳＤ006、8号建物ＳＢ008、10号建物ＳＢ010、2号溝ＳＤ002、3号溝ＳＤ003、4号溝ＳＤ004、5号溝ＳＤ005、7号溝ＳＤ007、1号井戸ＳＥ001、2号井戸ＳＥ002、3号井戸ＳＥ003、4号井戸ＳＥ004、1号土壙ＳＫ001、2号土壙ＳＫ002を発掘した。そのうち4号建物ＳＢ004の雨落溝ＳＤ006、2号溝ＳＤ002、3号溝ＳＤ003、4号溝ＳＤ004等から多量に土器が出土し、7号溝ＳＤ007、1号井戸ＳＥ001、1号土壙ＳＫ001、2号土壙ＳＫ002、柱穴等からも若干の出土があった。

遺構の項でも述べたように建物は8号建物ＳＢ008が4号建物ＳＢ004より古く、その間に10号建物ＳＢ010があったものと考えられる。又3号溝ＳＤ003が4号溝ＳＤ004より古く、8号建物ＳＢ008と3号溝ＳＤ003は同時期のものと考えられ、同一土器片の出土又は同一破片ではないが同種類の染付等を出すこと等からみて、4号建物ＳＢ004とその雨落溝ＳＤ006、2号溝ＳＤ002、4号溝ＳＤ004、1号井戸ＳＥ001、1号土壙ＳＫ001は確実に同時期の遺構と考えられる。一部第31図15のように3号溝ＳＤ003、4号溝ＳＤ004出土のものが接合されたりする矛盾もあるが、これは切り合って存在した溝で同じ日に出土したもので、いずれかの溝（多分4号

溝）に伴うものと考えられる。

以上のことをふまえて土器をみた場合に３号溝ＳＤ003出土の土器は唐津系土器、染付を基本的に含まず、土師器小皿、土師質土鍋、土師質火舎、瓦質火舎、瓦質摺鉢等が主体となっていることを指摘できる。以上の状況を福岡県内の発掘資料と対比すると、最も近いものに筑紫郡太宰府町所在の観世音寺子院金光寺跡推定地（以下金光寺跡とする）第Ⅲ期のものに最も近いといえる。金光寺第Ⅲ期とされた遺構および層位からは土師器坏・皿、瓦質土器、白磁、高麗青磁、黒釉陶器[1]（天目など）、安南陶器等が出土している。白磁は別としても高麗青磁・安南陶器等は波多江遺跡では出土していないが、土師器皿等の形態・法量等もこれらに近いもので、ほぼ金光寺第Ⅲ期の年代に近いことが推測される。金光寺跡第Ⅲ期は15Ｃ後半～16Ｃ前半に位置付けられており、波多江遺跡の３号溝ＳＤ003出土土器の示す年代もほぼ西暦1500年を前後する時期に推定される。

瓦質土器に押圧された菊花文、菱形文、木葉文はいずれも同一の原体によるもので、同一地点同一時期に生産されたことがわかる。

４号建物の雨落溝ＳＤ006、２号溝ＳＤ002、４号溝ＳＤ004、７号溝ＳＤ007、１号井戸ＳＥ001、１号土壙ＳＫ001、２号土壙ＳＫ002からは瓦質火舎、摺鉢等の出土は皆無に等しく、土鍋片、小皿、土鈴、土錘、茶釜等の土師器も少なく、唐津系の陶器、染付が主体を占めるといってよい。白磁も少量ある。

唐津系の陶器には、いわゆる天目の碗・皿、黒釉の壺、灰緑色を呈する灰釉の碗・皿、朝鮮唐津の徳利、飴釉の徳利、素焼の片口、褐釉の甕・鉢、摺鉢等の他に種々の絵唐津を含む。これらすべてが唐津に属するものとは限らないがその大部分はまちがいなく古唐津である。これらのうち飴釉の徳利、灰釉の皿等は一乗谷朝倉氏館跡からも類品が出土している。又摺鉢の底部に、両手の親指・人さし指をひきながら押圧した痕跡が数点あり（図版18）、窯印[2]として使われたものではないかと考える。これは窯を確定するに好資料と考える。又焼台にしじみと思われるが、貝を使用したものが数例あった。又数点ではあるが陶器というよりも磁器といったがいいような焼成のものもある。

染付は、猪口・碗・皿・徳利・鉢等の器種があり、かつ図柄も多種多様といえる。戦国期の城館跡等からよく出土するいわゆる碁笥底式の寿波文と芭蕉文をもつ皿、宝相華唐草文の皿、唐草文系の文様をもつもの、朝倉館・根来寺等にも一部みられる菊花文をもつもの等の他、草文、草花文、竹文、梅花に蜻蛉、山水画的図柄をもつもの等、現在[3]まであまり知られていない文様構成のもの等があるが、碗・皿ともに器形、高台のつくり等に一定したものがあり、これらがほぼ同一時期におけるものであることはほぼまちがいない。菊花文又は先述の新様式のものが原田氏が亡びた天正14年（1586年）頃流行していたものといえる。やや古い型式のものなどは、磁器ということもあってかなり伝世されることも考えるならば、これらの染付と唐津

系陶器の組合せが北部九州の戦国末期の一般的様相であったと想定できる。これらの染付は明らかに明のものと断定できるものがあり、大部分は明朝末期の染付であろうと考えるが、高取焼初代高取八蔵の剛葬品と伝えられる猪口に、底部近くのヘラ切りの手法等が若干異るが、草文の図柄がほぼ同様のものがあり、あるいは李朝系[4]の染付も一部存在するものかもしれない。初期伊万里そのものはないようであるが、文様など一部共通する要素もあるようであるが、初期伊万里が明・李朝の染付等の系譜のなかから出現することを考えれば当然のことかと思われる。（場合によると、近世染付も混りこんでいることも考えておかねばなるまい。）

したがって、4号建物ＳＢ004、2号溝ＳＤ002、4号溝ＳＤ004、7号溝ＳＤ007、1号井戸ＳＥ001、1号土壙ＳＫ001、2号土壙ＳＫ002等の示す年代は1586年以前、つまり16Ｃ後半頃と考えられる。遺物の上で、これら唐津系陶器、染付の組合せを細分するには至難の点があるが、あえていうならば、10号建物ＳＢ010の段階から、これらの組合せが出来上がっていたものと考えられ、10号建物ＳＢ010は16Ｃ前半～中頃の時期に考えることが妥当な線であろう。

【註】

(1) 九州歴史資料館「大宰府史跡—昭和55年度発掘調査概報」 1981

(2) 一乗谷朝倉氏遺跡の発掘成果は年次ごとに、福井県教育委員会・朝倉氏遺跡調査研究所によって概報が出されているので参照されたい。

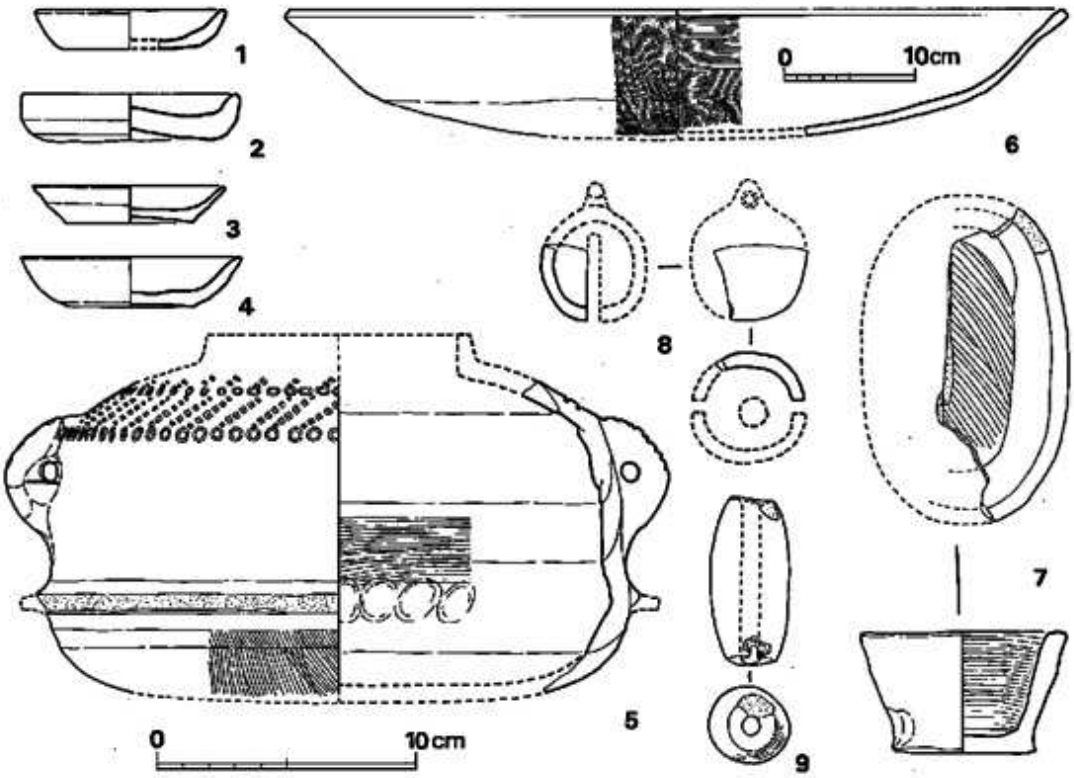
(3) 朝倉氏館については(2)と同じ。

上田秀夫「紀伊根来寺の発掘調査」『月刊文化財　昭和55年11月』文化庁文化財保護部監修

(4) 永竹威「西国大名と茶陶の潮流」『内ヶ磯古窯発掘記念大名茶陶』 朝日新聞社刊 1981

第5表　戦国期　土師器等観察表

番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
1	ＳＤ 003	土師器	小皿	口径 72mm 底径 53mm 器高 15mm	底部は糸切り離し。灰黄色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は硬質で良好。体部の調整はヨコナデ。口縁部の同一個所の内外に煤の付着あり。灯明皿として使用されたものと思われる。	
2	ＳＤ 003	土師器	小皿	復原口径 84mm 復原底径 74mm 器高 18mm	底部は糸切り離し。器壁はかなり分厚い。黄褐色を呈し、胎土には砂粒若干と、雲母片を多量に含む。焼成は硬質で良好。底部は内外ともにナデ、体部はヨコナデ。	
3	ＳＤ 004	土師器	小皿	口径 75mm 底径 50mm 器高 14mm	底部は糸切り離し。ロクロ方向は左回り。淡茶褐色を呈し、胎土には石英・金雲母の微細粒を含む。焼成は硬質で良好。内底および体部はヨコナデを施す。	



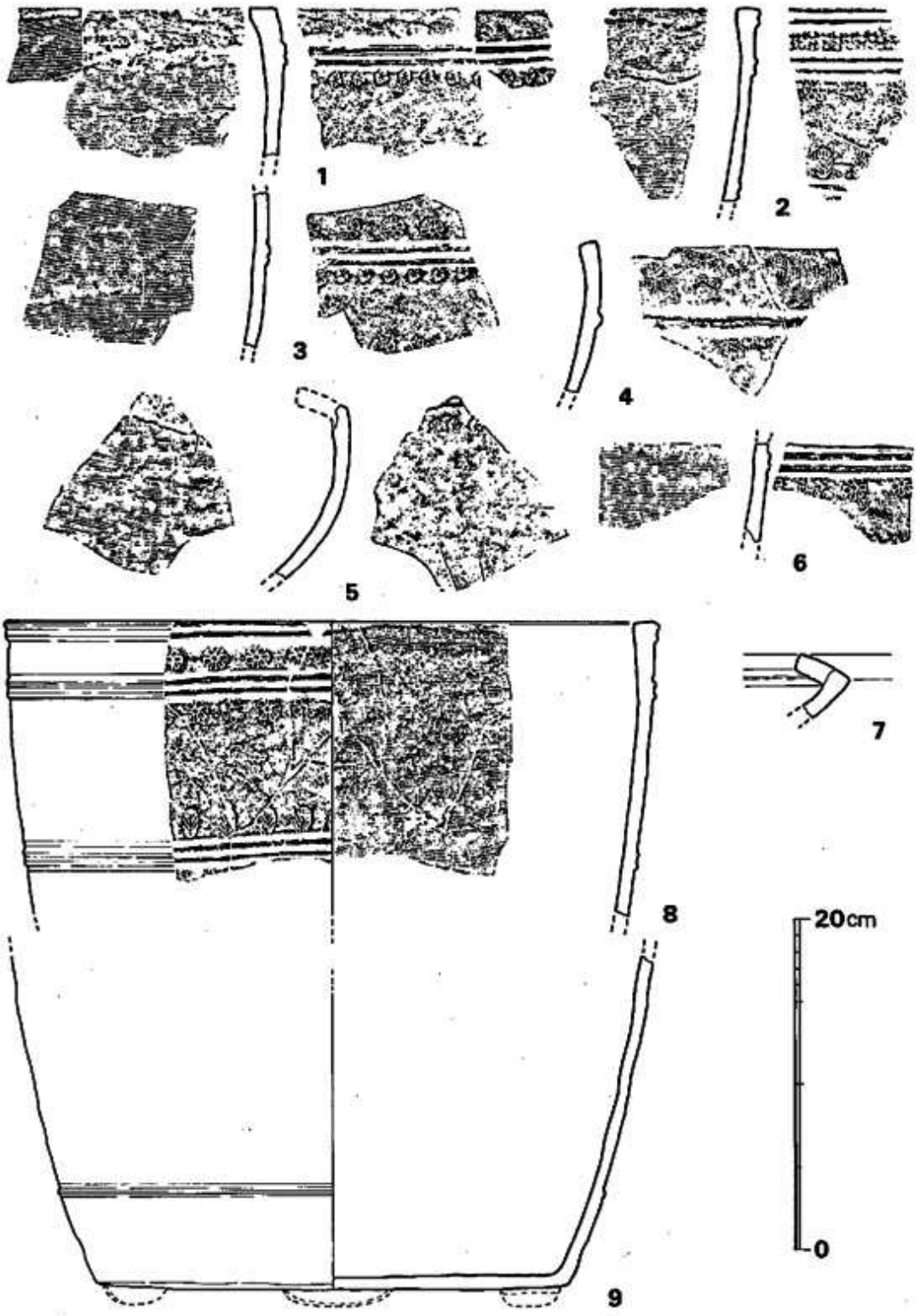
第27図　戦国期土師器他（縮尺1/3・1/6）

番号	出土遺跡	種類	器種	法量	特徴	備考
4	P 138	土師器	小皿	復原口径 84mm 底径 47mm 器高 19mm	底部は糸切り離し。黄褐色を呈し、胎土にはわずかに砂粒を含む。焼成は硬質でやや良好。内底および体部はヨコナデを施す。	
5	SD 002	土師質土器	茶釜	最大径 220mm 復原器高 142mm	口縁付近と底部を欠失する。粘土帯の積上によって成形。胴部下位に鍔をもち、肩部近くに釣手2つをもつ。肩部の文様は竹管文と櫛歯文の組合せ。調整は内外ともにハケ→ナデ。鍔の下は煤付着。	
6	SD 003	土師質土器	土鍋	口径 595mm 復原口径 100mm	大鍋である。淡茶褐色を呈し、胎土には小量の砂粒を含む。焼成はやや硬く良好。調整は内外ともにハケ目、口縁部はヨコナデ。外面には全面に煤が付着する。	
7	SD 003	土師器	鉢	復原口径 125×78mm 器高 46mm	長円形の鉢である。茶褐色を呈し、胎土には雲母片を含む。焼成は硬質で良好。内面の調整は粗いハケ目。外面は指オサエ→ナデ。底部はハケ目→ナデを施す。	

番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
8	SD 002	土師質	土鈴	復原径 40×45mm	土鈴と思われる。淡黄褐色を呈し、胎土には精選粘土を用いる。胎土は良好であるが、硬度の点では金属音なし。内外ともにナデ調整で、外には指紋痕あり。	
9	SD 004	土師質	土錘	長 65mm 径 30mm 孔径 7mm	土錘である。茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含まない。焼成は硬く、良好。	

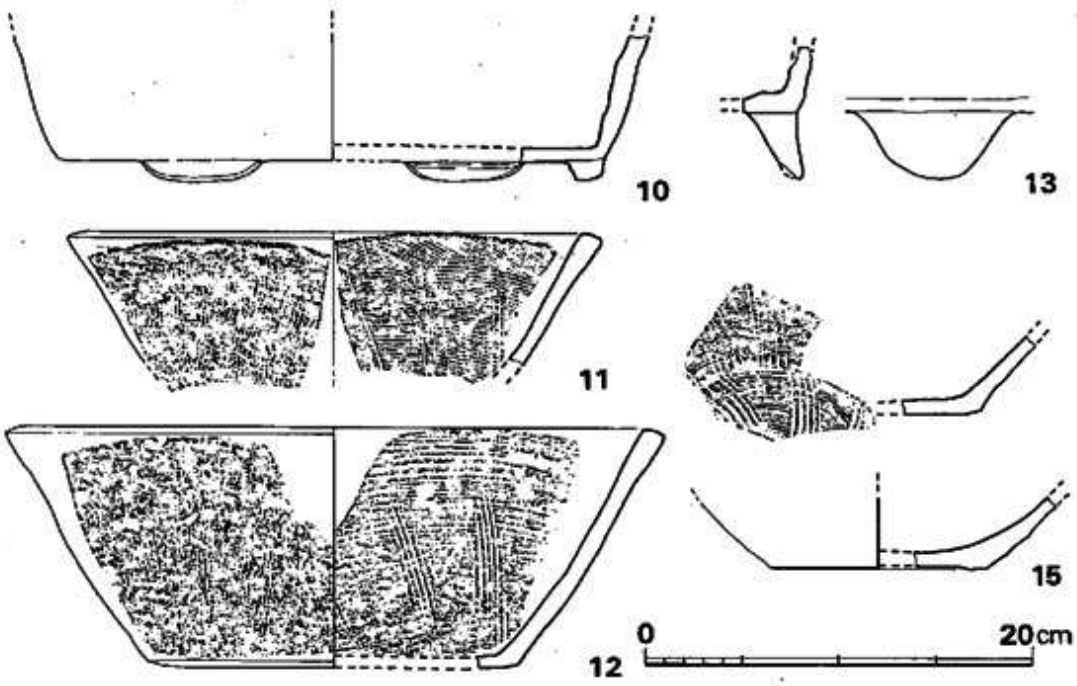
第6表　瓦質土器等観察表

番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
1	SD 003	瓦質土器	火舎		口縁下に2条の凸帯を削り出す。凸帯下には菱形文を押圧する。灰黒色を呈し、胎土には少量の砂粒を含む。焼成はやや硬質で良。内面は指オサエ→ハケ。口縁内面はヘラ切り。口縁部はヨコナデ、他はナデ。	
2	SD 003	瓦質土器	火舎		口縁、口縁下、胴部に2条の凸帯を削り出す。上部凸帯間には列点文、口縁下の凸帯下位には菊花文、胴部凸帯上位には木葉文を押圧。内面は指オサエ→ハケ、口縁内面はヘラ切、口縁部はヨコナデ、他はナデ。	
3	SD 003	瓦質土器	火舎		胴部凸帯は削り出し、その上位には菊花文、下位には菱形文、さらに下位に菊花文が押圧される。内面は指オサエ→ハケ目、外面はナデ。灰黒色を呈し、胎土には微量の砂粒を含む。焼成は硬質で良好。	
4	SD 003	瓦質土器	火舎		口縁下に1条の凸帯を削り出す。口縁下には線刻らしきものあり。内面は指オサエ→ハケ目→ナデ。口縁、凸帯下はヨコナデ、他はナデ、灰黒色を呈し、胎土には微量の砂粒を含む。焼成はやや硬質で良。	
5	SD 003	瓦質土器	火舎		口縁はくの字に内屈する。口縁下に菱形文を押圧する。内面は指オサエ→ハケ目、外面はナデ仕上。灰黒色を呈し、胎土には砂粒を含まず、焼成はやや硬く良。	
6	SD 003	瓦質土器	火舎		口縁下凸帯部付近と思われる。凸帯は削り出し。凸帯下は菊花文、さらに下位には菱形文を押圧する。内面はハケ目、外面はナデ。灰黒色を呈し、胎土には微量の砂粒を含む。焼成はやや硬質で良。	
7	SD 003	土師質土器	火舎		土師質火舎。くの字に内屈する口縁部分。内面は粗いハケ目。口縁外面はヨコナデ、口縁下はナデ。黄褐色を呈し、胎土には少量の砂粒を含む。焼成は硬質で良好。	



第28図　瓦質土器他1（縮尺1/4）

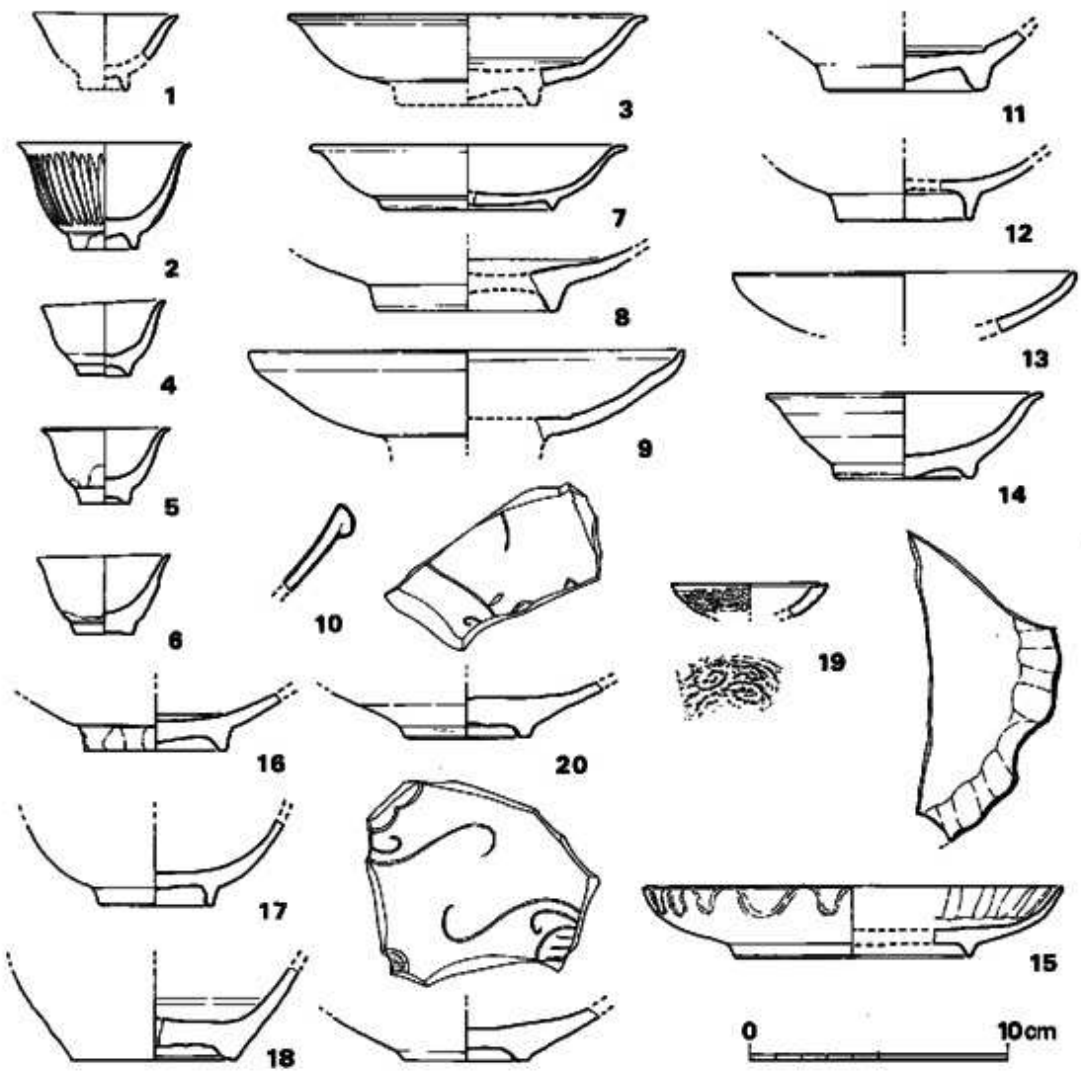
番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
8	SD 003	瓦質土器	火舎	口径 390mm	口縁、口縁下、胴部に2条の凸帯を削り出す。口縁下には菊花文、口縁下凸帯下位には菊花文、胴部凸帯上位には木葉文を押圧。内面はハケ目、口縁付近はヨコナデ、他はナデ。灰黒色、砂粒微量、焼成良好。	
9	SD 003	瓦質土器	火舎	底径 285mm	火舎底部。底部近くにも凸帯を削り出している。内部は灰褐色、外は灰黒色を呈し、胎土には微量の砂粒を含む。焼成はやや硬く良。内面は粗いハケ目、外面はハケ目→ナデ消し、底部は内外とも粗いハケ目。	
10	1号住居跡内柱穴	瓦質土器	火舎	底径 280mm	火舎底部、低い脚がつく。灰褐色を呈し、胎土には微量の砂粒を含む。焼成はやや硬良で良。内面は粗いハケ目→ナデ、外面はナデ仕上、脚部はナデ、底部は内外ともに粗いハケ目。	
11	SD 003	瓦質土器	摺鉢	復原口径 253mm	内面は黒色、外面は灰黒色、少量の石英、金雲母片を含む。焼成はやや硬く良。内面は横・斜のハケ目の後、6条1単位の筋を入れる。口唇部はハケ目、口縁下はヨコナデ、他はハケ目。余り使用していない。	
12	SD 003	瓦質土器	摺鉢	復原口径 317mm 復原底径 190mm 器高 124mm	内面は灰茶色、外は灰黒色、大粒の砂粒を含む、焼成は軟質で不良。内面は粗いハケ目の後6条1単位の筋を入れるが、使用の為とくに下半部がすれている。外面は粗い縦方向のハケ目の後、口縁部はヨコナデ。	
13	SD 003	瓦質土器	火舎		火舎の脚部。灰黒色を呈し、胎土には微量の砂粒を含む。焼成はやや硬質で良。脚部はヘラで整形。内面は粗いハケ目、外面はハケ目→ナデ。脚部外面はハケ目→ナデ。脚部内面は粗いハケ目→ナデ。	
14	SD 003	瓦質土器	摺鉢		外は灰褐色、内面は灰黒色、胎土には少量の石英・雲母片等を含む。焼成はやや軟質。内面は横方向ハケ目の上から5条1単位の筋を入れる。内底は余りすれていないが、体部はよくすれる。外・底部はハケ目。	
15	SK 004	須恵質土器	摺鉢	復原底径 110mm	須恵質摺鉢である。灰色を呈し、胎土には少量の砂粒を含む。焼成はやや軟質であまりよくない。内面は使用のため、よくすれている。外面はヨコナデ。底部はハケ目かと思われる。	



第29図　瓦質土器他２（縮尺1/4）

第７表　白磁・青磁観察表

番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
1	SD 002	白磁	猪口	復原口径 55㎜	猪口の小破片である。釉は白色。胎土は白色にて良好。	
2	SD 002	白磁	猪口	口径 66㎜ 底径 26㎜ 器高 41㎜	外底および高台の一部は露胎。簡略化された蓮弁があり、左→右方向へ施文されている。ロクロ方向は左回り。釉は白色。胎土は白色にて良好。	
3	SD 002	白磁	皿	復原口径 139㎜	高台部欠失。内外ともに底部ちかくに凹線あり。回転ヘラ削りの後施釉。釉は白のつよい灰白色。釉のかかりのつごうか凹凸がいちぢるしい。貫入なし。胎土は白色にて良好。	
4	SD 003	白磁	猪口	口径 47㎜ 底径 20㎜ 器高 29㎜	ロクロ方向は右回り。全面を施釉。釉は乳白色で、釉のかかり方が均一でなく、しずくがたれたような部分もある。貫入なし。胎土は白色で砂を含まず良好。	



第30図　白磁・青磁（縮尺1/3）

番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
5	SD 004	白磁	猪口	口径 49mm 底径 19mm 器高 29mm	外底および底部付近に一部露胎部あり。外底に焼台の砂付着。釉は白色で貫入なし。胎土は白色にて良好。ロクロ方向は左回り。	
6	SD 004	白磁	猪口	口径 51mm 底径 22.5mm 器高 31mm	外底および底部付近は露胎。釉は白色、底部ちかくの釉のかかり方は均一でない部分もある。貫入なし。胎土は白色にて良好。	

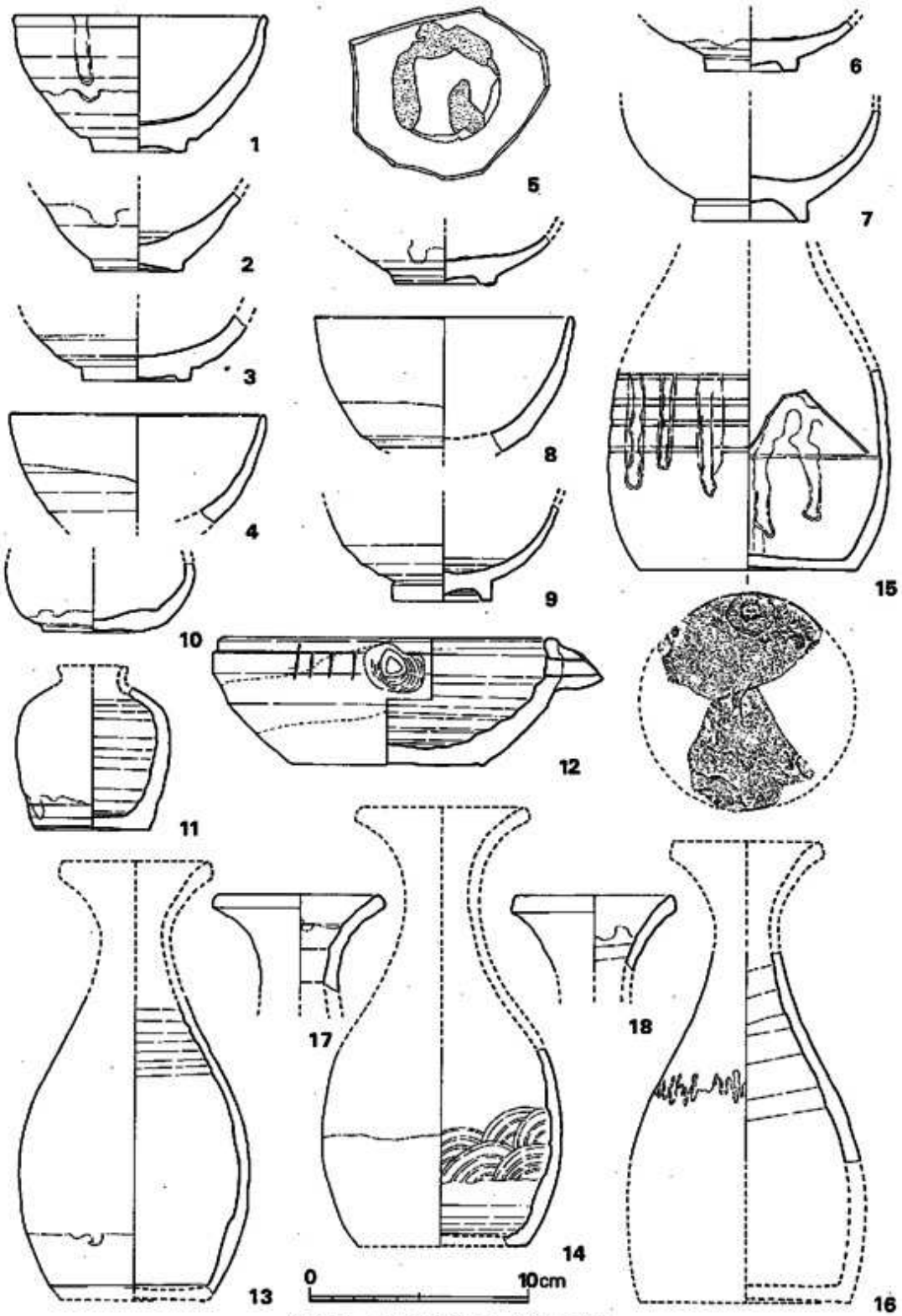
番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
7	SD 004	白磁	高台付皿	復原口径 122mm 復原底径 67mm 器高 25mm	高台は低く、体部は丸味を帯び、口縁部で外にひらく。高台部は露胎、外底に目跡あり。釉はうすく、やや黄味を帯びた灰白色を呈す。貫入なし。胎土は淡灰白色で良好。輸入品である。	
8	SD 004	白磁	高台付皿	復原底径 70mm	高台部分のみ。タタミ付は露胎。内底に目跡あり。外面は回転ヘラ削りの後施釉。釉はやや青味を帯びた灰白色で内外ともに貫入あり。胎土は白色にて良好。輸入品と思われる。	
9	SD 004 SD 002	白磁	高台付皿	復原口径 168mm	高台部を欠失。口縁部でほぼ直にたちあがる。回転ヘラ削りの後施釉。釉は灰白色で貫入なし。胎土は灰白色にて良好。輸入品である。内底には目跡あり。SD004出土であるが、SD002出土に同一破片あり。	
10	SD 004	白磁	碗		口縁部はヨコナデの後施釉。釉は淡灰緑色を呈し、貫入はなし。胎土は灰白色を呈する。	
11	SD 007	白磁	高台付碗	底径 64mm	底部のみ。内底には重ね焼の痕跡で、上に置かれた碗の高台の跡がきれいに残る。この部分と高台及び内底は露胎。外面は回転ヘラ削りの後施釉。釉は淡灰緑色で貫入なし。胎土は灰白色で良好。輸入品である。	
12	SK 001	白磁	高台付碗	復原底径 53mm	高台は高く、やや内方に向く。タタミ付は露胎、他は全面施釉。釉は白色で貫入なし。内底部は砂で釉調わるし。胎土は白色にて良好。輸入品である。	
13	SK 001	青磁	皿	復原口径 132mm	高台部分なし。釉はくすんだ緑色で、内外ともに貫入あり。釉のかかりぐあいで内外ともに凹凸いちぢるしい。胎土は白色にて良好。	
14	P － 36	白磁	高台付皿	口径 106mm 底径 52mm 器高 33mm	高台はほぼ直。体部は丸味を帯び、口縁部で外にひらく。体部外面は回転ヘラ削り。タタミ付部をのぞき全面施釉。釉は灰白色を呈し、貫入なし。胎土は灰白色で良好。輸入品である。	
15	P － 36	白磁	高台付皿	復原口径 140mm 復原底径 90mm 器高 28mm	口縁は波状を呈する。タタミ付部をのぞき全面施釉。口縁部は金縁(褐色を呈する。)釉は白色を呈し、貫入なし。胎土は白色にて良好。輸入品である。	
16	P － 74	白磁	高台付碗	底径 55mm	高台の一部および外底は露胎。釉は白濁色を呈し、貫入はなし。胎土は白色にて良好。輸入品と思われる。	

番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
17	P－79	白磁	高台付碗	底径 44mm	タタミ付部は露胎。高台内面には焼台の砂が付着する部分あり。回転ヘラ削りの後施釉したものと思われる。釉は灰白色で貫入なし。胎土は灰白色にて良好。	SB 008の柱穴
18	P－190	白磁	瓶？	底径 63mm	タタミ付部は露胎。回転ヘラ削りの後施釉。釉はやや青味がかった灰白色。底部付近および外底に貫入あり。内部は施釉してないが、内底には釉のしずくがたれている。胎土は灰白色。ロクロ方向は左回り。	
19	表層	白磁	合子	復原口径 60mm	内面から口縁付近は施釉。外面には渦文が型押しされる。釉は白色を呈す。胎土は白濁色を呈し、良好。	
20	表層	青磁	高台付碗	底径 49mm	タタミ付部は露胎、高台内面には焼台の砂付着。外面は回転ヘラ削りの後、内面はつる草文を線刻の後施釉。釉は淡青緑色にて、貫入なし。胎土は白色にて良好。	
21	表層	青磁	高台付碗	底径 48mm	タタミ付部は露胎、高台内面に焼台の砂付着。外面は回転ヘラ削りの後、内面はつる草文を線刻の後施釉。釉は外面がくすんだ緑色、内面が明るい緑色。貫入なし。胎土は白色にて良好。ロクロ方向は左回り。	

第8表　唐津系陶磁器観察表

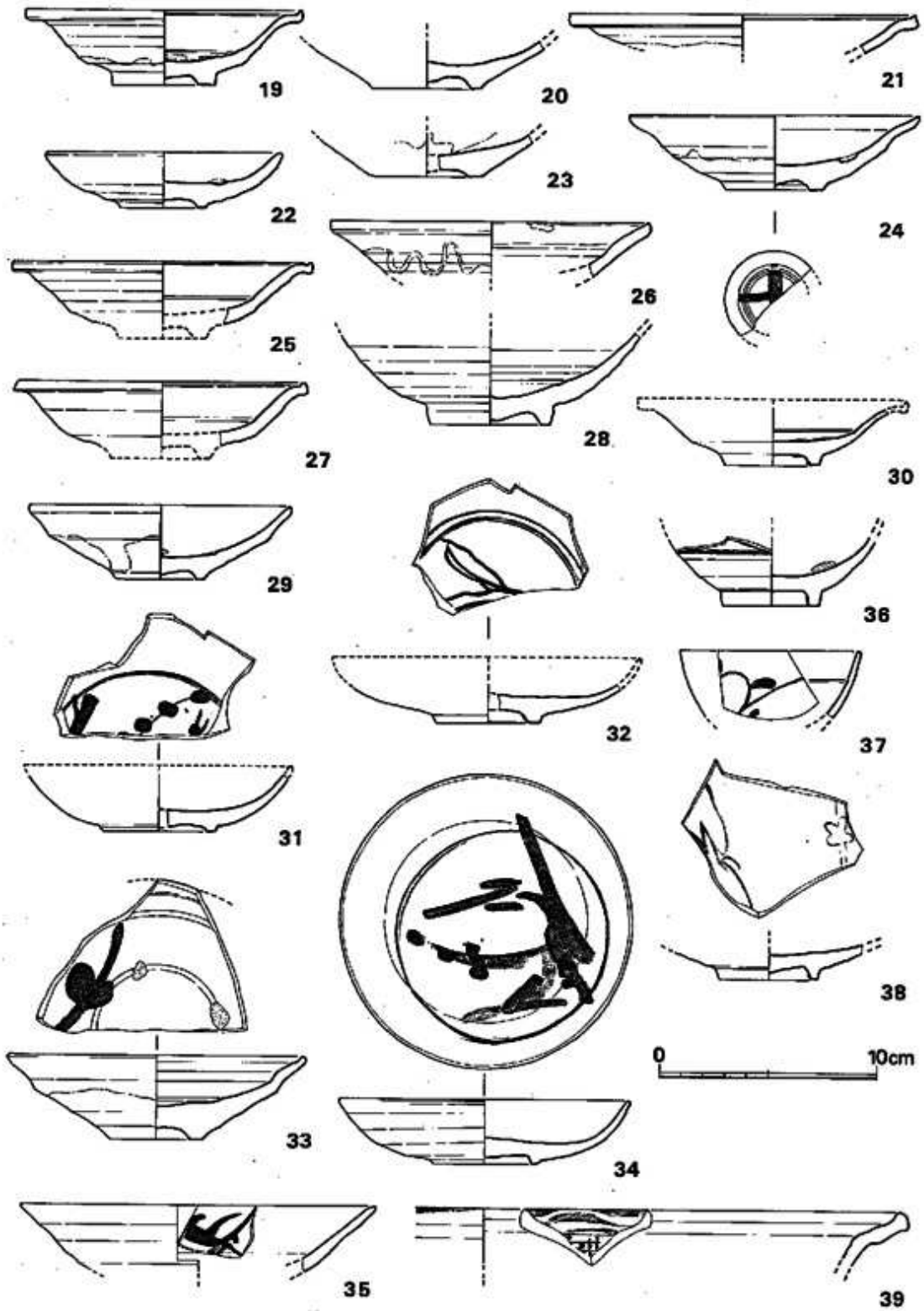
番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
1	SD 002	陶器	天目碗	口径 114mm 底径 42mm 器高 62mm	胴下半以下は露胎。外面はヘラ削りの後施釉。釉は鉛色と黒色の横縞状を呈し、内面は鉛色を基調として、白が霧雨のごとく流れ、内底には釉がたまる。胎土は黄白色で微量の砂粒を含む。	
2	SD 002	陶器	天目碗	底径 40mm	胴下半以下は露胎。回転ヘラ削りの後施釉。釉は緑を基調にして黒も発色した黒緑色。貫入はなし。胎土は赤褐色にて良好。	
3	SD 002	陶器	天目碗	底径 49mm	胴下半部以下は露胎。外面は回転ヘラ削りの後施釉。釉は黒茶色で貫入なし。胎土は黄白色で良好。	
4	P.179	陶器	天目碗		底部なし。胴下半部以下は露胎。外面は回転ヘラ削りの後施釉。釉は黒緑色を呈し、貫入なし。胎土は淡赤褐色で、微細な雲母片等を含む。	

番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
5	SD 002	陶器	高台付碗	底径 46cm	内底には目跡がみられるが、一部重ね焼した高台が融着。高台タタミ付部にも目跡あり。胴下半以下は露胎。底部は糸切り離し。露胎部は底部近くをヘラ削り。上はナデ。釉は淡緑色。貫入あり。胎土は灰茶色。	
6	SD 002	陶器	高台付碗	底径 42cm	上半を欠失。内底には目跡4ヶ所がみられる。高台部分および底部付近は露胎。釉は灰緑色で、内外ともにこまかい貫入あり。胎土は灰白色を、露胎部は赤褐色を呈する。ロクロ方向は右回り。	
7	SD 002	陶器	高台付碗	底径 53cm	口縁部近くはなし。高台タタミ付部は露胎。外面は回転ヘラ削りの後施釉。ロクロ方向は右回り。釉は灰黄色で、内外ともにこまかい貫入あり。胎土も灰黒色を呈す。高台内側には部分的に焼台の砂が付着。	
8	SD 004	陶器	碗		高台部分なし。胴下半部は露胎。外面は削りの後施釉。釉は淡灰緑色を呈し、内外ともにこまかい貫入あり。胎土は赤褐色を呈し、若干の砂粒を含む。	
9	SD 004	磁器的	高台付碗	底径 45cm	口縁近くを欠く。高台タタミ付及び外底は露胎。又高台外側には目跡と思われる大きな露胎部3ヶ所がある。釉は灰白色で内外ともにこまかい貫入あり。胎土は灰白色にて良好。	
10	SE 001	陶器		底径 45cm	器形不明。外底と底部付近の一部が露胎。他は内外ともに施釉。外面は釉下に回転ヘラ削りが認められる。釉は灰白色。胎土は茶褐色でわずかに砂粒を含む。	
11	P. 81	陶器	壺	底径 52cm 復原高 75cm	底部近くと外底は露胎。外面は施釉、内面は無施釉。内面はロクロ痕が明瞭である。その後ナデ。釉は黒褐色を呈するが凹部分は黄褐色に発色。貫入なし。胎土は灰褐色、露胎部は濃褐色を呈する。黒唐津。茶入か。	
12	P.141	陶器	片口	口径 151cm 底径 86cm 器高 58cm	注口の右側には縦4本のヘラ記号あり。内面はロクロ痕明瞭、外面は上半をナデ、下半はヘラ削り、外底はナデ。注口部先端はヘラ切り。釉はかけず、胎土は赤褐色でわずかに砂粒を含む。焼成は良好。煤付着。	
13	SD 002	陶器	徳利		口縁部、底部なし。内面は釉なし、胴部はタタキ→ナデ、上半はロクロ痕明瞭。外面底部近くはヘラ削りの後褐色の釉をかける。胴部はわら灰釉で灰白色に発色す。貫入なし。胎土は灰褐色を呈する。朝鮮唐津。	
14	SD 002 P.190	陶器	徳利	底径 77cm	内面には青海波が明瞭、一部はナデ。外面は底部近くは露胎で茶褐色を呈し、ナデ調整。上半はわら灰釉をかけ、灰白色を基調としながら青・褐色等が発色。胎土は黒褐色でわずかに砂粒を含む。朝鮮唐津。	



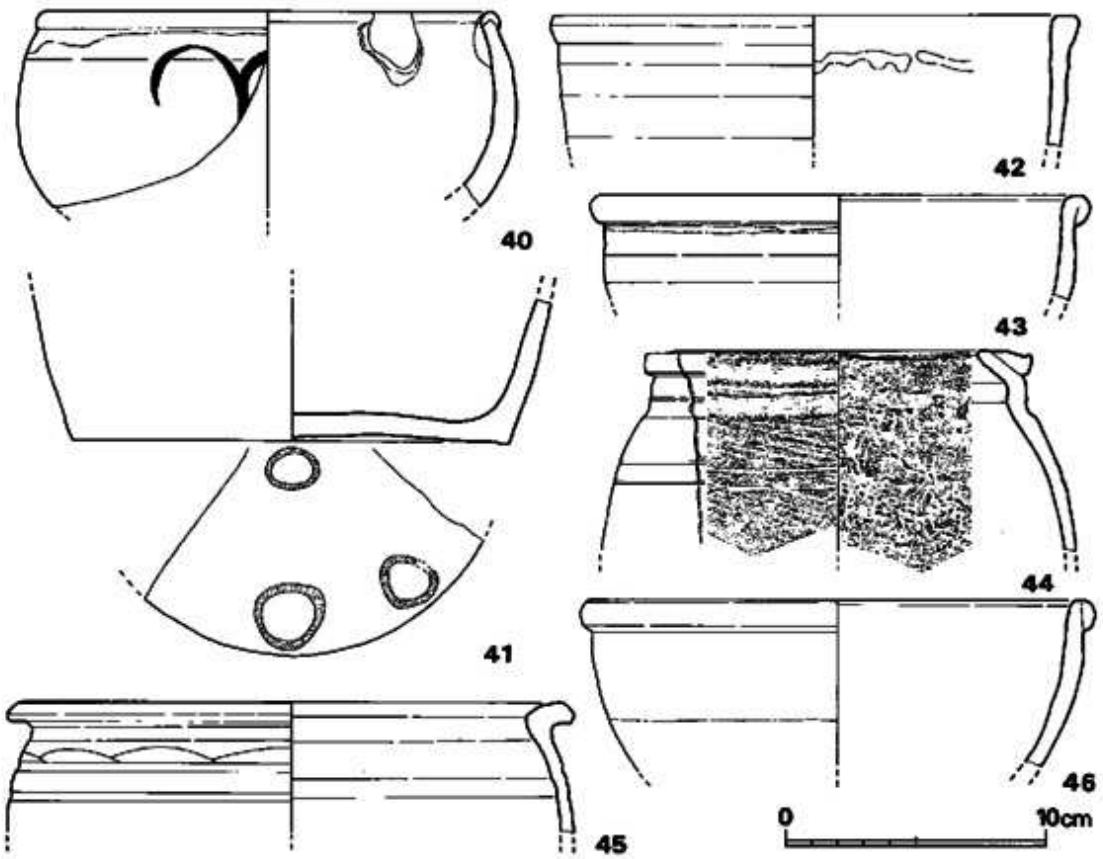
第31図　唐津系陶器1（縮尺1/3）

番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
15	SD 003 SD 004	陶器	徳利	底径 100㎜	上半を欠く。底部は露胎、外側に貝の痕跡で灰白色の目跡5ヶ所あり、中央部には3本の線を交叉させた記号あり。釉は内外にかけられ、緑味を帯びた褐色を呈する。内外ともに釉の流れあり。胎土は灰褐色。	
16	P.185	陶器	徳利		内面は釉なし、上からロクロ痕、ロクロ痕→ナデ、タタキ→ナデ。外面は頸・肩はわら灰釉。胴は褐色釉。頸・肩の乳白色を基調とする釉が流れて下端は青く発色する。貫入あり。胎土は茶灰色。朝鮮唐津。	
17	SD 004	陶器	徳利	口径 73㎜	徳利口縁部。口縁内部から外面に施釉。釉はわら灰釉で灰白色に発色。貫入なし。胎土は灰褐色。内面頸部にはヘラ削り痕が明瞭で、褐色を呈する。朝鮮唐津。	
18	表層	陶器	徳利	口径 72㎜	徳利口縁部。口縁内部から外面に施釉。釉は乳灰色を呈するが一部に青く発色する部分あり。内外ともに貫入あり。胎土は淡灰褐色を呈する。頸部内面はヘラ削り。朝鮮唐津。	
19	SD 002	陶器	高台付皿	口径 126㎜ 底径 47㎜ 器高 34㎜	底部近くから高台、外底は露胎、内底も露胎。底部は糸切り離し。内底には目跡4ヶ所あり。体部は内外ともに回転ヘラ削りの後施釉。釉は灰緑色。胎土は茶褐色にて良好。ロクロ方向は左回り。	
20	SD 002 表層	陶器	高台付皿	底径 50㎜	底部は糸切り離し。外底はヘラ削り。内外ともに回転ヘラナデ。釉なし、胎土は黄褐色を呈し、なま焼的感じを受ける。ロクロ方向は右回り。	
21	SD 002	陶器	皿	復原口径 158㎜	口縁部の小破片。下半近くは露胎。外面は回転ヘラ削りの後施釉。釉はざらざらした灰色で内外ともにこまかい貫入あり。胎土は灰色を呈す。	
22	SD 004	陶器	高台付皿	口径 105㎜ 底径 40㎜ 器高 25㎜	胴下半から底部にかけては露胎、外面は回転ヘラ削りの後施釉。釉は灰色で貫入なし。内底には目跡4ヶ所あり。胎土は赤褐色。ロクロ方向は左回り。	
23	SD 004	陶器	碗	復原底径 52㎜	下半部及び底部は露胎、内底部も露胎で、これらの部分はナデ。高台内側は削り。釉はくすんだ緑色を呈し、内外ともにこまかい貫入あり、胎土は灰色、露胎部は灰黄色。内底部に目跡あり。	
24	SD 004	陶器	高台付皿	口径 132㎜ 底径 42㎜ 器高 34㎜	下半部及び底部は露胎。外面は回転ヘラ削りの後施釉。釉は灰緑色で貫入なし。胎土は淡赤褐色を呈す。内底には目跡4ヶ所あり。外底には十の字の墨書あり。	



第32図　唐津系陶器２（縮尺1/3）

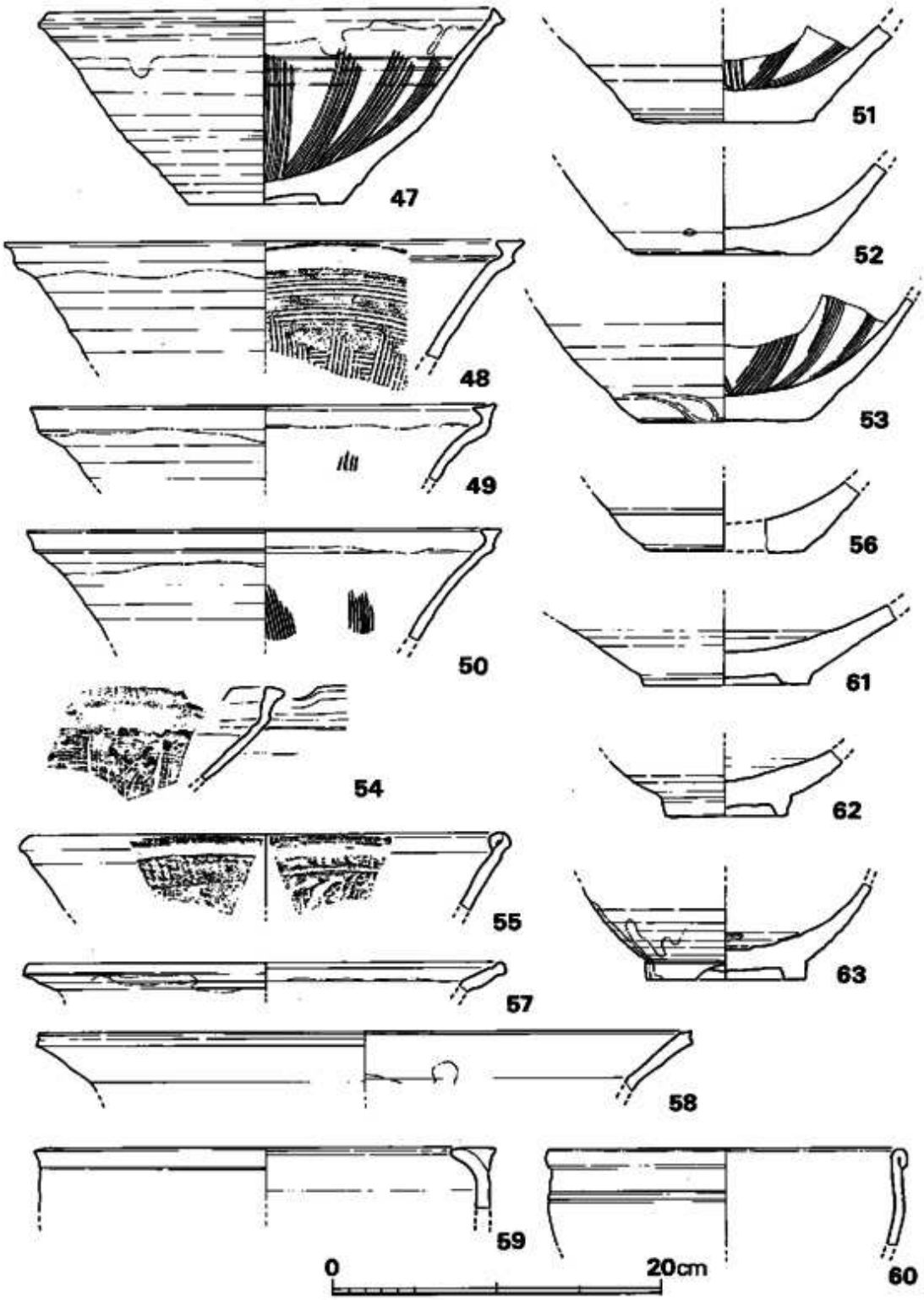
番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
25	P．41	陶器	皿	復原口径 136mm	外面は回転ヘラ削りの後施釉。釉は灰緑色を呈し、内外ともにきわめてこまかい貫入あり。胎土は灰色。	
26	P．78	陶器	皿	復原口径 145mm	下半部は部分的に露胎部あり。外面は回転ヘラ削りの後施釉。釉は緑味を帯びた灰色で不良。釉の流れの末端他に白い釉が部分的にかかる。貫入なし。胎土は赤褐色を呈する。	
27	P.189	陶器	皿	復原口径 130mm	小破片、底部なし、外面は回転ヘラ削りの後施釉。釉は灰緑色で内外ともにこまかい貫入あり。胎土は灰色にて良好。	
28	P.198	陶器	高台付碗	底径 55mm	上半を欠く。タタミ付部は露胎、他はヘラ削りの後全面施釉。釉は灰白色を呈し、ざらざらした部分あり。貫入はなし。胎土は灰黄色。ロクロ方向は左回り。	
29		陶器	天目碗	口径 118mm 底径 41mm 器高 34mm	下半部から底部は露胎。露胎部はヘラ削り→ナデ。釉は黒色で、内外ともに貫入あり。内底には小さなシジミの痕と思われる目跡4ヶ所あり。胎土は灰褐色を呈し、わずかに砂粒を含む。	
30	表層	陶器	高台付皿	底径 43mm	口縁部なし。全面施釉。外面は釉下にヘラ削りの痕跡あり。釉は緑味をわずかに帯びた灰色で、貫入なし。内底には目跡3ヶ所あり。高台内側にも目跡あり。胎土は灰白色。	
31	SD 002	陶器	高台付皿	復原底径 51mm	高台外側およびタタミ付部は本来は露胎。釉は灰黄色で、外面の貫入がはだはだしい。胎土は灰黄色を呈す。内面釉下に濃褐色の鉄絵があるが、梅花文ではないかと思われる。	絵唐津
32	SD 002	磁器	高台付皿	復原底径 48mm	高台タタミ付部は露胎。高台内側には焼台の砂が付着する部分3ヶ所あり。外面にはロクロ痕の凹凸が明瞭。釉は灰緑色で貫入なし。胎土は灰白色。内面釉下には黒緑色の絵があるが図柄は不明。	絵唐津
33	SD 004	陶器	皿	口径 132mm 底径 43mm 器高 38.5mm	外面の下半及び底部は露胎。釉は灰色で貫入なし。胎土は赤褐色で砂粒は含まない。内底には目跡あり（推定4ヶ所）。内面釉下には黒緑色の絵があるが、図柄は不明。露胎部は指によるナデ調整。	絵唐津
34	SD 007	陶器	高台付皿	口径 131mm 底径 48mm 器高 29.5mm	タタミ付部は露胎。底部には焼台の砂付着。釉は灰黄色で貫入なし。内面の釉下にはやや緑味を帯びた濃茶、褐色の鉄絵あるも図柄不明。胎土は灰黄色を呈す。ロクロ方向は右回り。	絵唐津



第33図　唐津系陶器３（縮尺1/3）

番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
35	ＳＫ 001	陶器	碗	復原口径 162㎜	小片である。外面は回転ヘラ削りの後施釉。内面は施釉後鉄絵を描く。釉は灰緑色を呈し、内外にこまかい貫入あり。胎土は灰色を呈す。絵は黒褐色で、木の枝を表わしたものか。	絵唐津
36	Ｐ．52	磁器	高台付碗	底径 44㎜	タタミ付部は露胎。高台内側には焼台の砂付着。外面は回転ヘラ削りの後施釉。釉は灰白色で内外ともに貫入なし。外面釉下には灰緑色の線と絵あるも図柄不明。胎土は灰白色。内底には異物の融着あり。	絵唐津 ＳＢ 004 柱穴
37	表層	陶器	碗		碗の小片。釉は灰白色を呈して、かかりはあまりよくない。施釉後に草葉文ともいうべき絵を描いている。灰緑色を呈す。胎土は灰白色。	絵唐津

番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
38	表層	磁器	高台付皿	底径 44mm	タタミ付部は露胎。釉は濃灰白色で、内面にわずかに貫入がみられる。内面釉下には梅花と草文らしき図柄の絵あり、うすい灰緑色で不鮮明な点がある。胎土は灰白色を呈する。	絵唐津
39	表層	陶器	大皿	復原口径 356mm	大皿の小破片。外面はヨコナデの後施釉。内面は灰釉を基調として、その上に白釉で文様を描く。白釉部分のみに貫入あり。胎土は赤褐色にて良好。	
40	SD 004	陶器	鉢	口径 170mm	片口かと思われる。外面は回転ヘラ削りの後施釉。釉は茶灰色で内外ともに貫入あり。外面の釉下には草文を鉄絵によって描く。胎土は赤褐色。口縁内側に白黄色の釉のかたまりあり。	絵唐津
41	SD 002	陶器	壺？	底径 166mm	底部には貝殻を使用した目跡あり。外面は平行線タタキ→ナデ→施釉、内面は青海波→ナデ→施釉、内底は粗いハケ目→ナデ→施釉。釉は褐色。胎土は灰色。焼成は硬質で良好。	
42	SD 002	陶器	鉢	口径 200mm	口縁部は露胎で赤褐色を呈す。他は内外ともに回転ヘラ削りの後施釉。釉は灰緑色を呈する。内面にはやや白く発色する釉の流れあり。内外ともに貫入あり。胎土は淡茶褐色を呈する。	
43	SK 001	陶器	鉢	口径 184mm	口縁部は折りまげる。口縁下の一部が露胎。外面は回転ヘラ削りの後施釉。釉は灰白色を呈し、内外ともに貫入なし。胎土は灰黄色。	
44	SE 003	陶器	壺	口径 147mm	外面のみ施釉。外面は斜方向の平行線タタキ→ナデ→施釉。口縁内外はヨコナデ。内面は青海波→ナデ。釉は濃褐色を呈し、貫入なし。胎土は灰褐色で微細粒の金雲母片を含む。	
45	SE 001 P.154	陶器	壺		内外ともに施釉。口縁内外はヨコナデ、内面はタタキ→ナデ→施釉、下位には青海波あり。外面は調整の観察不能。釉は茶褐色で、貫入なし。胎土は黄褐色を呈する。焼成はやや軟質。	
46	表層	陶器	鉢		片口かと思われる。外面下半は露胎。内外ともにヨコナデ→施釉。内面は茶褐色、外面は黒褐色で貫入なし。さかさに置かれたものと思われ口縁部に焼台の砂付着。胎土は灰黒色を呈する。	
47	SD 002 SD 004	陶器	摺鉢	口径 271mm 底径 93mm 器高 117mm	口縁内外のみ施釉、他は露胎。底部は高台状につくる。外面下半はヘラ削り、上半はヨコナデ。内面は横溝の後、6条1単位で18ヶ所の縦溝あり。内壁は使用のためよくすれている。釉は黒褐色。胎土は灰茶色。	



第34図　唐津系陶器4（縮尺1/4）

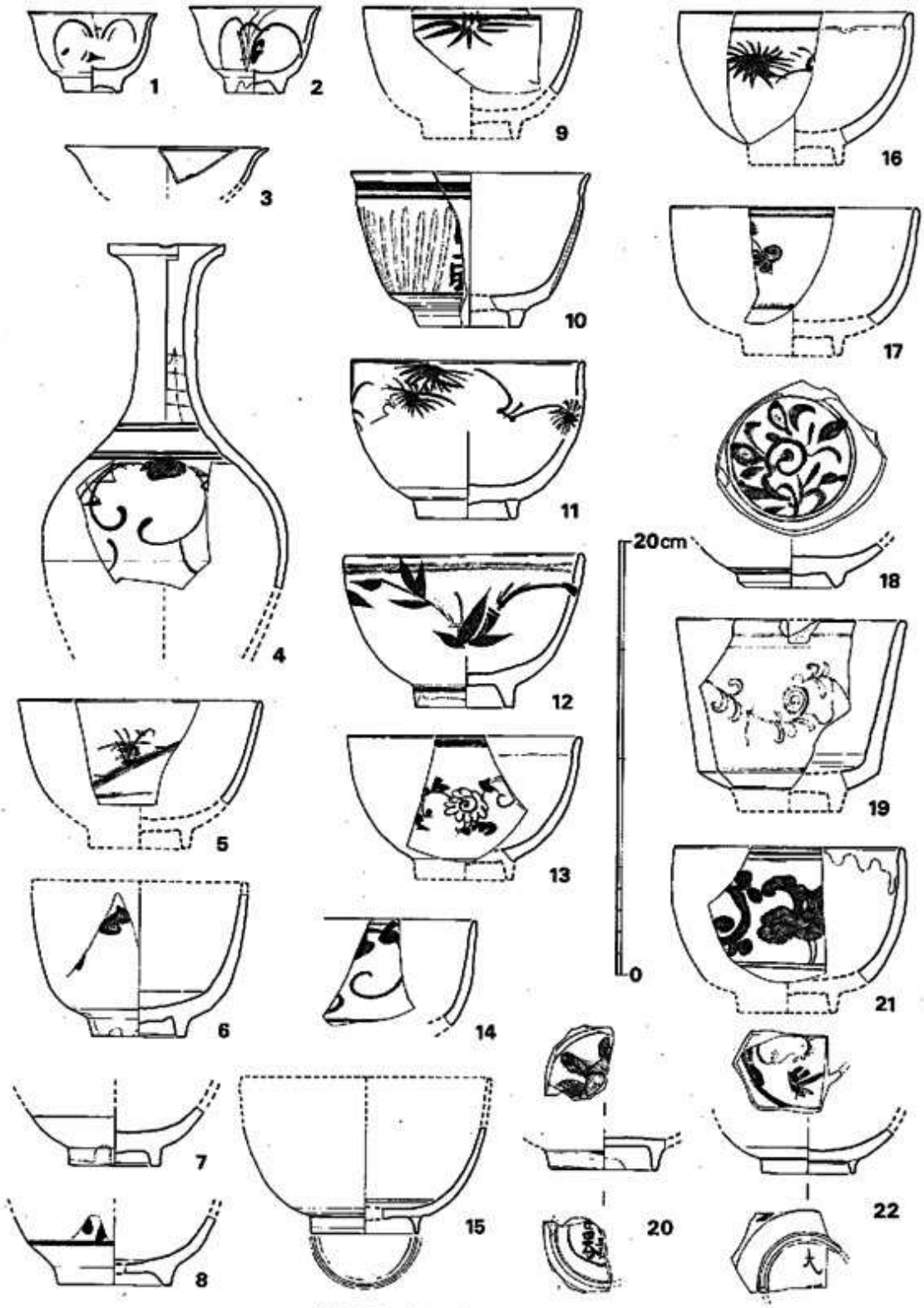
番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
48	SD 002	陶器	摺鉢	口径 316㎜	口縁内外のみ施釉、他は露胎。外面はヨコナデ、内面は横溝の後、6条1単位の縦溝を入れるが、使用のためよくすれている。釉は黒褐色、胎土は茶褐色。内面は褐色。外面は茶褐色を呈し、焼成は硬質で良好。	
49	SD 002	陶器	摺鉢	口径 281㎜	口縁内外のみ施釉、口縁頂部の一部を含め、他は露胎。外面はヨコナデ、内面はヨコナデ、条溝は1単位何条か不明。内面は使用のためよくすれている。釉は黒褐色。胎土は茶褐色で、良好。焼成は硬質。	
50	SD 002	陶器	摺鉢	口径 288㎜	口縁内外のみ施釉、口縁頂部の一部を含め他は露胎。外面と内面口縁下はヨコナデ、内面には9条1単位の縦溝あり。まだあまりすれていない。釉は赤味を帯びた黒褐色。胎土は赤褐色で良好。焼成はやや軟質。	
51	SD 002	陶器	摺鉢	底径 111㎜	底部は糸切り離し、外面はヨコナデ、底部近くに指による凹圧痕推定4ヶ所あり。内面は8条1単位の縦溝が右→左方向へ施される。赤褐色・濃褐色を呈し、胎土は灰黒色又は赤褐色を呈する。焼成は硬質。	
52	SD 002	陶器	摺鉢	底径 108㎜	底部は糸切り離し。底部近くに指による凹圧痕あり。外面はヨコナデ、内面は使用のため溝もほとんどみえないほどに磨れる。赤褐色、胎土も赤褐色、焼成は硬。糸圧痕あり長6.5㎜、幅3.0㎜、長幅比2.17で日本型。	
53	SD 003 表層	陶器	摺鉢	底径 106㎜	底部は糸切り離し。外面は指によるヨコナデ、底部近くに両手の親指・人さし指でつけた凹圧痕4ヶ所があり、窯印かと思われる。内面は10条1単位の溝が18ヶ所左→右へ。内面は使用のためよく磨れる。	
54	SD 004	陶器	摺鉢		口縁内外のみ施釉。外面はヨコナデ、内面は青海波の上から溝を入れる。釉は濃灰色を呈する。胎土は灰黒色で焼成は硬質。須恵質ともいえる。	
55	SD 004	陶器	摺鉢	口径 284㎜	外面施釉、内面露胎。外面口縁部はヨコナデ、体部は格子目タタキ。内面口縁部はヨコハケ。体部は青海波の上から溝を入れる。釉は黒褐色。胎土は濃青灰色で焼成は硬質。須恵質ともいえる。	
56	P.187	陶器	摺鉢	復原底径 96㎜	底部近くには指による凹圧痕推定4ヶ所。外面は指によるヨコナデ（指紋が残る）。内面は使用のためきれいに研磨されている。淡赤褐色を呈す。胎土も淡赤褐色、焼成は硬質。割れた面に煤が付着している。	
57	SD 002	陶器	鉢？	復原口径 289㎜	口縁内外はヨコナデの後施釉。口縁下は露胎。釉は灰緑色を呈し、貫入なし。胎土は淡赤褐色を呈する。	

番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
58	SD 002	陶器	鉢	復原口径 397㎜	内外ともに施釉。外面は釉下に回転ヘラ削りを認める。釉は乳灰色で内外ともに貫入あり。胎土は淡い灰色にて良好。内面にやや青味がかった発色部分あり、本来は絵唐津かとも思われる。	
59	SD 002 SK 001	陶器	甕	口径 280㎜	口縁平坦部は露胎、他は内外ともに施釉。口縁部はヨコナデ、それより下はナデ。釉は黒褐色。胎土は淡赤褐色、口縁露胎部は赤褐色を呈する。	
60	SK 002	陶器	鉢	口径 213㎜	口縁は折りまげる。口縁頂は露胎。内外ともに回転ヘラ削りの後施釉。釉は暗緑色で内外ともに貫入あり。胎土は灰黒色を呈する。	
61	SE 001 SD 002	陶器	鉢	底径 100㎜	内面は施釉、外面は露胎。底部は糸切り離し。外面底部近くは回転ヘラ削り→ヘラ研磨、外底は回転ヘラ削り、上半はナデ、ロクロ方向は左回り。釉は濃灰緑色。胎土は上半は灰褐色、底部付近は茶褐色。	
62	SD 004	陶器	鉢	底径 75㎜	内面施釉、外面下半は露胎なれど上半からの釉の流れあり。外面は回転ヘラ削り。釉はわら灰釉で乳白色、貫入なし。胎土は黄褐色。外面の一部に煤付着。	
63	P.906	陶器	鉢		内面および外面上半は施釉。外面の上半はヨコナデ、下半～底部は回転ヘラ削り。タタミ付に糸切痕が残る。高台にはいわゆる切高台あり。釉は濃灰緑色。内底には目跡あり。胎土は灰色。ロクロ方向は右回り。	SB 007 柱穴

第9表　染付観察表

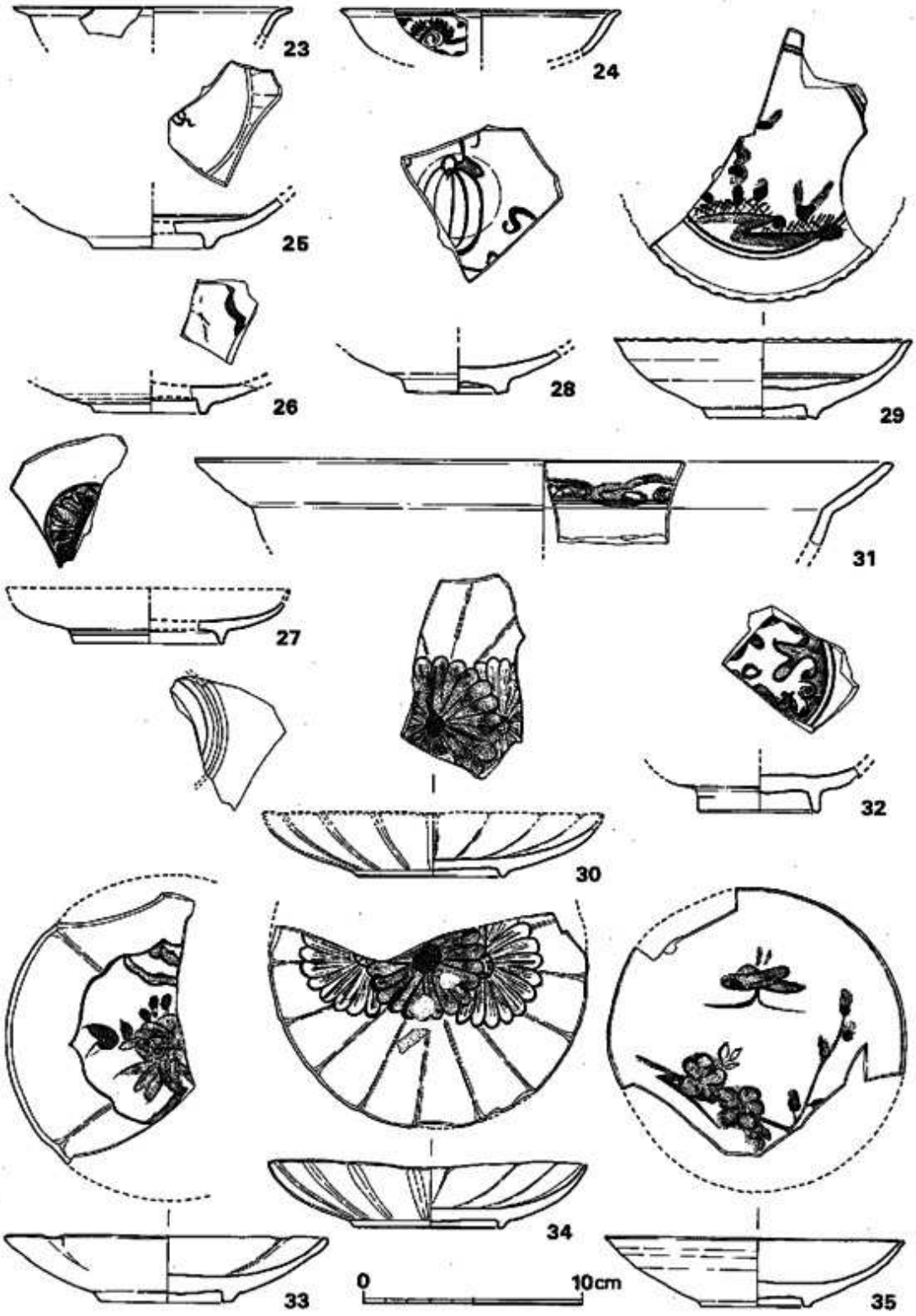
番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
1	SD 002	染付	猪口	口径 59㎜ 底径 27㎜ 器高 36㎜	底部付近および外底はヘラ切り。外底は露胎。釉は乳白色で貫入なし。胎土は白色で精良。文様は一部欠失しているが、淡いあい色で草文を描く。反対側は欠失。ロクロ方向は右回り。染付→施釉。	
2	P.907	染口	猪口	口径 60㎜ 底径 27㎜ 器高 40㎜	底部付近および外底はヘラ切り。外底は露胎。釉は乳白色で貫入なし。胎土は白色で精良。文様は淡いあい色で草文を描く。反対側にも同様の文様があるが中心部は欠失している。染付→施釉。	
3	P. 53	染付	猪口	復原口径 94㎜	やや大きい猪口の小破片。染付→施釉。内面口縁下に横線と、やや下位に図柄不明の染付がみえる。釉は白色で貫入なし。胎土は白色で精良。	

番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
4	SD 002 SD 004	染付	徳利	口径 54mm	口頸部、胴上半部がある。染付→施釉。釉は口頸部内面、外面にかかる。やや青味を帯びた白色で内面はやや濃い。図柄は肩部に2条の横線を2ヶ所。胴部は何を表わしているかわからない。胎土は白色で精良。	
5	SD 002	染付	碗	復原口径 112mm	染付→施釉。図柄は水辺の草か。一部淡い青を呈する部分もあるが、緑黒色ともいうべきくすんだ色調を呈す。釉は淡灰白色で貫入なし。胎土は白色で精良。	
6	SD 002	染付	高台付碗	底径 43mm	外底は露胎。底部ちかくは回転ヘラ削り。染付→施釉。染付の図柄は部分的すぎて不明。ややくすんだコバルトブルーを呈する。釉は淡灰白色で、内外ともに貫入あり。胎土は淡灰白色にて精良。	
7	SD 002	染付	高台付碗	底径 40mm	外底は露胎、一部釉がかかる。高台の一部には焼台の砂付着。染付→施釉。外面下位に淡いコバルトブルーの横線あり。釉は淡青白色で青磁的、貫入なし。胎土は淡灰白色にて精良。	
8	SD 002	染付	高台付碗	底径 51mm	タタミ付部のみ露胎。染付→施釉。底部近くにライトブルーの横線と、その上位に濃いコバルトブルー、ライトブルーを併用した文様あるも図柄不明。釉は白色で、内外とも貫入はなはだし。胎土は灰白色。	
9	SD 002	染付	碗	復原口径 100mm	染付→施釉。外面の口縁下に横線1条と草花文が描かれる。色はくすんだあい色。釉は淡灰白色で、貫入なし。胎土は白色にて精良。	
10	SD 002	染付	高台付碗	復原口径 110mm 復原底径 46mm 器高 71mm	タタミ付部のみ露胎。約1/4程残るが、染付4ヶ所の間に10本の簡略化した輪花を配置する。染付は字のようであるが部分的で読めない。釉は白色で外面に貫入あり。胎土は白色にて精良。	
11	SD 002	染付	高台付碗	口径 108mm 底径 45mm 器高 72mm	ややいびつ。外底は露胎。染付→施釉。外面口縁下と高台に横線、口縁下に草花文を描く。色はくすんだあい色で全体に淡い。釉はやや青味を帯びた灰白色。口縁内面は二重に施釉。貫入あり。胎土は灰白色。	
12	SD 002	染付	高台付碗	口径 108mm 底径 46mm 器高 71mm	かなりいびつ。外底は露胎。染付→施釉。外面口縁下に2条、やや下位に1条、高台に1条の横線。図柄は竹。濃淡のあい色を呈す。釉は白色で、口縁内面は二重に施釉し、うす緑を呈する。胎土は白色にて精良。	
13	SD 004	染付	碗	復原口径 107mm	染付→施釉。外面の口縁下に横線1条、ほぼ中位に花文を描くが何の花かはわからない。黒緑色で、濃い部分は黒に近い。釉は灰白色で、口縁内面には二重に施釉しやや緑味を帯びる。胎土は白色にて精良。	



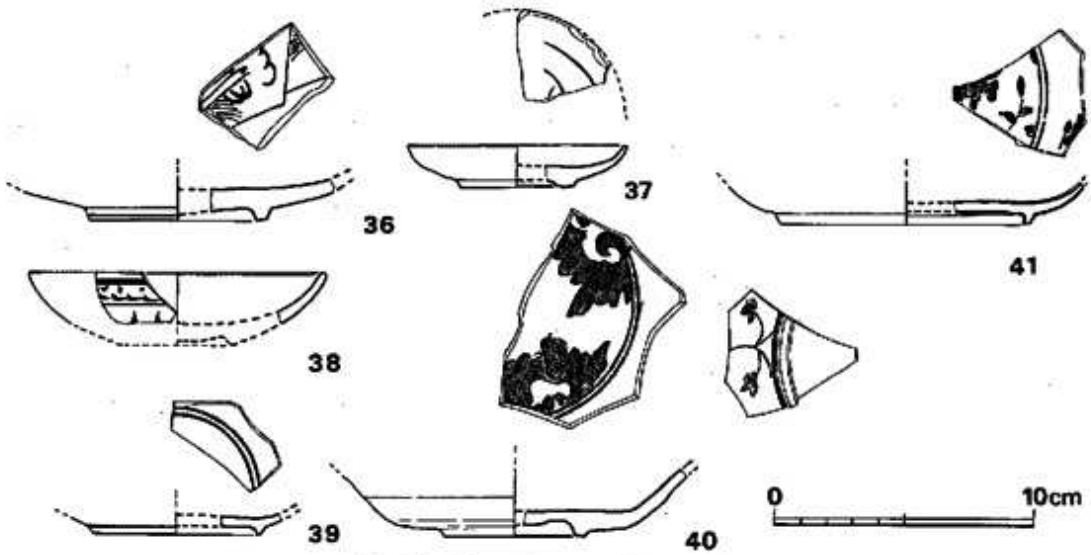
第35図　染　付　1（縮尺1/3）

番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
14	SD 004	染付	碗		染付→施釉。外面の口縁下に横線1条。図柄はつる草文ともいうべきもので4の徳利の図に似る。釉は淡灰白色で貫入なし。胎土は白色にて精良。	
15	SD 006	染付	高台付碗	底径 50㎜	染付→施釉。外面の底部近く、高台上位、高台中位に各1条の横線。外底にも円1条。円底には円2条。色は鮮やかなコバルトブルー。釉は純白で貫入なし。胎土は白色にて精良。器壁はきわめてうすい。	
16	P. 30	染付	碗	復原口径 106㎜	染付→施釉。外面の口縁下に1条の横線とその下に草花文を描く。くすんだあい色で全体に淡い。釉はやや青味を帯びた灰白色で内外ともに貫入あり。口縁内面は二重に施釉。胎土は灰白色で精良。	
17	P. 47	染付	碗	復原口径 112㎜	染付→施釉。外面口縁と直下に横線。上は淡緑黒色、下は緑黒色。上半には草花文と思われる図柄を、底部近くは横線2条。濃紺とライトブルーを併用。釉は白色で貫入なし。胎土は白色にて精良。	
18	1号住居跡内柱穴	染付	高台付碗	底径 42㎜	タタミ付、外底は露胎。染付→施釉。高台外側の上位に横線2条。内底には2条の円の中に草文を描く。色はくすんだ淡いコバルトブルー。釉は淡灰白色で内外ともに貫入あり。胎土は白色にて精良。	
19	1号住居跡内柱穴	染付	高台付碗	復原口径 106㎜ 復原器高 88㎜	染付→施釉。外面の口縁下に2条、底部近くに1条の横線。中央にはつる草文。きわめてうすい青色。釉は淡灰白色で内外ともに貫入あり。胎土は白色にて精良。	
20	P.124	染付	高台付碗	復原底径 48㎜	タタミ付部分のみ露胎。染付→施釉。高台外側に2条の横線。外底は円の中に文字があるが器の一字しか判読できない。内底は木葉文。色はコバルトブルーで内底の色はややくすむ。釉は淡灰白色、胎土は白色。	
21	P.907	染付	碗	復原口径 106㎜	染付→施釉。外面の口縁下の底部近くに各2条の横線と、その間につる草文と思われる図柄を描く。色はコバルトブルー。釉は淡灰白色で、内外ともに貫入あり。胎土は上半は白色、下半はやや赤味を帯びる。	
22	表層	染付	高台付碗	復原底径 43㎜	染付→施釉。外面は底部近くと高台外側に1条の横線、外底には円の中に大□…、内底は2条の円の中にうさぎというよりはもぐららしき動物と草等を描く。色は明るいコバルトブルー。釉は白色。胎土も白色。	
23	SD 002	染付	皿	復原口径 126㎜	小破片。染付→施釉。器壁はきわめて薄い。外面は口縁下に横線2条、下位の文様は小破片のため不明。内面も口縁下に染付あるも図柄不明。色は明るいコバルトブルー。釉は白色で貫入なし。胎土は淡灰白色。	



第36図　染　付　2（縮尺1/3）

番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
24	SD 002	染付	皿	復原口径 128㎜	染付→施釉。外面は口縁下に1条の横線。その下は宝相華唐草文。色は黒緑色。内面は口縁下に2条の横線、色はうすい黒緑色。釉は淡灰白色で貫入なし。胎土は白色にて精良。	
25	SD 002	染付	高台付皿	復原口径 54㎜	高台タタミ付は露胎。体部は輪花状。染付→施釉。内底にうすいコバルトブルーの染付あり、図柄不明。釉は淡灰白色で貫入なし。胎土は白色にて精良。	
26	SD 002	染付	高台付皿	復原口径 52㎜	高台タタミ付は露胎。染付→施釉。内底に図柄不明の染付あり。明るく濃いコバルトブルーであるが釉が淡灰黄色のため全体としてはややくすんだ色調。貫入なし。胎土は白色で精良。	
27	SD 002	染付	高台付皿	復原口径 68㎜	染付→施釉。外面は高台外側に2条の横線、外底に円1条。内底には円の中に菊花文を描く。内は濃い、外は明るく淡いコバルトブルー。釉は白色で貫入なし。胎土は白色にて精良。	
28	SD 002	染付	高台付皿	底径 46㎜	外底は露胎。染付→施釉。内面にややくすんだコバルトブルーで、つる草と瓜らしき図柄を描く。釉は青味を帯びた灰白色で内外ともに貫入あり。胎土は灰黄色を呈するが良好。	
29	SD 002	染付	高台付皿	復原口径 136㎜ 底径 50.5㎜ 器高 36㎜	高台タタミ付部は露胎。口縁はヘラによる刻目で波状を呈する。染付→施釉。内底に、円2条とその中に水辺のほとりに陽炎のたなびくような図柄を描く。色は青の濃淡によって表現。釉は白緑色。胎土は白色。	
30	SD 002	染付	高台付皿	復原底径 67㎜	高台タタミ付部は露胎。内外ともに16花文の輪花。染付→施釉。文様は内底に菊花文。線描のものと、色ぬりの両者あり。釉は白色で貫入なし。胎土は白色にて精良。	
31	SD 002	染付	鉢	復原口径 318㎜	染付→施釉。染付は口縁内面に流雲文のような図柄を描き、上に1条、下部に2条の横線あり。色はくすんだ黒緑色で全体に淡い。釉は淡灰白色で内外ともに貫入あり。胎土は灰白色。	
32	SD 004	染付	高台付碗	復原底径 54㎜	高台タタミ付部は露胎。染付→施釉。外面は底部近くに横線2条、上部にもあるが図柄は不明。内底には2条の円内につるくさ文らしき文様を描く。釉は青味を帯びた淡灰白色で外底に貫入あり。胎土は灰白色。	
33	SD 006	染付	高台付皿	復原口径 147㎜ 底径 61㎜ 器高 30㎜	高台タタミ付部は露胎。内外ともに4花文の輪花をなす。染付→施釉。内底には四葉座の中に牡丹らしき花を描く。かなりくすんだ淡い青色。外にも染付あり（写真参照）。釉は淡灰黄色。胎土は灰白色。	



第37図　染　付　3（縮尺1/3）

番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
34	SD 006	染付	高台付皿	口径 145mm 底径 61mm 器高 31mm	高台タタミ付部は露胎。内外ともに16花文の輪花をなす。染付→施釉。内面に菊花3つを描く、中央は色ぬり、両側は線描。青色の濃淡によって表現。内面には目跡あり。釉は白色。胎土は白色にて精良。	
35	SD 006	染付	高台付皿	口径 136mm 底径 50mm 器高 32mm	高台タタミ付は露胎。染付→施釉。内面に梅花と蜻蛉らしきものを描き、口縁内面には1条の横線あり、青色の濃淡によって表現。釉の基調は乳濁色、ピンク色を呈するところもある。貫入あり。胎土は灰白色。	
36	SD 007	染付	高台付皿	復原口径 68mm	高台タタミ付部は露胎。染付→施釉。外面は高台に1条の横線。内面は水辺を描いたものか。色は明るいコバルトブルー。釉は青味を帯びた白色。胎土は灰白色。	
37	P.907	染付	高台付小皿	復原口径 83mm 復原底径 43mm 器高 20mm	高台タタミ付部は露胎。染付→施釉。内面にうすいコバルトブルーの線があるが図柄は不明。釉は白色で、内外ともに若干の貫入あり。胎土は白色にて精良。	
38	1号住居跡内柱穴	染付	皿	復原口径 113mm	いわゆる蕎笥底をなすと思われる小皿で口縁部に青波文、底部近くに芭蕉文を描く。色は濃淡の青色。釉は灰白色で貫入なし。胎土は灰白色で精良。	

番号	出土遺構	種類	器種	法量	特徴	備考
39	P.139	染付	高台付皿	復原底径 64mm	高台タタミ付部は露胎。染付→施釉。外面は高台上位に1条の横線、内底に2条の円を描く。内外ともに明るいコバルトブルー。釉は白色で貫入なし。胎土は白色にて精良。	
40		染付	高台付皿	復原底径 53mm	高台タタミ付部は露胎。染付→施釉。内底に2条の円を描き、その中に雲文らしき文様あり、色はあざやかなコバルトブルー。釉は灰白色で貫入なし。胎土は灰白色で精良。	
41		染付	高台付皿	復原底径 96mm	高台タタミ付部は露胎。高台内側に焼台の砂付着。染付→施釉。図柄は内外ともにつる草文と横線で構成。色はあざやかなコバルトブルー。釉は白色。胎土は白色にて精良。	

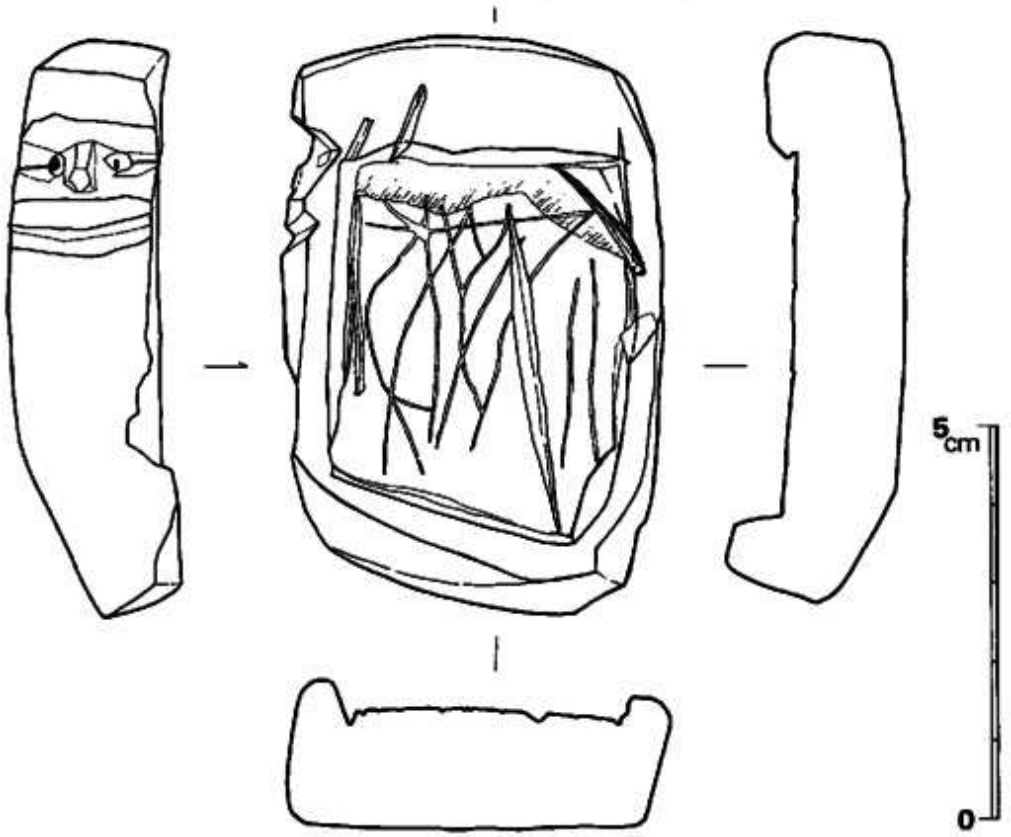
b. 石製品

硯（図版25，第38図）

SD002溝内から出土した。肩部の一部を欠損する以外は完形品である。陸と海の境は明確ではなく、肩部との屈折部の四周および陸部に2条の幅0.2~0.3cm・深さ0.15cmの大きめの工具痕を残す。また全面にわたって、手に石材を握って、他方の手の工具で陸部面を削り下げた際の工具先端の移動軌跡痕が条線で一面に認められることから、実際に硯として使用しなかった可能性が強く、海部も当所から作らなかったものであろう。むしろ、その側面にシャープに刻まれた人面の方に主眼をもたせたためか。人面は、眼面を大きく削り凹ませ、目尻を刻み、眼窩径0.2~0.3cmで、その中心に向けて眼面から0.2cm深めて眼としている。鼻先は丁寧に若干高く表出するが、鼻孔はない。口は上弦を若干弧状に表現している。海部側の小口面および裏面の屈折面は黒色の煤が付着し、他の面と異なって工具痕を認めぬ程に磨滅している。滑石製石鍋口縁部破片を使用したものであろう。長辺7.2cm・短辺4.9cm・肩部厚1.8cm・陸部厚1.5cmを測る。

磨臼（図版26~28，第39~42図）

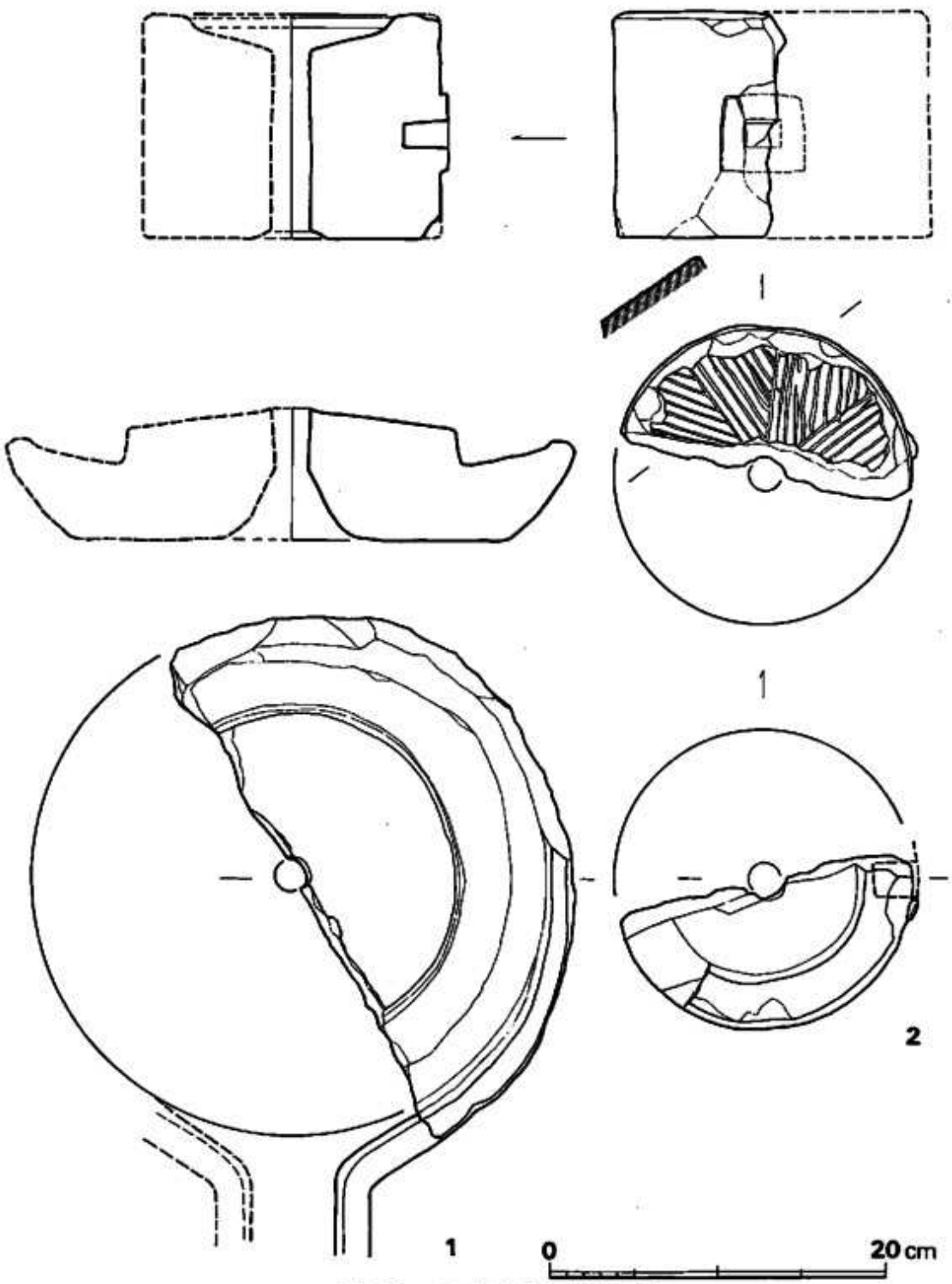
1は1号竪穴住居内から出土した。製茶用の茶臼といわれる下臼の残欠である。残欠部位での法量は以下復原値で示す。回転軸の心棒用の中央部孔は、上面から中位までは孔径1.8cmの隅



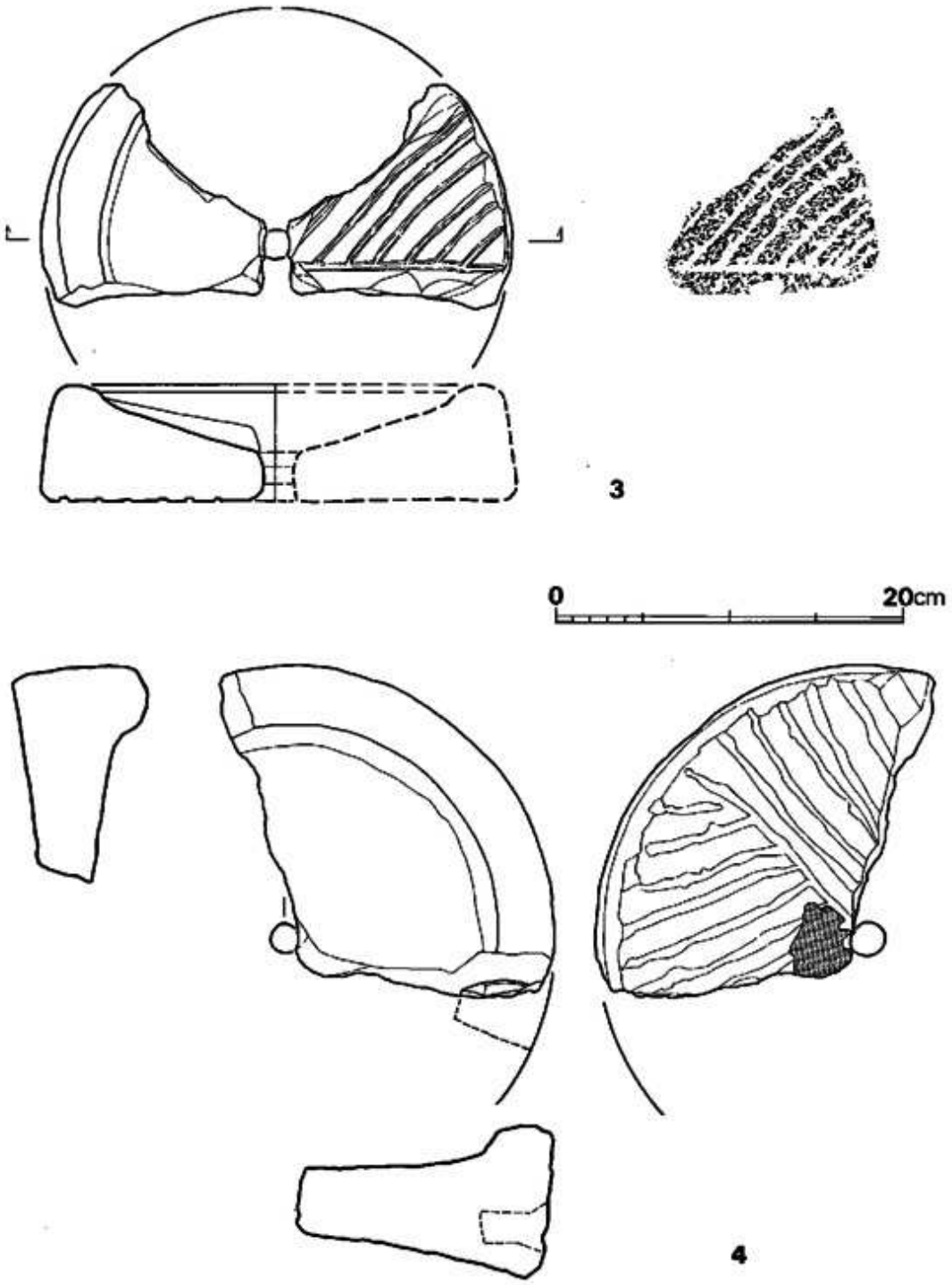
第38図　滑石製砚実測図（縮尺1/1）

丸方形を呈し、下面では孔径6.8×8.2cmの楕円形で大きい。心棒を下面から打ち込んで、強く固定させるための造作であろう。磨面は磨られた材料が、周縁溝への移動を容易にするために5.5°の傾斜をつけると共に、中央部孔内へ詰まるのを防ぐために孔周縁部を若干高くしている。磨面径19.5cmである。磨面周縁から周縁溝との屈折部面は直線的で丁寧に仕上げがなされている。周縁受け部溝底から周堤にかけては使用による磨滅によって凹凸が少ない。周堤外縁から裏および中央部孔中位にかけての器面は荒く仕上げている。断面部位では器高7.9cm・周縁受け部溝底幅5.1cm周縁受け部溝最大径33.8cmであるが、図下方での周縁受け部溝底幅は6.0cmと大きく、裏着地部径も大きくなっているので、磨られた材料の取り出し口に近い位置と考えられる。磨面は磨歯が全く遺存しないので、欠損したために新たな目たてを行わずに使用を放棄したものであろう。淡灰色安山岩である。

2はＳＤ002溝内から出土した。１と同様の使用例といわれるものの上臼の残欠であるが、１と同一セットのものではなく、磨面は水平である。孔径2.4cmの中央部孔は、投入孔と回転軸受け孔を兼ねる。外径17.8cm・周縁堤幅3.2cm・器高13.4cmで、側面に削り出し縁幅1.5cmの把手



第39図　石臼実測図1（縮尺1/4）



第40図　石臼実測図２（縮尺1/4）

孔を造作している。把手孔径は1.6×約2.1cmの長方形で奥行き2.7cmである。磨歯は碾面を８分割し、１分割区内に10～11条を造作し、歯幅は0.2cm・深さは0.05cmと浅く、使用による磨滅が著しい。側壁面は磨り仕上げによって円形にしており、一部横断幅約5.0cmの平面部を残している。0.2cm前後の多孔性の安山岩質凝灰岩で、淡青灰色を呈する。

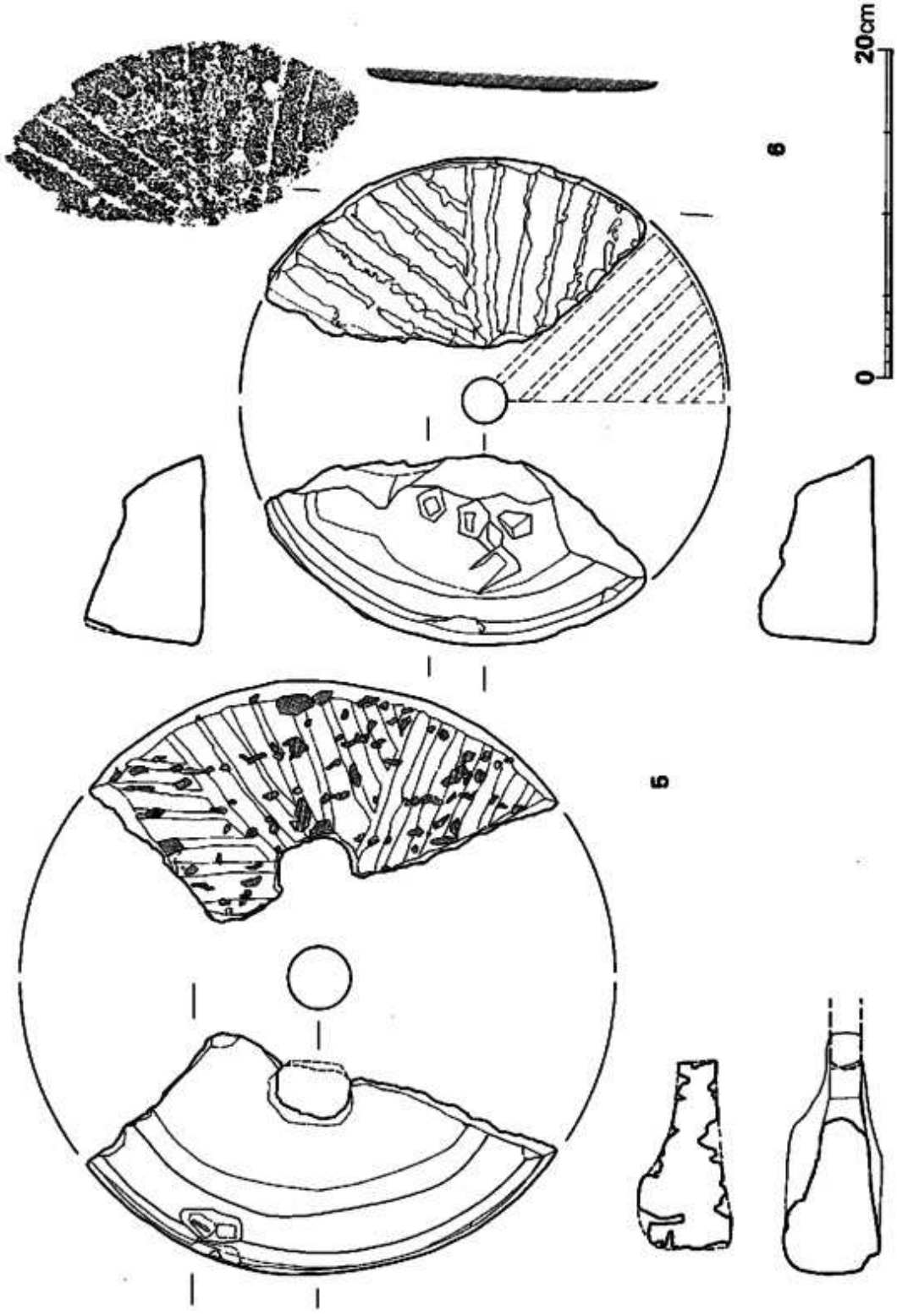
3はＳＥ001井戸内から出土した。碾面から周縁堤までの高さは5.8～7.0cmと一定せず、使用によって変形磨滅が著しい。中心部孔内径約1.6cmで、孔の深さは2.8cmである。碾面の磨歯は若干弧状を呈し、歯幅0.3～0.4cm・深さ0.2cmと、シャープで、新たに目たてされたものであろう。残片部に投入孔は遺存しない。0.2cm前後の多孔性安山岩質凝灰岩で、淡青灰色を呈する。

4はＳＤ002溝上層から出土した。中心部孔は一部を残すのみで、孔径は約2.0cmである。碾面縁から周縁堤までの断面高は7.4～8.8cmと差が著しく、碾面は当初から相当の使用による磨滅が著しく、数次の目たてを経たものであろう。側面は当初径31.0cmで直立して造作されたものであろうが、現在では碾面に向けて3.5°傾斜して着床するのも同様であろう。碾面は大きく内湾し、側縁部と中央部との比高差は2.5cmである。磨歯は石材が径0.5cm程の多孔質のため、実測図以上に鋸歯状を呈する。歯幅は約0.5cmと幅広で、深さは0.1cmと浅くなっている。側面には把手孔の残欠が認められるが、１のような削り出し縁は造作せず、奥行約1.0cmから側面までは円形に開口し、内部は方形で側面からの奥行きは3.7cm程である。安山岩質凝灰岩製で、淡橙灰色を呈す。

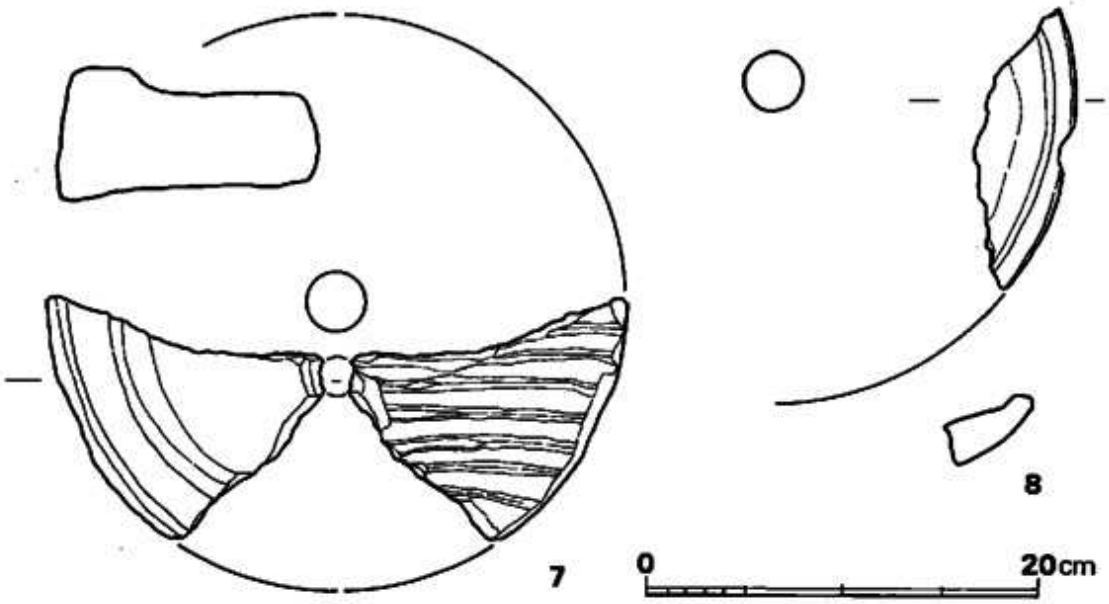
5はＳＤ002溝上層から出土した。中央部の回転軸挿入孔は遺存せず、投入れ孔内径は約3.0×4.4cmの隅丸長方形を呈す。海部から緩かに屈折する周縁堤は低く、外径は36.0cmである。碾面は大きく内湾し、側縁部と中央部との比高差は1.0cmである。磨歯は、石材が多孔質で、最大孔径1.4×2.3cm・平均0.5×1.0cm前後の気孔が実測図でアミ部で示したように上→下にむけて３～４列に走っているため、目たてに乱れが認められる。歯幅は0.7cm・深さは0.1cm前後で、両断面図作成位置間での主な気孔の深さは図の通りで、周縁周部のものは2.7cmの深さに貫入している。凝灰岩製で、灰白色を呈す。

6は包含層から出土した。仕上げの状態から下臼として説明する。碾面縁高は6.1～7.1cmと差が認められ、使用による磨滅が著しい。現在の磨歯も磨滅が大きく鋸歯状を呈し、歯幅0.5cm・深さ0.1cm前後である。側縁面径は29.6cmで、丁寧に削った深さ0.05cmの工削痕を断面で縦方向に0.5cm間隔で明瞭に残す。裏面の着地面は使用による磨滅で凹凸がないが、中心部に向けての内湾面は、断面図に示すように、深さ0.2～0.4cmの工具痕を残し、刃幅は1.0cmを測る。このような工具痕を多く残したままの荒い仕上げ状態で、明確な周縁堤を示さないことも考慮して下臼とした。玄武岩質安山岩で、淡灰褐色を呈す。

7はＳＤ004溝内から出土した。中央部の軸受け孔は遺存せず、投入孔は約2.0cmである。碾面は現在約1.0cm内湾するが、側縁面を外径19.6cmで直立させると、中心部と碾面縁との比高差



第41図　石臼実測図3（縮尺1/4）



第42図　石臼実測図4（縮尺1/4）

は1.5cm前後となる。磨歯はよく遺存し、歯幅約0.6cm・深さ0.2cmである。周縁堤上面から側縁面にかけては径0.5cm・深さ0.4cm前後の大きめの気孔を多く認めるが、磨面のそれは径0.2cm・深さ0.1～0.2cmと小さめである。造作にあたって、石材の表面に近い部分を側面にして、磨面に心部の気孔径の小さい部分を使用したものであろう。安山岩質凝灰岩製で、淡白灰色を呈す。

8はＳＤ003溝から出土した。茶臼といわれる下臼残欠片である。外径約31.2cm程である。安山岩質凝灰岩製で、淡橙灰色を呈する。

c．石　　器

石匕（図版25，第53図）

安山岩製横型石匕。剥片は直線的でかつ50°前後の角度と厚みを有した一辺を刃部として用いており、背にあたる側は、調整剥離を加えてつまみを作っているものの粗雑な剥離でつまみは小さめである。整形段階に剥離が大きめで、刃部との距離が短かいことに起因するのであろう。風化が進み、灰白色を呈す。刃部幅7.5cm・長さ3.3cm、最大厚1.4cm・重量31.8ｇを測る。

石戈（図版25，第53図）

表採されたもので、淡灰褐色の粘板岩質である。

d．木　器

下駄（図版29～31，第43～45図）

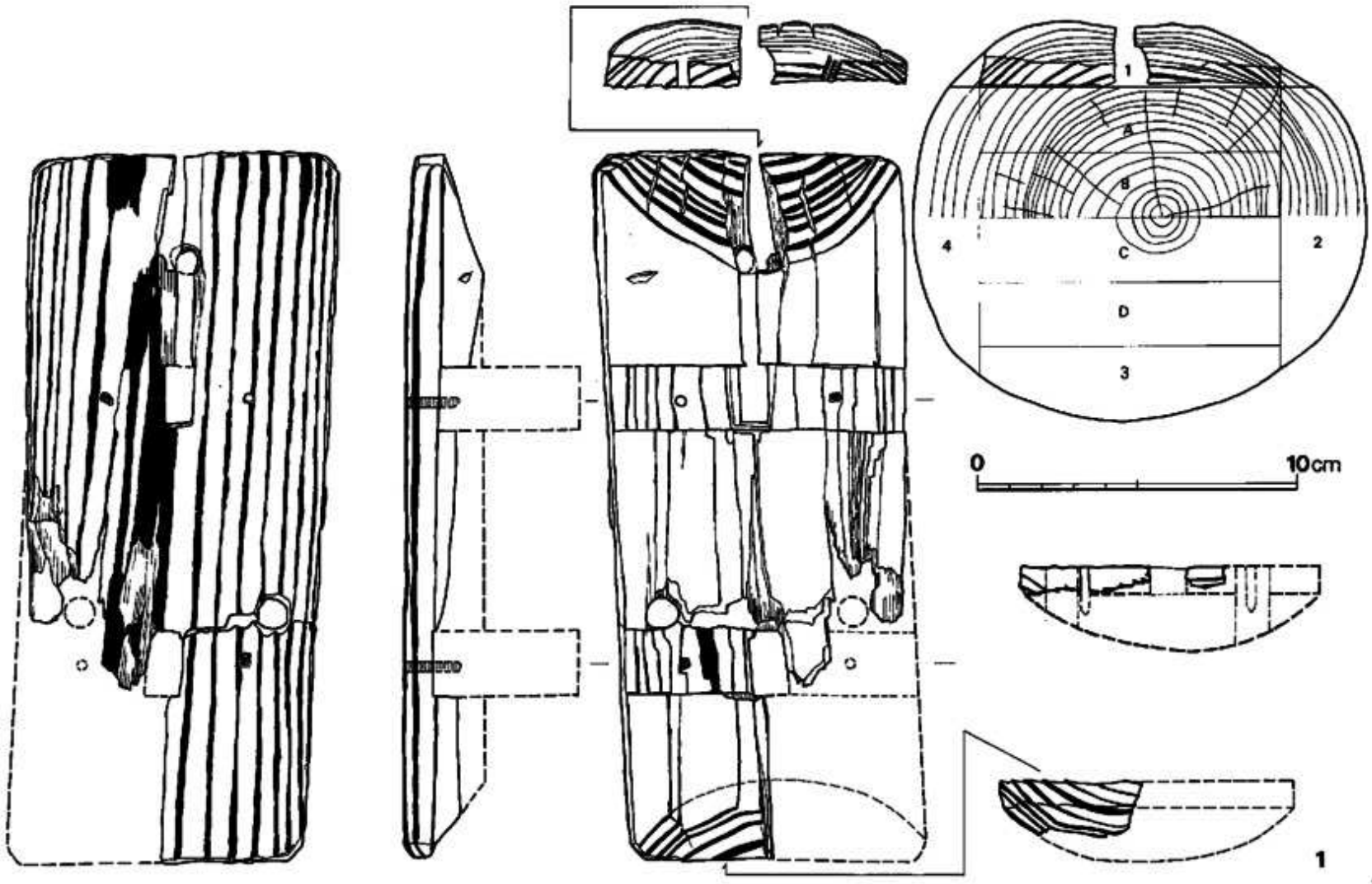
1はＳＤ002溝の断面土層図を作成した、ＳＤ003との合流地点よりやや南側の若干深まった溝底の第９層内で出土した。台部の甲幅は9.5×22.0cmで若干隅丸に仕上げ、側面厚0.8～1.0cmを測る。台部裏面は白木のままで、一部に表皮除去の際の工具痕を認め、両小口部は斜めに大きく削り、中央部最大厚2.5cmを測る。0.9cmの前壺孔は中央部に設け、横緒径も同様である。差歯形式で、枘孔を前歯で0.9×1.7cm・後歯で1.0×2.0cmの長方形に中央に１ヶ所、約0.3cmの目釘孔を両端に２ヶ所それぞれ設ける。目釘は２個が遺存する。差歯の厚さは台部裏面の切り込みから2.0cmを測る。差歯は前緒小口から6.6cm、横緒小口から5.3cmの位置に設ける。年輪は12を数える。

以上の計測値と年輪・割れの貫入等の観察から、杉丸太材による木地取りの復原を試みた。模式図の短径12.6×長径14.1×長さ22.0cmの法量の丸太材から、１～４の４枚の台部、Ａ～Ｄの４枚をそれぞれ長さ22.0cm×1/2＝11cmに切断すると８枚の差歯を得ることが可能で、２組の差歯形下駄が完成する。粗削から仕上げまでの損失法量を考慮すれば、径約15.0cm・長さ約23.0cm前後の大きさの白木材から、２組を合理的に得る最良の例として図示したものである。

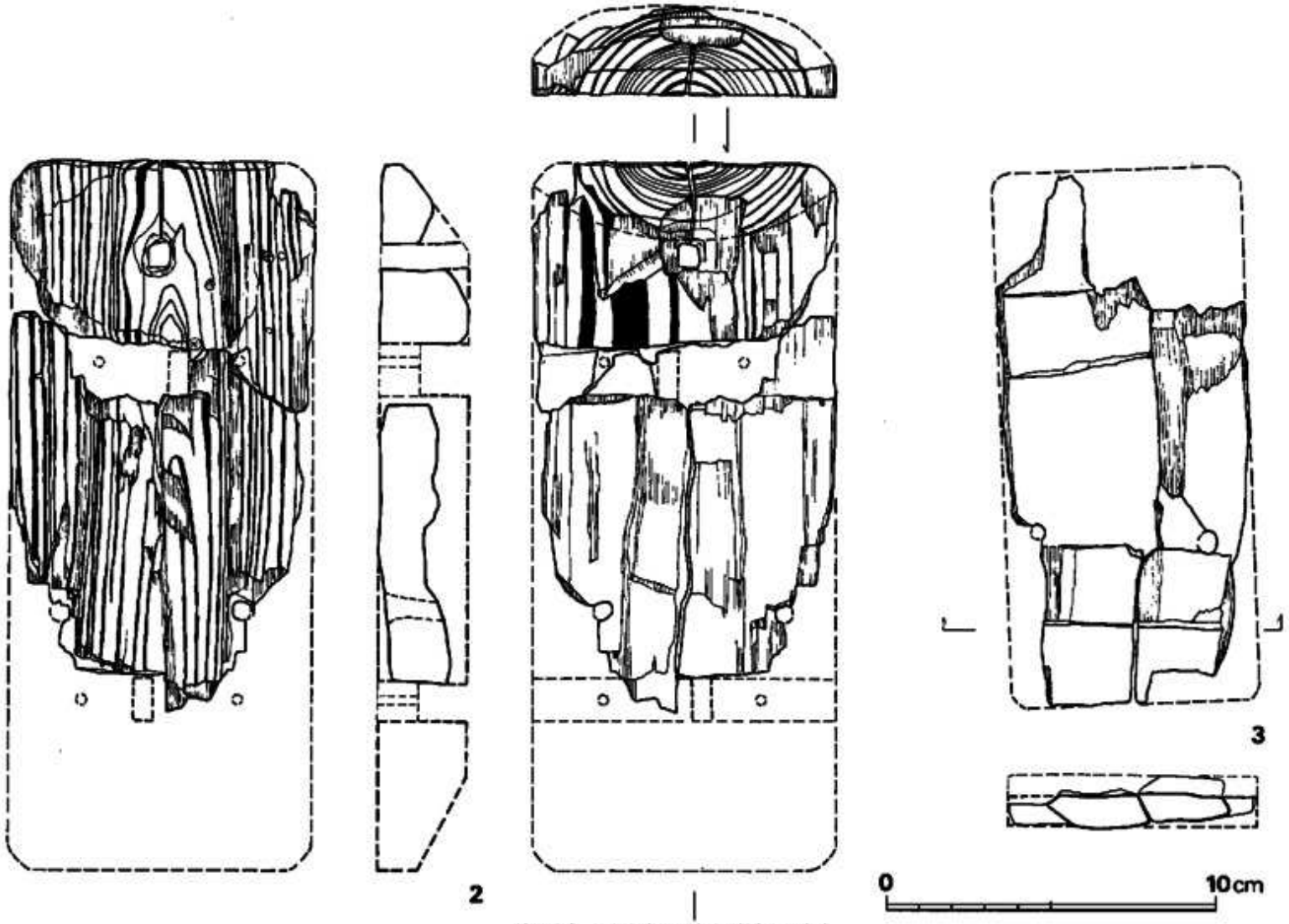
2もＳＤ002溝内で出土した。甲幅は短辺9.2cmで、長辺は16.5cmが遺存する。１同様の比率で差歯が設けられた場合の長辺は21.3cmと復原される。側面厚1.3cm、最大厚2.7cmを測り、台部裏面は白木のままであるが、遺存状態は悪い。前壺孔は0.7×0.8cmで方形に近く、ほぼ中央部に設け、横緒径は0.6cmの円孔である。差歯形式で、枘孔を前歯で0.6×1.4cmの長方形にほぼ中央に１ヶ所設けるが、後歯では欠損する。目釘孔は欠損したものと思われる。差歯の厚さは1.3cmを測る。年輪は約15を数える。

3はＳＤ006溝内から出土した。乾燥状態での写真・実測図・計測値を示すが、萎縮・変形が著しい。甲幅は7.6×約16.1cm、側面厚1.0cm、横緒径0.6×0.7cmを測る。連歯形式で歯は2.4cmと厚手に作り、遺存歯高は0.5cmである。

4はＳＤ002溝内から出土した。前壺が認められず歯幅が復原できないが、甲幅は長辺19.7cmで短辺は約9.0cm前後であろう。両小口面厚1.1cm・連歯間厚1.6cm・横緒孔内径0.6×0.8cmを測る。連歯形式で歯は3.6cmと厚手に作り、遺存歯高は0.8cmを測り、台部裏面の前歯と横緒間には、歯を設ける際の切り込み工具痕が横断方向にシャープに認められるが、鋸挽き痕としては観察されない。



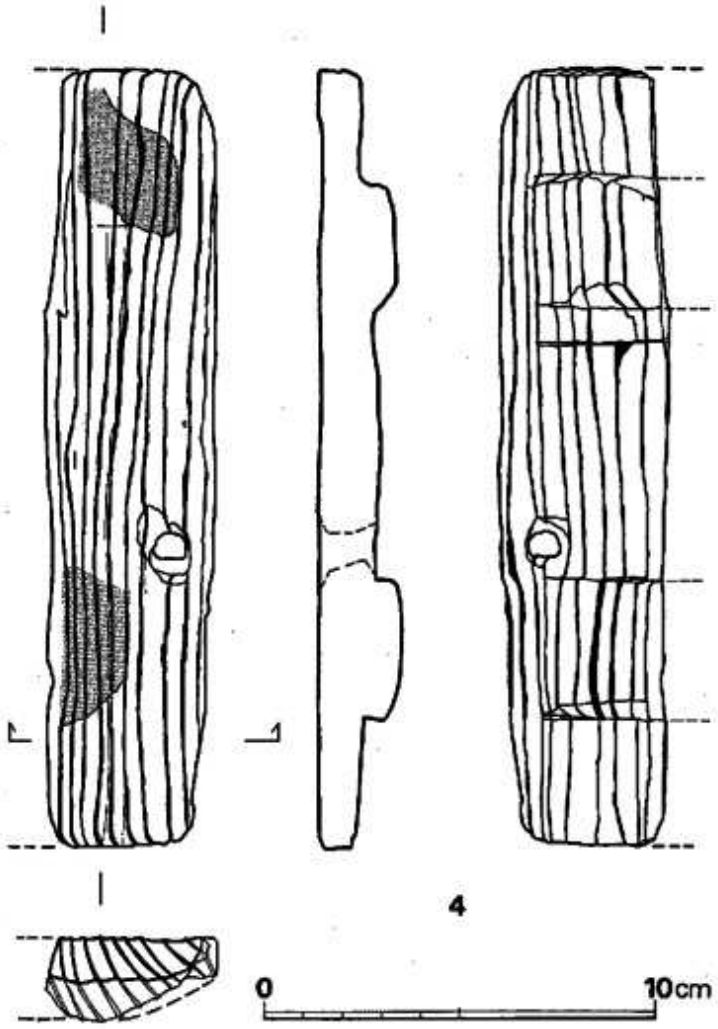
第43図　下駄実測図1（縮尺1/2）



第44図　下駄実測図２（縮尺1/2）

その他にＳＤ002溝内から連歯形式の破片が出土しており、甲の長さ18.6cm・最大厚1.1cm・歯厚3.1cm・現存歯高1.0cmを測る。

以上のように、５例がいずれも戦国末期の溝内から出土したが、差歯形式と連歯形式の両例が認められたが、若干薄手の歯材を枘と目釘によって組み立てられた前者は、白木のままの丸太の粗割材の小口部を削ったままで甲部材に使用している点が特徴として指摘されよう。

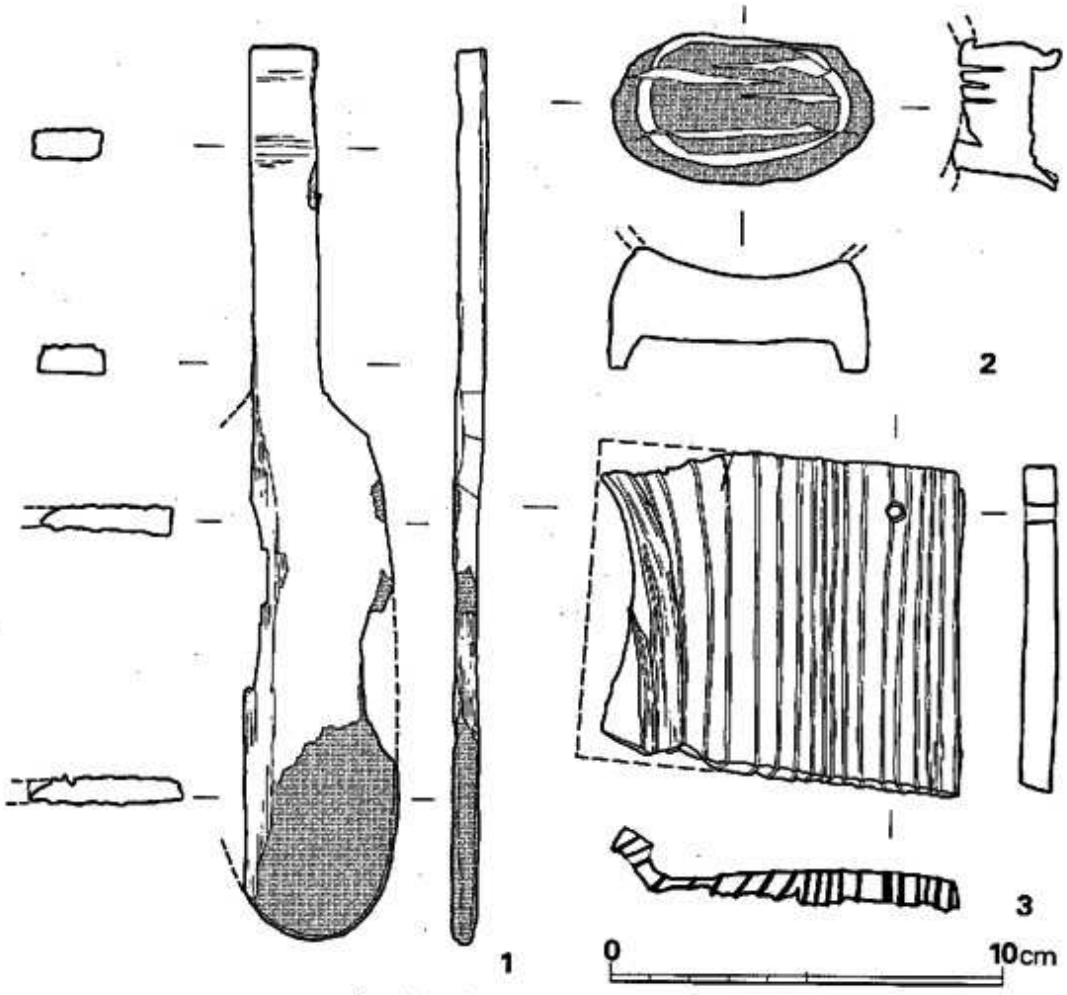


第45図　下駄実測図３（縮尺1/2）

木製高台付椀（図版32，第46図）

2はＳＤ002溝から出土した。乾燥状態での写真・実測図・計測値を示すが、萎縮・変形が著しい。底部の内面高2.4cm・外面高0.7cmを測り、杯部を欠失する。高台部は、外径3.7×6.6cmと大きく長円形に萎縮し、畳付き部厚は最大0.8cmを測る。赤茶褐色の漆器表面が剝離し、器内外面にわたって黒色を呈す。

図版32(下)も高台片で、出土時に既に土圧によって変形していた。高台部は、外径5.2×6.2cm、底部の外面高0.8cm、畳付き部厚0.2cmを測る。器内外面共に２と同様の色調を呈す。



第46図　木器実測図（縮尺1/2）

板状木製品（図版29，第46図）

3はＳＤ002溝から出土した。乾燥して萎縮・変形後の実測図・計測値を示す。いずれの面も丁寧に仕上げられ、幅は平坦に直すと9.3cm・長さは8.2cmの最大値を測る。厚さは0.8～0.9cmで、約0.4cmの小孔を2ヶ所に設けている。年輪20を数える。

杓文字状木製品（図版33，第46図）

1はＳＤ006溝から出土した。乾燥状態での写真・実測図・計測値を示す。萎縮はするが変形はあまりしていない。全長22.6cm、厚さ0.7～0.8cmを測り、アミ部は焼けて若干薄手となって

いる。しかし、丁寧に面削りされた柄と身の屈折部の一方は割損して身を欠き、これを杓文字とすれば当初から先端部は薄手に仕上げていたとも言えよう。

有孔板状木器（図版33，第47図）

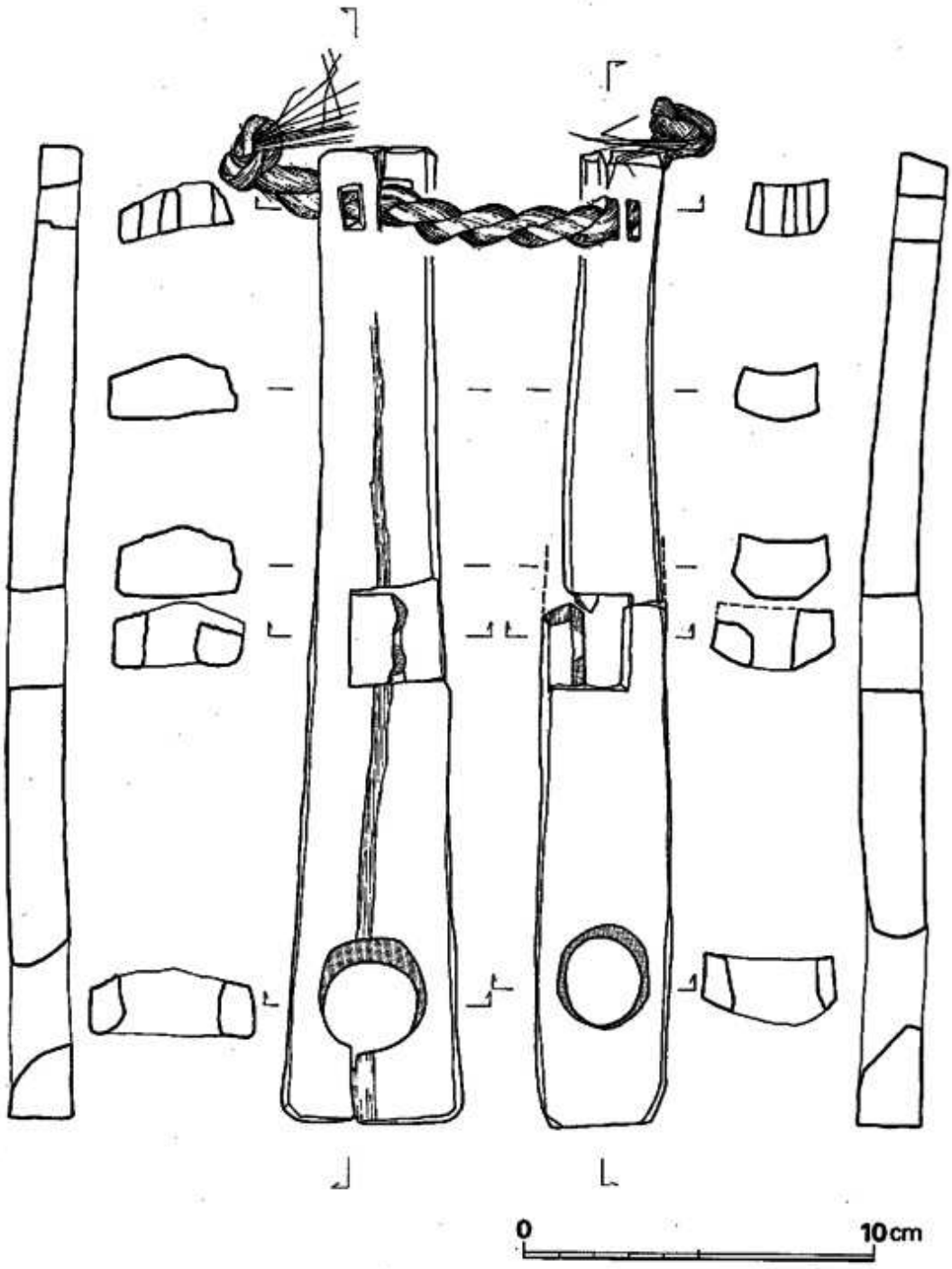
P59柱穴内から出土した。同大・対称形で対に棕櫚縄で連結された状態で検出したが、右はその後半折し、上半部は乾燥状態で、下半部は半乾燥状態での実測図・図版である。したがって若干の萎縮・変形が認められるので、出土時の図上右側部の法量は同左側と類似したものである。左側は全長27.8cmで、最大部幅5.1cm・最小部幅3.2cmを測り、厚さはほぼ一定で、上方小口側厚0.9cm・同中央部厚1.3cm、下方小口側厚1.4cm・同中央部厚1.9cmを測る。しかし、中央部はヒビ割れして若干厚手に、最大部幅も中央部が0.6cm間が割れて大きく計測されている。上方には径0.6×1.3cmの長方形孔が2対造作され、中位に、内側に片寄って2.7cmの方形孔を深さ0.5cmまで造作し、更に1.5×2.6cmの長方形孔を穿っている。図上アミ部は使用による磨滅部を示す。下方では径2.6cmの円孔を造作するが、図上アミ部が著しい使用磨滅で孔径が大きくなり、ツルツルである。左・右側共に裏面は年輪のカーブを示し、右側では裏面は白木のままの状態に近い。材質はカシ等の硬いものではなく、杉材に似て、丁寧に面削りがなされている。結束されたままでの棕櫚縄の現存長は18.5cmを測る。使用による磨滅は上方の長方形孔と、中位の孔の図上外側面には左・右側共に認められない。現状のように結束されて対に使用されたものとすれば、中位の孔も左・右側は縄（紐）様のもので通され、下方の円孔は縦断面図に示したような磨滅痕によって左・右側別途に上下の方向に縄（紐）が通されていたことが指摘される。この状態での使用としては、滑車側板等の利用も考えられよう。また、現状の結束が当初の使用時のものでないとすれば、桶の把手両側板としての用途も一部に考えられる。

e．柱　　根

柱86（図版35，第48・49図）

SB010号建物を構成する西梁行方向の86号柱穴内から出土した。柱穴底部標高12.32m、柱根先端同12.465mで柱が約15cm浮いて出土した。柱材の全長は不明であるが、同一建物柱根である柱300の下部は同12.36mであることから、一応同様の深さに柱穴を掘った後で、建物法量に合わせて柱材の埋置レベルを決めた可能性が強い。両柱根の底部が完存していることと、柱86の底部が伐倒の際にできた凹みが残ったままであることからも言えよう。

柱根は現存長31.3cm、最大径16.4×18.5cmを測るが、復原可能な高さ20cmの部位（柱根先端



第47図　有孔板状木製品実測図（縮尺1/2）

からの高さ、以下同じ）での径は13.7×15.2cmと急に細くなり、図版35に示したように木表の風化列痕が直線的でなく、むしろ渦巻状を呈している。また削られたフシが小さく、下方に伸びて認められ、木根のように観察される。このことから、根元に近い部位で伐倒した現状のまま使用したものであろう。木表は白木丸太材で、先端からの見透し図に示したとおり、大きく6面の裁断面があり、アミ部は縦断面に示した伐倒時の欠損部である。●印は年輪の中心位置である。年輪数は19を数える。樹種は五葉マツと分析されている。分析試料採取箇所は図上アミ部で示した。

柱200（図版36，第48・50図）

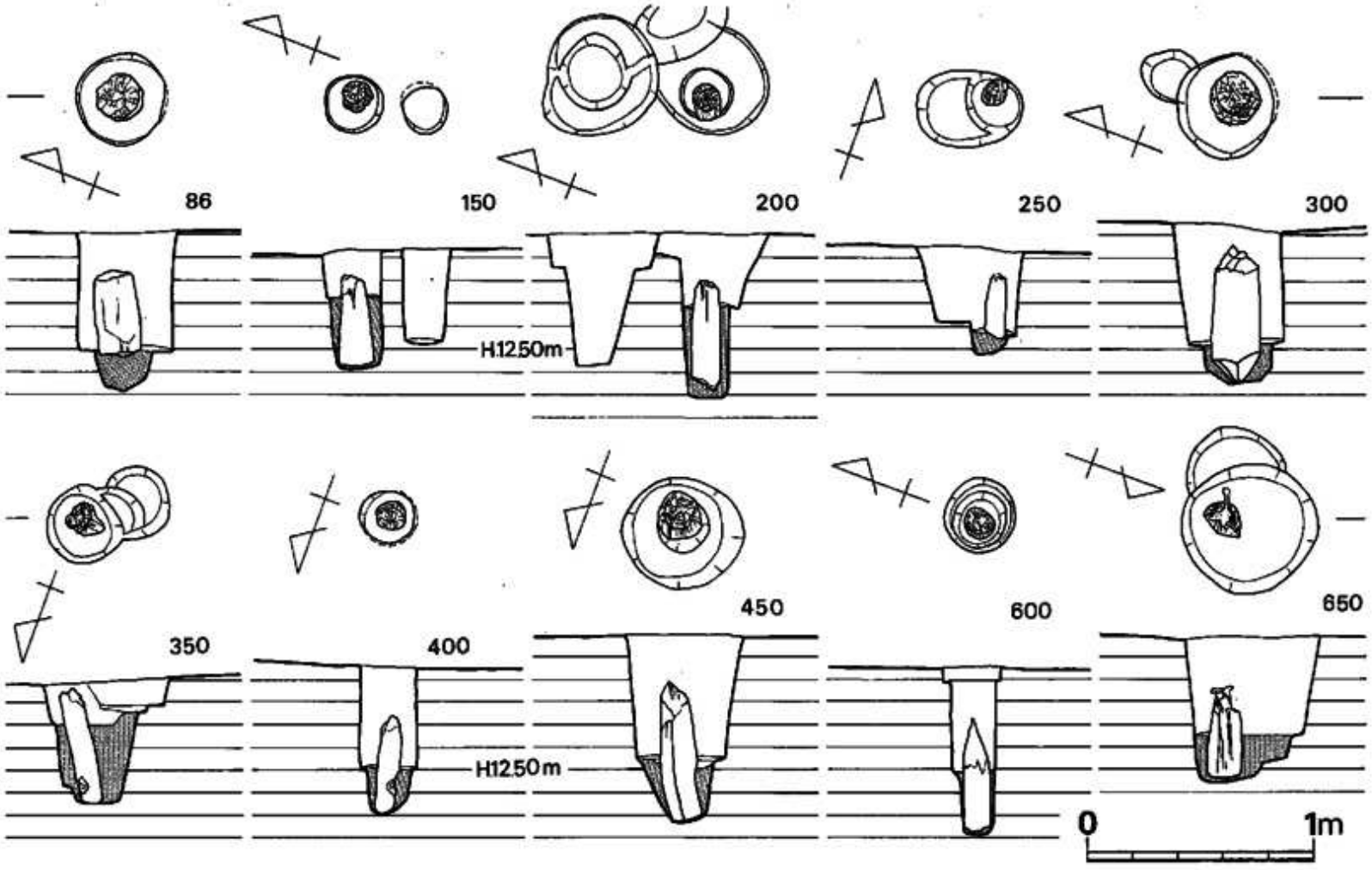
ＳＢ008号の西側で出土した。柱根先端標高12.325ｍで、柱86柱穴底・柱300先端・柱350先端等の標高と近似する。前出柱86柱穴のように当初柱穴底標高をほぼ同一にして掘ったとすると、位置的にも近いことも含めて、ＳＢ010号建物に近似した時期に埋置されたことも考えられよう。

柱根は現存長51.2cm、最大径部は裁断部で13.7×13.8cm、高さ41cmの部位での径10.7×12.4cmを測り、高さ29cmの部位で大きく屈折する。出土状態でのこの屈折方向は南北方向である。表は白木のままで、高さ3.5cmの部位は、表皮を除去する際の工具痕とも考えられる浅い切り込みが認められる。枝は５個認められ、削られているが、その先端からの見透し部位を年輪の中心と共に図示した。図上左上方のNo.３～No.５間には枝は認められない。前出柱根86の先端部の凹みとは逆に、先端の突出した部分には工具痕が認められず、周囲から多面錐形に裁断し、最後は人為的に押し倒した（あるいは押し折った）ことが指摘される。これが伐倒の際の折損痕とすれば、部材中心近くまで周囲を裁断しても、伐倒時に避難の必要を認めない程の立木であったことが指摘されよう。年輪数は24を数える。樹種はチョウセンゴヨウと分析されている。

柱300（図版37，第48・51図）

ＳＢ010号建物を構成する桁行方向の柱穴内から出土した。約40cmの掘り方のほぼ中央部を更に18cm掘り下げて埋置されていた。

柱根は現存長58.2cm、最大径部は高さ15.3cmで14.6×19.6cm、高さ40.3cmで約16.2×17.1cmを測る。木表は白木のままで、枝の削りは木表近くまで行っている。裁断部は大きく５面体を呈して先端まで至っている。図では、先端からのこの五つの稜線を実線で、高さ3.1cmでの横断面形をアミ部で重復させて示した。裁断面の工具痕幅は、上面で4.55cm、左面で4.3・4.35cmのものが認められ、約4.5cm前後の鉄斧を使用している。工具面は右面が最高で29を数え、下面が最小で９回を数える。年輪数は21を数える。樹種は、二葉マツと分析されている。

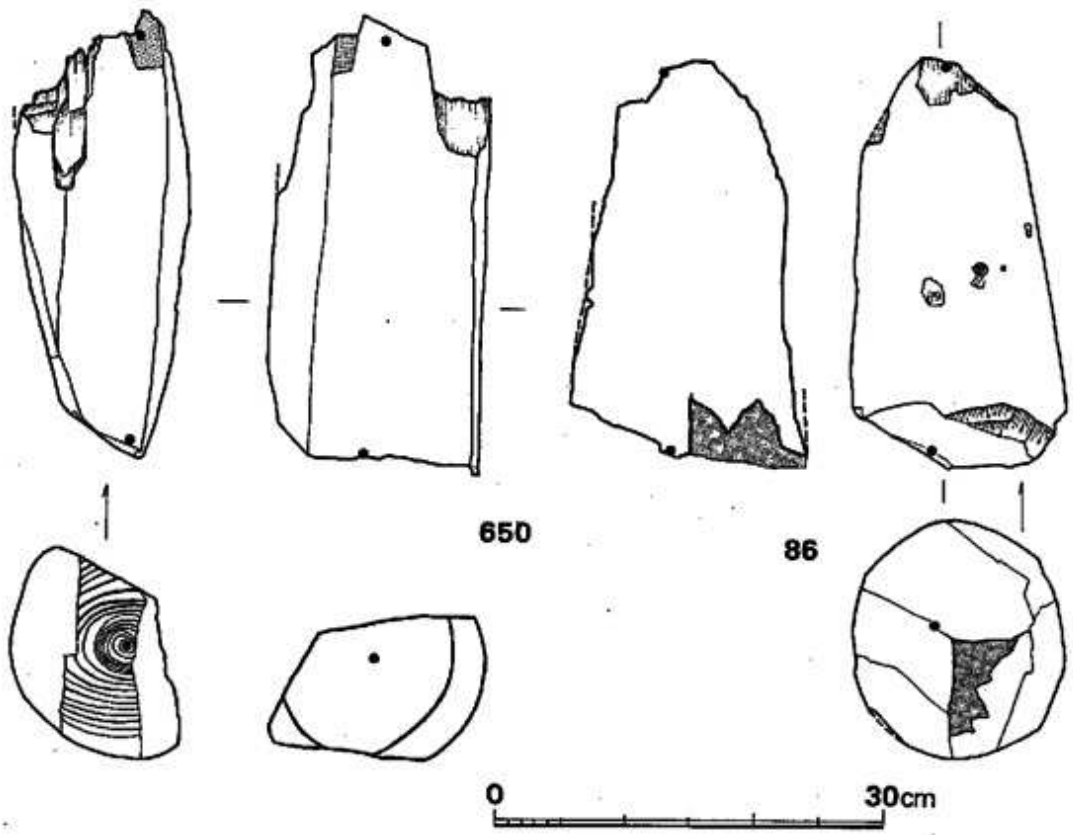


第48図　柱根出土状態実測図（縮尺1/30）

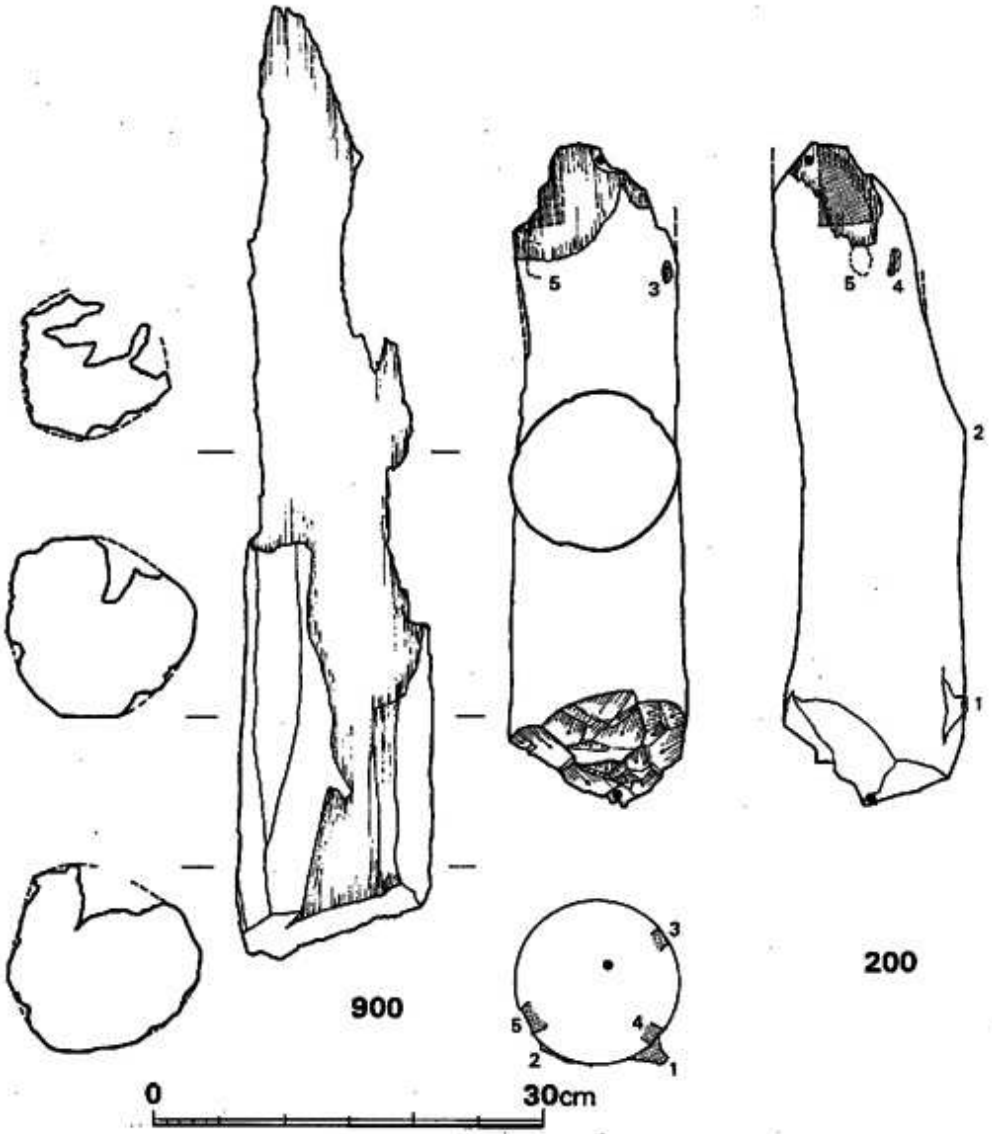
柱450（図版39，第48・51図）

ＳＢ004号建物を構成する中央部の梁行方向の柱穴から出土し、隣接する柱650と共に桁受け材として使用されたものである。二段に掘り込まれており、一段目の径約50cmの掘り方底部標高は12.55ｍで、柱650埋置のための一段目掘り方底部標高に等しい。前述のように、当初の掘り方はほぼ等しい深さで一段目まで掘られ、上部の組み合せの法量外を更に深く28cmまで掘り込んで埋置したものであろう。柱穴確認面から先端までの深さは83cmで当初は１ｍを越えたであろう。部材は白木のまま面取りをせずに使用しているが高さ20.5cmから32.4cmまでが半周のみ削られており、当初の掘り方から更に深める際の省力化を埋置部材の径の少量化で行ったものであろう。

柱根は現存長74.1cm、最大径部は削り面に近い白木のままの木表である高さ約36cmで径15.9×17.4cmを測る。一方向のみから裁断しており、裁断面は多面錐を呈さない。年輪数は15を数える。樹種は五葉マツと分析されている。



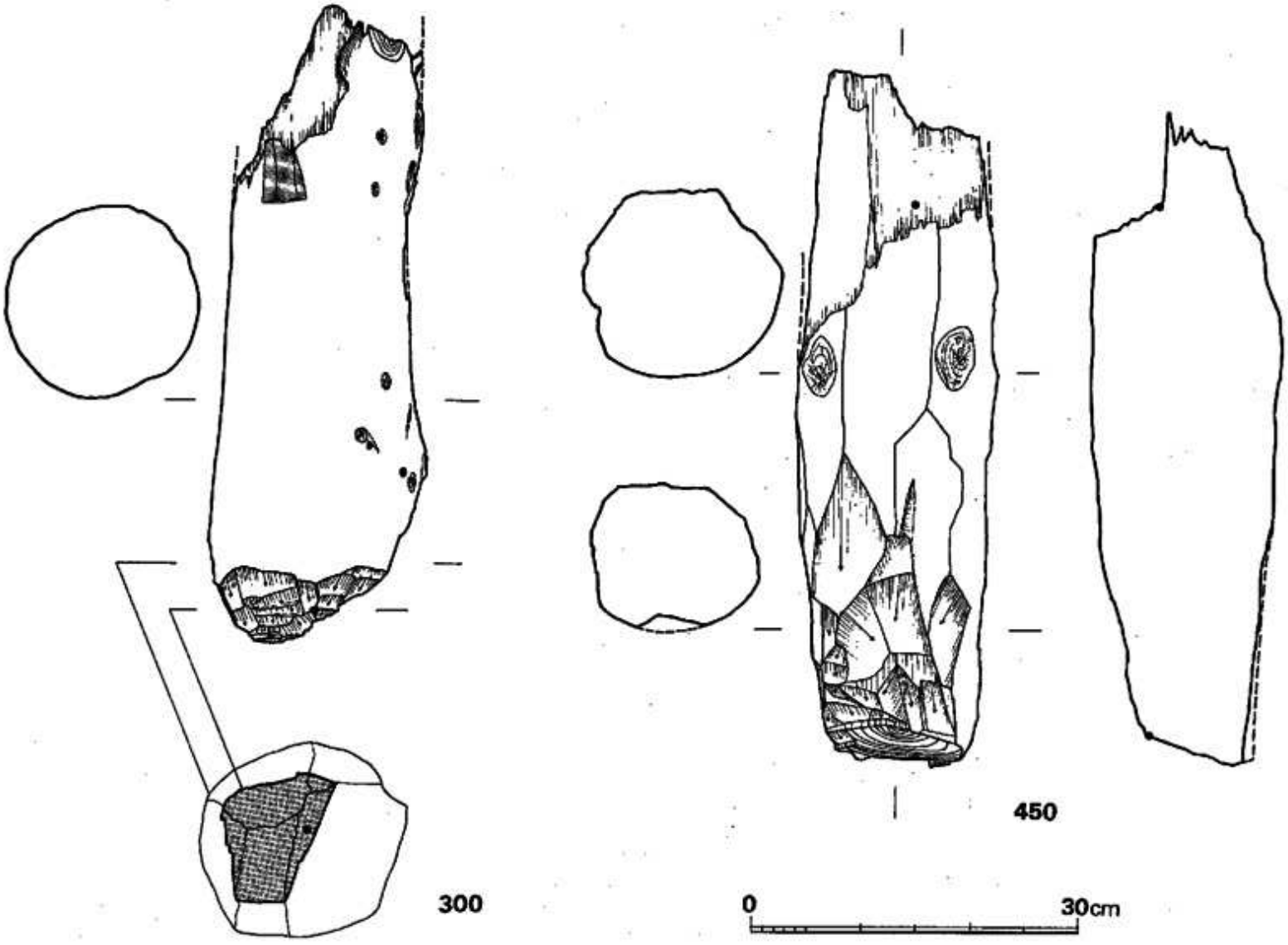
第49図　柱根実測図１（縮尺1/6）



第50図　柱根実測図２（縮尺1/6）

柱650（図版40，第48・49図）

ＳＢ010号建物を構成する中央部の柱穴から出土した。前述のように、径約60cmの一段目の掘り方を更に９cm掘り下げて埋置している。遺存部の全長にわたって約1/2周に削り面が認められるが、面取り部材として使用したものではなく、柱450と同様に埋置部のみを柱穴掘りの省力化の為に削ったものであろう。



第51図　柱根実測図３（縮尺1/6）

柱根は現存長34.4cm、最大径部は高さ約20cmで13.1×16.2cmを測る。削り面は、見透し図に示したように長方形に近い形状を呈し、工具の当りの深さはほぼ一定して丁寧に仕上げている。年輪数は23を数え、先端部見透図では18までを示し、高さ12.2cmでの断面図には15のみを図示している。樹種はチョウセンゴヨウと分析されている。

柱900（図版47，第50図）

ＳＢ007号建物を構成する東梁行方向の柱穴から出土した。出土時に既に現存高の上半部は木表近くが腐蝕し、断面図に示すような遺存状態で、他の柱材に比べて年輪が不明瞭で硬質であった。このため、作業員の足先が接触して転倒したほどであったが、分析の結果樹種はナツツバキとの結果を得た。柱穴の掘り方は、径の小さい二段目の掘りが約50cmと深く、一段目の床面は傾斜して二段目の掘り方に移行するなど、他の建物群の柱根の埋置状態とは明らかに異なっていた。時期的差位が部材の埋置の状態からも認められる例であろう。

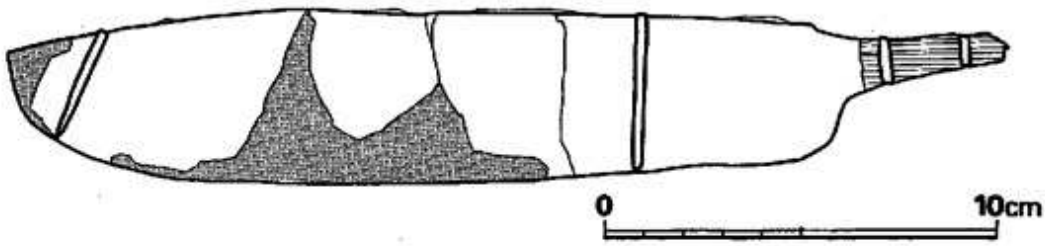
柱根は現存長73.2cmと出土例の中では一番長く遺存している。最大径は裁断部近くにあり、径14.6×14.8cmを測るが、高さ47cmでの径の遺存度や平面形から、当初からほぼ直線的な器形を有していたものと思われる。裁断は一方向のみからなされている。

出土柱根は以上の５例の他にも多数出土したが、このうち樹種の分析が試みられたものは半数の約20例である。出土状態は上述の５例と類似するが、１号竪穴住居内の位置で出土した柱350（現存長54.8cm）のものは、他の柱根と異なり、径が8.1×10.4cmと小さい。先端から約14cm、裁断部から約５cmの高さの両側から、深さ約２cmの深さで切り込みが認められる。建物の柱部材とは異なった用途の木根であろうか。なお、柱穴は黄灰褐色粘質土層中から、灰色細砂層にかけて掘り込まれ、柱穴埋土は灰褐色粘質土で、柱根の腐蝕消失部の柱痕は灰色砂混り灰褐色粘質土で検出することができた。木根先端部と掘り方床面との間および柱600の例のように柱穴側壁面との間隙の小さなものには灰色粘質土が認められた。

ｆ．鉄・青銅製品

包丁（図版34，第52図）

ＳＤ006溝から出土した。出土時には木製把片が付着していた。保存修復処理後の写真・実測図で示す。アミ部は復原材である。茎に目釘孔はなく、厚さ0.3cmを測り、関はシャープでない。背は若干内湾気味で、身最大幅4.2cm、厚さ0.3cm、全長25.4cmを測る。



第52図　包丁実測図（縮尺1/2）

銅銭（図版34，第53図）

ＳＤ004溝内の床面を覆う細砂層から出土した。明の洪武年間（1368～1398年）に鋳造されたといわれる「洪武通寶」で、外径22.35×22.40㎜を測り、無背である。ＳＤ004の上限を知ると共に、他の関連したＳＤ002およびＳＢ004・ＳＢ010の時期を検討する資料の一例でもあろう。

管状青銅製品（図版34，第53図）

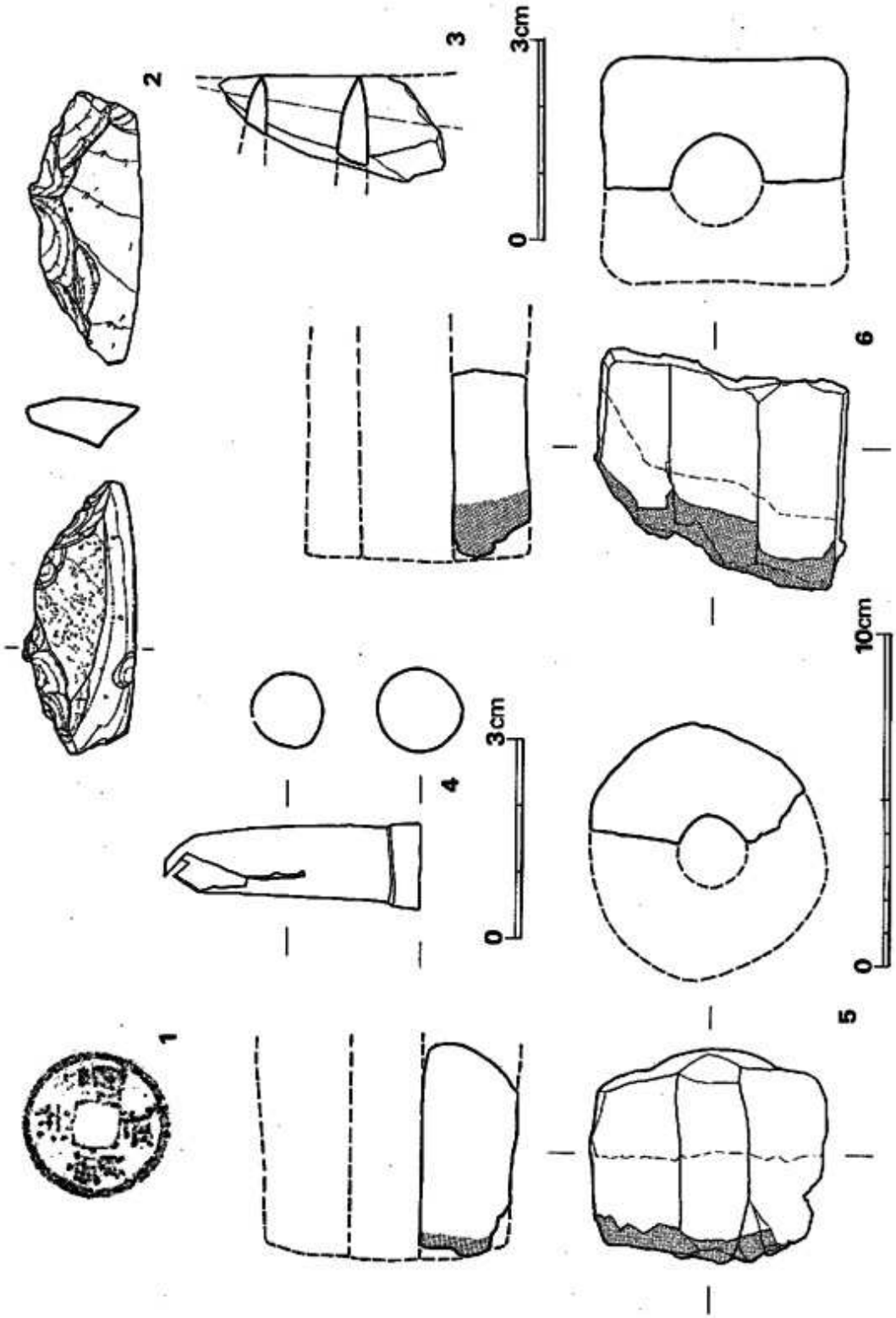
ＳＤ002溝内から出土した。管状をなし、最大部外径12.55×12.60㎜・同厚0.85～0.9㎜を測り、若干細くなる先端の欠損部厚は0.30㎜とやや薄手である。現存長は38.1㎜を測る。

g．土製品

鞴羽口（図版34，第53図）

5はＳＤ002溝内から出土した。断面部位での復原外径は7.7㎝・同内径は2.1㎝である。端部は暗青灰色に溶解し、先端から約2.5㎝の間は淡橙灰色に熱変する。細砂粒に1.5～2.0㎜程の石英砂を若干含んだ胎土で、淡灰褐色を呈する。

6はＳＤ004溝内から出土した。断面形は最大外径6.8㎝の隅丸正方形を呈し、中央部は若干凹み外径2.8㎝を測る。孔径は2.7㎝を測り、端部は暗青灰色に溶解し、先端から約3.0㎝の間は赤褐色に熱変する。粘土に砂粒を若干含み、褐色を呈し、先端に向けて細くならず、丁寧にナデを施し凹凸のない仕上げをしている。



第53図　輪羽口（縮尺1/2）・銅製品（縮尺1/1）・石器（縮尺1/1，1/2）
実測図，銅銭　拓影（縮尺1/1）

h．自然遺物　（図版48）

一括して検出・採集された貝類があり、同定の結果、

腹足類　ひめたにし　*Sinotaia histrica*（GOULD）238個体

やまきさご　*Waldemaria japonica*（A. ADAMS）　3個体

の2種、241個体であった。

ひめたにしは、殻高2.8cm・殻径2.0cm程度の小ぶりのものから殻高4.5cm・殻径3.3cm程度の大きさのものまであるが、殻高3.0～3.5cm程度のものが多い。河川・池沼等に生棲する。またやまきさごは、殻高・殻径共に6㎜前後で、落葉の間等にも生棲するのでまぎれ込んだものであろう。ひめたにしは、蓋が全くみられないことからみて、食用に供された後廃棄されたものと思われる。

Ⅲ．自然科学的調査

1．波多江遺跡から出土した木製遺物の樹種同定

九州大学　農学部
林　　弘也
松本　　勗

波多江遺跡では家屋跡とみられる多数の柱穴が発掘され、これらの柱穴から出土した木製遺物（柱根20点、用途不明木器２点）の樹種同定をおこなったので結果をとりまとめた。

Ⅰ　資料の概要

1．遺　跡　名　　波多江遺跡
2．所　在　地　　福岡県糸島郡前原町波多江
3．遺跡の年代　　平安時代と戦国時代後期
4．資料点数および用途

柱　根	20点
加工品	2点
計	22点

Ⅱ　樹種同定の方法

各資料から木材の３断面（横断面、放射断面、接線断面）について厚さ10－20μmの薄切片を各々数枚ずつ採取した。この薄切片を封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡で木材組織を観察した。

観察された組織学上の特徴に基づき樹種を検索すると同時に樹種名のはっきりした標本プレパラートと対照して樹種を同定した。

樹種同定の基準とした主要な点を列記すると次の諸点である。

針葉樹材では、1．仮道管の有縁壁孔の配列、らせん肥厚の有無。2．樹脂道の有無、樹脂道がある場合にはその分布状態。3．放射組織の細胞幅、細胞高、放射柔細胞の水平壁の肥厚。4．放射仮道管の有無、放射仮道管がある場合にはらせん肥厚や鋸歯状突起の有無。5．木部柔細胞の有無などである。

広葉樹材では、1．管孔の配列型、大きさ、分布数およびチロースの有無、複合管孔の有無。2．道管要素についてはせん孔の形態、らせん肥厚の有無。3．木部繊維のらせん肥厚の有無。4．放射組織の幅、高さおよび放射柔細胞の形。5．放射柔細胞の結晶の有無、道管要素と放射柔細胞との間の壁孔の形。6．軸方向柔組織の配列および結晶を含む柔細胞の有無。7．垂直樹脂道の有無。8．異形細胞の有無などである。このほかに早晩材の移行の状態も観察して参考にした。

Ⅲ　同定結果

同定された樹種は針葉樹が3樹種12点と広葉樹が8樹種10点であった。同定結果は資料番号、用途などとともにTable Ⅰに表示した。各資料の顕微鏡写真はPhoto. 1－22に示した。

各資料に認められた組織学上の特徴を同定した樹種ごとに簡単に述べる。

1）二葉マツ　*Pinus spp.*

資料　61，300，

横断面では垂直樹脂道が散在しており、垂直樹脂道は薄い壁をもったエピセリウム細胞にかこまれている。しかし樹脂道が破損され、周囲にある仮道管の一部とともに脱落し、大きな空隙となっている例がかなり多く認められた。

接線断面では放射組織に単列放射組織と紡錘形放射組織があり、紡錘形放射組織にはなかに水平樹脂道が含まれている。

放射断面では放射仮道管が放射組織の上下端部に1－3列配列しており、放射仮道管の内壁には鋸歯状突起がある。放射柔細胞と仮道管の間の壁孔は窓状壁孔であり、1分野に1－2個ある。放射柔細胞の水平壁の肥厚は細胞壁の劣化のため確認できなかったが、放射仮道管、分野壁孔などから二葉マツと同定した。日本産の二葉マツにはアカマツとクロマツがあるが、木部の検鏡だけでは両樹種を識別できないためまとめて〝二葉マツ〟として分類した。

Table I 樹 種 名 表

整理番号	用途	和名	学名	写真番号
61	柱 (丸)	二葉マツ	*Pinus spp.*	1
86	柱 (丸)	五葉マツ	*Pinus spp.*	2
107	柱(五面削り)	カシ	*Cyclobalanopsis spp.*	3
150	柱	五葉マツ	*Pinus spp.*	4
200	柱 (丸)	チョウセンゴヨウ	*Pinus koraiensis*	5
210		五葉マツ	*Pinus spp.*	6
250	柱 (丸)	五葉マツ	*Pinus spp.*	7
300	柱 (丸)	二葉マツ	*Pinus spp.*	8
350	柱 (丸)	アサガラ	*Pterostyrax spp.*	9
400	柱 (丸)	チョウセンゴヨウ	*Pinus koraiensis*	10
450	柱 (丸)	五葉マツ	*Pinus spp.*	11
500	柱	五葉マツ	*Pinus spp.*	12
600	柱(四面削り)	イスノキ	*Distylium racemosum*	13
650	柱 (丸)	チョウセンゴヨウ	*Pinus koraiensis*	14
700	柱 (丸)	カシ	*Cyclobalanopsis spp.*	15
750	柱 (丸)	イヌブナ	*Fagus japonica*	16
800	柱 (丸)	サクラ	*Prunus spp.*	17
850	柱 (丸)	クスノキ	*Cinnamomum camphora*	18
900	柱 (丸)	ナツツバキ	*Stewartia spp.*	19
柱穴No.1－1	用途不明木器	カシ	*Cyclobalanopsis spp.*	20
柱穴No.1－2	用途不明木器	クワ	*Morus spp.*	21
No.3	柱	五葉マツ	*Pinus spp.*	22

2）五葉マツ　*Pinus spp.*

資料　86，150，210，250，450，500，No.3，

横断面では垂直樹脂道が散在する。しかし垂直樹脂道のなかには周囲の仮道管とともに脱落し、空隙となっている例もあった。

放射断面では放射組織に放射仮道管があり、内壁は平担であった。放射柔細胞と仮道管の間にある壁孔は窓状壁孔であり、1分野に1－2個の壁孔がある。放射柔細胞の水平壁には壁孔がある。

五葉マツにはチョウセンゴヨウ、アマミゴヨウ、ヒメコマツなどがあるが、資料の劣化が著しく、いずれの樹種か同定できなかったので、"五葉マツ"として分類した。

3）チョウセンゴヨウ　*Pinus koraiensis*

資料　200，400，650，

組織学上の特徴は上記した五葉マツとほぼ同じである。放射断面では放射柔細胞の水平壁が薄く、末端壁がわん曲することが多い。

接線断面では、紡錘形放射組織中に水平樹脂道がある。

4）イヌブナ　*Fagus japonica*

資料　750，

横断面には散在状に分布する管孔があり、散孔材である。管孔の直径は100－150μmあり、複合する管孔も認められた。管孔の分布数は100－120個／mm^2であった。軸方向柔組織は資料の劣化が著しいために認められなかった。

放射断面では、放射組織は方形細胞および平伏細胞からなる異性放射組織型であることが認められた。道管要素のせん孔は単せん孔が多いが、階段状せん孔も認められた。道管要素の壁孔は小型であり、並列状または交互状に配列している。

接線断面では放射組織は多列であり、24細胞幅にも達する多列放射組織が認められた。

5）カシ　*Cyclobalanopsis spp.*

資料　107，700，柱穴No.1－1，

横断面では管孔が放射方向に配列する放射孔材である。管孔の直径は100－200μmあり、チロースが多数認められる。軸方向柔組織は独立柔組織であり、散在状および帯状に分布し、顕著に認められる。

放射断面では平伏細胞からなる同性放射組織型の放射組織が認められる。放射柔細胞と道管要素の間の壁孔は棚状に配列する大型の壁孔である。軸方向柔組織は柔細胞ストランドをなし、結晶を含んだ多室柔細胞および結晶細胞がある。

接線断面では放射組織は単列のものが多数あるが、多列放射組織も認められる。道管要素のせん孔は単せん孔であり、壁には小型の壁孔が交互状に配列している。多列放射組織中には結晶細胞がある。

カシにはアカガシ、イチイガシ、ハナガガシ、ツクバネガシなど数種類あるが、本資料はいずれの資料ともかなり劣化しているために十分に同定できなかったので、まとめて〝カシ〟として分類した。

6）クワ　*Morus spp.*

資料　柱穴No.1－2，

横断面では管孔が年輪界にそって2－3列の幅で環状に配列する環孔材である。管孔の直径は100－200μmあり、チロースが認められる。4個以下の管孔が複合した複合管孔があるが、複合の方向には特定の傾向はない。軸方向柔組織は随伴柔組織であり、連合翼状又は翼状に分布し、顕著に認められる。

放射断面では放射組織が方形細胞および平伏細胞からなっており、異性放射組織型である。放射組織には結晶細胞がある。放射柔細胞と道管要素の間の壁孔は大きさは中型であり、形は一定していない。

接線断面では1－6細胞幅の単・多列放射組織が認められる。道管要素のせん孔は単せん孔であり、壁には小型の壁孔が交互状に配列している。

管孔、柔細胞の形態および分布状態などからヤマグワに類似したクワ属の樹種であり、〝クワ〟として分類した。

7）クスノキ　*Cinnamomum camphora*

資料　850，

横断面では管孔が散在状に分布する散孔材である。管孔の直径は70－250μmあり、早材部にある管孔の直径は多少大きい傾向にある。２－４個の管孔が放射方向に複合する複合管孔がある。軸方向柔組織は随伴柔組織であり、顕著に認められる。

放射断面では放射組織が方形細胞と平伏細胞からなり、異性放射組織型である。放射柔細胞と道管要素の間にある壁孔は中型の大きさであり、偏平状の丸型やまぶた状である。油細胞が多数認められる。道管要素のせん孔は単せん孔であり、壁には小型の壁孔が交互状に配列する。

8）イスノキ　*Distylium racemosum*

資料　600，

横断面では管孔が散在状にあり、散孔材である。複合管孔があるが、複合する管孔数はほぼ２個である。管孔の直径は小さく、80μm以下である。軸方向柔組織は独立柔組織であり、接線状または短接線状に分布する。

放射断面では放射組織は異性放射組織型であり、放射組織中には結晶細胞がある。道管要素のせん孔は多孔せん孔である。

接線断面では放射組織は１－２細胞幅の単・複列放射組織である。軸方向柔組織には結晶細胞がストランド状に配列するのが認められた。

9）サクラ　*Prunus spp.*

資料　800，

横断面では管孔が散在状に分布する散孔材である。管孔の直径は50－100μmの大きさである。放射方向に２－３個の管孔が複合する複合管孔があるが、あまり多い数ではない。軸方向柔組織は随伴柔組織であるが、顕著には認められない。

放射断面では放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。放射柔細胞と道管要素の間の壁孔は小さく、道管要素の壁には小型の壁孔が交互状に配列している。

接線断面では放射組織は１－４細胞幅の単・多列放射組織である。道管要素のせん孔は単せ

ん孔である。

放射組織、軸方向柔組織、道管などからヤマザクラに類似したサクラ属の樹種と同定し“サクラ”として分類した。

10) ナツツバキ　*Stewartia spp.*

資料　900，

横断面では管孔が散在状に分布する散孔材である。2個の管孔が複合した複合管孔がある。軸方向柔組織は独立柔組織であり、散在状および短接線状に分布する。これらの柔組織は比較的顕著に認められる。

放射断面では放射組織が方形細胞、直立細胞、平伏細胞からなっており、異性放射組織型である。軸方向柔細胞がストランド状に配列するのが認められた。放射柔細胞と道管要素の間の壁孔は中型の大きさであり、階段状を示すことがある。

接線断面では放射組織が2－4細胞幅であることが認められ、道管要素のせん孔は階段状せん孔である。道管要素の壁孔も階段状に配列する壁孔である。

11) アサガラ　*Pterostyrax spp.*

資料　350，

横断面では管孔が散在状に配列し、管孔の直径は70－130μmである。軸方向柔組織はあまり数多くは認められなかった。

放射断面では放射組織は方形細胞と平伏細胞からなる異性放射組織型である。道管要素のせん孔は多孔せん孔であり、壁には小さい壁孔が交互状または並列状に配列するのが認められた。

接線断面では放射組織は1－3細胞幅であり、軸方向柔細胞がストランド状に配列するのが認められた。

Ⅳ　柱材に用いられた木材

本遺跡から出土した柱根は60%（12点）が針葉樹材であり、残りの40%（8点）が広葉樹材であった。針葉樹材は二葉マツと五葉マツの別はあるが、すべてマツ材であった。広葉樹材は種々の木材が使用されており、特定の樹種の木材が多用されているような傾向はない。

Table II　柱の形状と使用樹種

用途	形状	樹種名	資料番号	資料数	計
柱	角柱	カシ	107	1	
		イスノキ	600	1	2
	円柱	二葉マツ	61　300	2	
		五葉マツ	86　150　210　250　450　500　No.3	7	
		チョウセンゴヨウ	200　400　650	3	12
		イヌブナ	750	1	
		カシ	700	1	
		クスノキ	850	1	
		サクラ	800	1	
		ナツツバキ	900	1	
		アサガラ	350	1	6

出土柱根の形状は種々であるが、推定された柱の形状が角柱とされたもの2点、円柱とされたもの18点である。これら柱の90%が円柱であり、遺跡の柱の大部分は円柱であっただろうと推定される。さらに柱根に髄があったものが10点あるが、このなかには資料107の角柱も含まれている。このほかに資料の破損のために髄自体は残っていなかったが、生長輪（年輪）の状態から推定して髄を含んでいたと思われる柱根が相当数あり、大部分の柱根が髄をもった柱根であったものと思われる。以上のようなことから推定される柱は根もとの直径が10－18cmの丸太であり、角柱といっても丸太に多少の表面的な加工をした程度のものと推定される。出土柱根の形状、樹種は Table II にまとめて表示した。

柱材について多少検討すると、柱に使われた樹種は時代や建築物の種類によって変遷している。例えば、鎌倉・江戸時代の寺院ではヒノキ材が最も多く用いられ、そのほかにはコウヤマキ材、スギ材やわずかであるが二葉マツ材などが使われているが、針葉樹材に限られている。[1] 安土桃山時代から江戸時代初期の間に建築された農家ではマツ材、ツガ材、スギ材などの針葉樹材とケヤキ材、クリ材などの広葉樹材が使われている。[2] 農家では、針葉樹材が多く使われているが、針葉樹材と広葉樹材が併用されている。しかし使われた木材の樹種は限られている。

本遺跡は平安時代と戦国時代の遺跡であるが、戦国時代の柱根は民家のものであろうと推定されているので、ほぼ同時代に建築された農家の例と対照すると、本遺跡の柱根の66%がマツ材であり、農家の場合と同じく針葉樹材を多く用いる傾向を示している。広葉樹材では、農家の場合にはケヤキ材とクリ材だけが用いられ、耐朽性のよい樹種を選択して使用していたものと思われる。しかし本遺跡では、出土柱根数が少ないことも影響していると思われるが、広葉

Table Ⅲ　柱の使用樹種

家屋	使用樹種名	資料番号
Ⅰ	五葉マツ	450, 650
Ⅱ	二葉マツ 五葉マツ	86, 300
Ⅲ	クスノキ ナツツバキ	850, 900
Ⅳ	二葉マツ	61

樹には数多く用いられた特定の樹種がないこと、さらにイヌブナ材のように耐朽性が悪い材も使用されていることなどから広葉樹の樹種の選択はあまり厳格なものではなかったであろうと思われる。

しかし本遺跡の柱根は散在する多数の柱穴から出土した柱根であったので、これを家屋ごとに整理して考えることも必要であろう。

柱穴の配置からは総数10戸の家屋が推定されたが、柱根が出土した家屋は4戸であった[※1]。この4戸の家屋の配置および柱根が出土した柱根の配置[※1]をFig 1に示し、家屋ごとの柱根の樹種名はTable Ⅲに表示した。

※1 福岡県教育委員会の分析による。

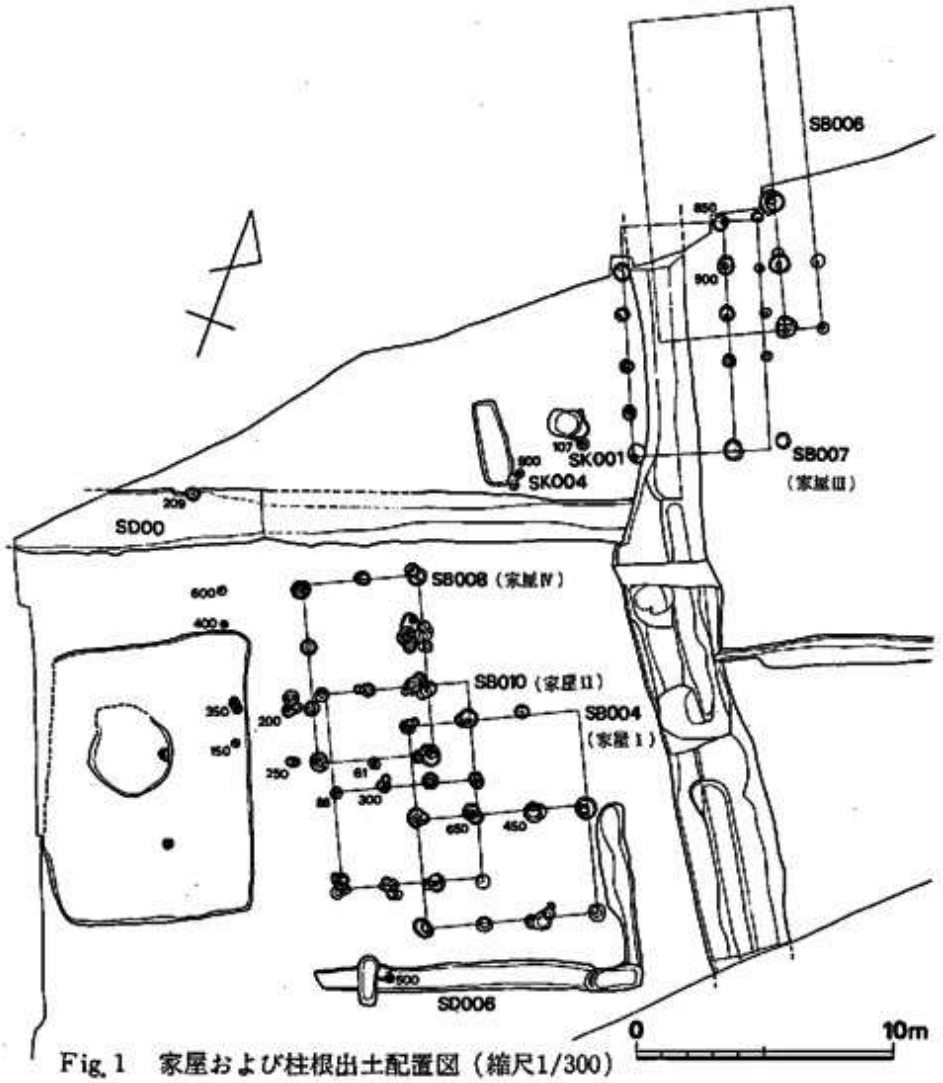


Fig. 1　家屋および柱根出土配置図（縮尺1/300）

家屋配置図の家屋Ⅰ、Ⅱ、Ⅳは類似した柱穴配置を示し、戦国時代の建築であろうとされている。同様な柱穴配置をもつ家屋はこのほかにも数戸分推定されており、当時の一般的な間どりの家屋であろうと考えられる。これに対し家屋Ⅲは長方形の柱穴配置を示し、平安時代前期の建築であろうとされている。

まず家屋Ⅰ、Ⅱ、Ⅳのグループと家屋Ⅲのグループに区分して考えることにする。

まず家屋Ⅰ（資料450、650）と家屋Ⅱ（資料86、300）、家屋Ⅳ（資料61）の柱根は全てマツ材であり、これらの家屋近くにあった柱根（資料200、250、500）も全てマツ材であった。このことは、ほぼ同じ時代（安土桃山時代から江戸時代初期）に建築された農家の柱材は針葉樹材、なかでも主としてマツ材を使用している事実[(2)]と一致する。これに対し家屋Ⅲ（資料850、900）は広葉樹材を使用しており、間どりばかりでなく、柱材の使用樹種も異なっている可能性が大きい。

柱に使用された材の樹種の点では、マツ材は広葉樹材のクスノキ材などと同じく耐朽性のよい針葉樹材である。さらに柱材としては長さが長く、元口と末口の直径がほぼ同じ大きさであるような通直な材がよいが、このような形態的な条件に合う材はマツ材では比較的容易に入手できるであろう。しかし枝が多い広葉樹ではこの条件に合う材は少なく、得られたとしても比較的長さの短い材しか得られないであろう。また小屋組や屋根の重量を支えるために柱には強さが必要であり、このために材の強さが大きいこととある程度直径の大きい材であることが要求される。この点でもマツ材は強さも大きく、大径の材も入手し易かったであろう。このように家屋の柱材としての適性では、広葉樹材に比較して、マツ材のような針葉樹材は一般によい材であるといえる。したがって家屋Ⅰ、Ⅱ、Ⅳがマツ材を柱に使っていたということは、家屋Ⅲに比較してしっかりした構造の家屋であっただろうと思われる。

このように考えてくると、戦国時代の一般の民家——本遺跡の家屋Ⅰ、Ⅱ、Ⅳのような間どりの家屋——はマツ材の柱を主に使っていたものと考えられる。一方平安時代前期の家屋Ⅲは広葉樹材を柱材として使っていたのであろう。

Ⅴ　本遺跡出土の五葉マツ、チョウセンゴヨウについて

これまで福岡市周辺から出土した弥生～古墳時代の木材片に、ヒメコマツあるいはゴヨウマツのいわゆる五葉マツがあったことはすでに報告したが、その産地を推定することは困難であった。

現在九州では中央山地の高地にわずかに自生しているにすぎない五葉マツが、戦国時代後期と推定される本遺跡家屋の柱根として多数出土したことは、当時背振山系の高地にも自生していたものと推定できそうである。

また、現在九州には全く自生していないチョウセンゴヨウと同定されたものが出土したことは、やはり背振山系の高地に当時自生していたものか、あるいは、朝鮮半島に多く自生していたものが運ばれてきたものかいずれかであろう。

農耕文化は自然の植生を破壊したといわれているが、それは今日ではわれわれの眼で確かめることができる。しかし朝鮮半島からわざわざ運ばれたものが、民家の柱材として使用されたとは考えにくい。多くの調査が必要であろう。

【参考文献】

(1) 鳴倉己三郎：奈良教育大学紀要（自然）、19（2）、111（1970）

(2) 多数の文献があるが、例えば

文化財建造物保存技術協会編：平山家住宅保存修理工事報告書、文化財建造物保存技術協会東京（1977）

文化財建造物保存技術協会編：長岡家住宅保存修理工事報告書、文化財建造物保存技術協会東京（1979）

Photo.1　　61　　柱　　二葉マツ

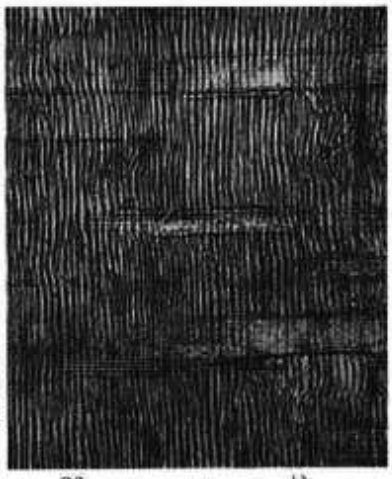


Photo.2　　86　　柱　　五葉マツ

横断面(30倍)	放射断面(30倍)	接線断面(72倍)
写真番号	試料番号　用途	樹種名

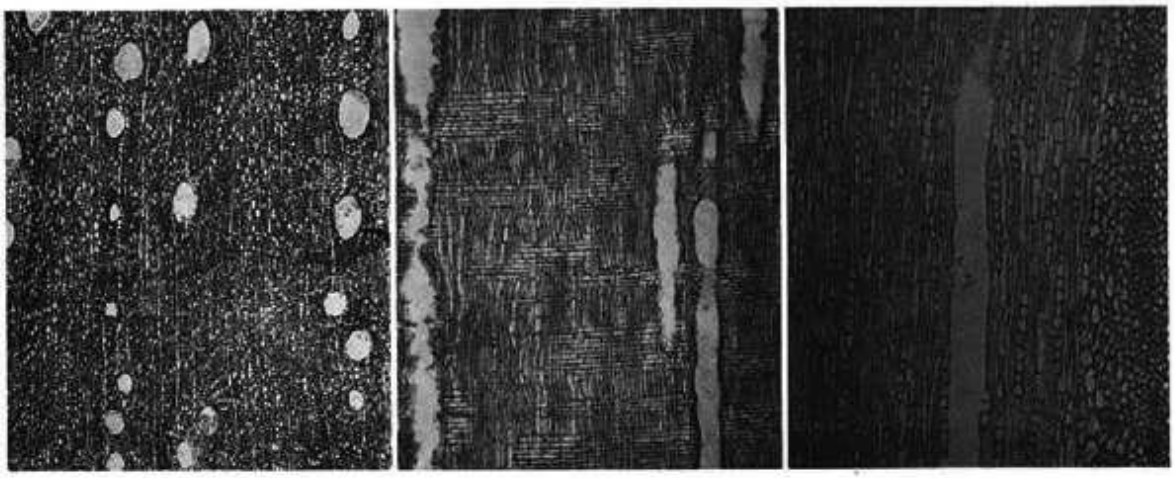


Photo.3　107　柱　カシ

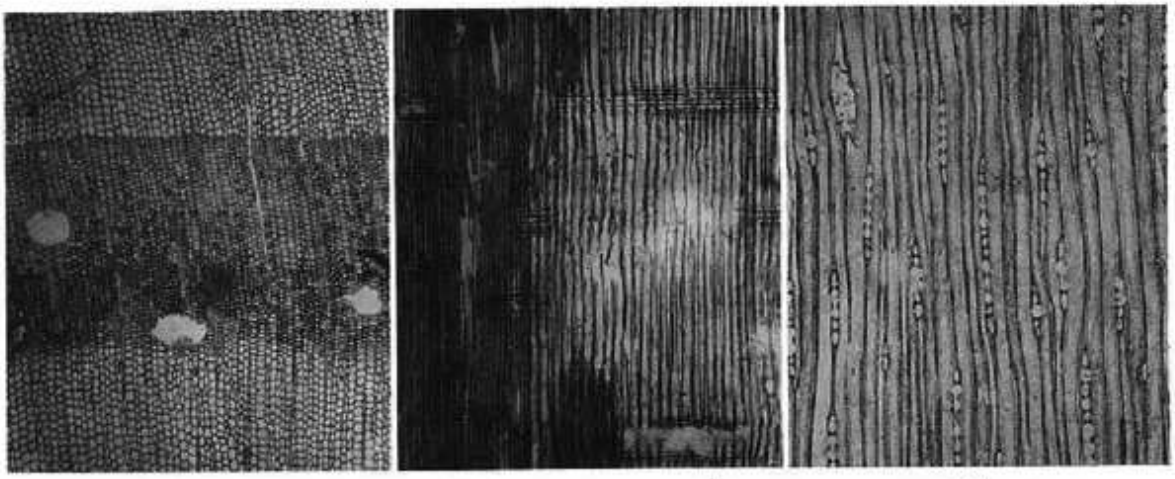


Photo.4　150　柱　五葉マツ

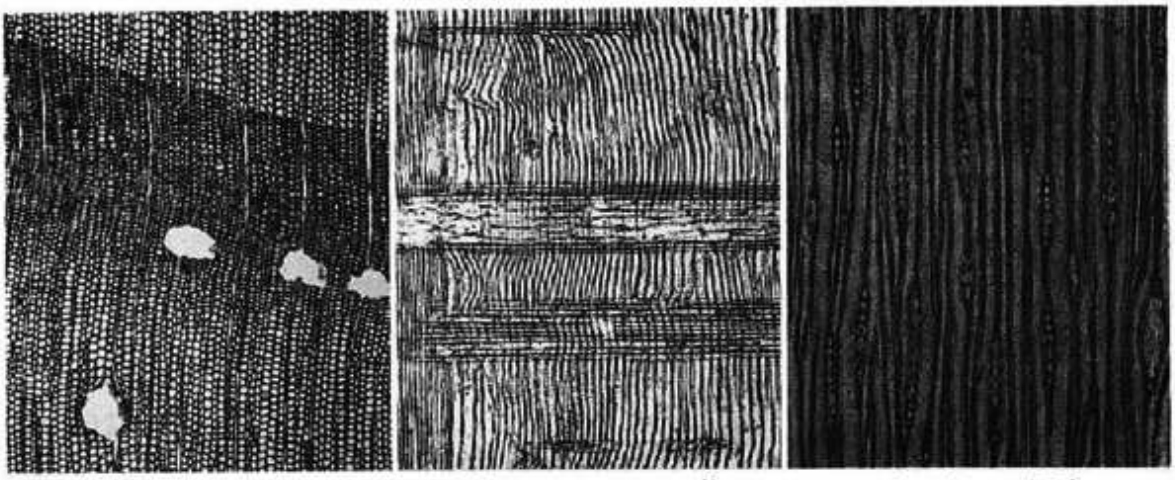


Photo.5　200　柱　チョウセンゴヨウ

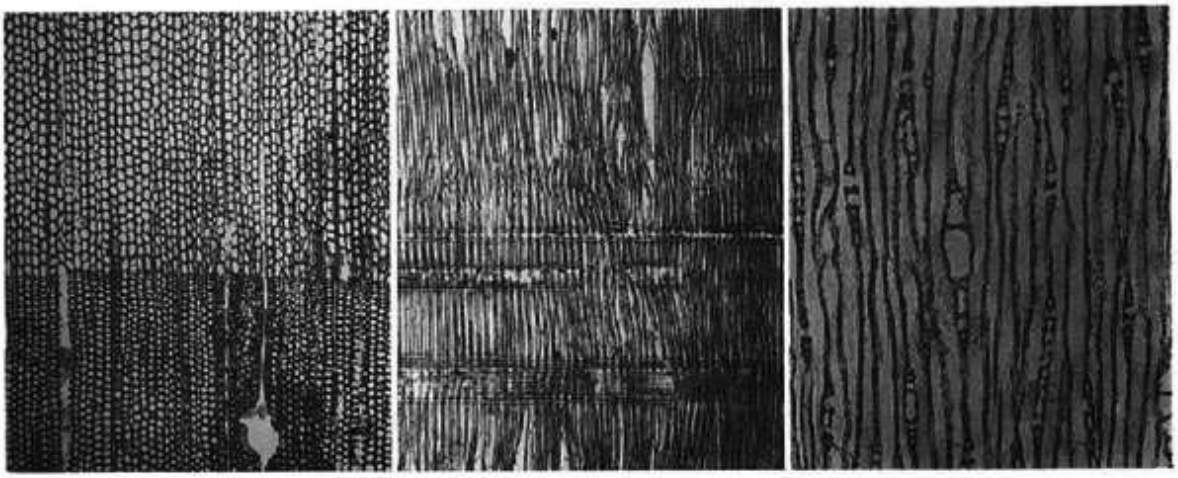


Photo.6　210　柱　五葉マツ

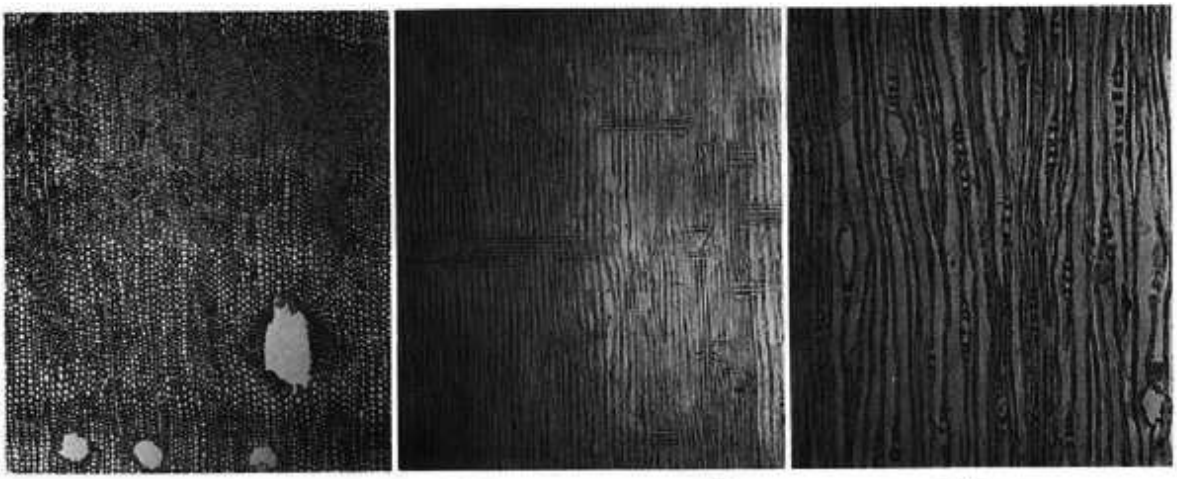


Photo.7　250　柱　五葉マツ

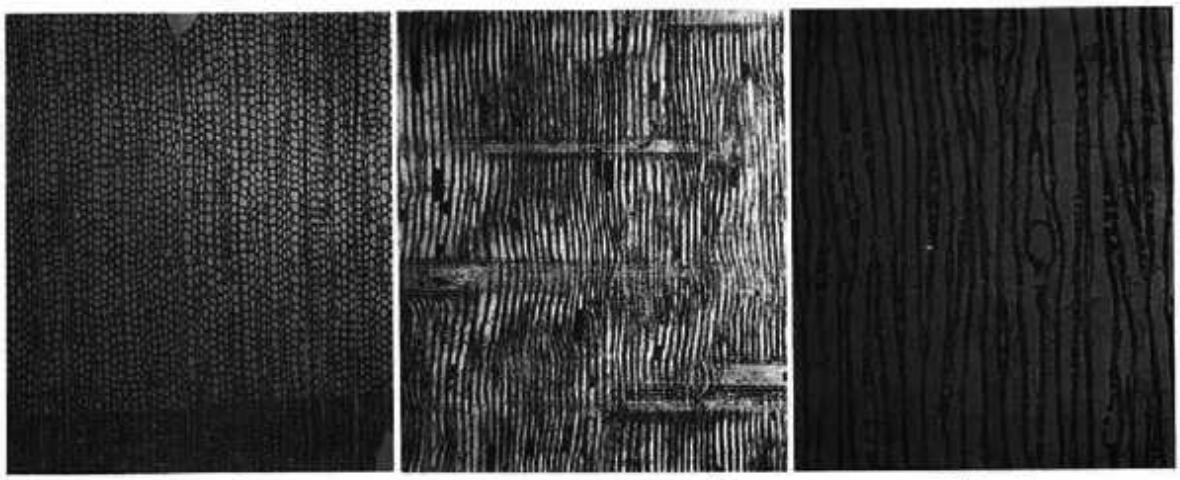


Photo.8　300　柱　二葉マツ

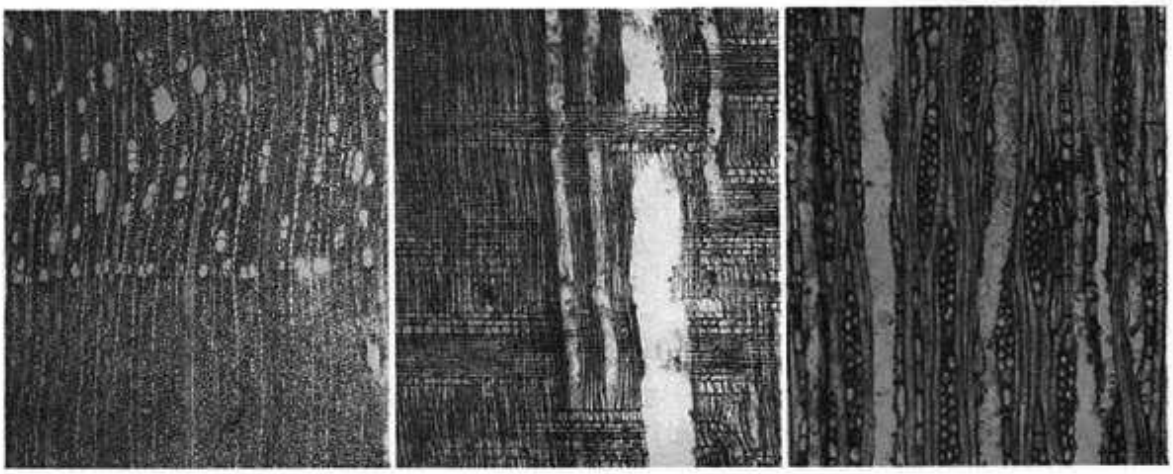


Photo.9　350　柱　アサガラ

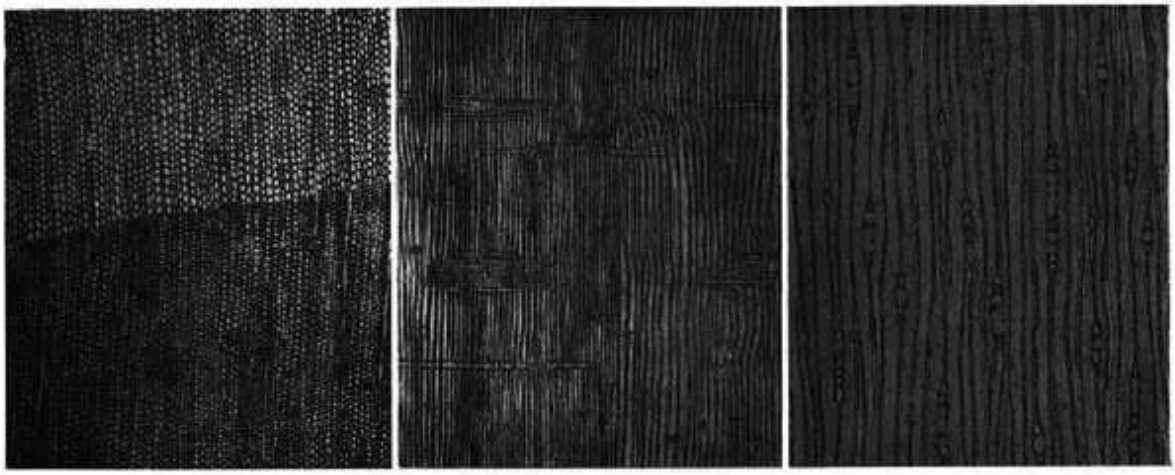


Photo.10　400　柱　チョウセンゴヨウ

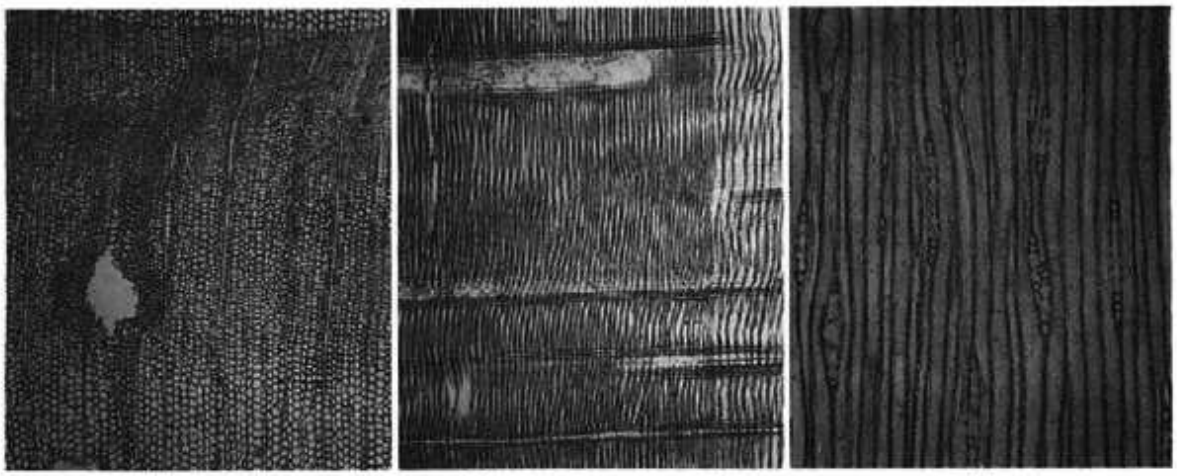


Photo.11　450　柱　五葉マツ

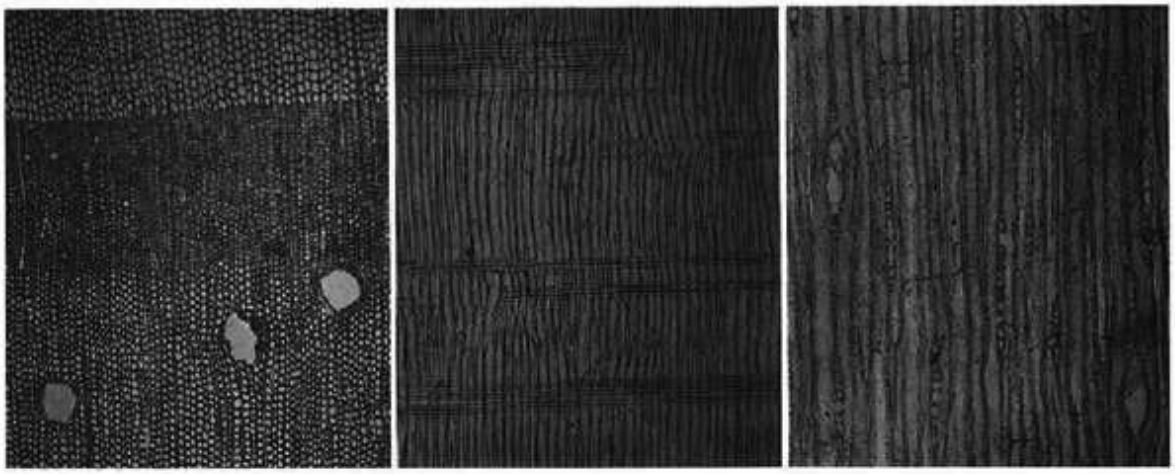


Photo.12　500　柱　五葉マツ

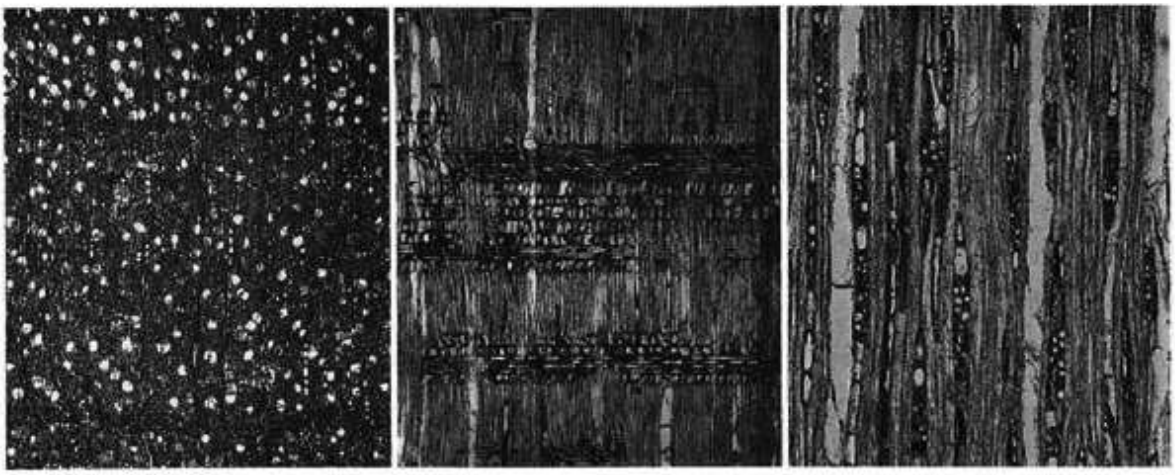


Photo.13　600　柱　イスノキ

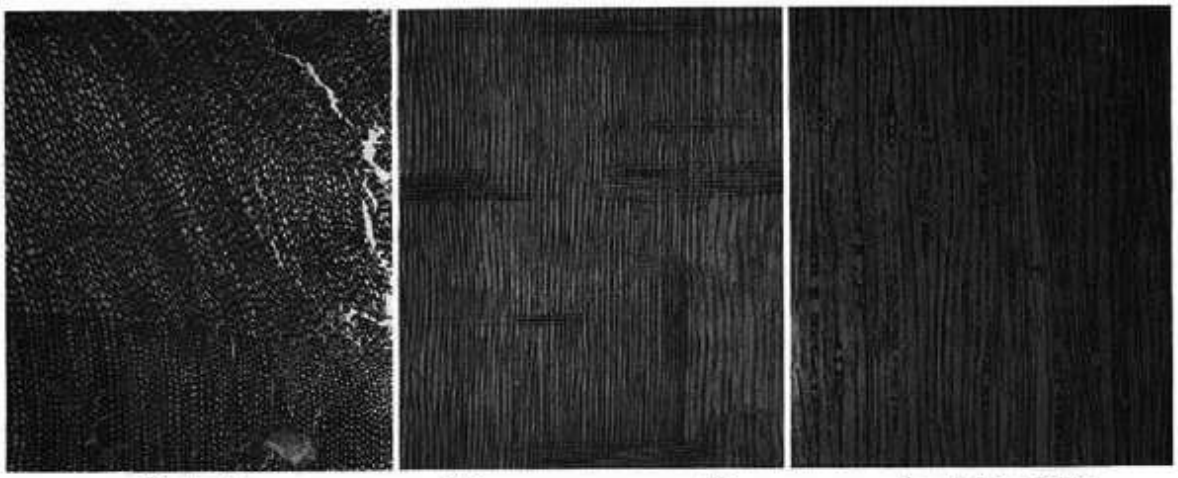


Photo.14　650　柱　チョウセンゴヨウ

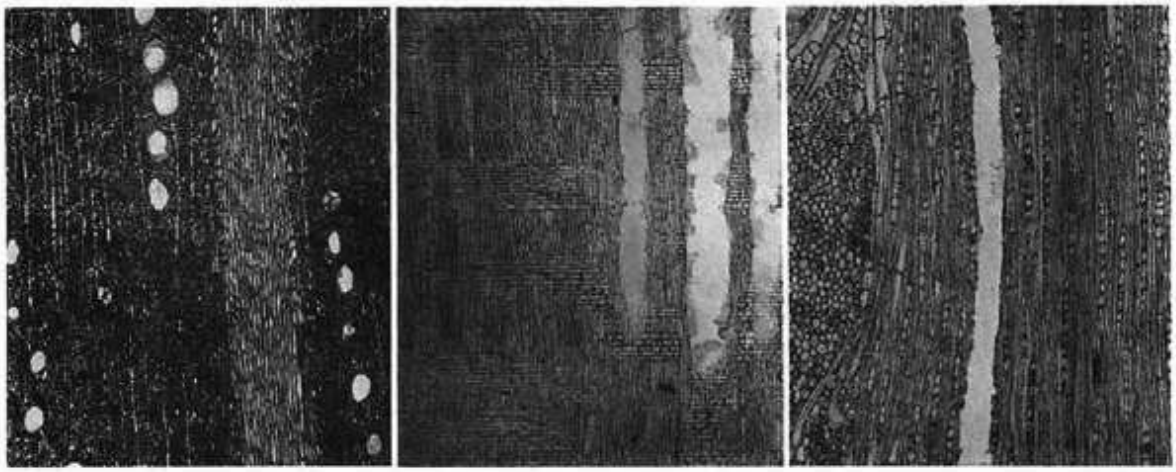


Photo.15　700　柱　カシ

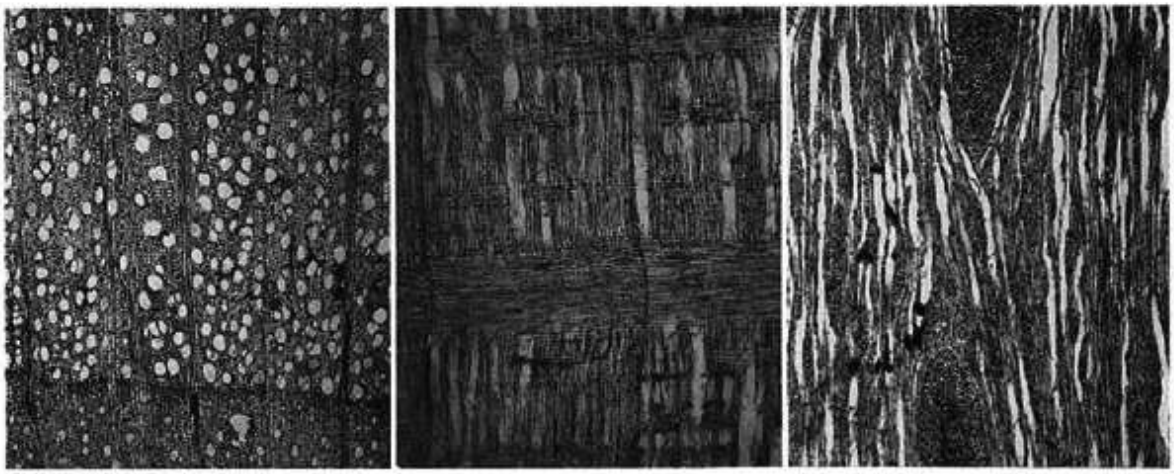


Photo.16　750　柱　イヌブナ

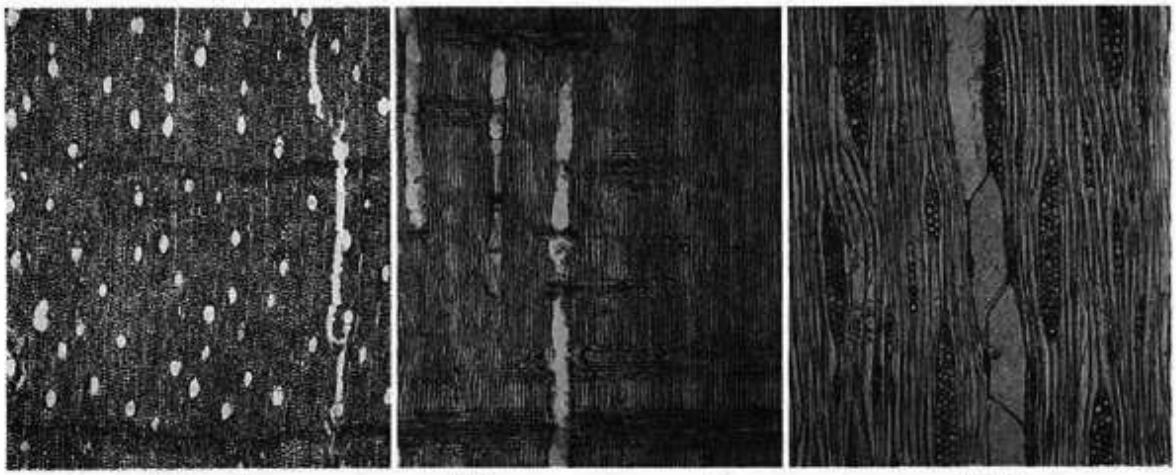


Photo.17　800　柱　サクラ

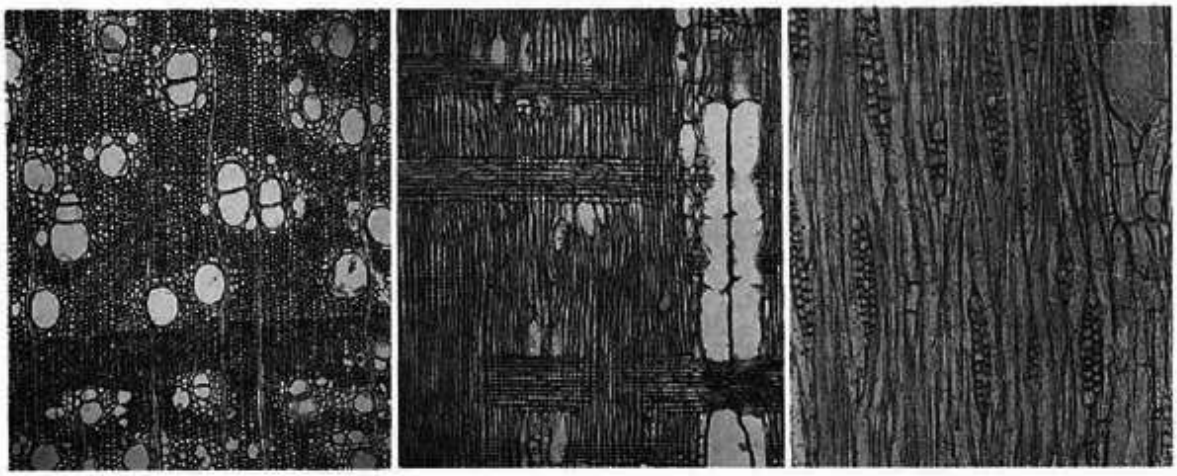


Photo.18　850　柱　クスノキ

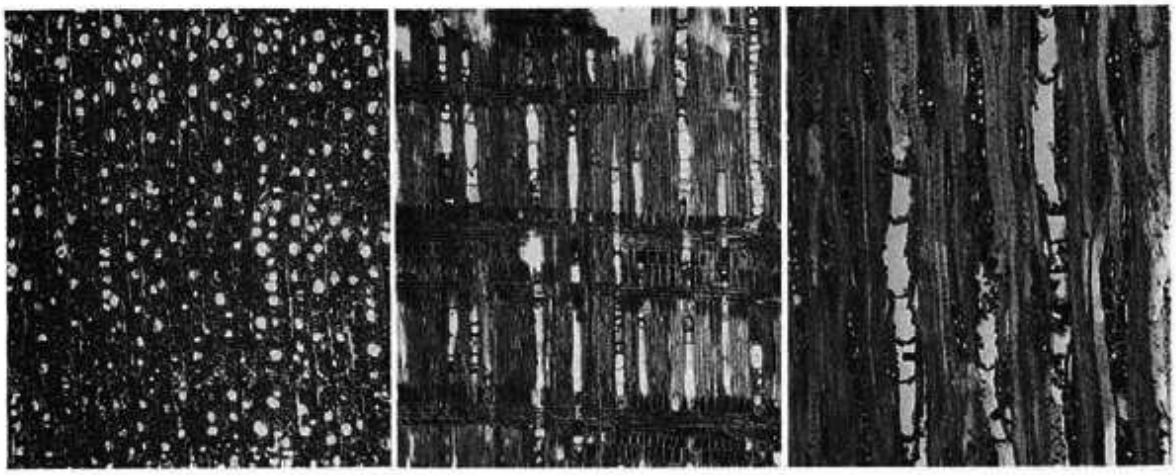


Photo.19　900　柱　ナツツバキ

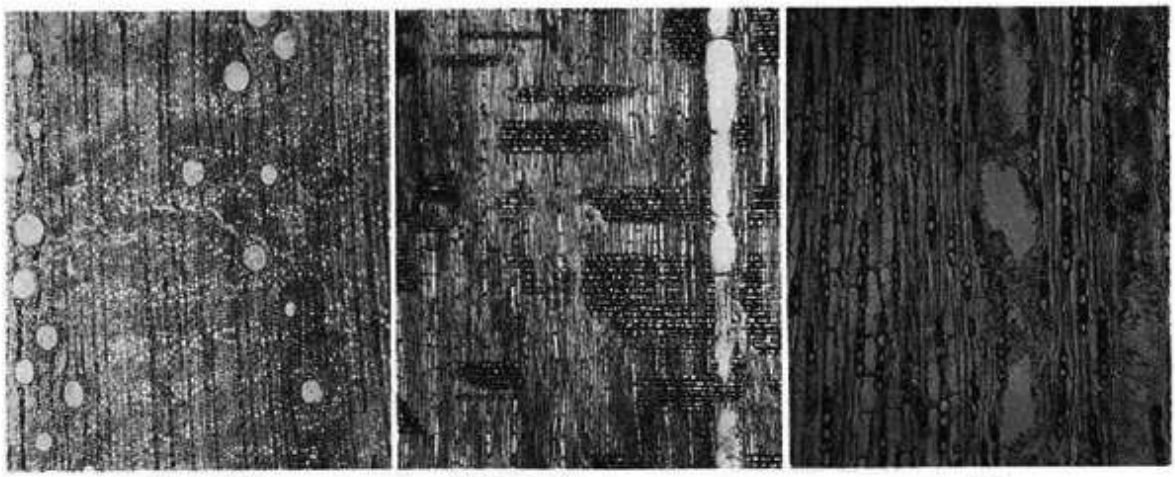


Photo.20　柱穴No1-1　カシ

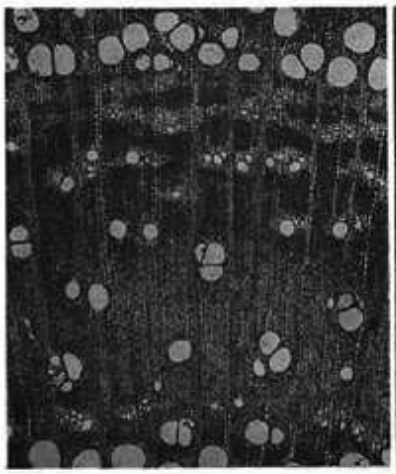


Photo.21 柱穴No.1-2

クワ

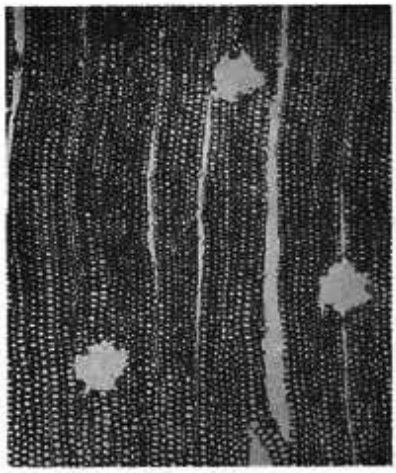


Photo.22 No.3 柱

五葉マツ

2．前原町波多江遺跡出土鉄滓の分析調査

大澤正己

昭和57年1月31日

1．はじめに

波多江遺跡は、福岡県糸島郡前原町波多江に所在する。当遺跡の平安時代（9C末）に推定される1号竪穴住居址より鉄滓が出土した。この出土鉄滓2個について、福岡県教育委員会文化課より分析調査の依頼を受けたので、鉱物組成と化学組成の調査を行ない、鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）であることを明らかにした。

考察は

(i) 鍛錬鍛冶滓の位置ずけ

(ii) 当鍛錬鍛冶滓は、火窪の炉底部に溜まる椀形鍛冶滓が含まれるので、県下出土での椀形鍛冶滓の出土状況及び椀形鍛冶滓からみた古代製鉄

らに触れた。

なお、糸島郡内での鉄滓を出土する遺跡は、管見でおさえているのは8ヶ所(00)である。

2．供試試料

調査対象となった鉄滓は、Table 1に示す2個である。

Table 1　供試鉄滓の履歴及び調査項目

符号	試料履歴				調査項目		
	出土位置	鉄滓サイズ(mm)	重量(g)	鉄滓形状	外観写真	顕微鏡組織	化学組成
Q－901	1号竪穴住居址	85×75×30	180		○	○	
Q－902		75×40(破片)×25	110	椀形滓	○	○	○

3．調査方法

1）肉眼観察

2）光学顕微鏡組織

鉄滓は水道水で充分に洗滌して乾燥後、二分割して片方の中核部を検鏡試料とした。（残余部分は化学分析用）検鏡試料は、ベークライト樹脂に埋込んだ後、エメリー研磨紙（コランダム：Al_2O_3に磁鉄鉱を含んだ黒灰色の結晶の粉末砥石を膠質の接着剤で塗布している)の#150, #320, #600, #1,000を使って荒研磨し、次にアルミナ（Al_2O_3）粉末溶液（アルミニウム塩の沈澱物を焼成して作られた六方晶形細粒粉末の水溶懸濁液）をバフ布に注ぎながら被研面を仕上げて構成鉱物の同定を行なった。アルミナの粒子は、5μと1μを2回に分けて使用している。

3）化学組成

分析試料は、検鏡試料の片割れを当てた。二酸化硅素（SiO_2)、酸化アルミニウム（Al_2O_3)、酸化カルシウム（CaO)、酸化マグネシウム（MgO)、酸化マンガン（MnO)、二酸化チタン（TiO_2)、硫黄（S)、五酸化燐（P_2O_5）等については螢光X線法、残りの全鉄分（Total Fe)、金属鉄（Metallic Fe)、酸化第1鉄（FeO)、酸化第2鉄（Fe_2O_3：計算値)、バナジウム（V)、酸化クロム（Cr_2O_3)、銅（Cu）等については湿式法による化学分析を行なっている。

4．調査結果

顕微鏡組織は、Photo. Iに、化学組成はTable 2に示す。

1）鉄滓Q－901

a．肉眼観察

表裏ともに鉄錆から発した赤褐色を呈し、局部的に軟質木炭を噛み込み、気泡を発散させた軟軽化質の鉄滓である。破面は、中核部のみ黒褐色で、その周りは赤褐色を示し、ここでもやはり木炭を噛み込み、気泡が全面に散在する。大きさは85×75×30mmで、重量は180gであった。

b．顕微鏡組織

Photo. Ⅰの最上段と、上より2段目に2視野にわたって撮影した組織写真を示す。鉱物組成は白色粒状のヴュタイト（Wüstite：FeO）[2]と灰色長柱状で大きく成長したファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）[3]が暗灰色のガラス質地の上に晶出している。当鉄滓は、ファイヤライトの成長具合からみて徐冷を受けた傾向が読みとれる。

当鉄滓は、外観観察からみて多孔質で軟軽化質であること、鉱物組成がヴュタイト＋ファイヤライトで構成され、半還元砂鉄粒子や高温側で晶出するマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）[4]が検出されないことから、鍛冶滓と判定される。

2）鉄滓Q－902

a．肉眼観察

椀状鉄滓の半分を欠くものである。表皮の大半は黒色を呈するが、縁の周辺部は鉄錆の赤褐色を発している。表面は、若干の凹凸を有するが、おしなべて平である。裏面は端部が薄く、中央部が肉厚になり、全体が鉄錆色で気泡を散在し、やや粗鬆気味である。破面は黒褐色を示して、わずかに小気泡を有するが緻密で比重は大きい。サイズは、75×40(半分)×25mmで重量は110ｇであった。

当鉄滓は鍛冶の段階で、火窪の底部に集積した滓で俗に椀形滓[5]と呼んでいる。

b．顕微鏡組織

Photo. Ⅰの上から3段目と最下段に、2視野の組織写真を示す。鉱物組成は、大きく成長した白色粒状のヴュタイト（Wüstite：FeO）が大量に晶出し、これに極く少量の盤状結晶であるファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が存在する。鍛冶滓特有の晶癖を示している。

c．化学組成

鉄滓の分析結果をTable 2に示す。全鉄分（Total Fe）が非常に多く61.57%であり、このうち酸化第1鉄（FeO）が占める割合が61.36%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）は19.36%である。造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$）は少なく13.2%、これに随伴微量元素である二酸化チタン（TiO_2）0.05%、バナジウム（V）0.005%で両成分の非常に低いのも特徴的である。他に酸

化マンガン（MnO）0.1%、酸化クロム（Cr_2O_3）0.02%、硫黄（S）0.01%、五酸化燐（P_2O_5）0.3%と低目であり、銅（Cu）のみ0.004%とやや高目であった。

全鉄分（Total Fe）が50%以上と高目で、造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$）が10%以下と低目で、かつ2酸化チタン（TiO_2）1.0%以下、バナジウム（V）は小数二桁目以下に数字が現われる鉄滓は鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）として位置ずけられる。

製鉄原料が砂鉄であれば、製錬過程で鉱滓中にチタン（Ti）分が濃縮し、鍛冶過程では逆に鉄分（Fe）の増加でチタン分は希釈され、銅（Cu）が鉄の随伴成分なので豊んでくる。

5．考　察

1）鉄滓の分類

古代製鉄址で採取される鉄滓は下に示す4種類に分類できる。

i　製錬滓

ii　精錬鍛冶滓（大鍛冶滓）

iii　鍛錬鍛冶滓　（小鍛冶滓）

iv　鋳物滓

製錬とは、砂鉄や鉄鉱石等の原料から含有金属を抽出し、精製する冶金学的反応操作をいう。古代製鉄では、主として砂鉄と木炭を交互に装入し、炉体の下部より冷風を吹き込んで温度を上げながら還元を行うものである。この時、排出された滓を製錬滓と呼ぶ。

この製錬滓は、原料砂鉄成分の影響を強く受ける。糸島郡内では、柑子岳以北の半島北東部で北崎花崗閃緑岩が賦存し[8]、これから風化された北崎村海岸砂鉄が著名[9]である。Table 3に北崎村砂鉄の成分を示す。酸性砂鉄（真砂）で、すこぶる高品位のものである。全鉄分（Total Fe）は67～68%含有され、製錬時に鉄と鉱滓の分離を阻害する二酸化チタン（TiO_2）が1%以下と少なく、製錬には適した砂鉄と考えられる。

この高品位極低チタン砂鉄を製鉄原料とすれば、製錬滓には二酸化チタン（TiO_2）は3%前後に濃縮されるであろう。事実、Table 2に示すように、糸島郡内では八熊遺跡の製錬滓は、二酸化チタン（TiO_2）が3.49%を示している。

次に製錬炉から出された鉄は、まだ粗成品で直接製品加工は無理である。鉄中には非金属介在物や炭素が多く含有され、これらを追い出すべく加熱半融し、脱炭と鍛錬を施さなければならない。この工程で排出された鉄滓は、鉄の再加熱で出来た鉄滓の全鉄分（Total Fe）が増加し、造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$）は製錬滓で大半除かれているので、かなり減少する。この時点での排出滓を精錬鍛冶滓（大鍛冶滓）と呼ぶ。Table 2に示す塚田遺跡の

鉄滓がこの範ちゅうに入る。

先述の成分調整を済ました鉄素材（錬鉄）は、加熱鍛造により製品加工が可能である。この最終加工時に排出される滓が鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）である。鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）は、全鉄分（Total Fe）が多くなり、逆に造滓成分（SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO）や砂鉄成分の特徴を示す二酸化チタン（TiO_2）やバナジウム（V）らは、精錬鍛冶滓よりさらに減少したものになる。なお鉱物組成も、鍛錬鍛冶滓になると、ヴュスタイト（Wüstite）が成長し、半還元砂鉄粒子など認められなくなる。

Table 2は糸島郡内で採取された鉄滓成分を示しているが、これらを工程別に分類すると、Table 4の様になる。波多江遺跡出土鉄滓と、三雲の築山古墳近くで採取された鉄滓は、いずれも鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）であり、化学組成、鉱物組成が製錬滓や精錬鍛冶滓と異なることが判るであろう。

製錬滓と鍛冶滓は、製鉄原料となる砂鉄成分によって大きく変動するので注意を要する。Table 4には、糸島郡内以外に、北九州市内[10]、岡山県久米郡稼山地区[11]や千葉県[12]のデータを参考に載せた。

北九州市内の鉄滓成分は、糸島郡内に近似した傾向であるが、岡山県稼山地区のものは、チタン含有量が非常に高いのが注目される。このデータは、6世紀後半から7世紀にかけての稼山古墳群の古墳供献鉄滓と同時期の大蔵池南製鉄遺跡出土の製錬滓及び鍛冶滓である。千葉県内の鉄滓もチタンは高目である。

原料砂鉄のチタン含有量の高いものを使った地域は、製錬滓及び精錬鍛冶滓（大鍛冶滓）の二酸化チタン（TiO_2）やバナジウム（V）は、高目で残留する。

鉄滓は、分析値だけで判断するのではなく、鉱物組成と、地域差を考慮して総合的な見地からの検討が必要である。

なお、鉄鉱石を原料とした鉱滓（製錬滓）は、二酸化チタン（TiO_2）が1％以下と低目で、鍛錬鍛冶滓と混同するような数値を示すので注意を要する。この鉱石製錬滓は、滋賀県を中心に7ヶ所、岡山県2ヶ所、山口県1ヶ所と計10ヶ所が確認されている[13]。鉱物組成と化学組成の総合判断で識別すれば間違うことはないであろう。

2）椀形鍛冶滓からみた古代製鉄

製鉄遺跡は多くの場合、遺構確認が困難である。鍛冶関係もその例外でない。しかし、鍛冶炉には、火窪の底部に集積して特有の形状を現わす椀形鍛冶滓が存在する。これが鍛冶炉の間接証拠品として挙げられる。この椀形鍛冶滓から古代製鉄の考察を試みてみる。

椀形鍛冶滓の出土例は、南は沖縄から北は北海道まで知られ、管見の集成した出土例だけで

も100例を越えている。[14]

Table 5に福岡県での椀形鍛冶滓の出土例を抽出した。推定年代が最も遡る例は、筑紫郡の松木遺跡出土の5世紀前半代である。これは、鍛錬鍛冶滓で、手ずくね土器や陶質土器共伴の祭祀遺構からの検出である。このあと、6、7、8世紀のものは、福岡市内の金武古墳群吉武L群4・5・6号墳、筑紫郡の観音山古墳群13号墳、宗像市の百田、浦谷古墳群出土滓で、いずれも古墳供献鉄滓である。5世紀前半から6世紀中葉にかけては、まだ製品加工時に排出される鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）であるが、6世紀中葉以降は、精錬鍛冶滓が出現するのは注目すべきである。精錬鍛冶滓は製錬とセットで操業された証として受留められるであろう。事実、古墳供献鉄滓は製錬滓が検出されるのも、この時期頃からである。現在のところ、製錬遺構も6世紀後半以降からの確認にとどまっている。[15]

6世紀中葉は、列島内での製鉄の1つの変革期でもあったのであろう。この時期頃より、列島内で砂鉄製錬への盛行期を迎えたことと推定される。

8世紀以降の鍛冶は、官衛や寺院に関連した所でみられ、中世にかけてまた一般庶民に定着した技術として拡散したものと考えられる。糸島郡の竹戸遺跡は駅屋跡と推定され、遠賀郡の浜口（月軒）廃寺は寺院跡である。波多江遺跡の1号竪穴住居跡から出土した鍛錬鍛冶椀形滓の検出は、周辺に鍛冶遺構を存在させる証明品であろう。

なお、鍛錬鍛冶滓で、椀形滓としての形状をもたないものは、弥生時代後期の遺跡数所[16]から発見されており、鍛錬鍛冶はその時代まで遡ると考えられるが、本稿では椀形滓に関連して述べたので、省略した。又、鍛冶炉そのものも、弥生時代中期末頃のものが春日市赤井手遺跡[17]から検出されている。

鍛冶技術は、弥生中期頃に列島内に導入され、それが数次にわたって技術革新に見舞われたものと考えられる。その現れが、5世紀前半代の筑紫郡の松木遺跡の祭祀遺構からの鉄滓出土であり、また鍛冶炉の形態であろう。宗像郡の今川遺跡の円形土坑型鍛冶炉や、福岡市の上和白遺跡の舟底型鍛冶炉である。

列島内での製鉄始論について、鍛冶技術と関連させて別稿で論じてみたいと考える。

2．まとめ

波多江1号竪穴住居址より出土した鉄滓2点の外観観察、鉱物組成及び化学組成を調査して次のことが明らかになった。

① 鉄滓外観は、火窪底部に集積した椀形滓タイプである。

② 鉱物組成は、ヴュスタイト（Wüstite：FeO）＋ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）で構成され、両者の結晶が成長して鍛冶滓特有の晶癖を示している。

Table 2　鉄滓の化学組成　—糸島郡内出土滓を中心に—

符号	遺跡名	鉄滓区分	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe	注
Q-902	波多江	製錬鍛冶滓	平安時代	61.57	0.32	61.36	19.39	8.9	2.0	1.1	1.2	0.1	0.05	0.02	0.01	0.3	—	0.005	0.004	13.2	0.214	0.008	1－A
K-901	曽田	精錬鍛冶滓	奈良時代後半	52.29	0.44	52.59	15.61	15.8	4.2	1.3	1.3	0.4	2.6	0.11	<0.01	0.2	—	0.10	0.002	22.6	0.432	0.050	1－B
K-902	〃	〃	〃	45.94	0.43	49.00	10.62	22.6	5.2	2.2	1.3	0.3	1.8	0.17	0.01	0.1	—	0.08	0.002	31.3	0.681	0.039	〃
	飯山古墳近く	鍛錬鍛冶滓	不明	63.3	0.06	66.80	16.20	8.40	2.4	1.9	1.8	0.16	0.20	0.01	0.021	0.69	0.076	0.015	0.005	14.5	0.229	0.003	1－F
C-811	八熊	製錬滓	奈良時代	52.1	—	54.9	13.48	16.95	6.95	1.71	1.08	0.41	3.49	0.18	0.065	0.49	0.04	0.29	Nil	26.29	0.505	0.067	1－C
参考	キララ	製錬滓	不明	40.03	2.93	47.60	0.14	28.68	7.55	4.64	3.10	0.20	1.36	—	SO_3 0.440	0.282	—	—	—	43.97	1.098	0.034	1－G
	新町高畑	鍛冶滓	不明	44.50	—	—	—	23.58	—	—	—	Mn 0.66	Trace	—	0.24	0.21	—	—	—	—	—	—	1－H

Table 3　砂鉄の分析結果

採取地	全鉄分	FeO	Fe_2O_3	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	MnO	P	S	Cu	TiO_2	Cr_2O_3	V_2O_5	灼熱減量	Ti / Fe	注
糸島郡北崎村海岸砂鉄(長谷川分析)	68.22	30.31	63.84	2.36	1.02	1.59	0.79	0.50	0.159	0.076	0.067	0.83	—	—	0.36	0.007	6
〃 (梅津分析)	67.24	28.87	63.99	2.49	1.72	1.15	0.28		P_2O_5 0.11	0.015		0.78	なし	0.204	—		7

Table 4　各地域別の製錬滓と鍛冶滓の化学組成・鉱物組成の比較

項目 / 組成		福岡県糸島郡内			福岡県北九州市内 ⑨			岡山県久米郡緑山地区内 ⑮			千葉県内 ⑫		
		製錬滓	鍛冶滓		製錬滓	鍛冶滓		製錬滓	鍛冶滓		製錬滓	鍛冶滓	
			精錬鍛冶滓	錬錬鍛冶滓		精錬鍛冶滓	錬錬鍛冶滓		精錬鍛冶滓	錬錬鍛冶滓		精錬鍛冶滓	錬錬鍛冶滓
化学組成	全鉄分 (Total Fe)	40～52 〈46%〉	46～52% 〈49%〉	62～63% 〈62%〉	34～46% 〈39%〉	40～57% 〈49%〉	39～66% 〈56%〉	34～38% 〈36%〉	52%	53%	38～50% 〈43%〉	46～63% 〈55%〉	48～69% 〈59%〉
	造滓成分	26.29	23～31% 〈27%〉	13～15% 〈14%〉	35～42% 〈39%〉	21～41% 〈31%〉	12～36% 〈19%〉	17～27% 〈22%〉	21%	7.5%	12～33% 〈23%〉	14～31% 〈22%〉	8～32% 〈19%〉
	二酸化チタン (TiO_2)	3.49	1.8～2.6% 〈2.2%〉	0.05～0.2% 〈0.13%〉	2.9～13% 〈5.0%〉	1.5～2.2% 〈1.8%〉	0.13～0.38% 〈0.27%〉	22～36% 〈30%〉	5.6%	1.6%	13.8～30.0% 〈18.1%〉	2.09～5.5% 〈3.8%〉	0.11～1.8% 〈0.56%〉
	バナジウム (V)	0.29	0.08～0.10% 〈0.09%〉	0.005～0.015% 〈0.012%〉	0.25～0.26% 〈0.255%〉	0.01～0.12% 〈0.07%〉	Trace～0.05% 〈0.019%〉	0.1～0.46% 〈0.26%〉	0.12%	0.06%	0.16～0.27% 〈0.24%〉	0.038～0.27% 〈0.16%〉	0.006～0.15% 〈0.040%〉
	銅 (Cu)	Nil	0.002% 〈0.002%〉	0.004～0.006% 〈0.005%〉				0.001～0.002% 〈0.002%〉	0.004%	Trace			
鉱物組成		W＋F W＋F＋M W＋F＋M＋S	W＋F W＋F＋M	W＋F	W＋F W＋F＋M W＋F＋M＋S	W＋F W＋F＋M	W＋F W＋F＋H	M＋F U＋I＋F	W＋M＋F	W＋F	W＋M＋F M＋F M＋S＋F M＋P＋F	W＋F W＋F＋M	W＋F W＋F＋H

造滓成分 ($SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$)　〈 〉内数値は平均値。　W：Wustite (FeO)，F：Fayalite ($2FeO \cdot SiO_2$)，M：Magnetite (Fe_3O_4)，S：半溶元砂鉄粒子，H：Hercynite ($FeO \cdot Al_2O_3$)

P：Iron Titanium Oxide ($2FeO \cdot TiO_2$) もしくはIlmenite：$Fe \cdot TiO_2$，U：Ulvöspinel ($2FeO \cdot TiO_2$)，I：Ilmenite

Table 5　椀形滓出土地名表（福岡県のみ）

No.	遺跡名	所在地	椀形滓形状 サイズ(mm)	椀形滓形状 重量(g)	椀形滓出土数	遺構(鍛冶炉)	区分	羽口出土有無 数量	羽口出土有無 内径	羽口出土有無 長さ	推定年代	分析
1	松木遺跡群A地区	那珂川町大字松木字新町	90×70×25 50×40(破片)×20	245 50	2	祭祀遺構より	鍛錬鍛冶				5C前半	
2	金武古墳群吉武L群4号	福岡市西区吉武字塚原	100×70×30	285		古墳供献	〃				6C前半～中葉	◎
3	〃　5号	〃	70×60×20	150		〃	〃				6C中葉	◎
4	〃　6号	〃	110×110×60	900		〃	精錬鍛冶				〃	◎
5	観音山古墳群13号墳	筑紫郡那珂川町大字中原字深原	110×90×30	530		〃	〃				6C後半～7C前半	◎
6	百田古墳群	宗像市大字朝町字百田	90×60(破片)×40	140		祭祀遺構	鍛錬鍛冶				7C	◎
7	浦谷古墳群	〃　字浦谷	65×65×30	145		古墳供献	〃				8C	◎
8	今川	宗像郡津屋崎町今川	166×110×40	945	20以上	円形土壙型 直径1100mm	精錬鍛冶	3	25	破片	7C後半	◎
9	板取	宗像郡津屋崎町大字在自字板取	80×68×44	220		不明	鍛錬鍛冶					◎
10	平蔵	筑紫郡那珂川町上梶原	100×95(破片)×40	340	3	(土壙状工房址)	〃	1	30～36	破片	8C前半	◎
11	上和白	福岡市東区大字和白宮前	小型椀形滓			舟底型 400×1000mm	〃	4以上	13～19	160	8C	
12	塚田	糸島郡二丈町大字深江字万龍の下	120×90×45	765	20以上	火窪 300mm径	精錬鍛冶	5以上	30	100前後	奈良時代後半	◎
13	浜口(月軒)廃寺	遠賀郡芦屋町	104×90×37	420		不明	鍛錬鍛冶	なし			8C	◎
14	波多江	糸島郡前原町波多江	70×40(半分)×25			1号竪穴住居址出土	〃				9C末	◎
15	竹戸	〃　二丈町吉井字竹戸				竪穴遺構					9C末～10C初	
16	多々良	福岡市東区大字多々良宗原	100×100×20	335		長楕円形炉？	精錬鍛冶	6	12～21	不明	13C	◎
17	茶臼山	久留米市山川町				不明					13～14C	
18	芦屋旧小学校	遠賀郡芦屋町	80×94×34	310		不明	鍛錬鍛冶	なし			中世	◎
19	馬場山	北九州市八幡西区大字書月馬場山	100×80×35	245		不明	〃	なし			〃	◎
20	辻田	〃　辻田	70×40(破片)×20	115		不明	〃	なし			〃	◎
21	水町池	遠賀郡直方市上境水町池	100×75×20	300		不明	〃	なし			不明	◎
22	原田	甘木市上秋月字原田				不明		1	21	不明	不明	◎

◎分析・検鏡実施

椀形滓地名表に関する文献 （No.は対応する）

1．那珂川町教育委員会『那珂川町の歴史を掘る(Ⅳ)』（松木遺跡現地説明会資料）ガリ刷 1981．2．21

2～4．大澤正己「金武古墳群青武L群1～8号墳、乙石H群1号墳出土鉄滓の調査」『夫婦塚』〈四箇周辺遺跡調査報告書(3)〉（福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書 第51集）福岡市教育委員会 1980

5．大澤正己「鉱滓の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第5集 福岡県教育委員会 1978

6．宗像市教育委員会社会教育課・原俊一氏より鉄滓の調査依頼を受けた。鉄滓は須恵器のカメを伏せた下に7個分が納められ、古墳前方部の小ピットから発見された。

7．宗像市教育委員会社会教育課・原俊一氏よりの依頼、8C代の須恵器壺の中に鉄滓は入れられ、土師器皿でフタをして追葬。墓道より検出された。

8．大澤正己「今川遺跡出土椀形鍛冶滓の調査とその考察」『今川遺跡』（津屋崎町文化財調査報告第4集）津屋崎町教育委員会 1981

9．大澤正己「八号墳出土鉄滓の調査結果」『潜田ヶ浦古墳群』津屋崎町教育委員会 1977

10．沢田康夫他『平歳遺跡』（那珂川町文化財調査報告書第5集）那珂川町教育委員会 1980、出土椀形滓の分析結果は未発表

11．穴澤義功「鉄生産のあり方」『和白遺跡群』福岡市教育委員会 1971

12．大澤正己「二丈町深江・塚田遺跡出土鉄滓の分析調査」（今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第7集）福岡県教育委員会 1982

13．石松好雄・高橋章他『浜口(月軒)廃寺』芦屋町教育委員会 1979、分析結果は本発表

14．大澤正己「前原町波多江遺跡出土鉄滓の分析調査」（今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第6集）福岡県教育委員会 1982

15－1．佐々木隆彦編『竹戸遺跡』（二丈町文化財調査報告書 第1集）二丈町教育委員会 1979

－2．馬田弘稔「竹戸遺跡」『二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告』福岡県教育委員会 1980

16．福岡市教育委員会『多々良遺跡調査報告書』1972、椀形滓の分析結果は次の報告書に収録。大澤正己「福岡平野を中心に出土した鉱滓の分析」『広石古墳群』（福岡市埋蔵文化財調査報告書 第41集）福岡市教育委員会 1974

17．久留米市教育委員会『茶臼山・東光寺遺跡』1974

18．波多野睦三「芦屋石垂遺構」『筑紫史論』第3集 1975．10、椀形滓の分析結果は未発表

19．栗山伸司編『馬場山遺跡』（北九州市文化財調査報告書 第36集）北九州市埋蔵文化財調査室 1980

20．大澤正己「香月地区遺跡出土の鉄滓について」『辻田遺跡』（北九州市文化財調査報告書 第35集）北九州市教育文化事業団 1980、馬場山遺跡出土椀形滓の分析結果も、この報告書に収録

21．轟次雄氏採取品。分析結果は未発表

22．甘木市教育委員会・内田俊和氏よりの提供品。分析結果は未発表

③ 化学組成は、全鉄分（Total Fe）が、61.57%と高く、造滓成分（SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO）が13.2%、二酸化チタン（TiO_2）0.05%、バナジウム（V）0.005%といずれも低目で鍛錬鍛冶滓の成分構成である。

以上の結果より、当鉄滓は鉄製品加工の再加熱時に排出された鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）として位置ずけられる。

【注】

1．糸島郡内で鉄滓出土地は下表の通りである。

糸島郡内鉄滓出土地名表

符号	遺跡名	所在地	遺構及び出土状況	推定年代	発掘調査
A	波多江	前原町波多江	1号竪穴住居址より出土	平安（9C末）	有
B	塚田	二丈町大字深江字方蔵の下	鍛冶炉4基と鉄滓出土	奈良時代後半	有
C	八熊	志摩町大字西貝塚字八熊	製鉄炉4基　炭窯1基 鍛冶炉3基	奈良時代（7－8C）	有
D	竹戸	二丈町吉井字竹戸	土壙出土（製鉄の可能性あり）	9C末～10C初頭	有
E	三雲	前原町三雲	番上地区他広範囲	古墳～中世	有
F	築山古墳近く	〃	遺構を伴わない	不明	有
G	キララ	前原町キララ	－	不明	表採
H	裏畑	芥屋村新町裏畑	－	不明	表採

※八熊遺跡の周辺には5ヶ所程鉄滓出土地があるが、これは数に入れていない。

A：県文化課橋口達也氏より鉄滓の提供あり。
大澤正己「前原町波多江遺跡出土鉄滓の分析調査」本稿

B：県文化課橋口達也氏より鉄滓の提供あり。
大澤正己「二丈町深江・塚田遺跡出土鉄滓の分析調査」（今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第7集）福岡県教育委員会　1982

C：県文化課井上裕弘氏より鉄滓の提供あり。
「八熊製鉄遺跡出土鉱滓の分析調査」『八熊製鉄遺跡・大牟田遺跡』志摩町教育委員会　1982

D：佐々木隆彦編『竹戸遺跡』（二丈町文化財調査報告書第1集）二丈町教育委員会　1979
馬田弘稔「竹戸遺跡」『二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告』福岡県教育委員会　1980

E：県文化課柳田康雄氏と出土鉄滓の分析調査の談合をしているが、現在までは分析調査の実施は実現していない。

F：大澤正己「福岡県の古代製鉄」『福岡県考古懇話会々報』第3号　1975．12．1

G：窪田蔵郎『鉄の考古学』雄山閣　1973　194頁

H：窪田蔵郎前掲書G　161頁
原田淑人氏鉄滓採取→俵国一氏分析

2．ヴュスタイト（Wüstite：FeO）。Fe－O_2系２元状態図におけるFeとO_2との固溶体のこと。FeO（O_2、22%）にα鉄とヴュスタイトとの混合物であることが知られる。またヴュスタイトを冷却してゆくと、570℃で分解し、この温度でFe_3O_4とα鉄に分かれる。共析反応（eutectoidreaction）をおこす。すなわち

Wüstite $\xrightleftharpoons{570℃}$ Fe_3O_4＋α鉄となる。

鉱物特性　光学的性質：マグネタイトと同様に等軸晶系に属し、反射偏光を示さない。屈折率もマグネタイトよりわずかに低く、色調もマグネタイトより灰色を帯びているが、その差はあまり大きくない。形状は一般に球状、樹枝状およびマグネタイトとの共晶の形で観察されるが、光学的性質だけではマグネタイトと識別しがたい。透過光ではマグネタイトと同様、不透明である。

腐食性：ヴュスタイトの明確な識別は、エッチ・テストによるがよく、$SnCl_2$飽和溶液により１～２minで完全か、それに近い程度まで腐食されるのでマグネタイトと識別される。

微小硬度：焼結鉱中のヴュスタイトは一般にマグネタイトと共晶をなしており、微小硬度は450～500Hv程度で、マグネタイトよりいくぶん低い値を示す。

3．ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）。斜方晶系に結晶する鉄ケイ化物のこと。溶融点990℃比重４～4.2。$2FeO + SiO_2 \rightarrow 2FeO \cdot SiO_2$の反応による生成物。

鉱物特性　光学的性質：ファイヤライトは斜方晶系に属し、反射偏光を示す。屈折率（Ng＝1.886）は酸化鉄鉱物に比べれば低く、マトリックスのけい酸塩の中では比較的高い。ファイヤライトは焼結鉱中に現われる場合スラグ中に、よく木ずり状となって晶出するため、この場合その特徴ある組織から他鉱物との識別は容易である。透過光では、開ニコルで無色であり、交差ニコルで淡黄色、黄緑色、黄橙色などを呈する。

微小硬度：微小硬度は600～700Hv程度である。

4．マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）。$FeO \cdot Fe_2O_3$でも表わされ、FeOの２価のFeは、MgまたはNiで置換され、また別にTiO_2を含むこともある。立方晶で普通正八面体。

鉱物特性

光学的性質：マグネタイトは等軸晶系に属し、屈折率はN＝2.42で、わずかに黄色を含む灰白色を呈し、反射光度は弱い。反射偏光を示さず、このことは屈折率の低いことと共にヘマタイトと明瞭に識別できる。マグネタイトは不規則塊状の大きい結晶を生成し、また往々にして樹枝状、四面体、八面体などで観察される晶癖の面からヘマタイトとは異なる。透過光では不透明である。

腐食性：マグネタイトは王水により黄変するが、ヘマタイトは変化せず、ヘマタイトと識別される。また$SnCl_2$飽和溶液によって侵されず、ヴュスタイトは１～２minで暗灰色を呈するのでヴュスタイトと識別される。

微小硬度：500～600Hvでヘマタイトとは相当の差異を有する。

※　腐食液の$SnCl_2$飽和アルコール溶液の代用として$SnCl_2$の１%HCl飽和溶液を代用してもよい。

5．椀形滓「椀形滓は鍛冶滓の一種であり、直径12～18cmのやや楕円形を呈した浅い椀形の鉄滓である。鍛冶工房で大鍛冶や鍛え鍛冶にともなって発生するものと、小鍛冶の作業にともなって発生するものがあり、前者の表面はやや製錬滓に近い外観をしており、後者の方はやや小形で質も均一に粗鬆である。いずれも吹子直下の火床中に形成されるもので、鉄滓と藁灰、あるいは山土との焼結状態を呈している。」以上は窪田蔵郎『鉄の考古学』雄山閣　1972　最近では、芹澤正雄、穴澤義功両氏らは、椀形滓タイプは製錬滓にもみられると云っている。関東地区に多く存在するシャフト炉の炉底滓をさしているので、俗に云う椀形滓とは異なる（成分的に）と考えている。

6．長谷川熊彦『砂鉄』　技術書院　1963

7．梅津七蔵「砂鉄の研究」『鉄と鋼』　1931．4

8．松本達郎・野田光雄・宮久三千年『日本地方地質誌九州地方』　朝倉書店　1962

9．長谷川熊彦前掲書⑥、梅津七蔵前掲書⑦

10．大澤正己「新道寺天疫神社前遺跡出土の鉄滓の調査」『新道寺天疫神社前遺跡』　北九州市教育文化事業団　埋蔵文化財調査室　1982

11．大澤正己「大蔵池南製鉄遺跡出土の鉱滓と鍛冶滓の調査結果」『大蔵池南製鉄遺跡』　久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1982

12．大澤正己「谷津遺跡出土の製鉄・鋳銅関連遺物の分析調査」
千葉市教育委員会　1982

13．(イ)　北牧野A遺跡。滋賀県高島郡マキノ町
(ロ)　源内峠遺跡。滋賀県大津市瀬田南大萱字石捨
(ハ)　野路小野山遺跡。滋賀県草津市野路町
(イ)(ロ)(ハ)の3遺跡は、7～8C代の古代製鉄遺跡で鉄鉱石を原料とする製錬滓であることが判明している。
大澤正己「野路小野山遺跡出土の製鉄関係遺物の調査－周辺遺跡との比較検討－」　滋賀県文化課へ近日中に提出予定の原稿。
この他に、滋賀県志賀町足田ヶ口、大門、和邇ら3個所の遺跡鉱滓も分析値をみたかぎりでは鉱石製錬滓と判定される。
又、最近大津市平津町1丁目の平津遺跡から、平安・鎌倉時代の文化層より大量の鉱滓が出土している。これも当方で調査したところ、鉱石製錬滓であった。鉱石を共伴していた。資料としては次のものがある。
滋賀県教育委員会「平津遺跡現地説明会資料」　1981．9．6
分析値、検鏡は未確認であるが、大津市藤尾奥町の藤尾神社近くから出土した鉄滓も鉱石製錬滓の可能性が濃厚である。
岡山県は、備中平遺跡と須内遺跡出土滓である。同「岡山県の古代製鉄研究」『稼山遺跡群II』
久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1980。須内出土滓は未発表。
山口県阿東町金山谷たたら、県教育委員会で生産遺跡調査の確認で発見されている。

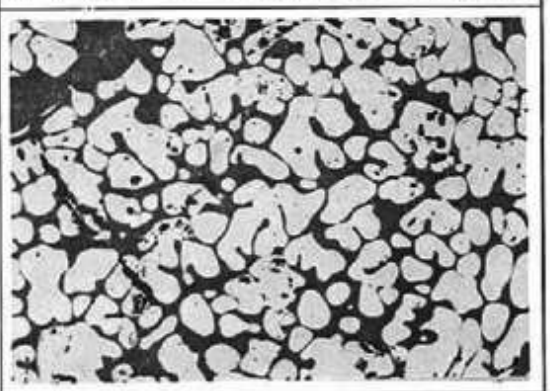
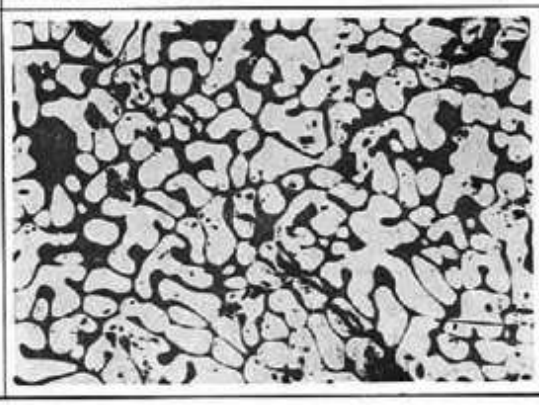
14．大澤正己「大阪府所在土師遺跡27－1街区、大和川・今池遺跡、高師浜遺跡出土鉄滓の調査」
『大和川・今池遺跡III』（第6地区・「古道」発掘調査報告書）大和川・今池遺跡調査会　1981
なお北海道出土椀形滓は千歳市末広遺跡の平安～鎌倉時代に推定されるものである。当方で調査中。発掘調査報告書を次に示す。
千歳市教育委員会『末広遺跡』　1981

15．大澤正己前掲書①及び「岡山県の古代製鉄その1」　椀形滓地名表に関する文献16のうちの抽稿。

16．熊本県の諏訪原遺跡、下前原遺跡、西弥護免遺跡、弓削山尻遺跡がある。このうち3遺跡については検鏡、分析調査を実施しているが未発表。他に春日市の門田遺跡、立岩遺跡、長崎県の北岡金比羅祀遺跡、大分県の下城遺跡、安国寺遺跡等も報告されているが、再検討を要すと考えられる遺跡もある。

17．春日市教育委員会『赤井手遺跡』（春日市文化財調査報告書　第6集）　1980

Photo. I　鉄滓の顕微鏡組織

Q－901 波多江遺跡 鍛錬鍛冶滓 ×100 表側の外観写真½		
Q－901 波多江遺跡 鍛錬鍛冶滓 ×100 裏側の外観写真½		
Q－902 波多江遺跡 鍛錬鍛冶滓 ×100 表側の外観写真½		
Q－902 波多江遺跡 鍛錬鍛冶滓 ×100 裏側の外観写真½		

Ⅳ. 結　語

1．平安時代の遺構は９Ｃ前半頃から９Ｃ末頃のもので、溝・掘立柱建物の方位は条里とほぼ同一であり、条里の区割に強く規制されている。またこの溝に囲まれた屋形内の東側半分は中央部を広場にして建物群が配置され、西側半分には竪穴住居跡があり、南側に入口をもち整然とした配置を示す建物群からは役所的な、西側半分からは私的側面をもつといえよう。

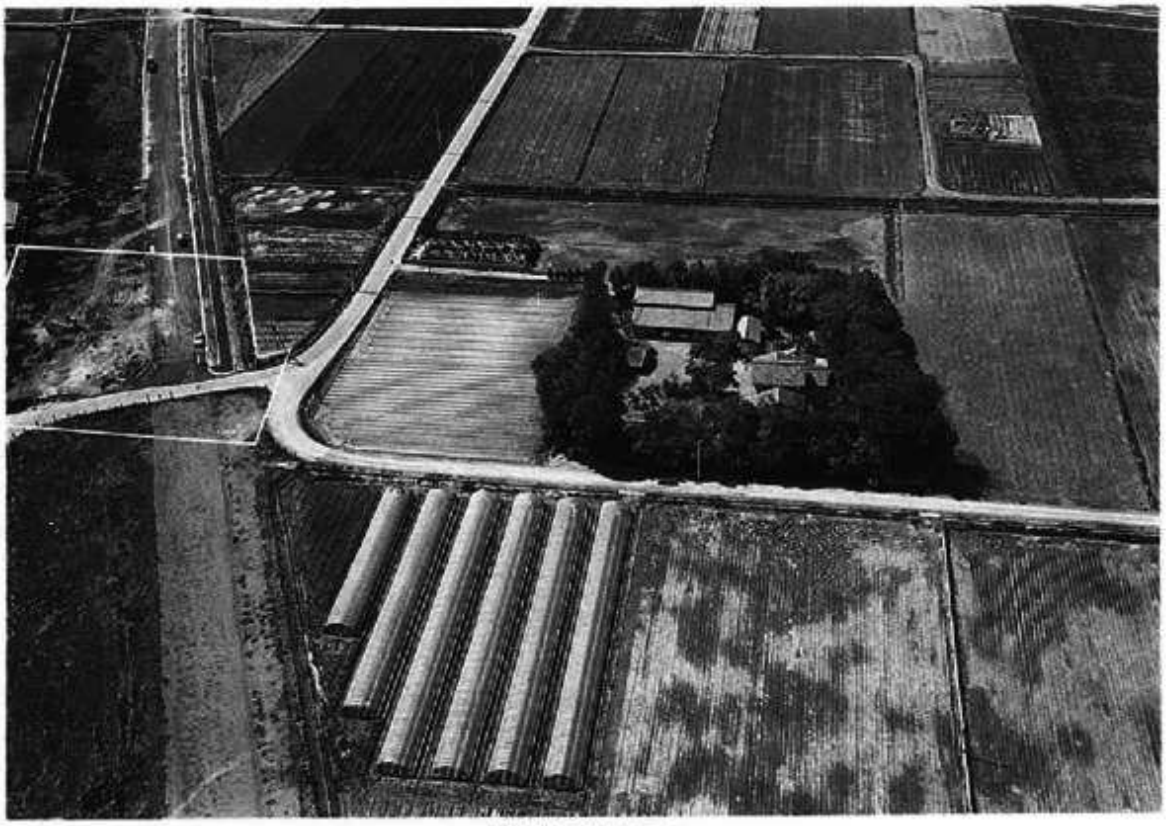
主には平安時代の遺構に伴うものであるが、いわゆる怡土城の瓦が出土した。これらは瓦として使用されたものでなく、湿地の敷石用等に手頃なものとして、礫程度に使用されたものと考える。このようにみるならば当時（９Ｃ前半～末）の階段で怡土城内の建物は、すでに崩壊しており、瓦は文字どおり瓦礫の状態であったと想定される。

2．戦国時代の遺構はやはり溝に囲まれている。多くの柱穴が存在し、まだ多くの建物がたつかもしれないが、大きくは３棟分が検出され、これには時代差があることが判明した。すなわち唐津系陶器・染付を伴わない時期のもので、これは瓦質火舎・土鍋等を主体としている。唐津系陶器、染付を伴う時期には２棟分があり、最後の時期は原田氏の滅亡の時期と対応するものと考えられる。北隣の「丹波屋敷」と伝えられる中世屋形跡と比較すると小規模の観はまぬがれないが、屋敷全体を把握していないので、この大きさのものが小規模のものであるか否かの断定はできない。

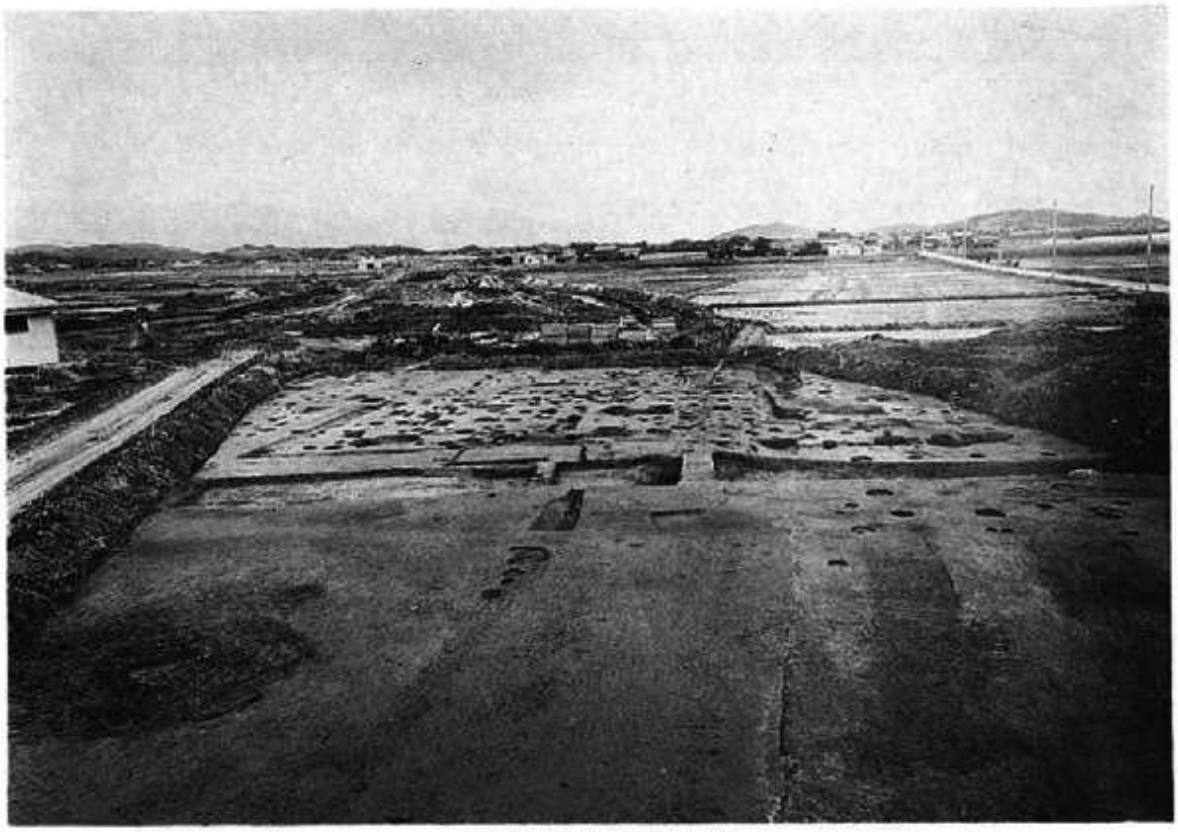
遺物としては土器、陶磁器類の他に石臼・下駄等の木器もかなりの量出土した。石臼の用途は製粉および挽茶であるが、主要には製粉と考えられる。多量のすり鉢の出土とも考えあわせると、粉食の多い食生活が想定される。

3．柱材の樹種同定によると、平安時代の掘立柱建物には広葉樹材が、戦国時代のものにはマツ材が使用されている。又戦国時代の建物の間取、柱材の選択は、戦国時代～江戸時代初期の農家のものと共通するものであることは興味深い。

図　　版



遺跡付近航空写真



遺跡全景（東側より）

遺跡全景（西側より）

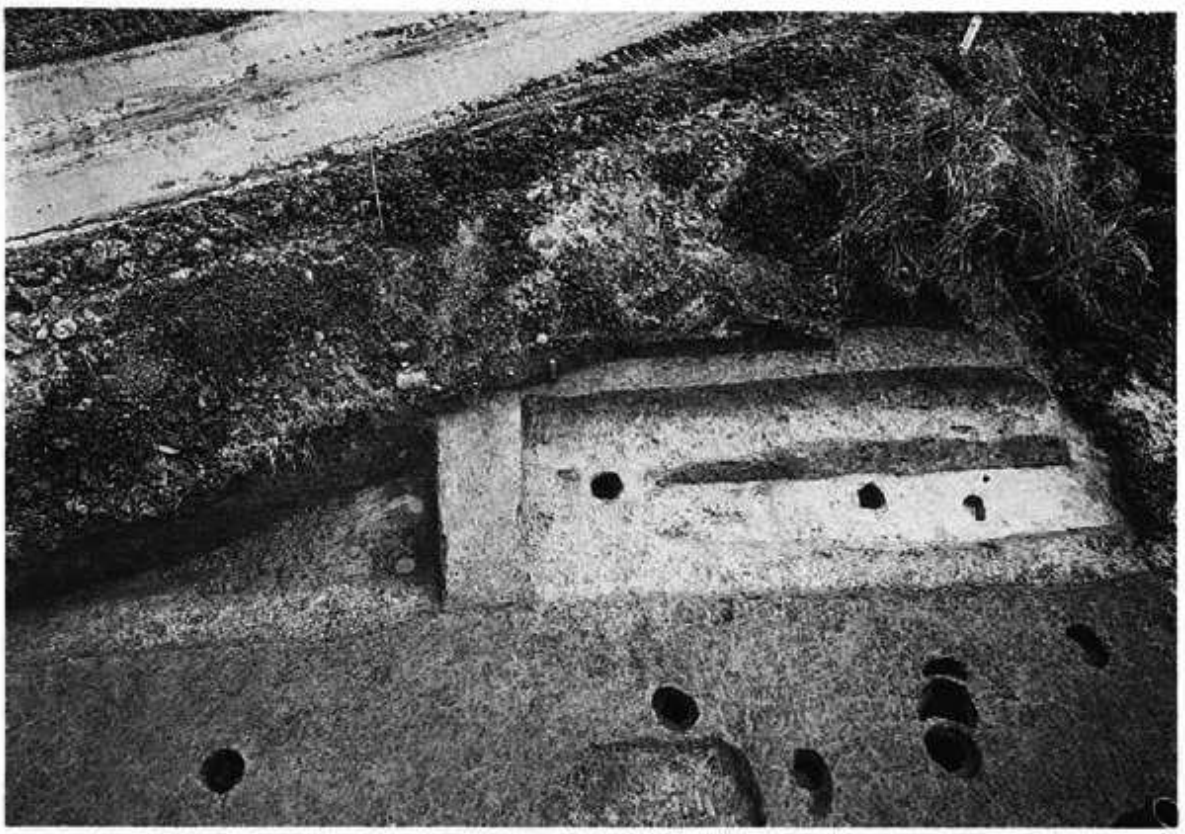
遺跡西半部（東側より）

1号掘立柱建物　SB001

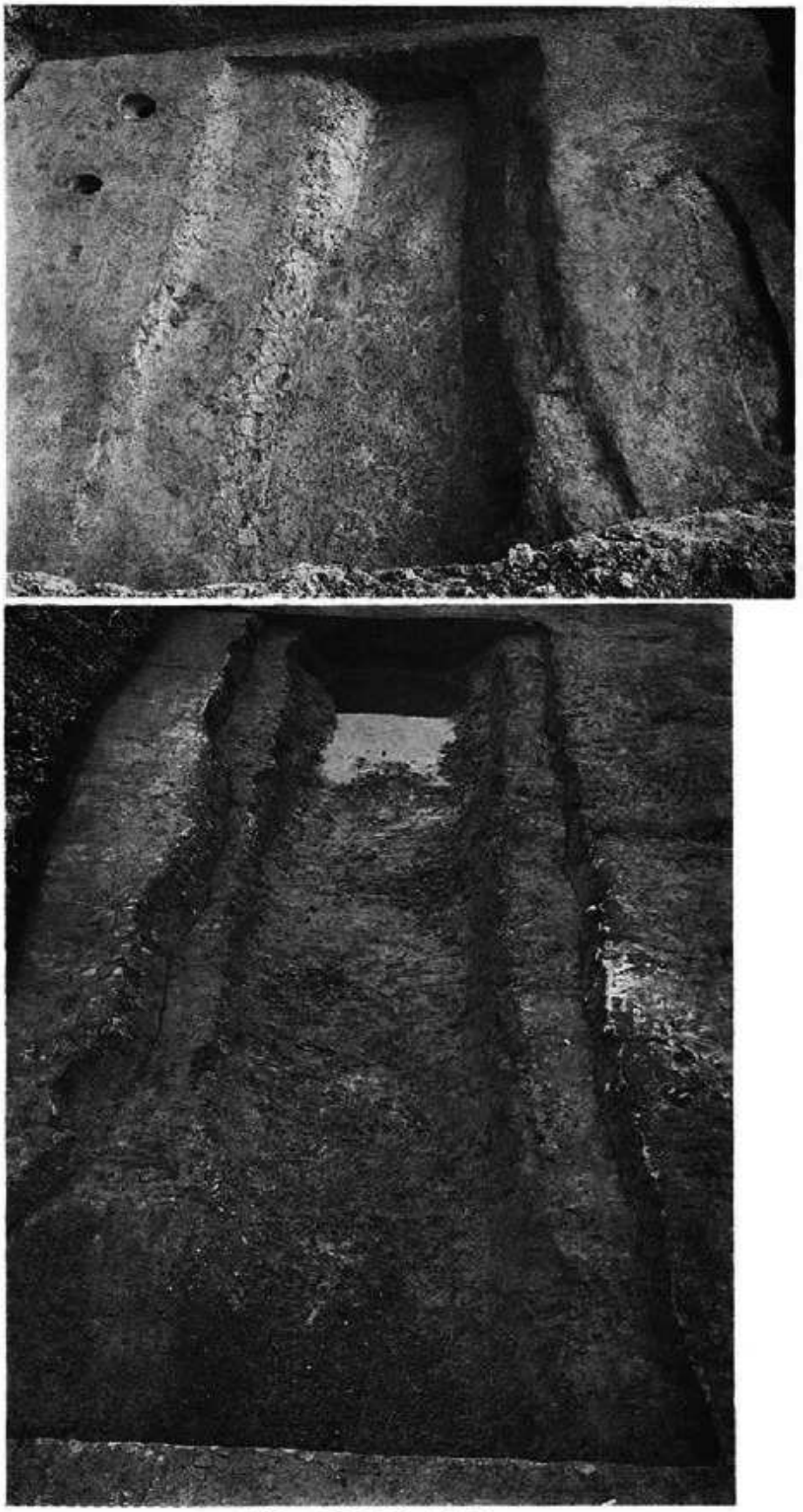
2号掘立柱建物　SB002

3号掘立柱建物　SB003

1号竪穴住居跡

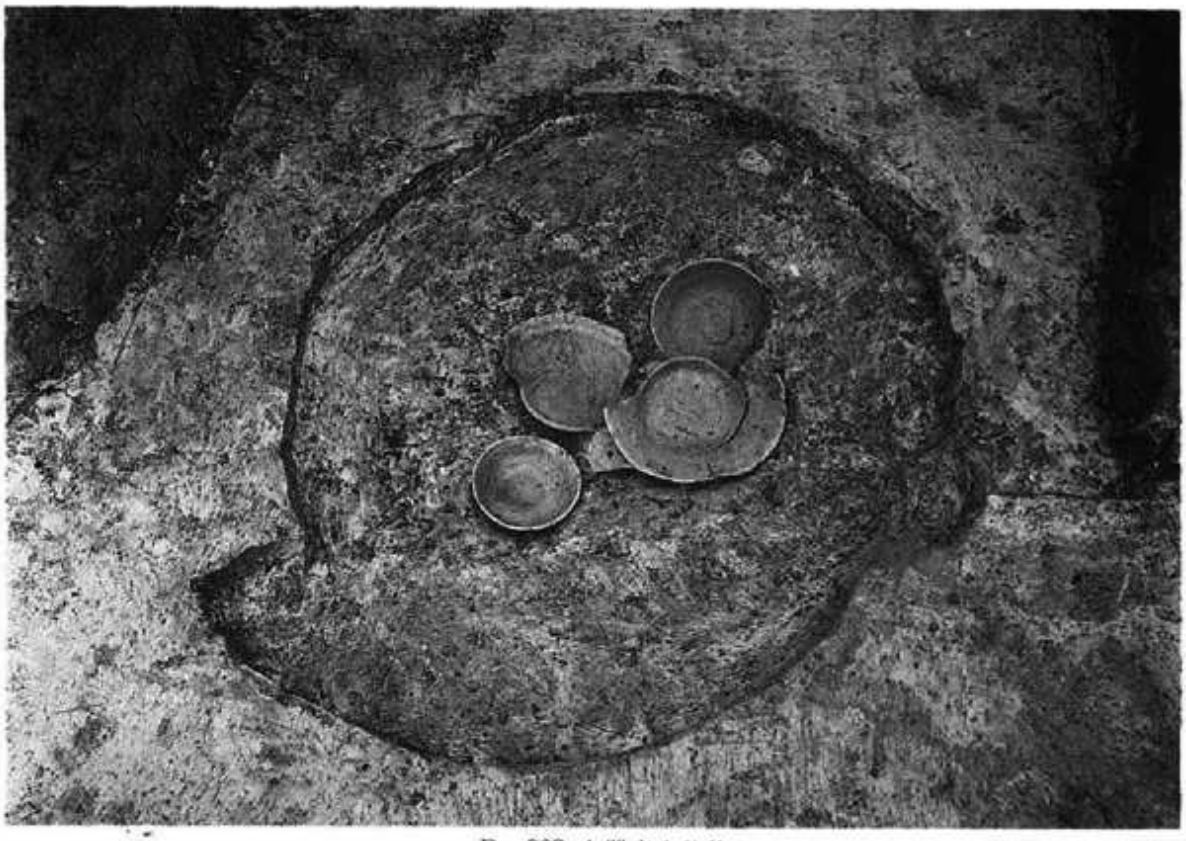


溝1　SD001（南辺）



溝1　SD001（東辺）

P．902 ，P．903



P．902 土器出土状態

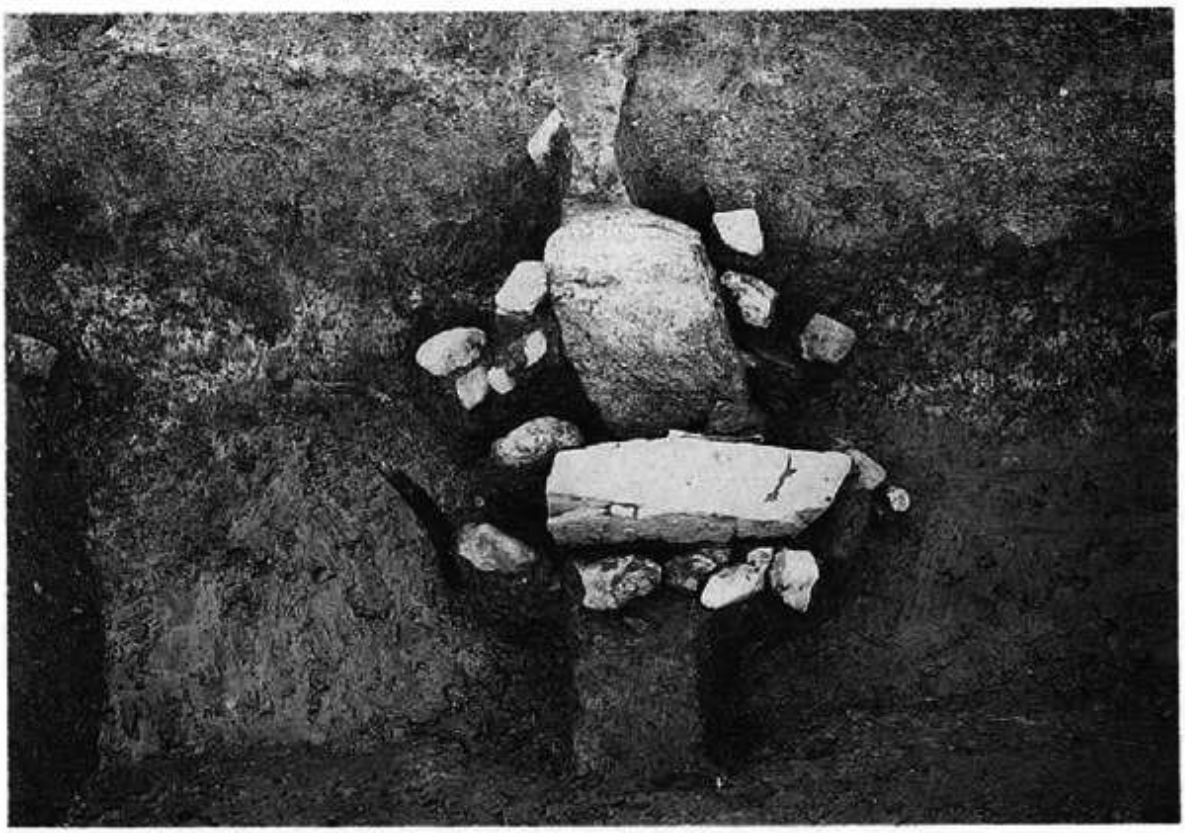
遺跡西半部（北側より）

遺跡西半部（東側よりＳＤ002・003・004等をのぞむ）

遺跡西北部（西側より SK001・002、SE002、SD002 SB006・007等をのぞむ）

溝2　SD002（南側より）

溝2　SD002の石橋



同　上

1号井戸　SE001

1号土壙　SK001

第２次調査区（ＳＤ001・002，ＳＥ003等をのぞむ）

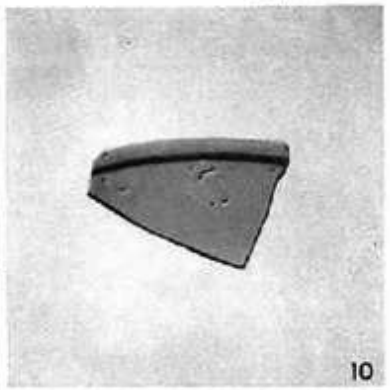
３号井戸　ＳＥ００３

平安期土器　1

平安期土器　2

1

2


10

2

4

11

白磁

3

5

8

6

1

8

瓦質土器

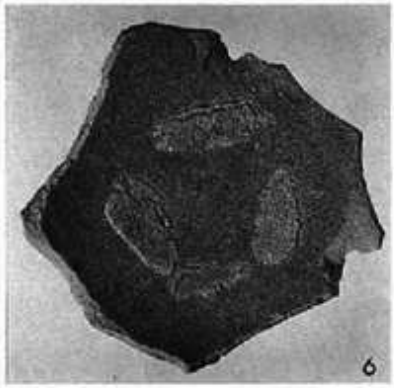
土師器

5

5

13

11


6

15

22

14

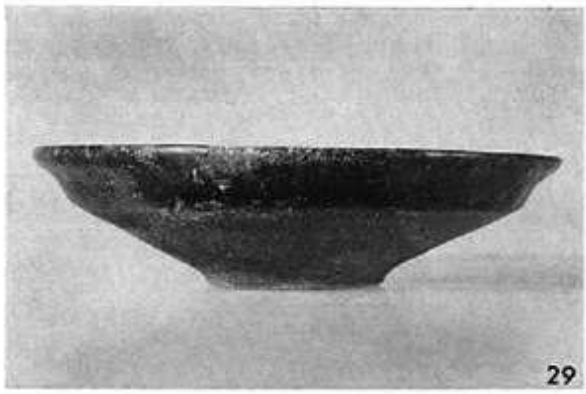
15

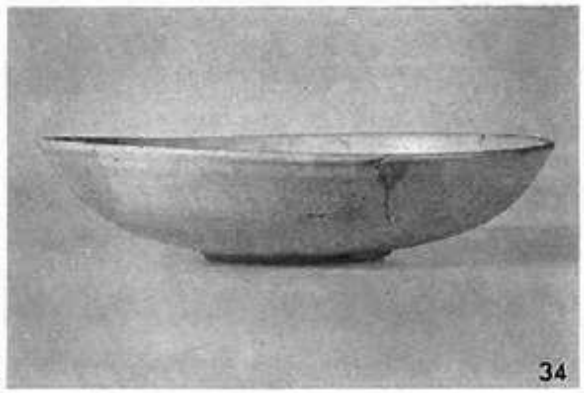
30

14

16

唐津系陶器　1


29


34

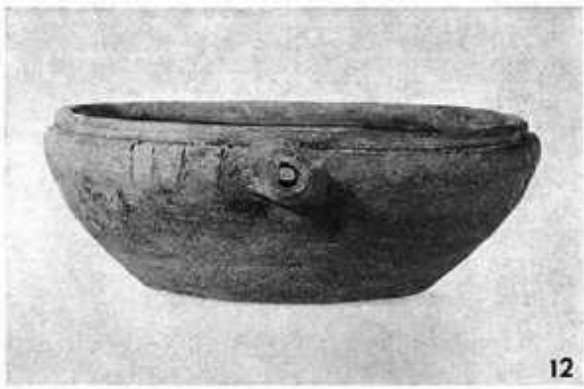
29

34

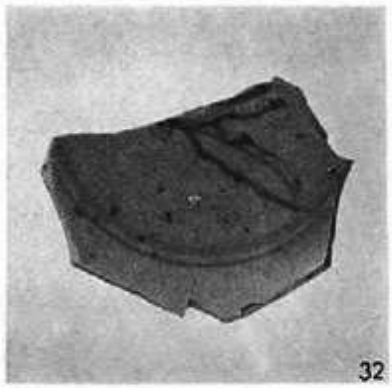
29

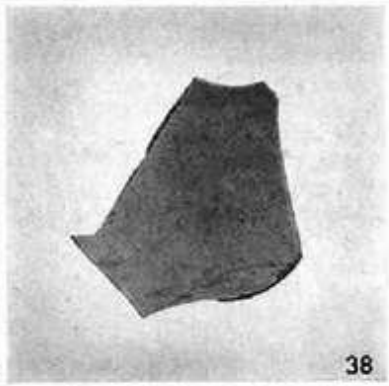
34

唐津系陶器　2

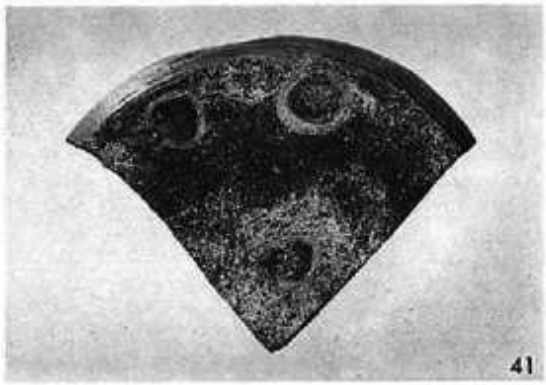

12

19

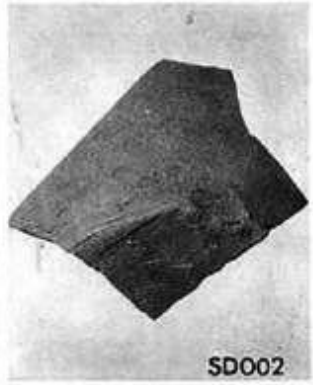

32


38

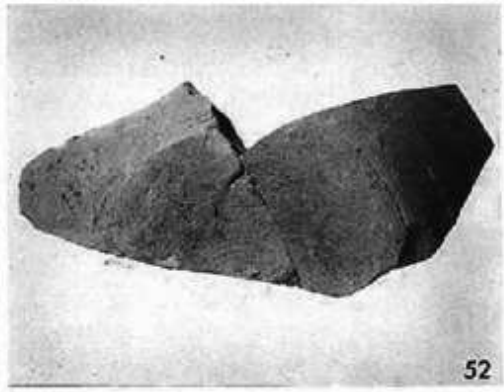
40


41

56

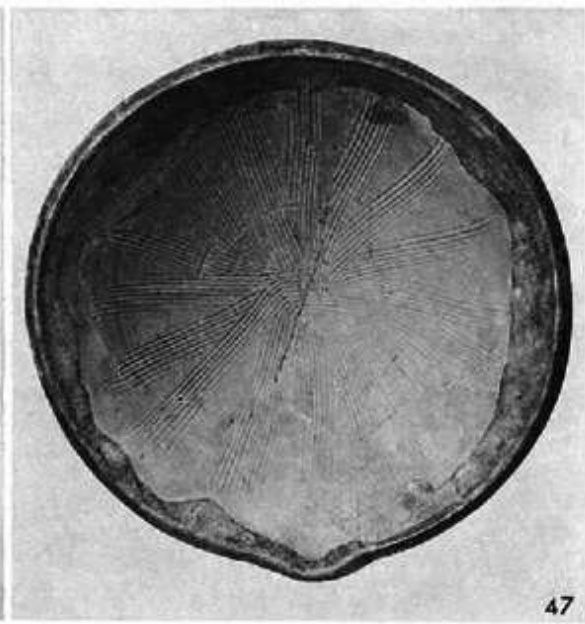

SD002

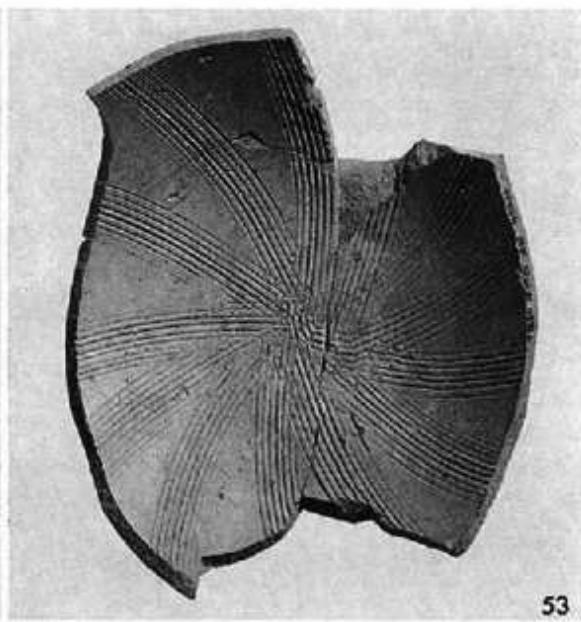
51


52

53

唐津系陶器3



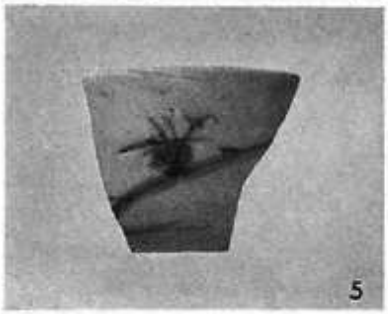


唐津系陶器　4

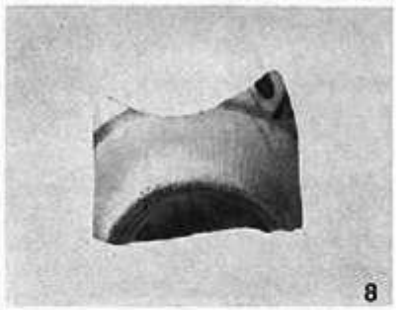
1

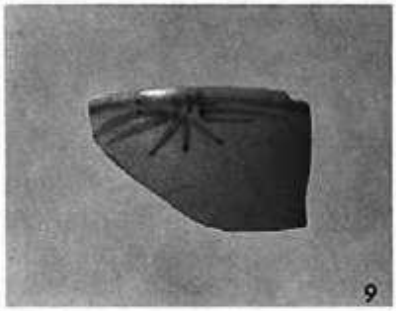
2

4

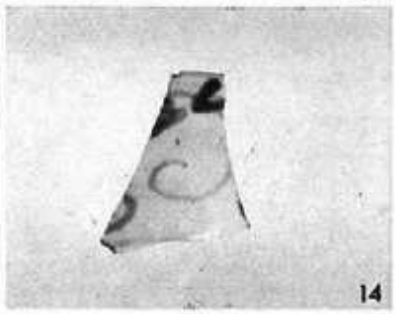

5

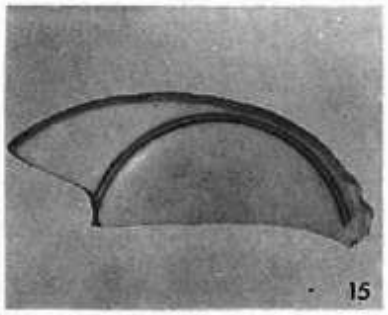
6

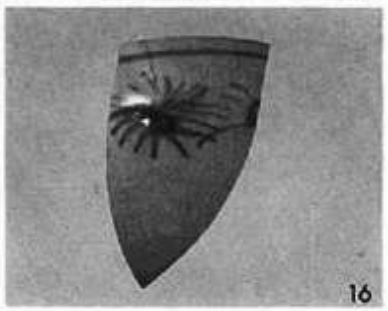

8

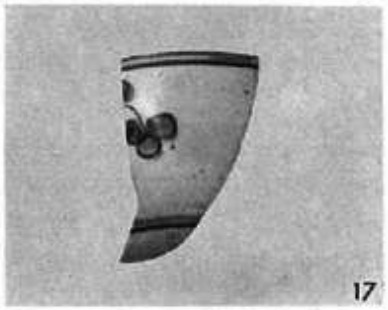

9

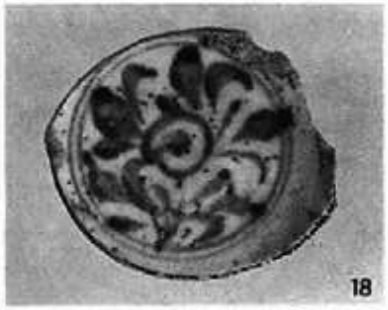
13

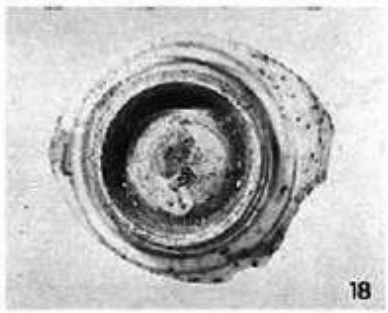

14


15


16


17

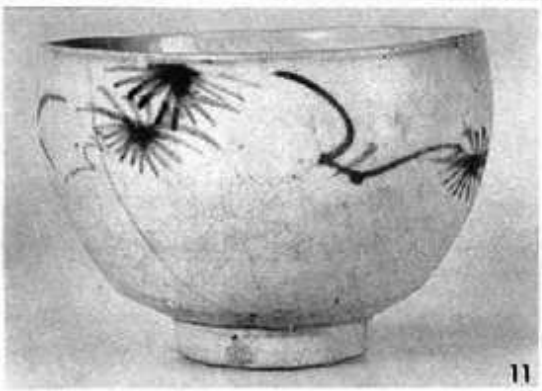

18


18

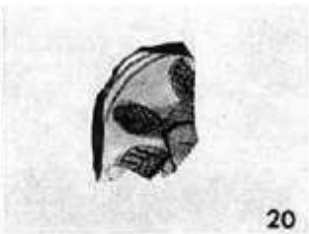
染 付 1

12

10


11

19


20

20

21

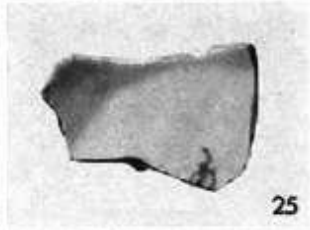
22

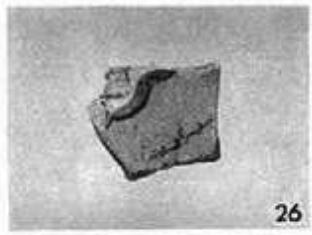
22

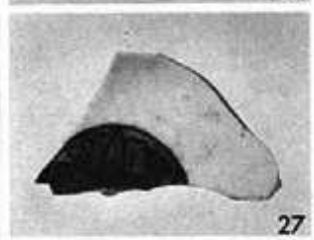
23

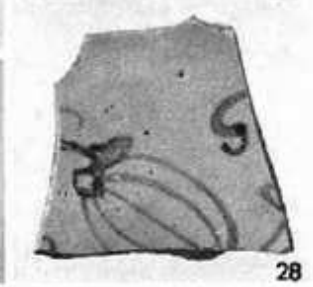
23

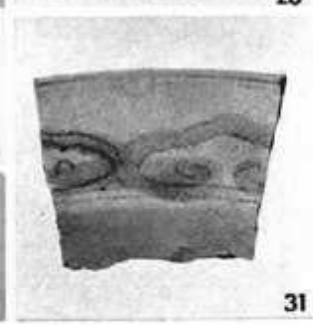
24

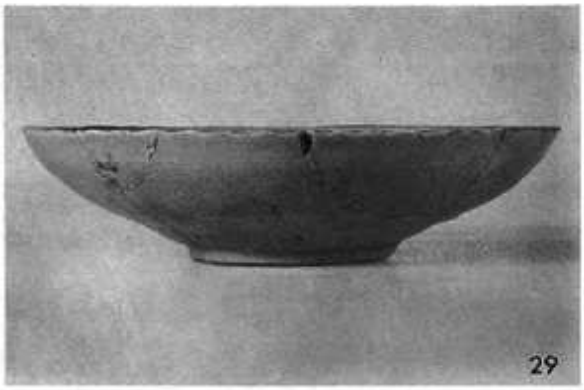

25


26


27


28


31


29

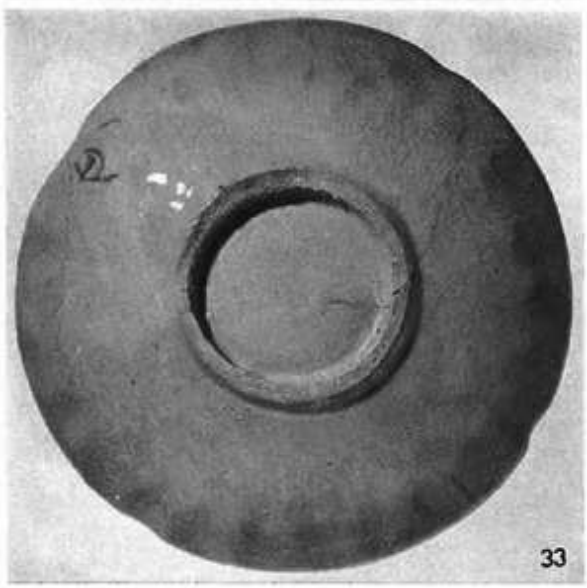
30

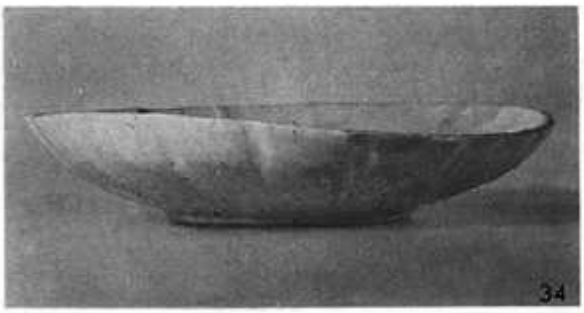
30

29

33

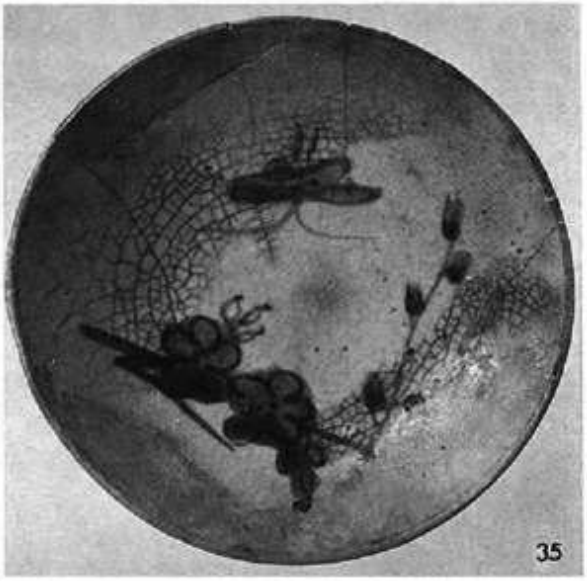
29

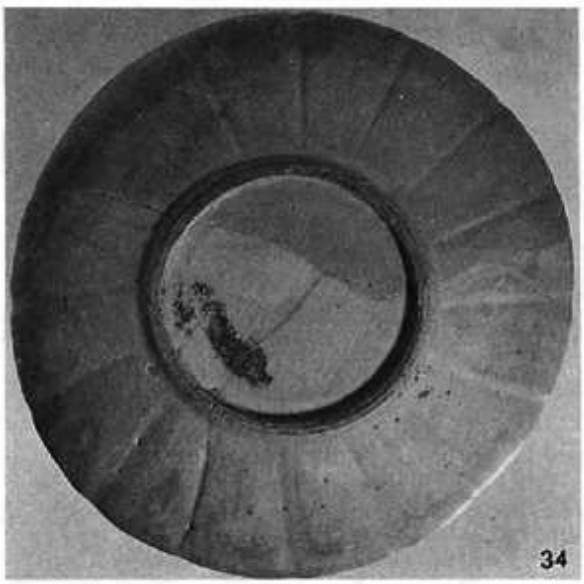

33

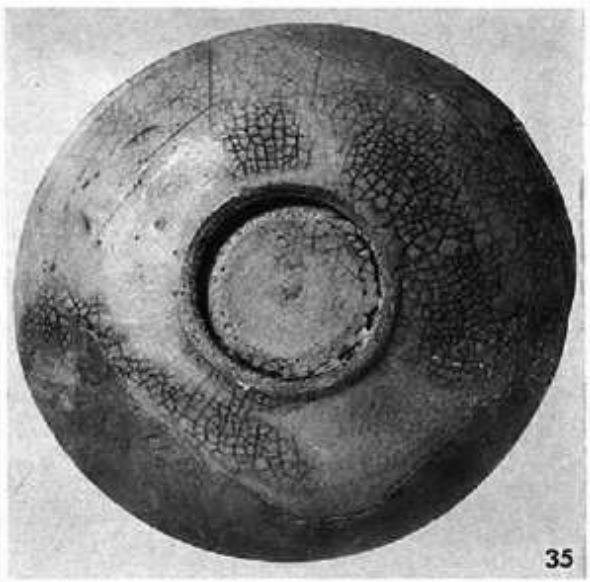

34

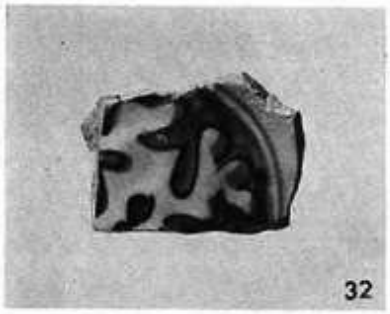
35

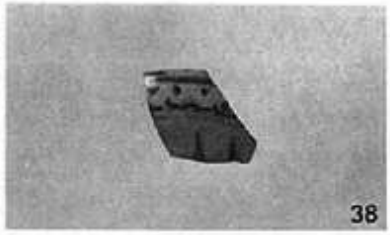
34

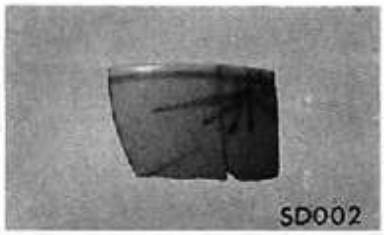

35

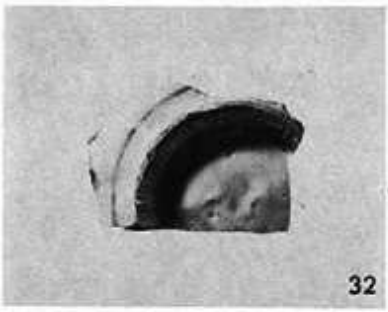

34


35

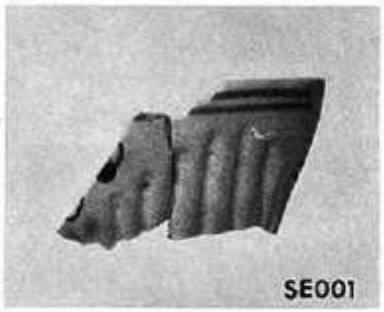

32


38


SD002


32

40


SE001

36

40

表 層

37

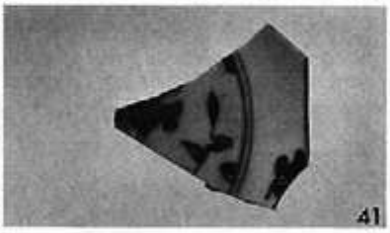
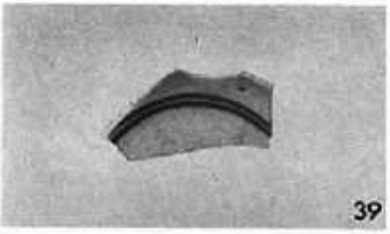

41

表 層


39

41

表 層

39

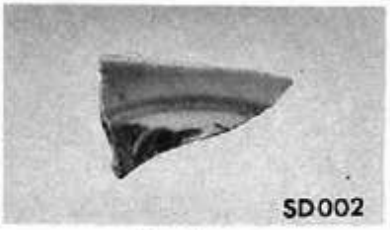

SD002

表 層

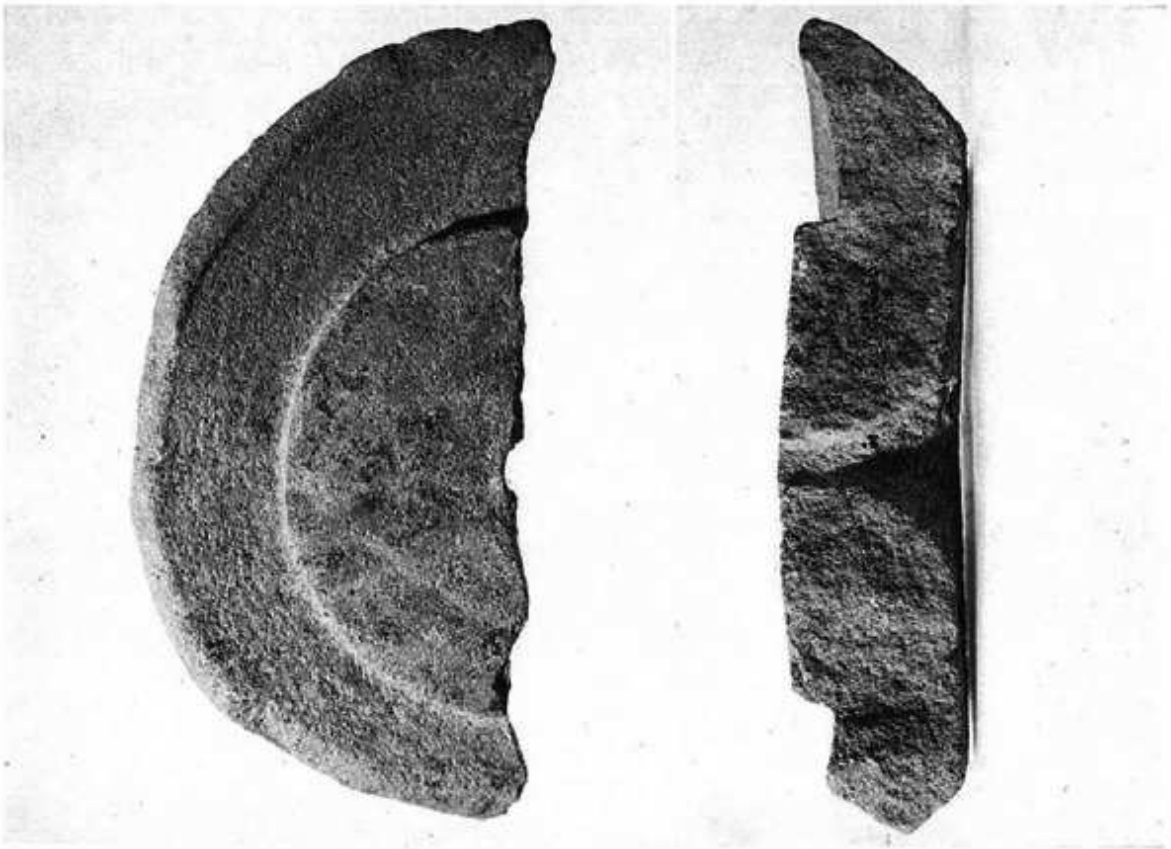
染 付 5

石 戈

石 匕

滑石製硯

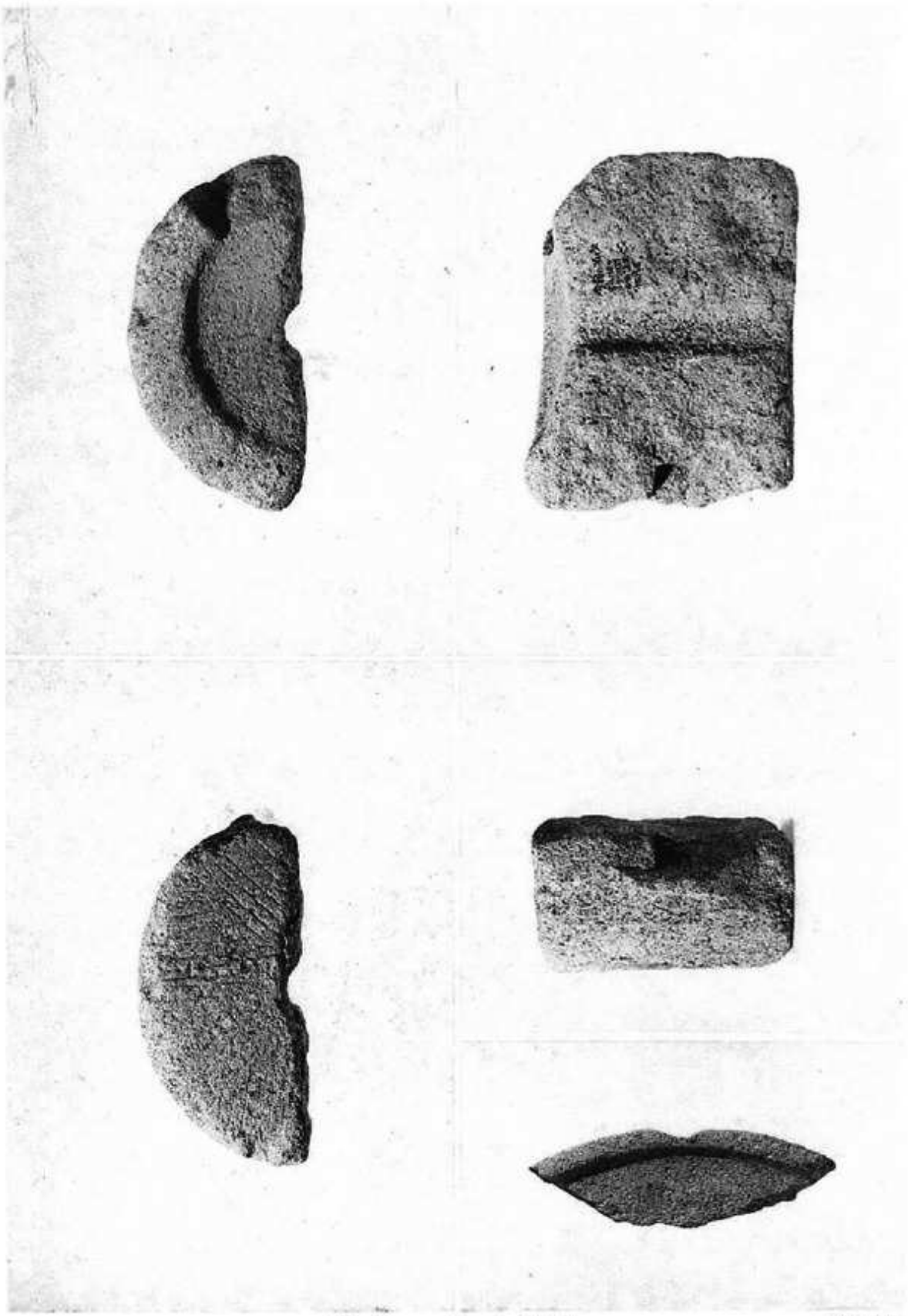
〈縮尺1/1・石匕は1/2〉



白 1

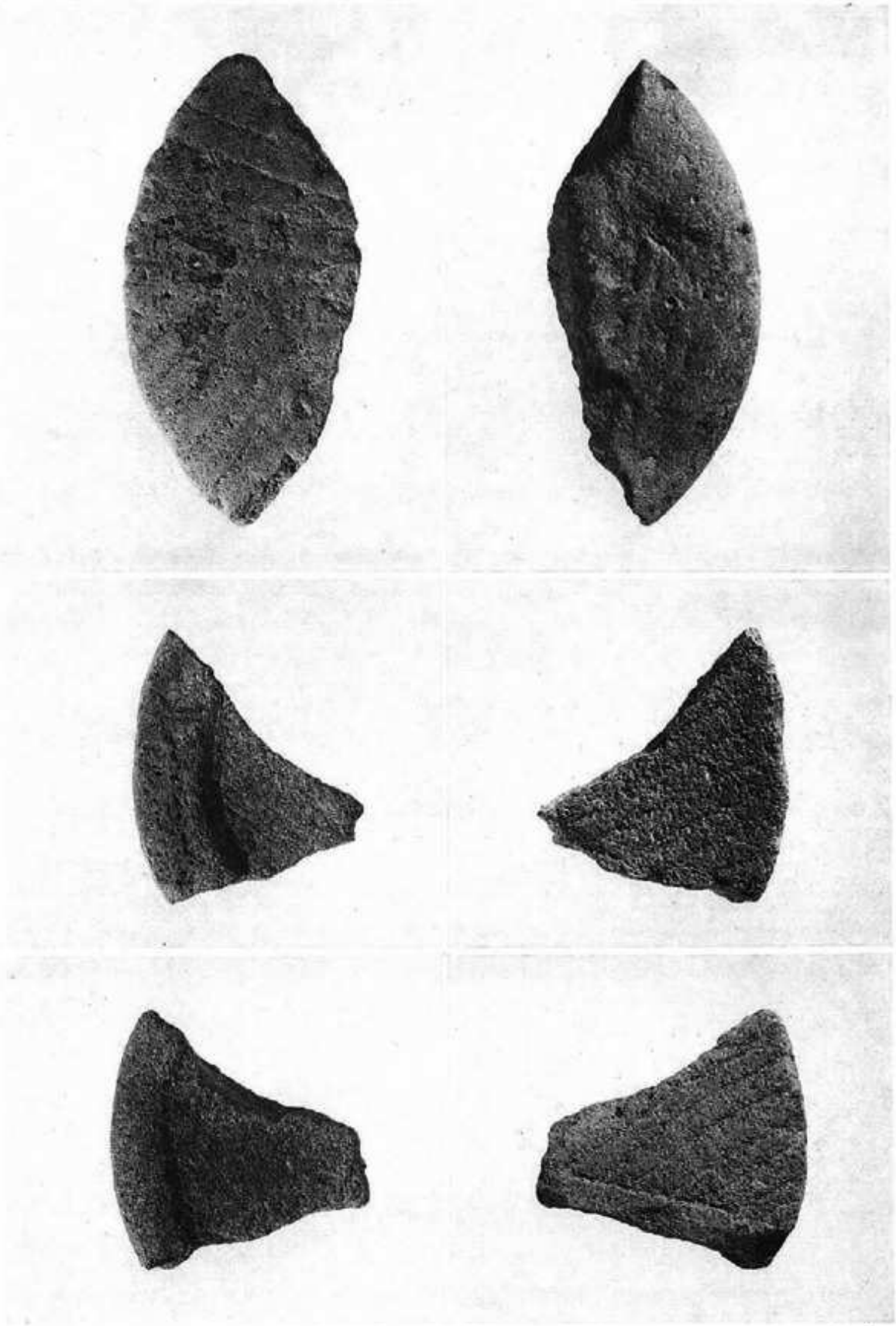
白 5

〈縮尺 1/3〉

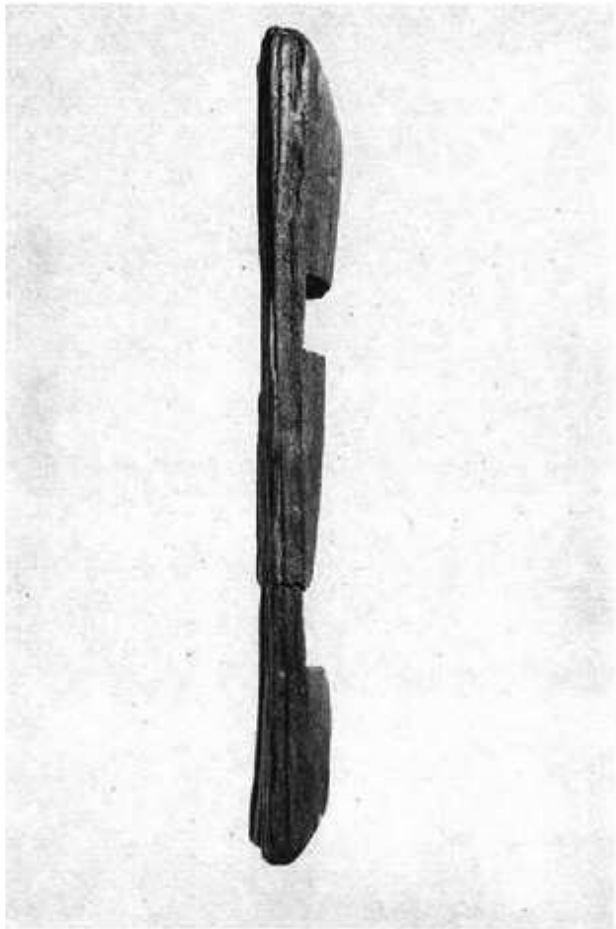


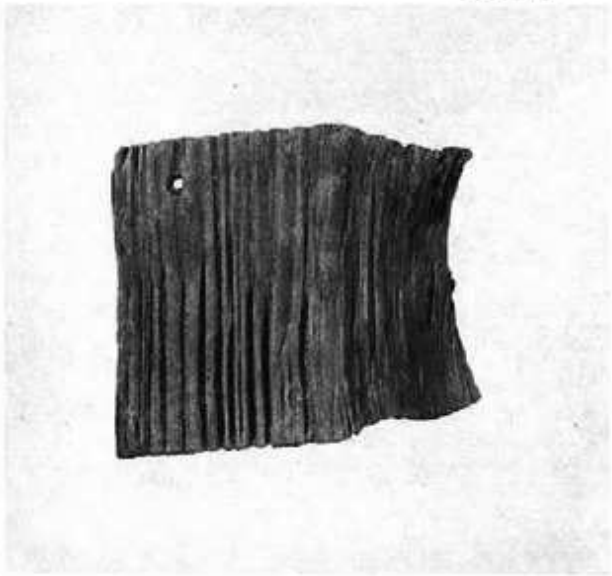
白 2 ・ 白 8 (右下)

(縮尺 1/3)

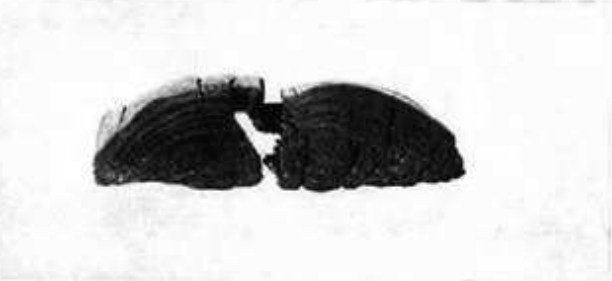


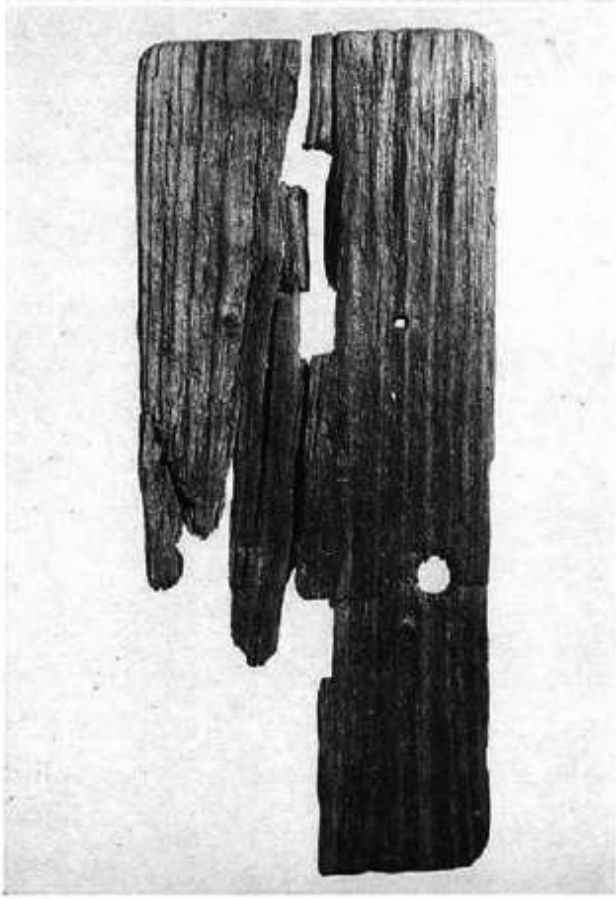
白 6（上）・7（中）・3（下）　〈縮尺 1/3〉





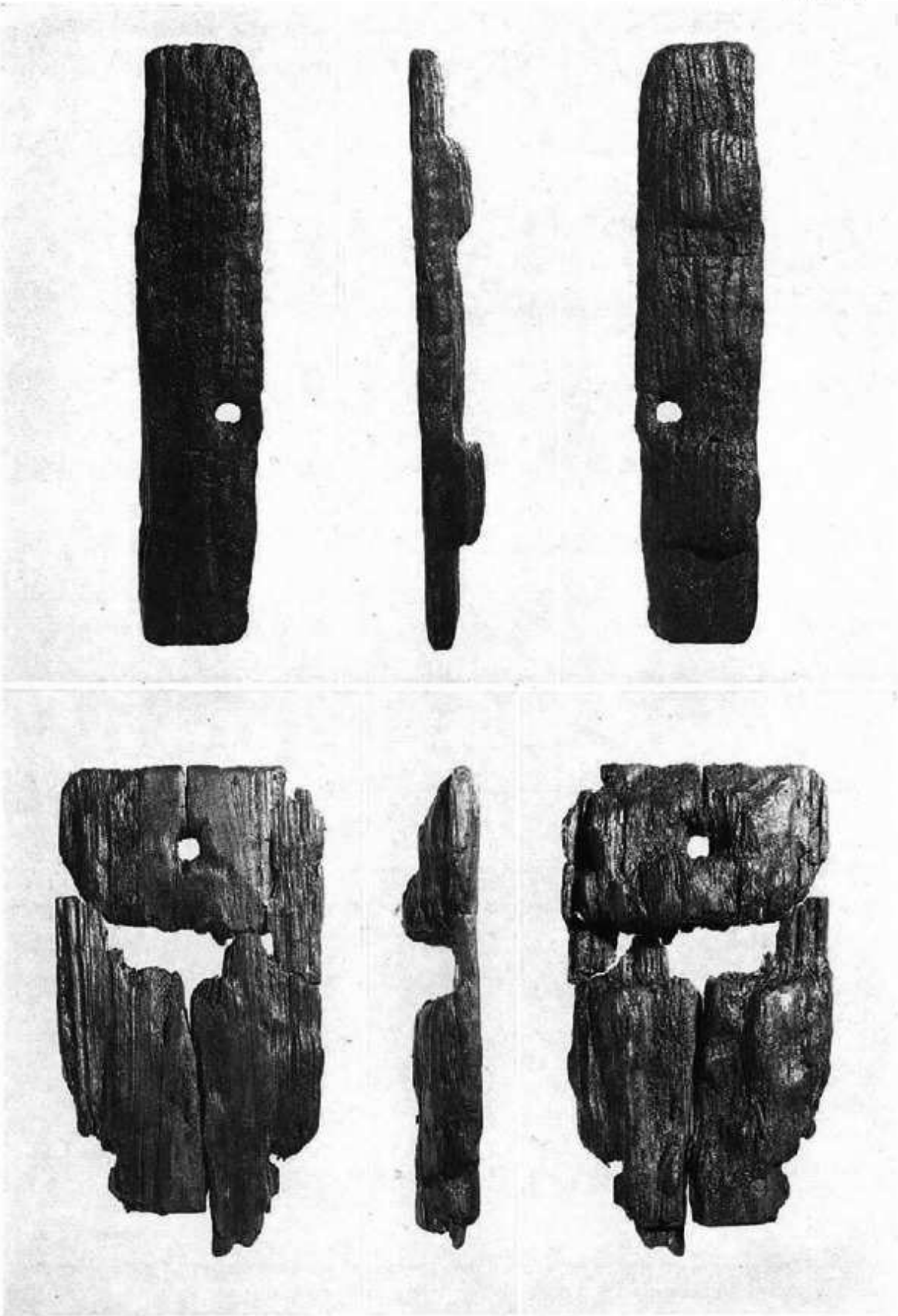
板状木製品3





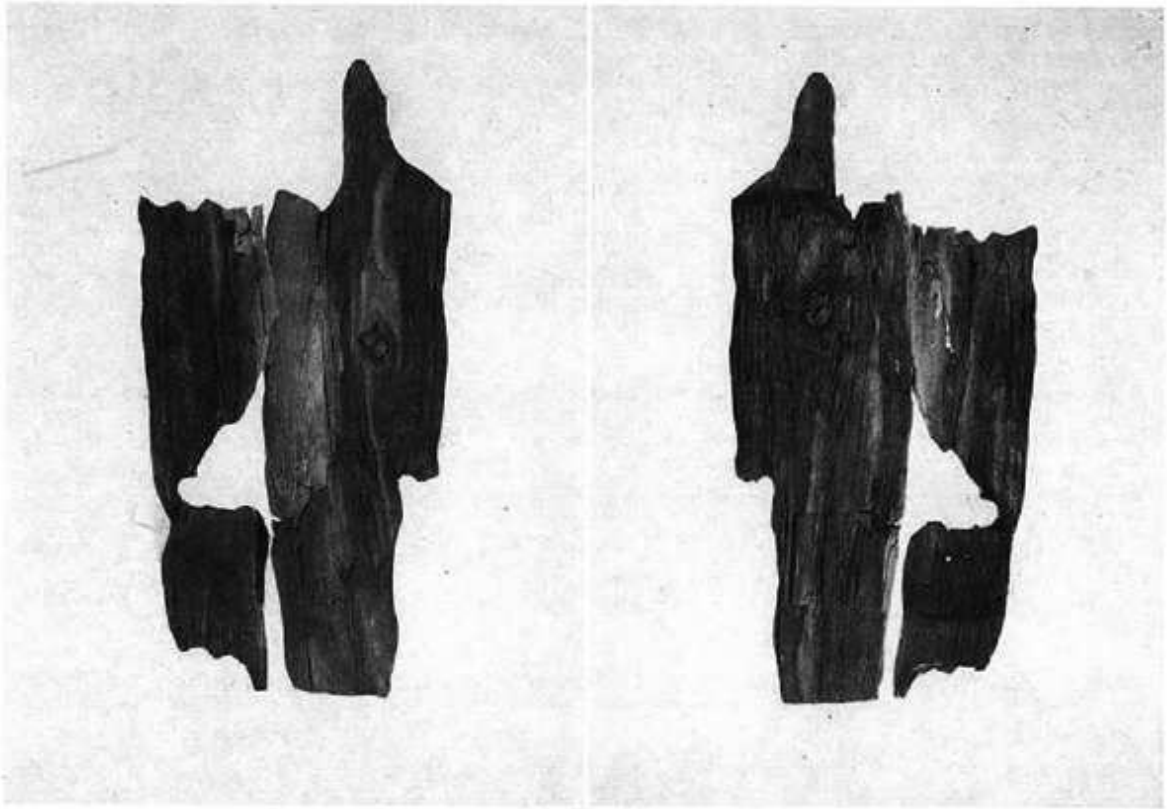
下 駄 1

〈縮尺1/2〉

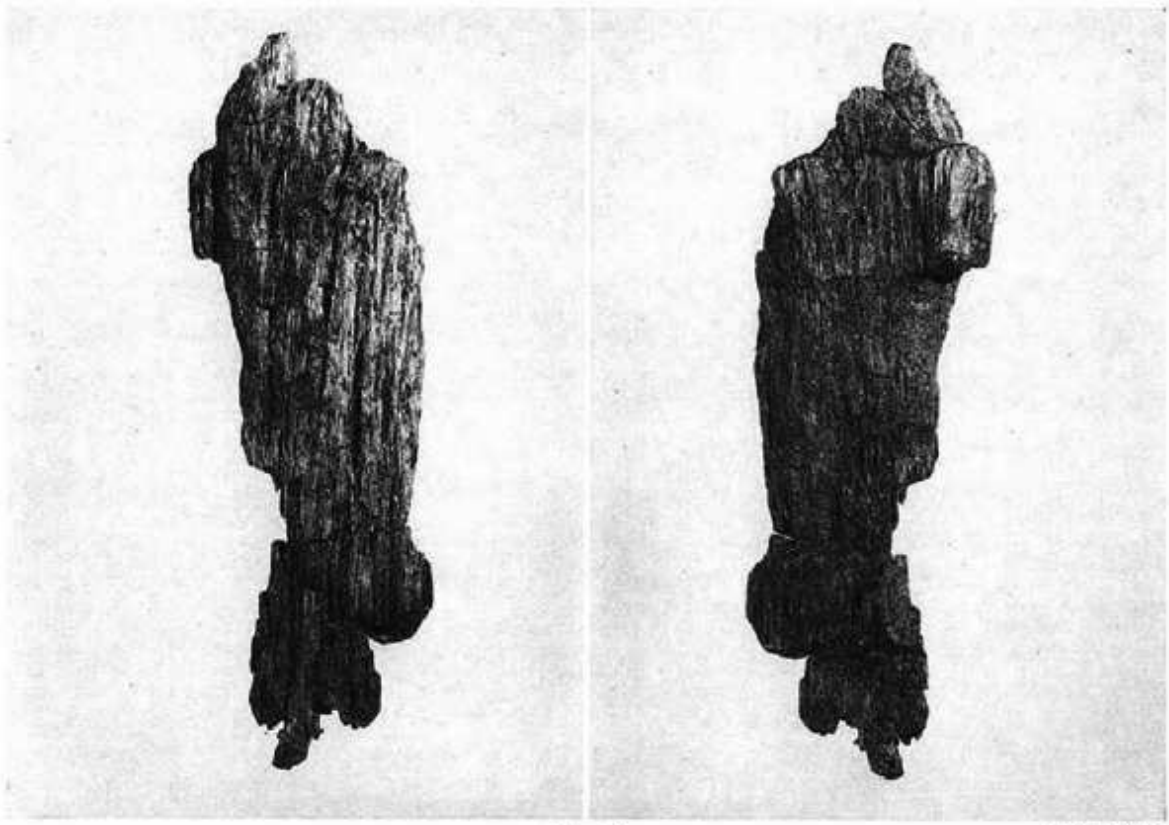


下 駄 4（上）・2（下）

〈縮尺1/2〉

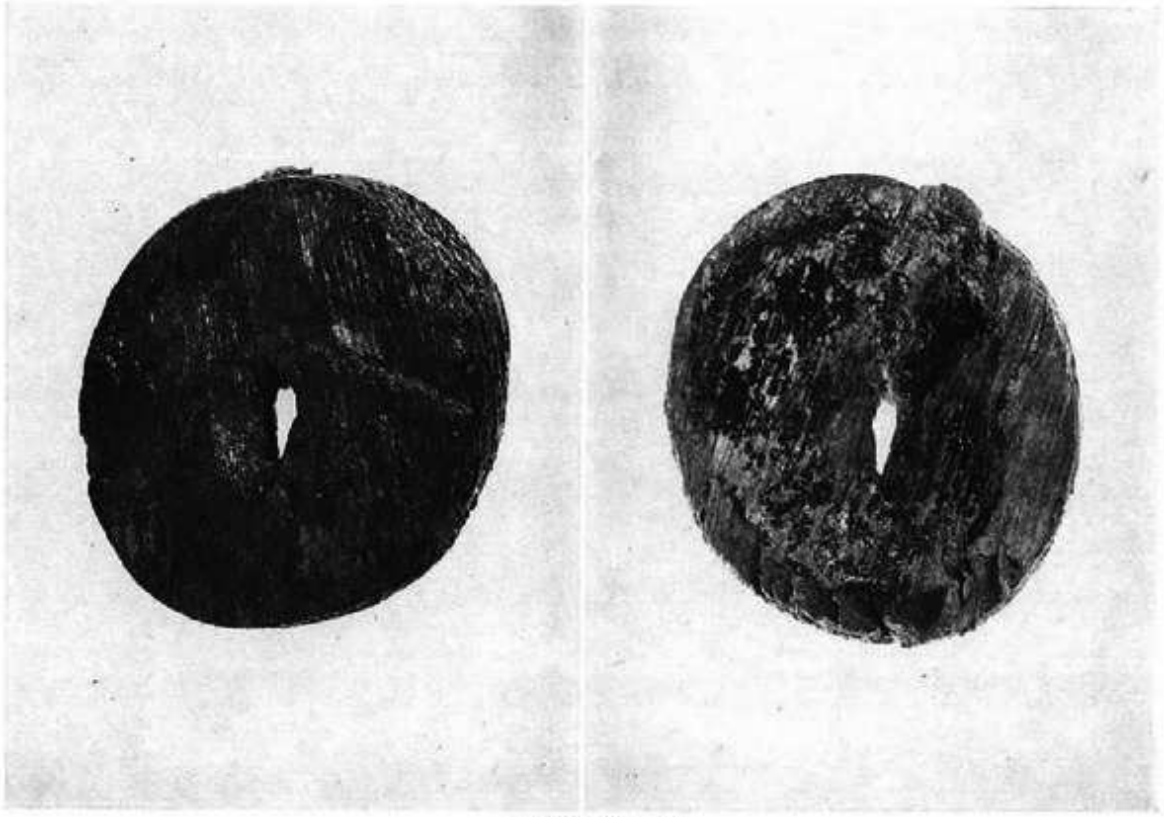


下 駄 3

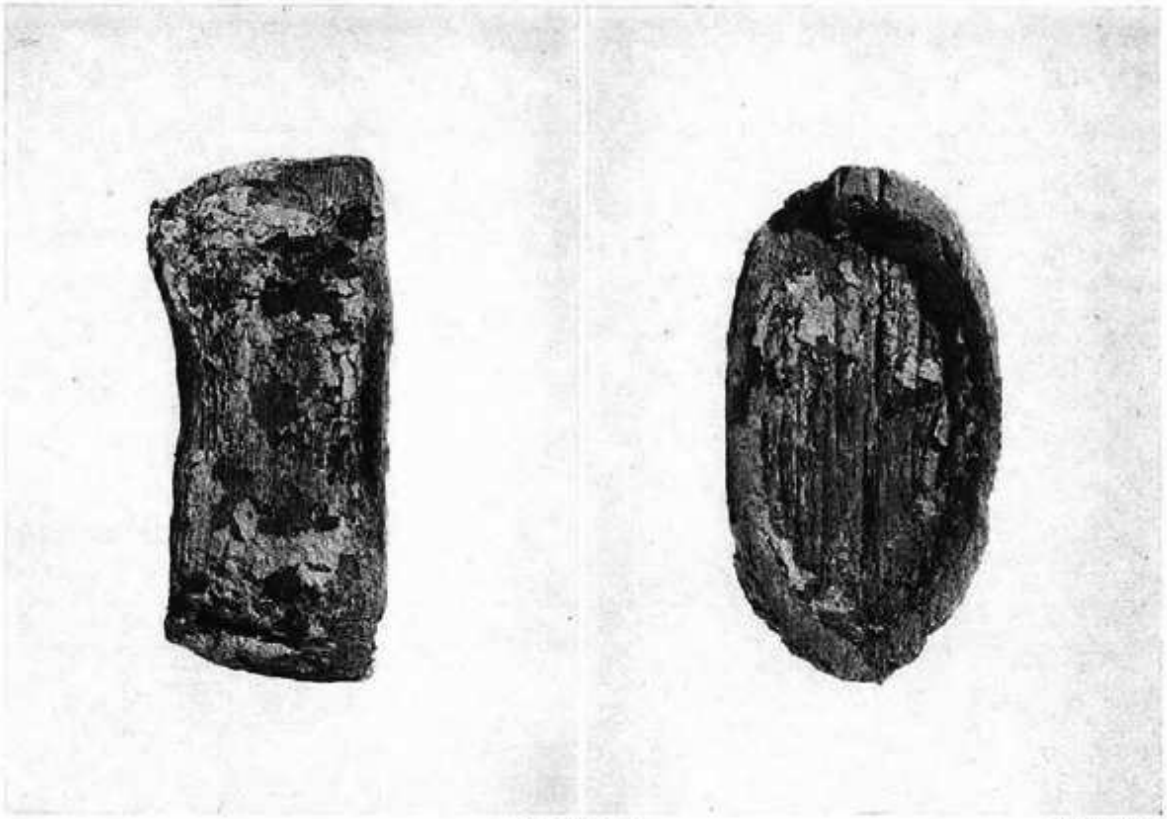


下 駄

〈縮尺 1/2〉

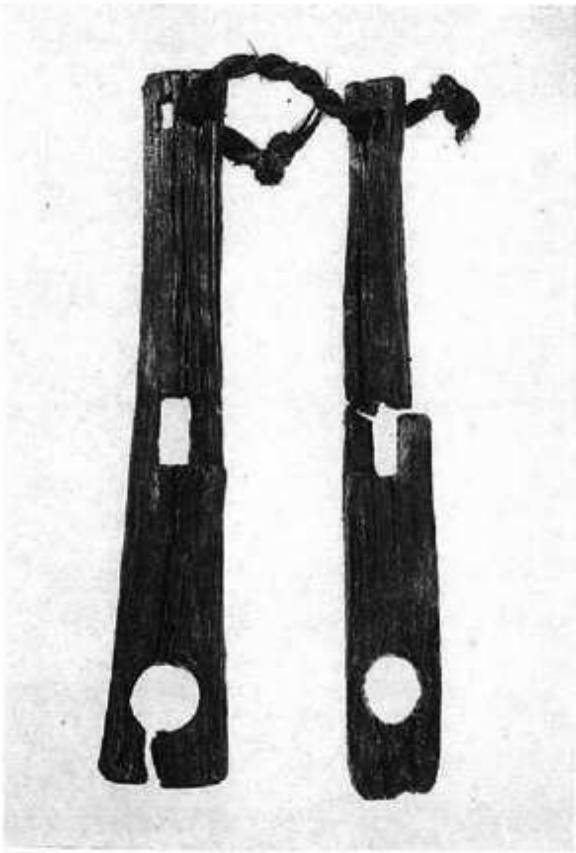


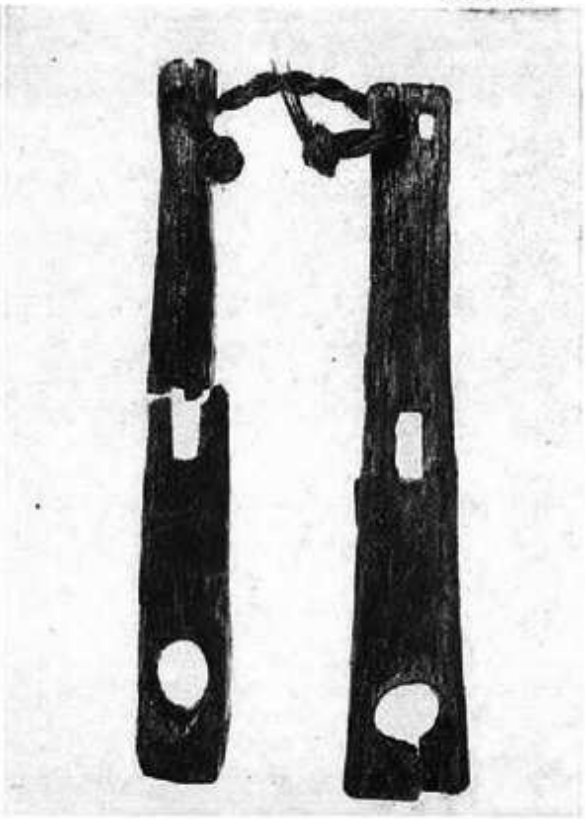
木製椀高台　2

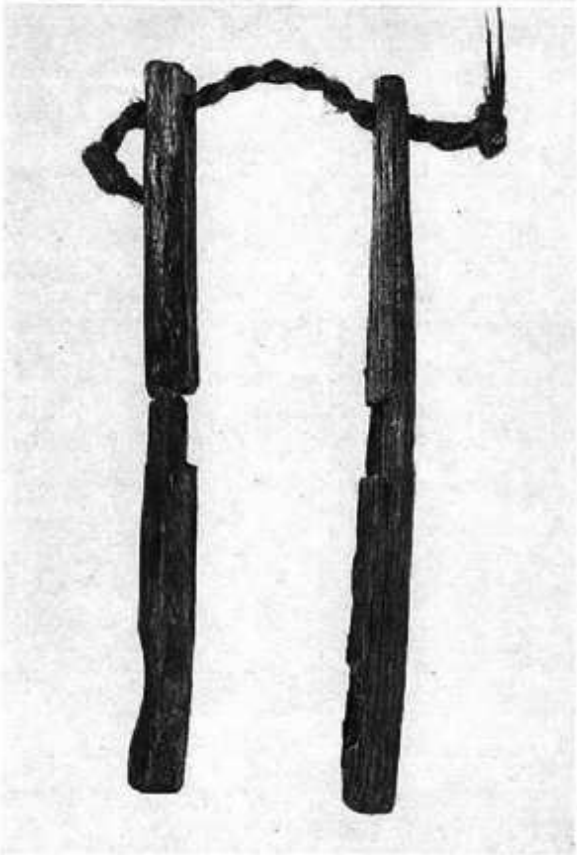


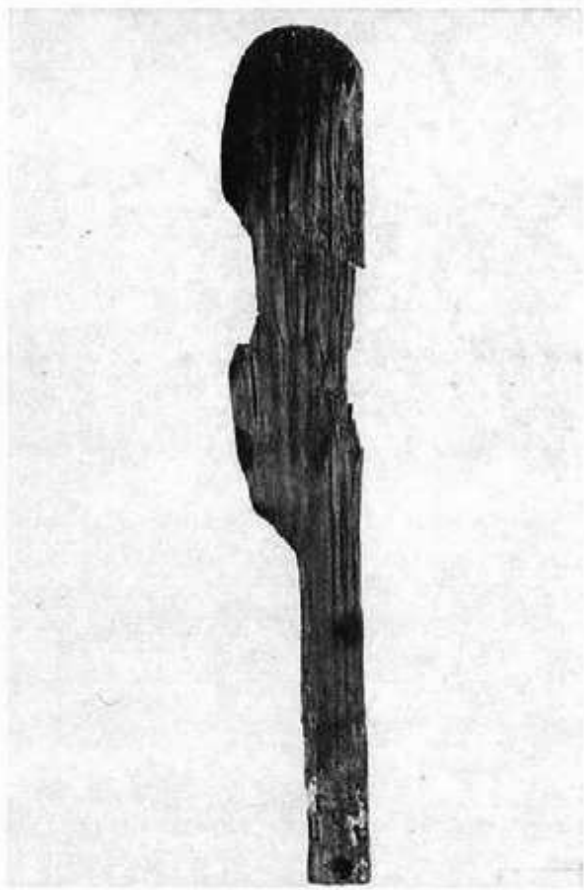
木製椀高台

〈縮尺 1/1〉





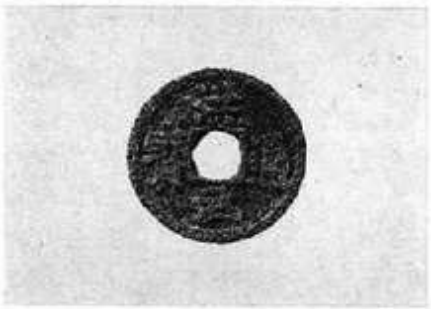




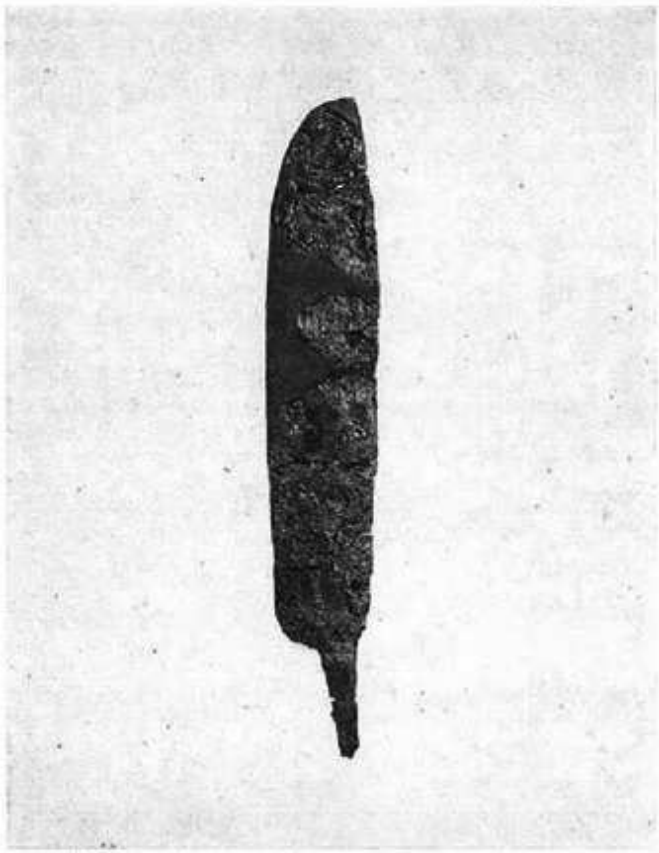
有孔板状木器

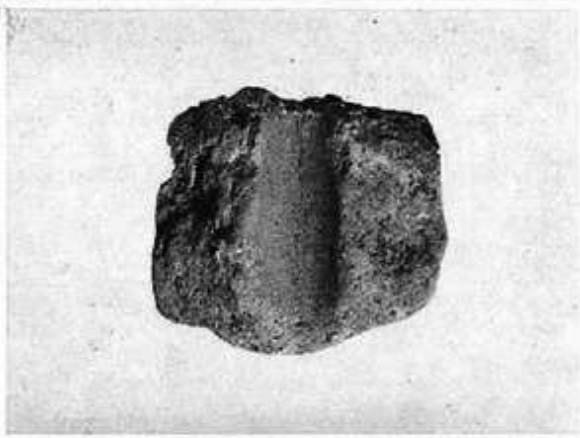
杓文字状木製品

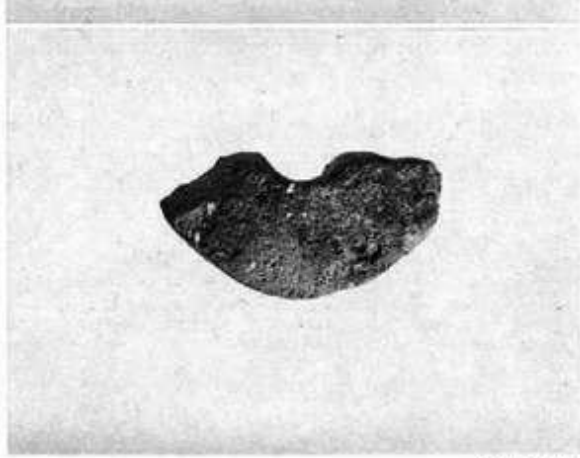
〈縮尺 1/2〉



環状銅製品（左上実大）・銅銭（左下実大）・包丁（右）

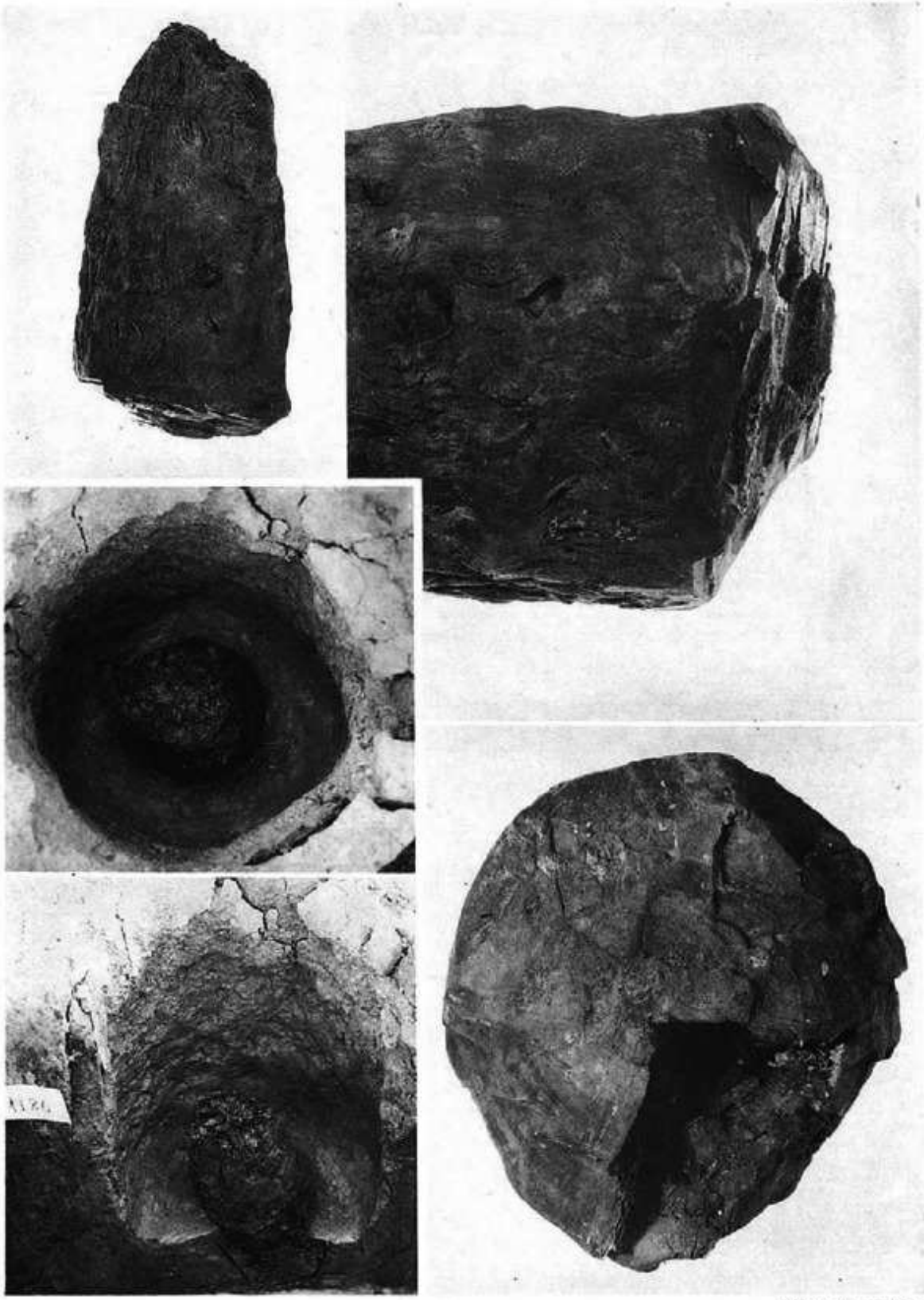




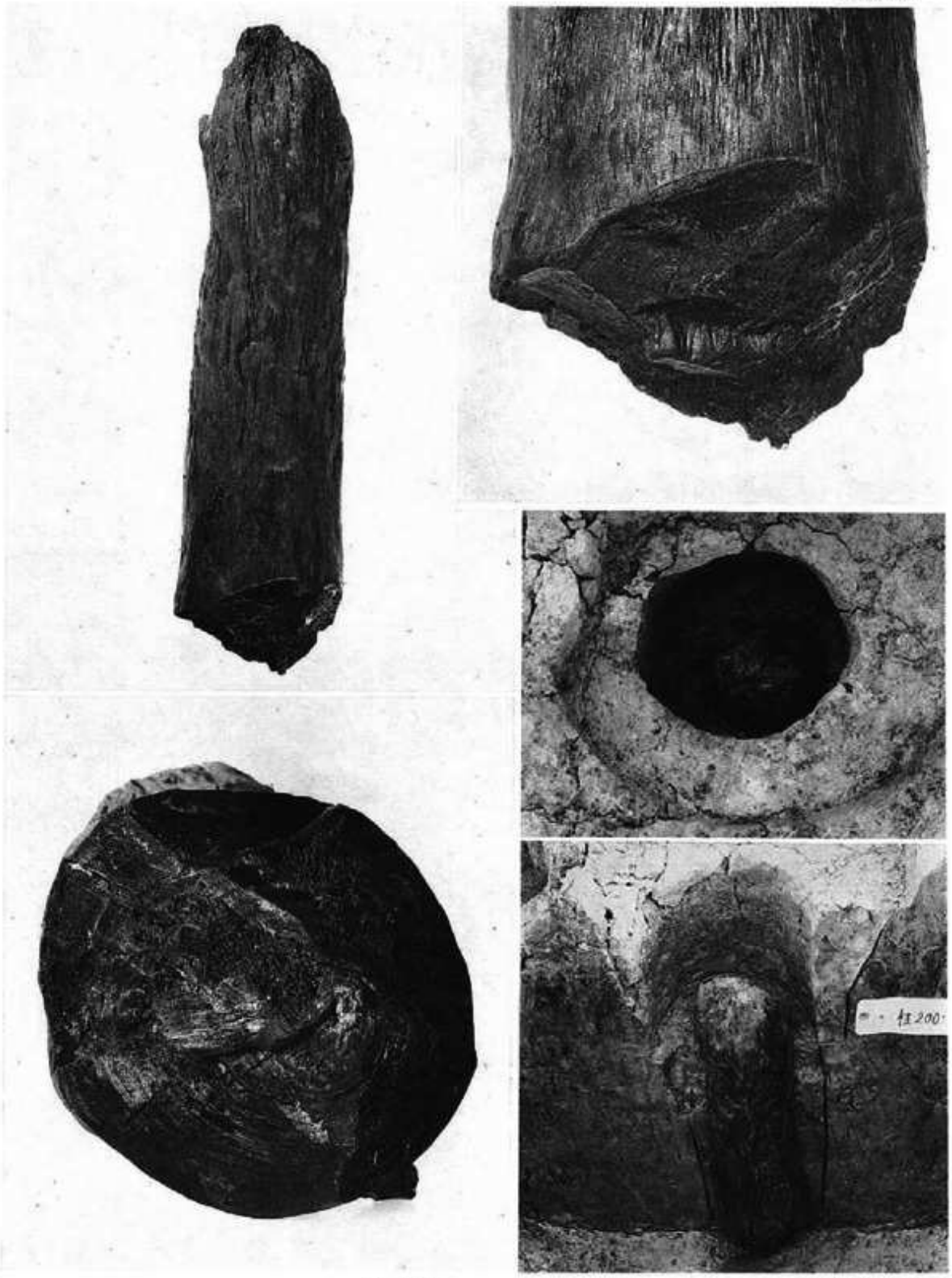


輪羽口3（左）・5（右）

〈縮尺 1/2〉

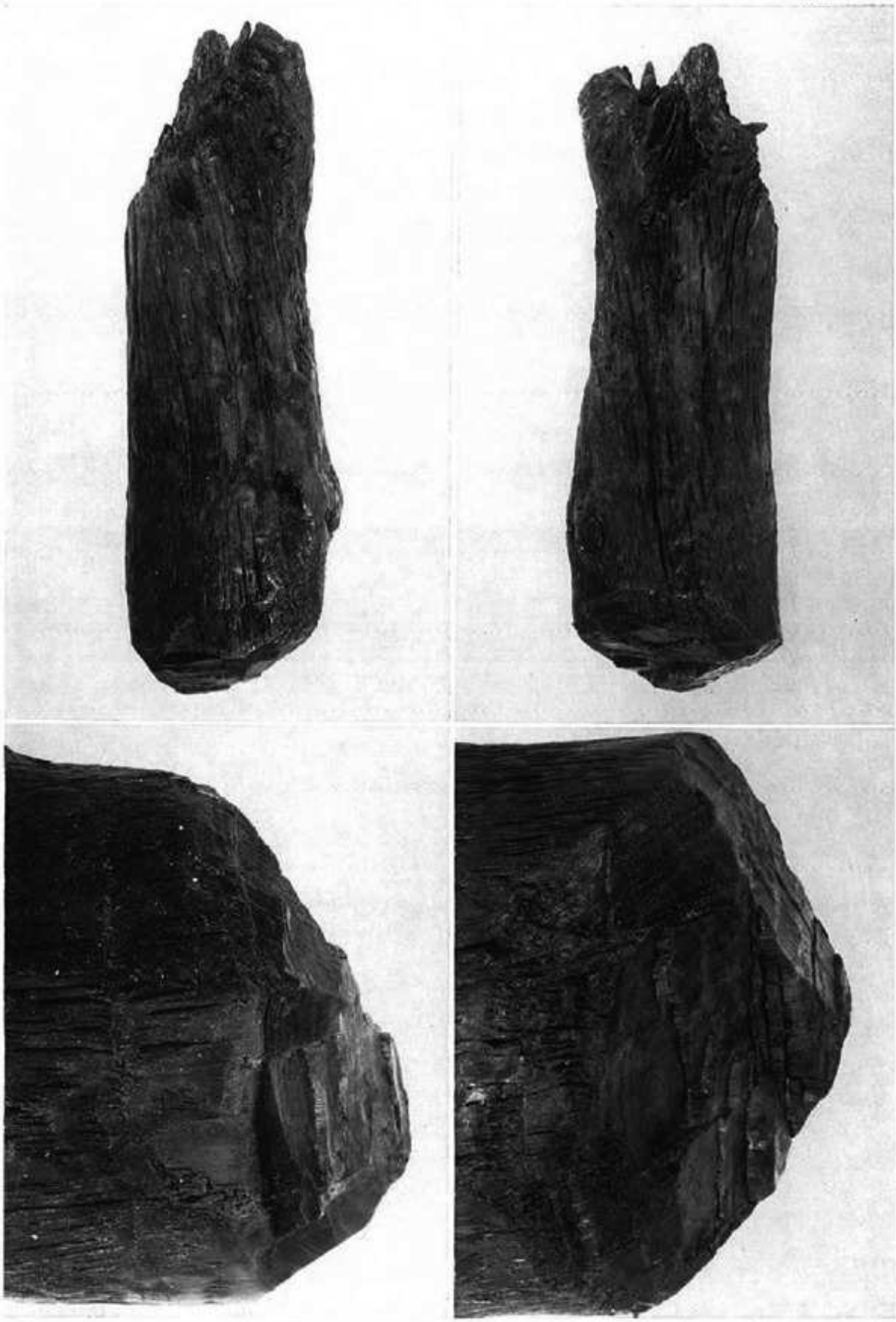


〈縮尺1/2・1/5〉



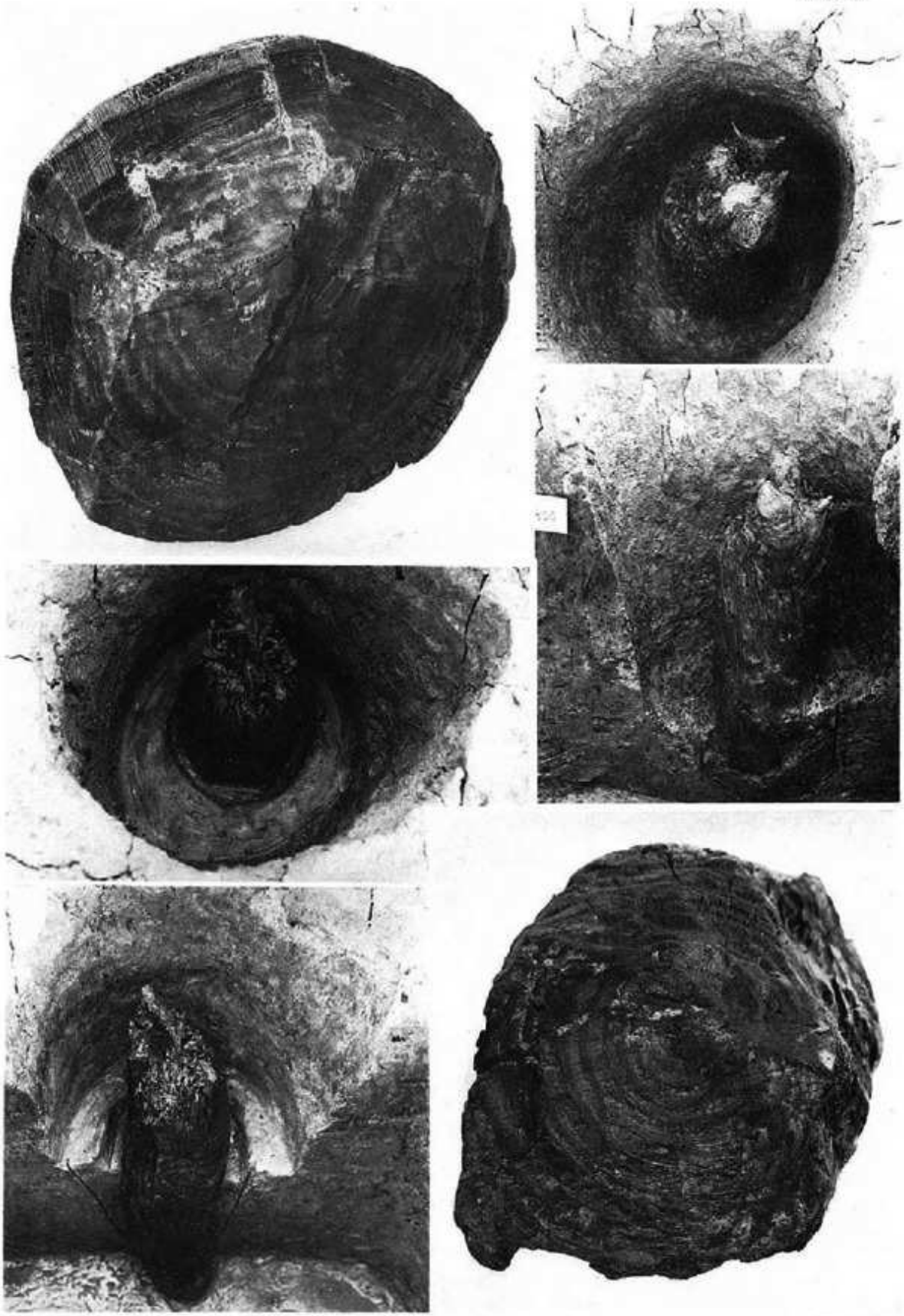
柱 200

〈縮尺 1/2・1/5〉



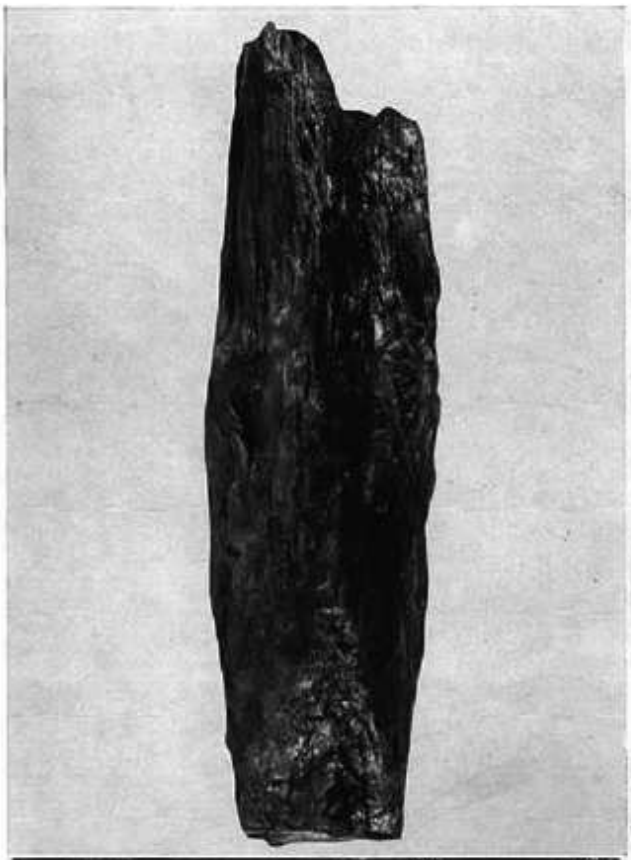
柱 300

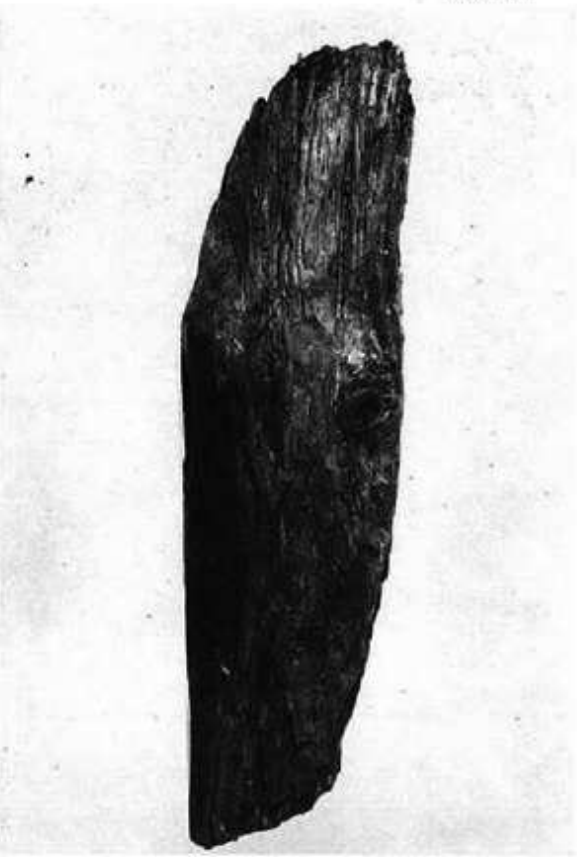
〈縮尺 1/2・1/5〉

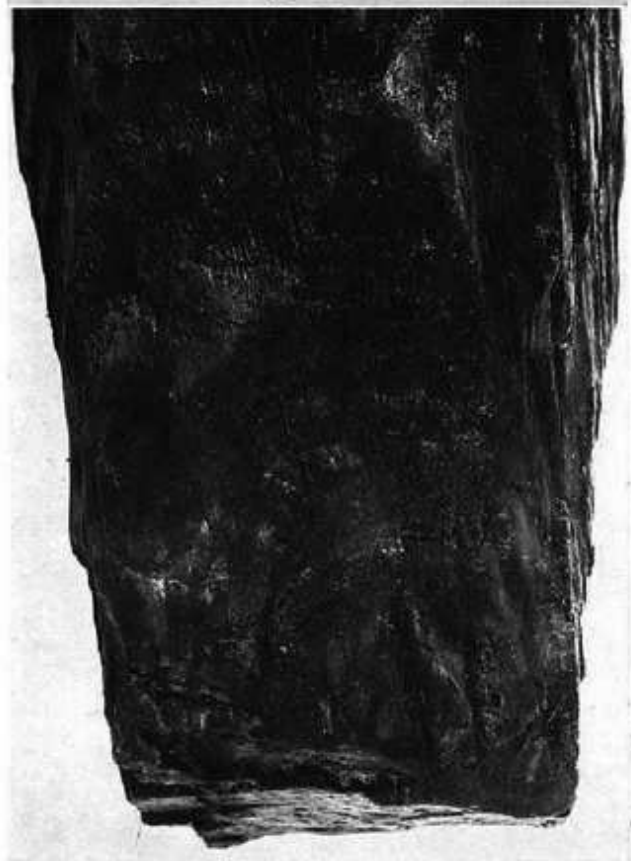


柱 300 （上） 柱 450 （下）

〈縮尺 1/5〉

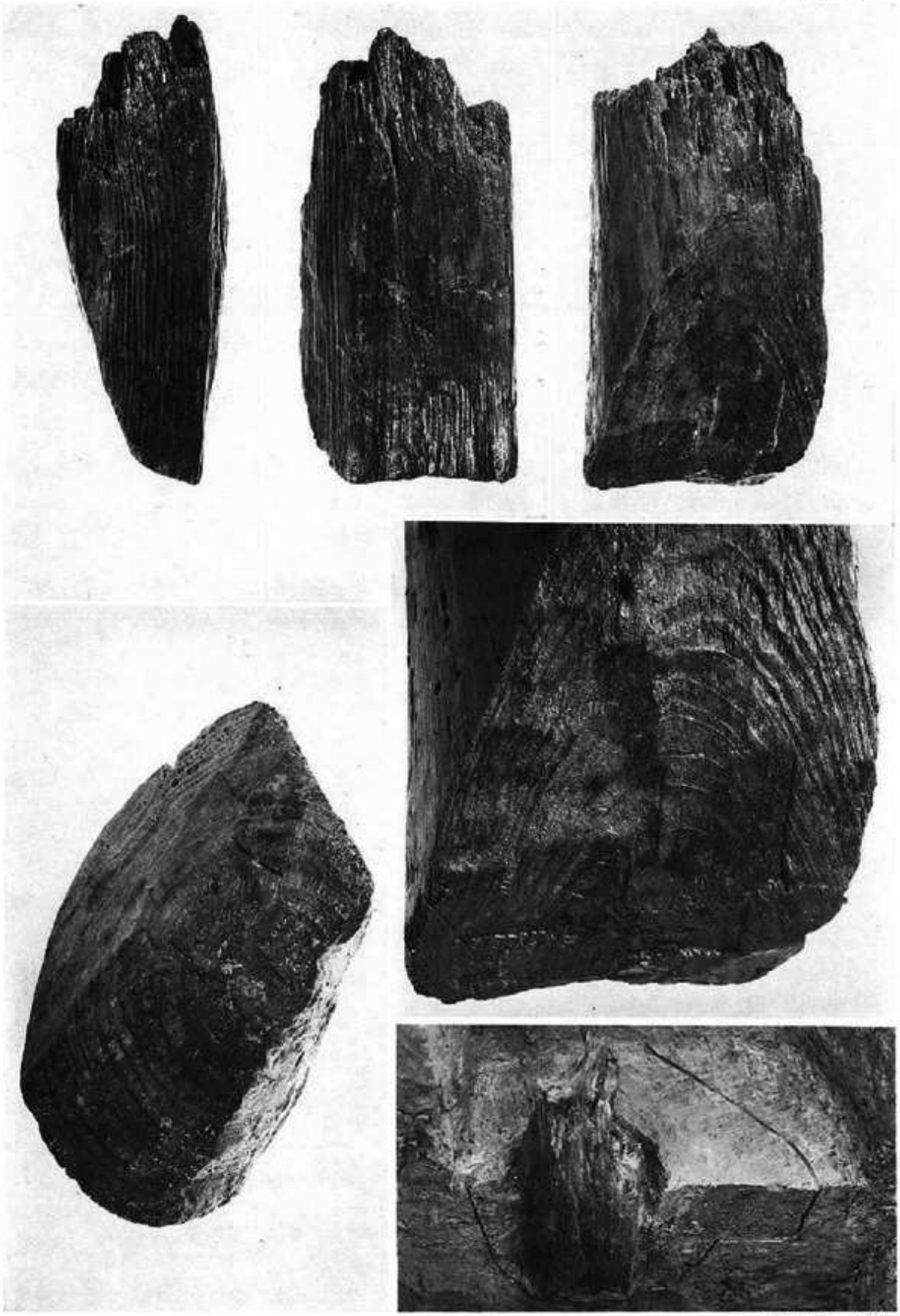






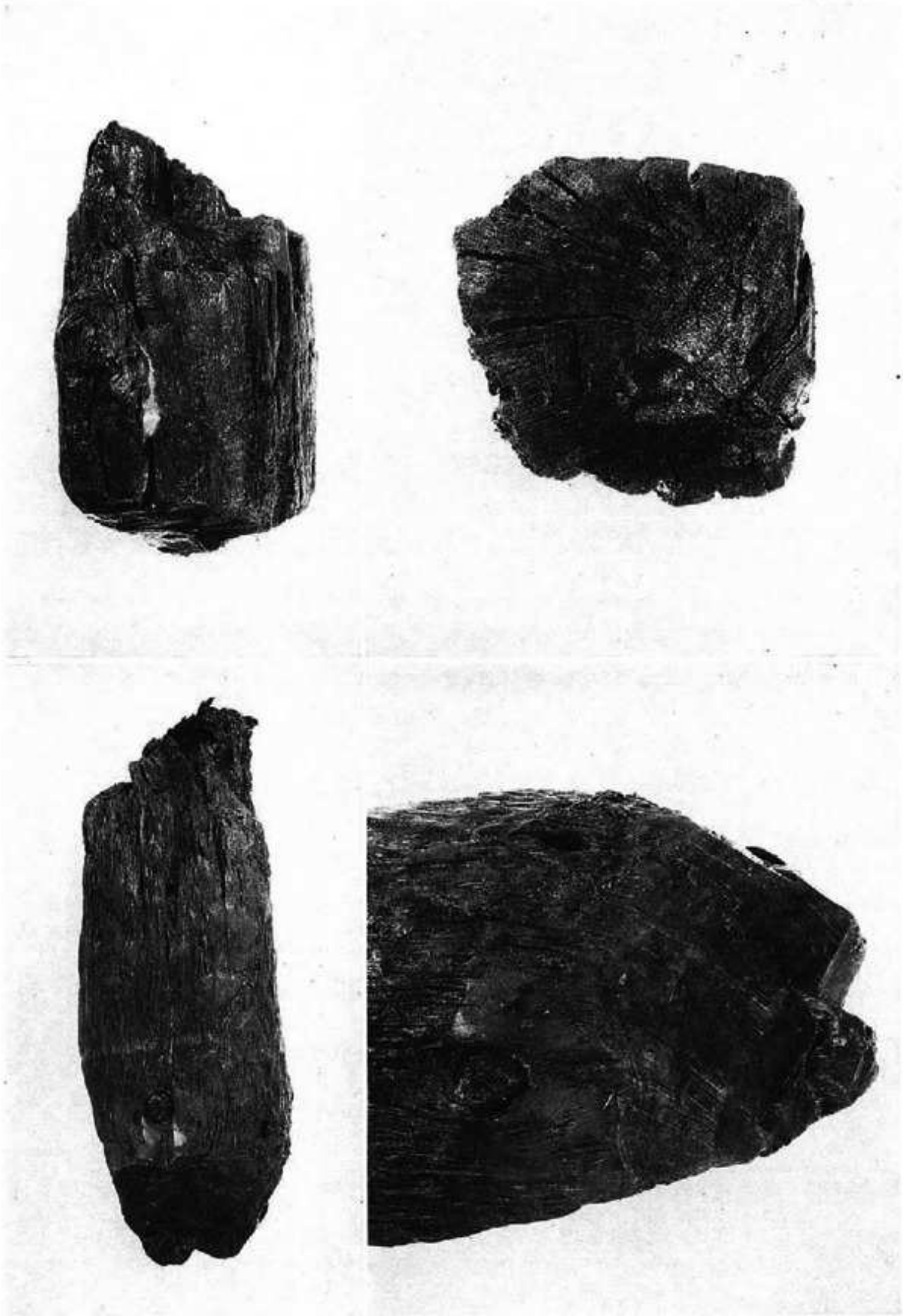
柱 450

〈縮尺1/2・1/6〉



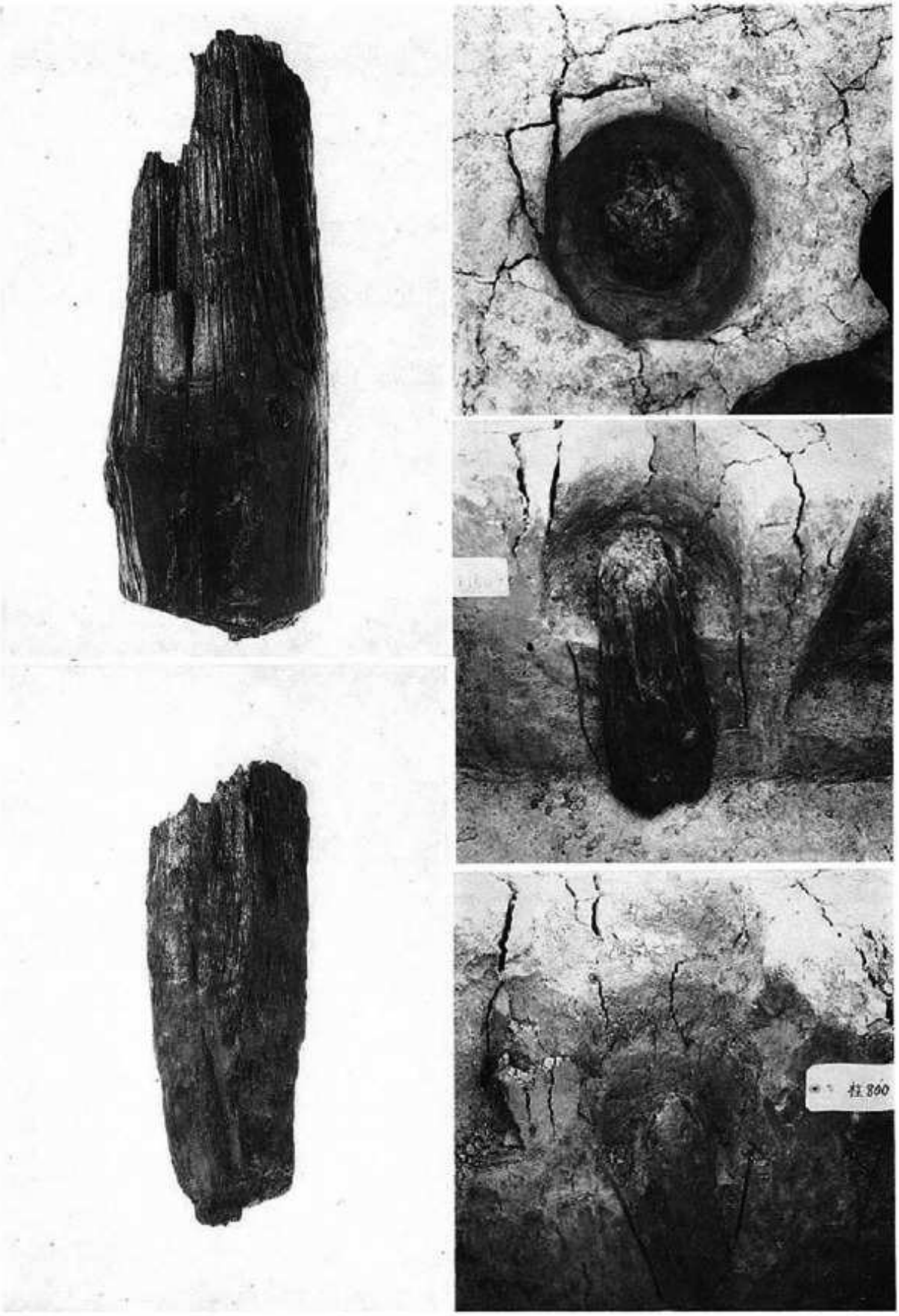
柱 650

〈縮尺 1/2・1/4〉



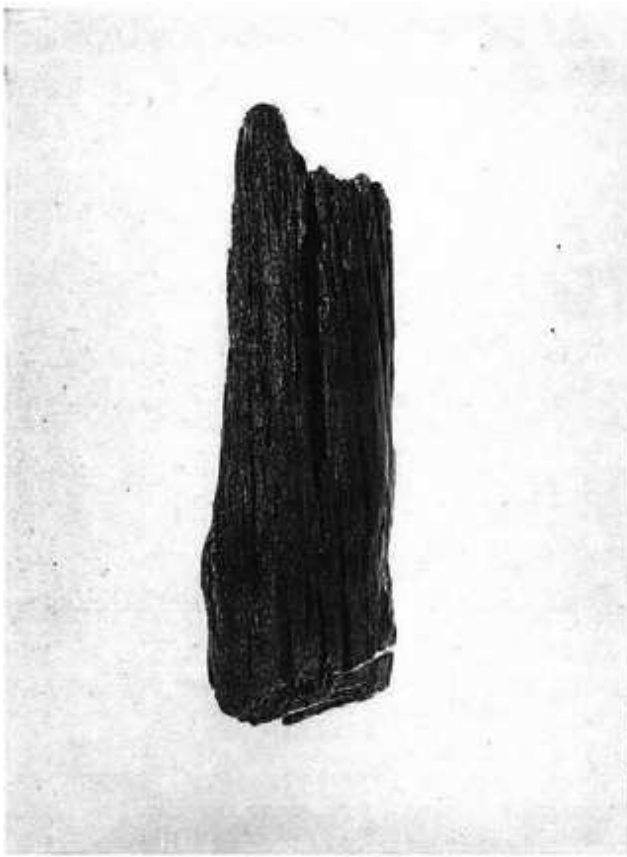
柱 107 (上) ・61 (下)

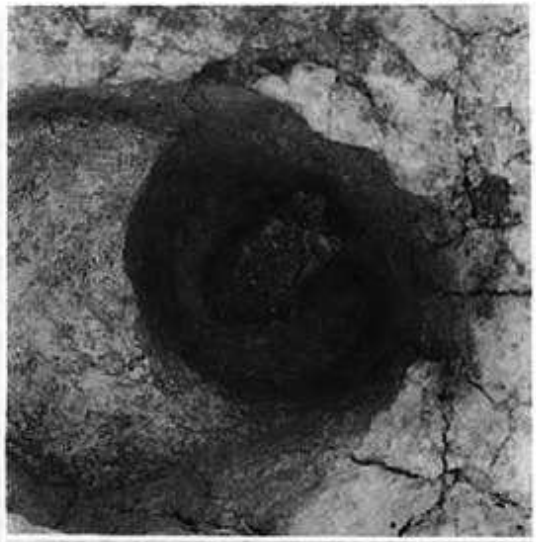
〈縮尺1/2・1/4〉



柱150(上) ・800 (下)

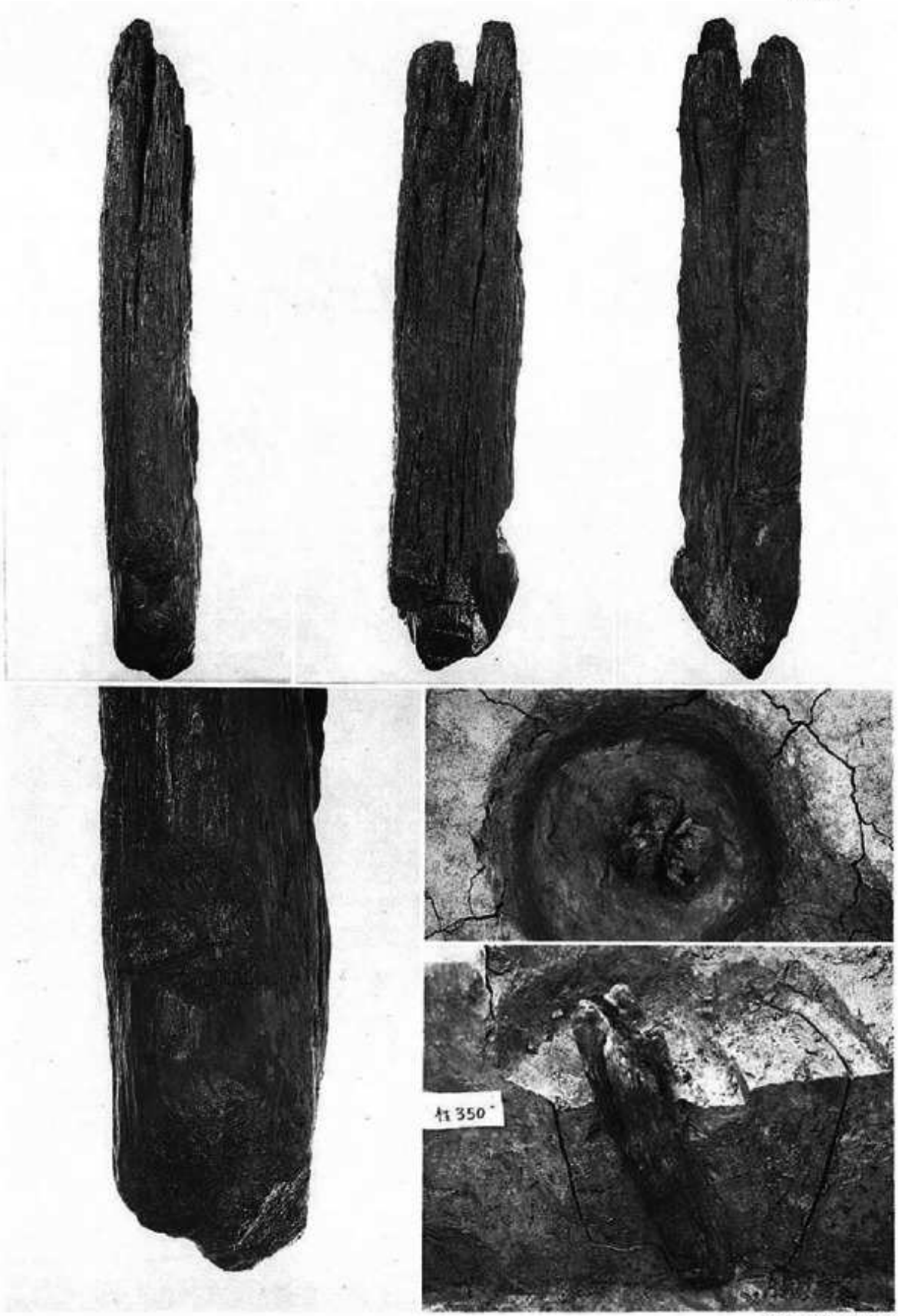
〈縮尺1/4〉





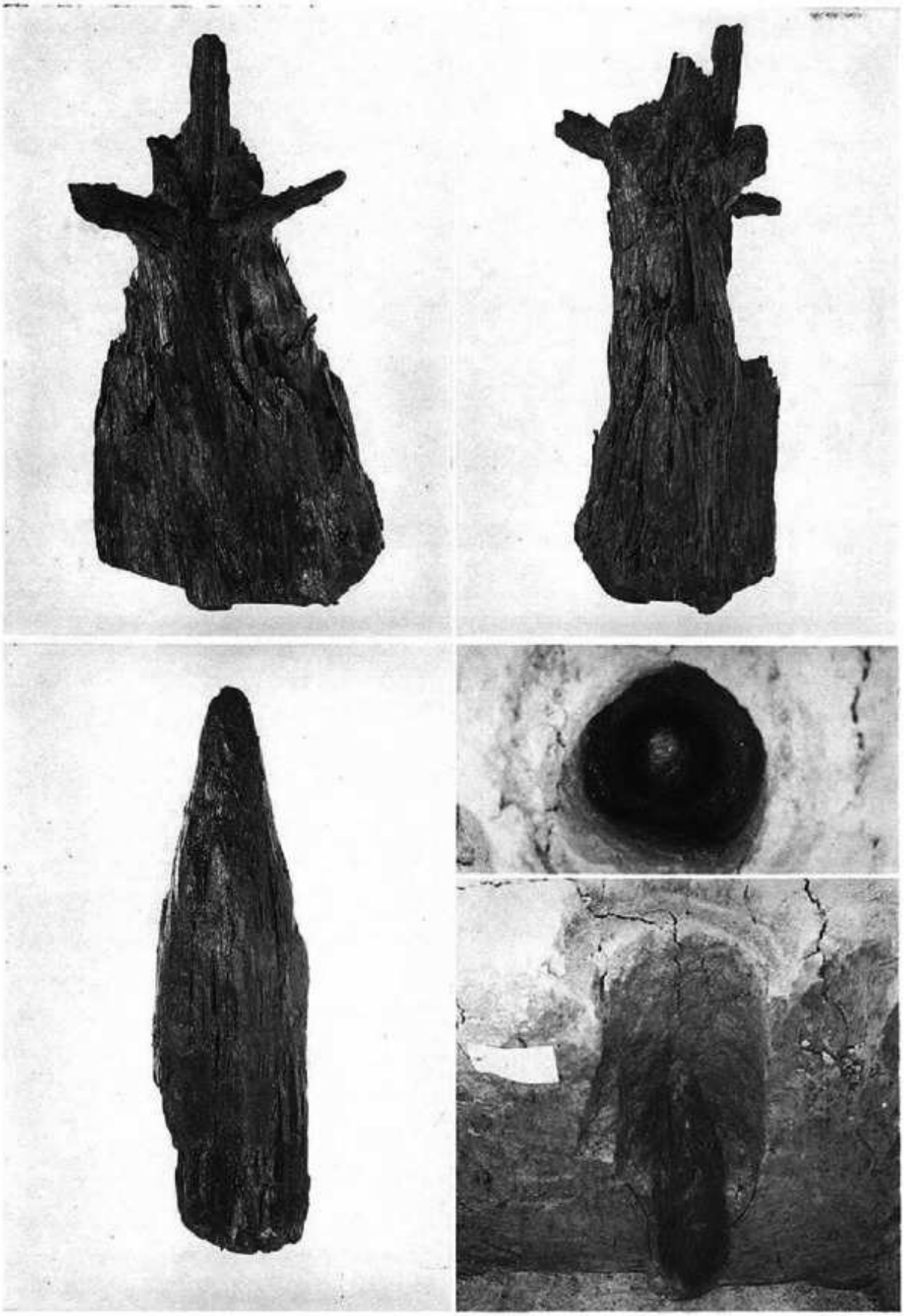
柱 250（上）・ 700（下）

〈縮尺 1/4〉



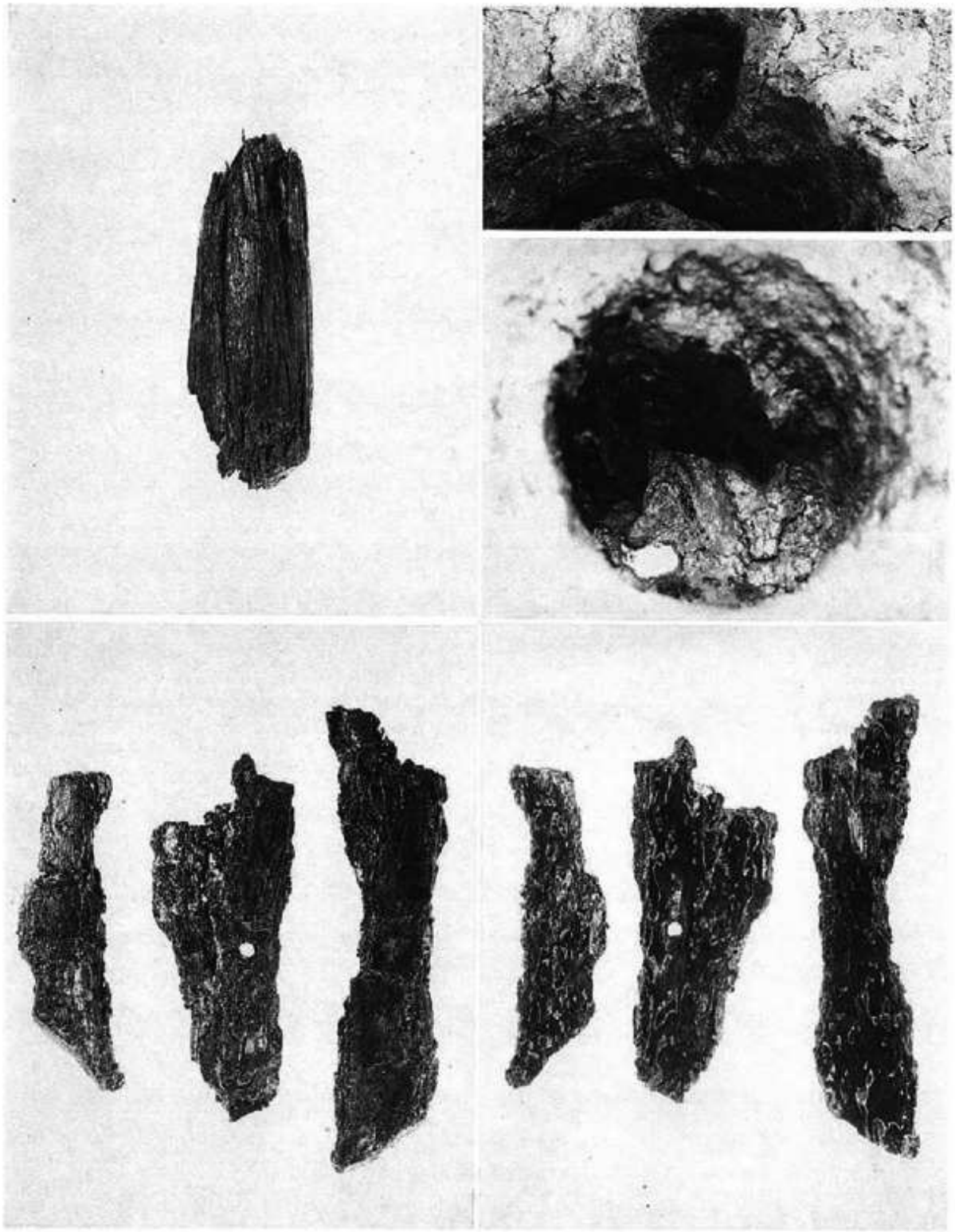
柱 350

〈縮尺 1/2・1/4〉

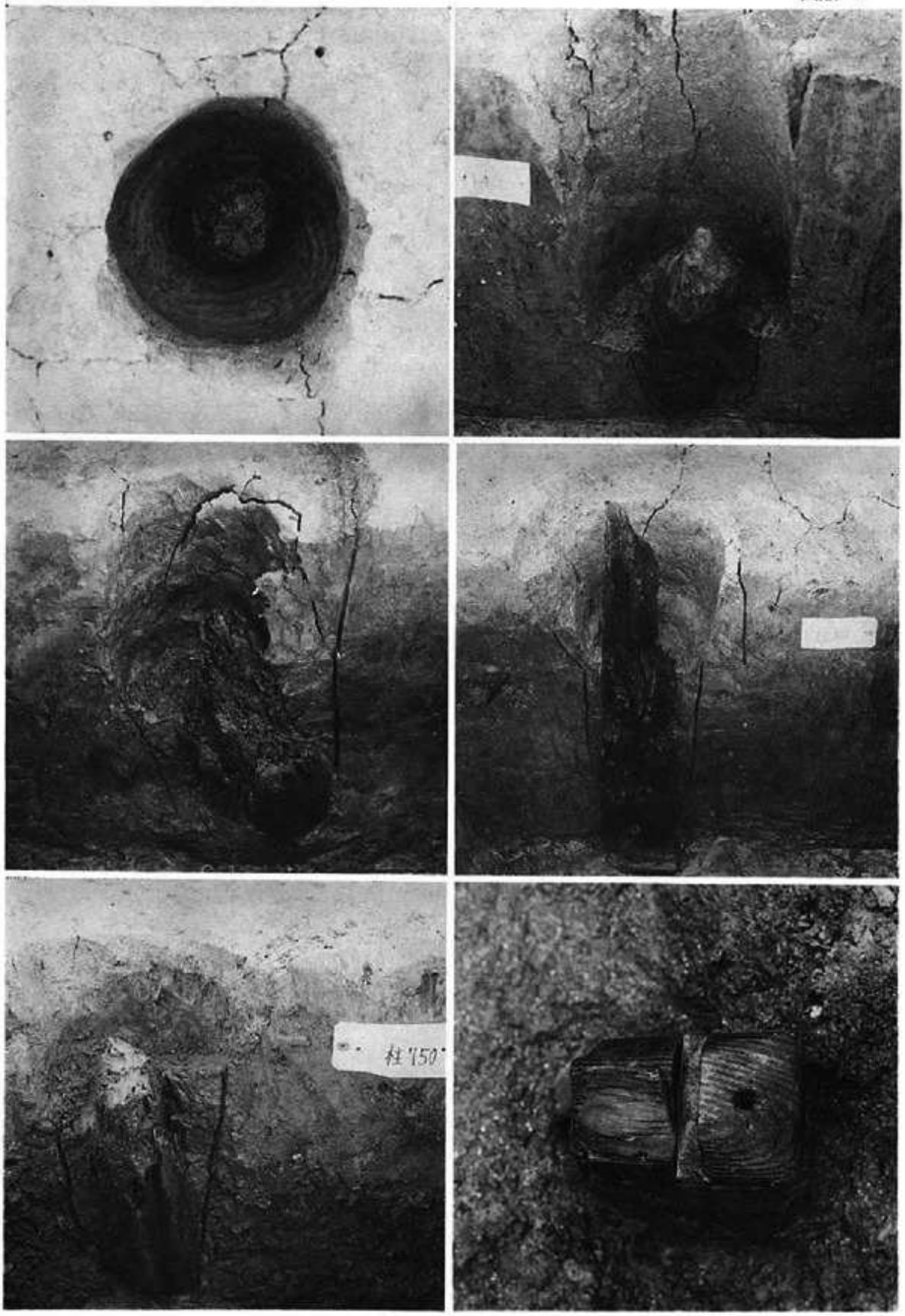


柱 210（上）・600（下）

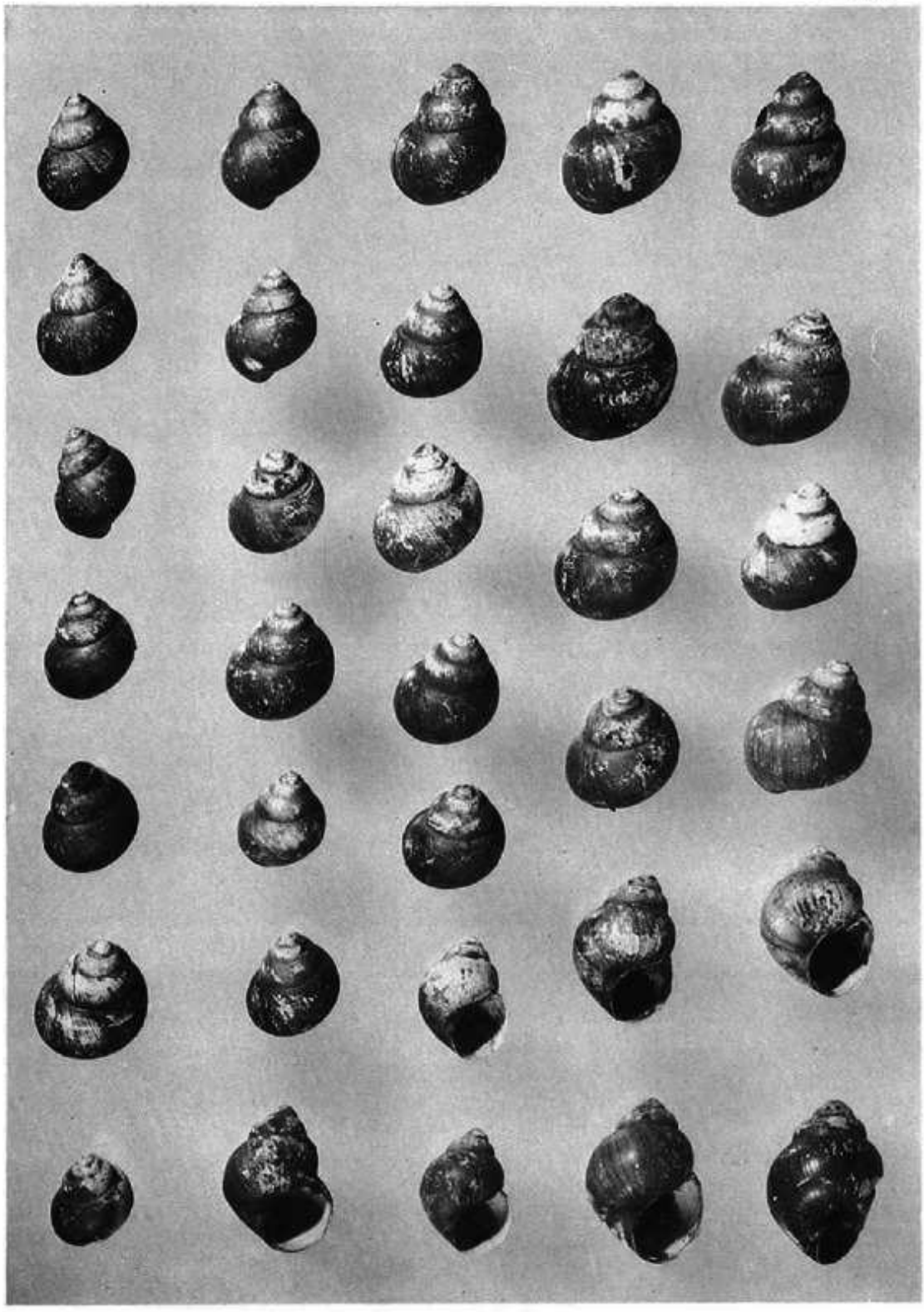
〈縮尺 1/4〉



柱 500（上）・表皮 550（下）　〈縮尺 1/4〉



柱根および下駄出土状態



溝　2　SD002出土　タニシ

今宿バイパス関係
埋蔵文化財調査報告
第6集上巻

昭和57年3月31日

発　行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印　刷　祥文社印刷株式会社
福岡市博多区博多駅南4丁目15−17